

ペット動物販売業者用説明マニュアル (哺乳類・鳥類・爬虫類)

環境省

資料

動物の特性と飼養方法

哺乳類	1
鳥類	63
爬虫類	105

目次

哺乳類

・基本事項	2
1．飼い主の責任	2
2．動物販売業者の責任	2
・共通事項	4
1．動物購入者が種類や品種を選ぶために必要な情報	4
2．終生飼養を確保するために必要な情報	5
3．適正飼養を確保するために必要な情報	5
4．所有の明示	5
5．繁殖制限に関する情報	6
6．人と動物の共通感染症の予防に必要な情報	6
7．逸走と危害の発生を防止するために必要な情報	12
8．生物多様性保全の見地から必要な情報	12
・動物種ごとの個別事項	14
1．犬 食肉目イヌ科	14
2．猫 食肉目ネコ科	22
3．ウサギ ウサギ目ウサギ科	29
4．ハムスター げっ歯目ネズミ科	34
5．マウス げっ歯目ネズミ科	37
6．スナネズミ（ジャービル） げっ歯目ネズミ科	38
7．モルモット げっ歯目テンジクネズミ科	40
8．チンチラ げっ歯目チンチラ科	41
9．シマリス げっ歯目リス科	43
10．プレーリードッグ げっ歯目リス科	46
11．モモンガ げっ歯目リス科	47
12．ハリネズミ 食虫目ハリネズミ科	48
13．フェレット 食肉目イタチ科	50
14．スカンク 食肉目イタチ科	53
15．アライグマ 食肉目アライグマ科	54
16．フェネックギツネ 食肉目イヌ科	55
17．ワラビー 有袋目カンガルー科	56
18．ポッサム（フクロギツネ） 有袋目クスクス科	57
19．サル リスザル：霊長目オマキザル科、マーモセット：霊長目キヌザル科	58
IV．参考	61
引用及び参考資料等	61

1. 基本事項

動物を飼うにあたっては、まず飼おうとする動物について事前に十分調べ、適正に飼えるかどうかの判断も含めて必要な準備をすべきところです。しかし、「今すぐに飼いたい」、「かわいい」、「珍しい」といった一時的な感情や衝動的な動機のみで、十分な知識のないまま安易に飼い始め、結果として、不適切な飼養や飼養放棄につながり、近隣とのトラブルや虐待、遺棄等の問題を引き起こす例が後を絶ちません。さらに飼い主が飼いきれなくなる等の理由で、都道府県等が引き取らざるを得ない犬や猫の数は、近年減少しつつあるものの、全国で40万頭近くに及んでいます。また、遺棄された動物が野生化し、在来の野生動物を捕食したり圧迫する等、自然環境保全上の問題も起きています。

このようなことから、平成11年12月に改正され、平成12年12月に施行された動物愛護管理法では、「動物が命あるものであること」と「人と動物の共生」が謳われ、動物の飼い主等の責任が強化されるとともに、動物販売業者については、動物の購入者に対し当該動物の適正な飼養保管の方法について、必要な説明を行い、理解させる責任が新たに課せられました。動物は「命あるもの」であり特別なもの、特別な配慮が求められるものとして法的に位置づけ、動物の売買に当たっては、飼い主となる購入者はもちろんのこと、販売業者にも販売に当たっての特別な配慮を、その生命があるという特殊性を踏まえて、責務として求めているわけです。

購入者が、購入に先立って、当該動物の生態、生理（寿命を含む）、飼養方法等の動物の特性に関する十分な知識をもとに現状での飼養の可能性、さらには、住宅環境や家族構成の変化など、飼い主の将来的な生活設計を踏まえ、終生飼養ができるかどうか慎重に判断、選択するために必要となる情報の提供が求められています。

動物を購入するときの窓口である動物販売業者の説明、情報の提供がペット動物をめぐる多くの問題を未然に防止するための重要なポイントとなっているのです。

1. 飼い主の責任

法律にも謳われたように動物は私たちと同じように命ある生きものです。飼い主は動物の生態、習性、生理を理解し、動物に合った適正な取り扱いを行うことが必要であり、それは人間社会に動物を引き入れ、飼養下に置いた人間がとるべき責任といえます。ただ「かわいい」、「好き」だけでは飼養はできません。

飼い主はその動物に関わる全てに責任があります。ここでいう飼い主の責任には「動物への責任」と「社会への責任」の2つがあります。

「動物への責任」とは共に暮らす動物の健康、安全の保持、終生飼養、適正な環境の確保などその動物の一生に対する責任です。餌と水を与えているだけでは責任を果たしたことはありません。その動物の生態、生理に合った、そしてその習性が十分に発揮できる環境を整えることを忘れてはなりません。

次に「社会への責任」とは、飼っている動物が人の生命、身体、財産へ害を及ぼすことを防ぐとともに、周辺への迷惑の防止、自然環境への影響防止の責任です。このため、飼い主は、飼っている動物に対して人間社会で共に暮らす上での必要なしつけや訓練、繁殖制限等適切な管理を行うことが求められます。

「かわいがる」と「愛情」は異なります。一時の感情の発露ではなく、上記の責任の裏打ちがあってはじめて「愛情」といえるのです。飼い主責任の遂行、モラルの向上、共生への配慮が社会に行き渡ってはじめて、動物が真の意味で社会に受け入れられるようになるのだと思います。

2. 動物販売業者の責任

動物の適正な飼養保管という飼い主としての責任を果たすためになすべき基本的なことは、終生

飼養の心構えを持つことと、その動物の生態、習性、生理等を理解し、これに配慮した飼養を行うということです。そのためには、それらに関する知識、技術の修得が必要となります。

動物愛護管理法が動物販売業者に、販売に際してその動物に関する情報、適切な飼養管理のための必要な情報を購入希望者に説明するよう責務を課したのは、これをもっとも効果的にサポートしようとするものです。

したがって、この説明責務は、動物の販売業の社会的な責務として、動物販売業を営む者すべてに課せられています。法第8条による届け出義務を課せられている動物取扱業者だけでなく、例えばインターネットなどを用いた仲介販売業者なども含め、全ての動物販売業者に課せられているものです。

また、動物販売業を営む者がこの責務を果たすためには、経営者は購入者に対し適切な説明が行えるよう従業員に対する平素からの教育、指導が必要です。

近年、野生由来の爬虫類・哺乳類のペット動物が増えています。これら野生由来の動物については、生態や習性、飼養方法などがあまり知られておらず、また、犬や猫などの家畜と異なり、人と生活を共にした種としての歴史的経験が浅いか、全くないものが多く、その飼養は難しいものであること、譲渡が難しく、家畜以上に人と動物の共通感染症に注意が必要であること等を説明する必要があります。「家庭での飼養に向かない動物」、「購入者の飼養能力を明らかに超えると思われる動物」が、熟慮されることなしに安易に購入されることがないように、販売者としての社会的役割、責任を踏まえた積極的な姿勢が望まれるところです。

なお、本マニュアルで取り上げられなかった動物種についても、販売に当たっては説明の責任はありますので、業者は販売する動物全てについての生態、習性、生理や適切な飼養管理方法等について資料等を揃え、修得しておく必要があります。

II. 共通事項

1. 動物購入者が種類や品種を選ぶために必要な情報

動物を飼い始める前に、飼い主は飼養目的と飼養環境条件を考えながら、動物の選択を行うこととなります。その場合、動物の生態や習性、生理、飼養方法などの特性について十分理解するとともに、住宅環境や家族構成の変化など将来的な見通しも踏まえた上で、最後まで責任を持って飼う（動物の特性に応じた飼養環境を動物が寿命を全うするまで用意し続ける）ことができるかを考えることが求められています。

(1) 動物の特性

それぞれの動物種の生態、習性、生理、食性、適応環境、知能、運動能力、力の強さ、行動パターン、気質や性質（成長に伴う変化、繁殖期の変化等も含む）、成長時のサイズ、力量、性別、犬等の品種による気質や運動要求量の差、長毛、短毛による必要な手入れの差、寿命等々できるだけ多くの特性についての情報が必要です。また、飼い主になる人との相性を見ることも大切です。

(2) 野生由来の動物飼養の特殊性

野生由来のペット動物は、長年、何世代にもわたって繁殖飼養がくり返されることにより、人と共に暮らすことに対する適応性を持つようになった動物（家畜）と異なり、人間社会で人と共に暮らすことに対する適応性は低いものです。

本来の野生における生態、生理を考え、その習性が十分発揮できるような環境条件を整備し、その中で適切な給餌、給水が必要です。また、幼獣の時は人に馴れたように思っても成長するにしたがって本来の野性が出て人馴れしない動物も多いのです。

さらに、世界には多くの人と動物の共通感染症がありますが、野生動物は、どのような病原体を持っているかわかりません。さらに、遺棄等により野生化した動物が生物多様性への影響を起している例も全国各地で見られます。その他、譲渡も難しいなど、飼養を途中でやめることは簡単にはできないと考えるべきです。このため、「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」では、野生動物を飼う前に慎重に判断するよう求めています。これらのことを考えあわせるとほとんどの野生由来の動物は、ペットとして飼うのは容易でなく、リスクと大きな責任を伴うことを理解させるべきです。また、飼うこと自体が動物の心身に多大なストレスを与えることを認識しておかなければなりません。

それでも家庭で飼養する場合には相当の知識、技術、設備、環境ならびに覚悟が必要であることを十分理解させるべきです。

(3) 飼養環境

飼養空間

動物種によって、行動上必要な広さの空間は異なります。

住宅環境

一戸建か集合住宅か、持ち家か賃貸か、ペット動物飼養可か不可か、家の広さ、自宅の周辺環境等諸条件を確認する必要があります。最近ではペット動物飼養可能な集合住宅が増えてきてはいますが、まだ不可のところも多く、不可のマンションで飼養している犬や猫を処分するよう管理組合から勧告されたり、裁判になったりすることもありますので、飼養予定場所や住宅環境を確認することも飼養放棄を未然に防ぐためには大切です。

その他飼養目的、家族の同意等

その他下記の事項についても確認をする必要があります。

- 1) その動物を飼う目的、飼いたい理由
- 2) 家族の同意
- 3) 家族構成とそれぞれの年齢

- 4) 家を留守にする時間
- 5) 他に飼っている動物の有無、種類、年齢、性別
- 6) 今までの飼養経験

動物を飼うにはその動物たちに適切な食物を与え、生活環境を整え、健康管理をし、また、家族全員で出かける時は誰かにその世話を頼まなければなりませんし、犬の場合はしつけもしなければなりません。毎日8～10時間、誰もいない家で子犬や子猫を飼うことは十分な世話ができませんし、また、散歩時のコントロールができない人が大型犬を飼うことは危険を伴います。

2. 終生飼養を確保するために必要な情報

飼養途中で動物を手放す主な理由には次のようなものがあります。

- (1) 転勤で転居先の住居では動物を飼養することが認められない
- (2) 婚姻や就職
- (3) 飼い主自身の病気
- (4) 鳴き声や臭いに対する近隣からの苦情
- (5) 動物の体毛、羽毛による飼い主や家族のアレルギー疾患
- (6) 動物の治療費

この他、動物の成長に伴う変化や経費の増加、犬の場合には問題行動も高い比率を示しています。また最近では、高齢の飼い主の死亡や家族が妊娠、出産するからという理由も増えてきました

これらは動物を飼い始める前に予想できる部分が多くあります。動物の成長に伴う必要な世話や健康管理、成長時の大きさや繁殖期の変化、老齢期の世話、寿命等と家族構成及び家族の年齢も合わせて考えることも大切です。10年、15年の間には家族構成が変わり、転勤、転居もあるかもしれません。引越しが予定されている場合はそれが終わって新居が片付いてから飼養を考えるべきですし、転勤が多い職業の方は転勤が落ち着くまで我慢することも愛情です。

また近年、動物の寿命の延びと人間社会の高齢化ということも考慮すべきです。高齢の方が子犬や子猫から飼うには家族のバックアップがないと難しいと思われれます。動物の寿命と飼いたい人の年齢を考えることも必要です。

3. 適正飼養を確保するために必要な情報

擬人化した飼養管理は愛情のはき違えであり、無知がなせるものといえます。

それぞれの動物種にはそれぞれの健康維持にふさわしい食物があり、本来の生態、生理に合った生活環境や、習性を十分に発揮できる居住空間が必要です。十分なスペースとストレスが蓄積しないように遊びや運動も必要ですし、安心して休める場所も必要です。

したがって、それぞれの動物種についてその生態、習性、生理を十分理解し、その動物に見合った適正な飼養保管に努めなければなりません。具体的には、動物の特性に配慮した温度、湿度、照明、居住空間の材質や床敷等の環境作り等のほか、動物の逸走防止にも心がけなければなりません。

健康管理においては予防に心がけ、毎日の手入れや観察で動物の異常の早期発見に努め、必要に応じて獣医師の診察を受けます。動物の生活環境の衛生管理も大切です。

4. 所有の明示

飼い主の責任の一つとして、飼っている動物の所有の明示があります。この所有の明示については、名札、脚環、マイクロチップ等の方法があり、このうち、マイクロチップについては、所有者を確認する新たな識別方法として生体内埋め込み方式の電子標識器具が開発されたもので、国内外で動物の個体識別のために導入されています。マイクロチップは、皮下に埋め込むことから、名札や首輪のように外れたり、とれたりする心配がなく、平常時の逸走だけでなく、緊急災害時等の混

乱状態で行方不明になった時でも発見が容易になります。

なお、犬の飼い主には、別途、狂犬病予防法に基づく登録、鑑札装着の義務があり、これを実施することは当然の義務です。

マイクロチップとは

マイクロチップ（MC）は、直径約2mm×長さ約12mmの小さな円筒形の電子標識器具です。ガラスのカプセルでできており、その中に集積回路（IC）、コンデンサー、アンテナの役割を果たすコイル等を収めてあり、ICチップとも呼ばれています。

MCに標識されているデータは、リーダーという装置を使って読み取ります。電波を発するリーダーをMCに近づけると、MCがその電波に反応して電波を送り返し、これをリーダーが感知してデータを読み取るのです。MC自体は電源を必要としないため電池の交換等は不要で、一度動物の体内に注入すれば、一生交換する必要はありません。

MCは動物病院で獣医師に注入してもらいます。注入の方法は、一般的な皮下注射とほとんど変わらないため、動物には負担をかけません。

5．繁殖制限に関する情報

犬や猫等の家畜は、自由に繁殖できる状態である場合、あっという間に頭数が増えてしまいます。ブリーダーなどのように一定の販路がある場合を除き、生まれた動物それぞれに責任ある新しい飼い主を見つけることは困難であり、一方、次々と生まれる子を全て自分の手元で飼養するのは、物理的にも経済的にも無理な場合がほとんどです。適切な飼養管理、健康管理ができず、劣悪多頭飼養者になってしまいかねません。もらい手がないからといって遺棄することは許されません。違反した場合は法律に基づき罰せられます。動物による近隣迷惑、危害、環境影響を防止するだけでなく、動物愛護の面からも不幸な命は増やさないようにすることが大切です。動物の愛護上あるいは管理上の問題の多くが、飼い主の責任による適切な繁殖制限の実施により大きく改善されます。

このため、法に基づいて定められた「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」では、自らの責任において終生飼養または確実に譲渡が可能である場合を除いて、原則として不妊去勢等の繁殖制限措置をとるよう努めるべきとしています（図表1、2参照）。

なお、不妊去勢の手術費に対する助成制度を持っている自治体もありますので、関係自治体における助成措置の有無について把握しておき、説明に加えることも重要です。

6．人と動物の共通感染症の予防に必要な情報

(1) 人と動物の共通感染症

動物から人へ、人から動物へと病原体が感染すること、またはその感染によっておこる疾病のことを「人畜共通感染症」、「人獣共通感染症」、「ズーノーシス」といっていますが、厚生労働省は、動物から人へ感染する疾病を「動物由来感染症」といっています。

(2) 感染症の種類

世界では約200種類近くの人と動物の共通感染症が数えられているといわれ、そのうち日本では数十から百種類くらいの感染症があるといわれています。

その中でペットに関係する主なものは図表3の通りです。

図表2:不妊、去勢手術のメリットとデメリット(犬の場合)	
メリット	デメリット
<p>【オス・メス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 長生きする確率が高くなる ・ 雌雄一緒に飼養が可能になる <p>【オス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前立腺の病気、精巣や肛門周辺の腫瘍などの予防になる ・ 性的欲求によるストレスから解放される ・ 攻撃性が抑えられ、温和になる ・ 無駄吠えやマーキングが減り、落ち着く <p>【メス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 望まない妊娠が避けられる ・ 子宮の病気や乳癌の予防に効果がある ・ 生理や発情時のわずらわしさとともに、発情のストレスもなくなる 	<p>【オス・メス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 繁殖させたくなくても不可能 ・ 栄養管理等によっては肥満になりがち ・ ホルモン欠乏症による皮膚病がおこる場合がある。ただし発症率はかなり低く、有効な治療法がある
<p>手術の方法としては、オスの睾丸摘出手術、メスの卵巣、子宮摘出手術が一般的です。</p> <p>手術をする時期はいつでも可能ですが、生後6～8ヵ月頃の最初の発情前に行うのが効果的です。それ以降であってはなるべく早く手術を実施すべきです。</p> <p>不妊、去勢手術に対して「かわいそう」という声もありますが、多くのメリットがあり、人と動物の共生の上からも必要です。</p>	

図表3: ペットに関する主な人と動物の共通感染症

	病名	対象動物	主な感染経路	動物の主な症状	人の主な症状	その他	感染症の種類 (**)
ウイルス	エボラ出血熱*	サル類、終末宿主はチンパンジー	直接接触(血液、体液、糞便、尿、吐物)	サル類: 元気消失、沈うつ、食欲廃絶、出血斑(胸部、上腕内側、大腿部)、肝機能障害 感染後6~10日で100%死亡	突然の高熱、眼結膜炎、咽頭痛、関節痛、筋肉痛、頭痛、腹痛、嘔気、嘔吐、下痢、消化管出血傾向、黄疸、肝機能障害、多臓器不全	現在のところ対症療法以外には特異的効能を示す薬剤はない	第1類感染症
	マールブルグ病*	サル類、終末宿主は霊長類	直接(血液、尿、糞便、吐物)	サル類: 感染後3週間程度で発症。出血熱。100%死亡	突然の高熱、頭痛、筋肉痛、胃腸障害、吐気、嘔吐、頻繁な水様下痢、鼻口腔、消化管出血、肝機能障害、腓	通常ではヒト ヒトへの感染はない	
	ラッサ熱*	マストミス(げっ歯類)	直接(咬傷、尿、糞便、体液、血液、吐物) 飛沫(塵埃)	不明	発熱と 怠感、高熱、頭痛、筋肉痛、腹痛、下痢、発疹、重症では出血傾向	通常ではヒト ヒトへの感染はない	
	クリミア・コンゴ出血熱*	野生哺乳類や家畜(ウシ、ウサギ、ヒツジ等)、鳥類	直接(咬傷、血液、体液、吐物) 直接接触 媒介: マダニ	ウイルス血症を起こすが発病しない	突然40 を超える発熱、頭痛、筋肉痛、上部腹痛、結膜炎、口中の出血、下痢、肝機能障害	通常ではヒト ヒトへの感染はない	第4類感染症
	狂犬病	犬、猫、アライグマ、キツネ、スカンク、吸血コウモリ、ハムスター	直接(咬傷)	よだれ、意識障害、狂躁又は全身麻痺、昏睡後死亡(100%)	不安感、恐水症状、興奮、麻痺などの神経症状、発症後は昏睡、呼吸障害、死亡(100%)	犬: 年1回の予防接種の法義務 ヒト: 咬傷時石けんで洗浄 ワクチン接種	
	腎症候性出血熱(HFRS)	野ネズミ、ドブネズミ、高麗セズミ、ヤチネズミ等	直接(咬傷、尿、糞便) 飛沫	無症状(げっ歯類)	ハンタ型のウイルスは重症のHFRSを起こす。突然の発熱、頭痛、腹痛、出血傾向、腎不全	ウイルス株により感染性に違いがある。通常ではヒト ヒトへの感染はない	
	Bウイルス病*	東南アジア産マカ属サル類(カニクイザル等)	直接(咬傷、引っかき傷、だ液)	口腔粘膜の水疱、重篤な病気は起さない	傷口の発赤、腫脹、水泡形成、頭痛、嘔下困難、麻痺等の脳神経症状、発熱、脳炎症状を起こす		
ウエストナイル熱/脳炎*	野鳥、ウマ、その他哺乳類(犬、猫、コウモリ、リス、スカンク、ウサギ)	直接(咬傷) 媒介: 蚊(イエカ、コガタアカイエカ)	鳥類: 通常は症状を示さない。大型猛禽類、カラス、カケス、サギ類等で感受性高い。ニワトリ、スズメ等小型鳥類は感受性が低い。犬、猫等小動物はひどい症状は起さない。ウマでは致死的な脳炎を起こすことがある	突然の発熱(39度以上)、頭痛、筋肉痛、時に消化器症状、リンパ節腫脹、発疹(胸、背、上肢)、多くは1週間で回復、怠感が残ることも多い	約80%が不顕性感染 ヒト ヒト感染はない		
細菌	ペスト*	げっ歯類	腺ペスト: 直接(咬傷) 肺ペスト: 飛沫(吸入) 媒介: ノミ	猫以外はほとんど無症状	腺ペスト: ヒトペストの80~90%を占める。発熱、頭痛、リンパ腺腫脹、自潰、敗血症 高熱 肺ペスト: 高熱、咳、漿液性血瘍、重症の肺炎。腺ペストからの移行	腺ペストは膿に触れなければヒト ヒトへの感染はない。肺ペストの極期は強い感染力を有す。わが国においては1926年以降ペスト患者の報告なし	第1類感染症
	細菌性赤痢	霊長類	経口(飲食物を介して。患者、保菌者の糞便)	発熱、下痢、急性大腸炎	急激な発熱、下痢、しぶり腹、急性大腸炎(粘血便)	サルが下痢をしたら注意	染第2類
	腸管出血性大腸菌感染症	ウシ、ヒツジ、シカ	経口(飲食物を介して)	無症状	腹痛、水様性下痢、血便、溶血性尿毒症症候群。乳幼児、高齢者は重篤傾向		第3類
	ブルセラ症	犬、ウシ、ヤギ、ブタ、ヒツジ	接触(血液、乳汁、尿、胎盤)	流産、精巣炎、陰囊皮膚炎	インフルエンザ様症状、波状熱	流産した犬は要注意(獣医師の検診を)	感第4類
	野兎病	野生げっ歯類(ウサギ、ネズミ)、野鳥	直接接触(血液) 間接(蚊、サシバエ、アブ、マダニ) 経口(汚染生水、野ウサギの調理不十分)	不明	発熱、悪寒、関節痛、菌の侵入箇所のリンパ節腫脹	ヒト ヒト感染はない	
	レプトスピラ症	犬、ネズミ、家畜(ウシ、ブタ等)	経皮(尿に接触、たまたに経口)	腎炎。げっ歯類は無症状が多い	発熱、筋肉痛、眼球粘膜出血、黄疸、出血	犬ワクチン有効、水系環境要注意、乾燥は予防に有効	
	パステレラ症	犬、猫、家畜(ウシ、ブタ等)	直接(咬傷、引っかき傷)	無症状が多い	傷口が腫れて痛む。軽症。発症した場合は上部気道炎、気管支炎、肺炎を起こすこともある。死亡例なし。予発熱、下痢、嘔吐等の急性胃腸炎	犬、猫の口腔内正常細菌叢。菌の保有率: 犬75%、猫97%(猫の爪20%)傷は石けんでよ	
	サルモネラ症	犬、猫、ニワトリ、ミドリガメ、家畜(ウシ、ブタ等)	経口(飲食物を介して)	無症状が多い	発熱、下痢、嘔吐等の急性胃腸炎	特にカメの保菌率は高い	
	カンピロバクター症	犬、猫、鳥類	経口(飲食物を介して)	無症状が多い	発熱、粘血便を伴う腸炎		
	仮性結核	犬、猫、霊長類、偶蹄類	経口(飲食物を介して)	無症状が多い	胃腸炎、虫垂炎、泉熱様疾患、発熱、発疹		
	エルシニア・エンテロコリチカ感染症	犬、猫、ネズミ、ブタ	経口(飲食物を介して)	無症状が多い	頭痛、咳、咽頭痛などのかぜ様症状、腹痛、吐気、嘔吐、胃腸炎、下痢、虫垂炎、関節炎		
	猫ひっかき病	猫	直接(咬傷、引っかき傷)	無症状が多い	リンパ節の腫れ、発熱、ほとんど軽症	特に子猫は注意	
	リケッチア・クラミジア	Q熱	野生動物、鳥類、ウシ、ヤギ(偶蹄類)、愛玩動物	直接(経口)、吸入(汚染塵埃、汚染獣皮、汚染毛皮類、乳汁、尿、糞便)	無症状が多い、流産	インフルエンザ様症状、悪寒、戦慄を伴う急激な発熱、頭痛、食欲不振、全身 怠、気管支炎、肝炎、髄膜炎、心内膜炎	ダニからの感染も有
オウム病		鳥類(セキセイインコ、オウム、ハト等)	吸入(糞便、だ液)	下痢、元気消失。ヒナや若鳥では症状が重く、成鳥では無症状が多い	インフルエンザ様症状、突然の発熱、咳嗽、全身 怠感、食欲不振、筋肉痛、頭痛、関節痛	口移しでの餌やり禁止	
原虫	トキソプラズマ症	猫、犬、家畜(ブタ、ヒツジ)	経口	猫: 全身感染、肺炎、腸炎、脳炎 犬: 下痢、ジステンパー類似症状	不顕性感染がほとんど。急性の場合、発熱、脈絡網膜炎、脳症状。先天性の場合、上記症状以外に脳水腫、水頭症、発育障害	無症状感染も多い。妊婦は特に注意	
真菌	真菌症(皮膚糸状菌症)	犬、猫	接触	脱毛、フケの発生、皮膚の肥厚、痂皮形成	軽度の脱毛等の皮膚障害、かゆみを伴う	感染動物は隔離、治療。部屋の清掃は必要	
寄生虫	エキノコックス症	犬、キツネ	経口(飲食物を介して虫卵が口に入る) 媒介: ネズミ	無症状が多い	上腹部の不快感、膨満感、腹痛、肝機能障害、腹水、黄疸、重度の肝機能不全	人では10年以上経っての発症もある	感第4類
	回虫症(幼虫移行症)	犬、猫	経口(糞便中の虫卵が口に入る)	子犬、子猫: 食欲不振、下痢、おう吐 成犬、成猫: 無症状が多い	幼児で肝臓、脳、目等に障害	犬、猫に触ったり、砂場等で遊んだ後の手洗い励行	
	疥癬症	犬、猫	接触	皮膚の強いかゆみ、脱毛	皮膚の強いかゆみ、脱毛		

* 印: わが国で病原体がいます、もしくは長期間発見されていない病気

** 印: 感染症の種類

[参考文献・資料・ホームページ]

1. 動物由来感染症ハンドブック: 厚生労働省健康局結核感染症課編、2002
2. 動物由来感染症: 厚生省生活衛生局乳肉衛生課編
3. 厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/>
4. 厚生労働省検疫所 <http://www.forth.go.jp/>
5. 国立感染症研究所感染症情報センター <http://idsc.nih.go.jp/index-j.html>
6. 人と動物の共通感染症研究会 <http://www.hdkkk.net/>

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により、感染力、罹患した場合の重篤性に基づく総合的な観点からみた危険性と対応の内容及び必要度により、その高い順に第1類から第4類に区分、類型化されている。

(3) 予防のための注意（予防方法）

人と動物の共通感染症のほとんどは日頃の注意で防ぐことができます。必要以上にこわがることはありませんが、次のことに気を付けましょう。

飼養環境の管理

1) 動物の飼養場所の清掃等

ケージ（食器類も）や施設全体の定期的清掃及び定期的消毒の実施。

2) 餌（飼料）、水の管理

新鮮なものを適量与え、長時間放置しない。また、餌（飼料）の保管も適正に行う。（特に開封後のものや要冷蔵のもの）

3) 外界動物との接触（侵入防止）

他の飼養動物との接触防止（疾病、ノミ、ダニ等の感染）、野生動物（野鳥、ねずみ等）及び昆虫類（ハエ、ゴキブリ、蚊など）の侵入・接触の防止並びに駆除。

飼養動物の健康管理

・体調の管理（チェック）

健康な状態の理解と異常の早期発見のため、気をつけて観察する必要があります（図表4参照）。感染症によってはすぐに症状を示さない場合もあるので常に観察が必要です。また、幼齢動物は購入等直後にはストレスがかかるので注意することが必要です。

飼養動物との（過度の）接触等

1) 手洗い等身体の清潔保持

飼養動物の世話の前後には手洗いやうがいを行います。また、衣服等に毛や汚れがついたら清潔に保つようにします。

2) 過度の接触

餌の口移し、一緒の就寝、取扱作業場所での食事などは避けます。

3) 動物等により傷を負った場合

速やかに傷口を流水、石けんで十分に洗浄後、消毒します。必要に応じて医療機関で受診します。（犬による咬傷の場合は保健所に届け出ます。）

4) 飼養者が体調不良

健康状態の良くない人には、飼養動物の取り扱いを行わせないようにします。（人の健康チェックも必要です。）

(4) 消毒方法

「消毒」とは、感染症を防ぐために病原微生物を物理的、化学的方法で死滅させるか感染力を失わせることです（図表5参照）。

飼養動物のチェック項目		対 処
<ul style="list-style-type: none"> ・ 元気、食欲はあるか ・ 鳴き声、呼吸の状態はいつもと同じか ・ せき、くしゃみをしていないか ・ 毛のつやはよいか(逆立ったり、抜けたりしていないか) ・ 目やに、耳だれ、鼻水などはでていないか ・ 排泄物(フン、尿等)の状態は正常か(色調、下痢、血便、寄生虫の有無など) ・ 発熱はないか 	異常を 発見した時	<ul style="list-style-type: none"> 【飼養動物】 ・ 健康な動物とは隔離して飼って下さい。 ・ 必要により動物病院で受診して下さい。 【飼養者、接触者】 ・ 飼養者の体調もすぐれない場合は診療施設で受診します。(ペットを飼っていること、ペットの種類・期間等を告げて下さ

図表5:代表的な消毒方法と特性

消毒法(消毒薬)	消毒方法	特性	対象微生物	代表的薬剤名(製品名)
熱湯消毒	80度、5秒以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 簡単、安価、残留性無 ・ より高温、長時間で高効果あり ・ 熱に弱い素材には不適 食器、布類、床、壁等に適 	一般細菌に有効 (条件によりウイルス等にも有効) 芽胞は無効	
煮沸消毒	100度、10分以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 簡単、安価、残留性無 ・ より長時間で確実性があがる ・ 熱に弱い素材には不適 ガラスや金属製の食器、器具、布類等に適 	細菌、真菌、ウイルスに有効 (芽胞細菌は無効)	
逆性石けん	洗浄、浸漬	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低毒性、分解しにくい(安定性) ・ 手指などの使用に適 ・ 布類の消毒には不適 ・ 有機物により効果低下 手指、皮膚、床、壁、器具等に適 	細菌に有効 (MRSA含) ウイルスは無効	塩化ベンザルコニウム
アルコール類	塗布、噴霧	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低毒性、使用法簡易 ・ 汚れを残さない(脱脂作用) ・ 引火性有、蒸発性高い ・ プラスチック、ゴムの一部を変質 手指、皮膚、ガラスや金属の器具の表面等に適 	細菌、真菌に有効 芽胞、ウイルスに無効	消毒用エタノール
グルコン酸クロルヘキシジン	塗布、浸漬	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低毒性、低腐食性 ・ アルコール併用可 ・ 粘膜への使用不可(耳、目も) ・ 石けん分があると効果低下 獣医師と相談して使用 	細菌、真菌に有効 結核菌、芽胞、ウイルスは無効	ヒピテン液
塩素剤	塗布、噴霧、浸漬	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低毒性、安価、低残留性 ・ 分解しやすい(不安定性) ・ 金属腐食、刺激臭、脱色性有 布類、水、食器、床、壁等に適 	細菌、真菌、ウイルスに有効 結核菌、一部の真菌無効	次亜塩素酸ナトリウム
クレゾール	塗布、洗浄	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安価、有機物があっても有効 ・ 臭気が強い、損傷皮膚には不可 排泄物、床、壁等に適 	細菌、真菌に有効 芽胞、ウイルスに無効	クレゾール石けん
ヨウ素剤	塗布	<ul style="list-style-type: none"> ・ 皮膚、粘膜、傷への使用可 ・ 分解しにくい(安定生)(日光、有機物で分解) ・ 着色性、金属腐食性有 ・ 過敏症を起こす可能性有 獣医師と相談して使用 	細菌、真菌、ウイルスに有効 (一部の芽胞、ウイルス除く)	ポピドンヨード
過酸化水素	塗布	<ul style="list-style-type: none"> ・ 傷、潰瘍への使用可 ・ 発泡による機械的洗浄作用有 手指、皮膚(傷、潰瘍)等に適 	一般細菌に有効	オキシドール
グルタール(アルデヒド系)	噴霧、浸漬	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人体に使用不可(劇薬指定) ・ 金属腐食、刺激臭 獣医師と相談して使用 	細菌、真菌、ウイルスに有効 結核菌、芽胞にも有効	サイデックス ステリハイド グルタールZ
<p>消毒のポイント: 消毒薬は汚れを落としてから。 消毒薬の使用温度は「室温」が効果的。 消毒薬は適正な濃度と消毒時間を守る。 消毒薬の有効期限を確認。 消毒薬の保管場所に注意。 使用に不安、疑問があるときは必ずメーカー、獣医師、薬剤師に相談すること。</p>				
<p>【参考文献・資料・ホームページ】 1. 消毒と滅菌のガイドライン: 厚生省保健医療局結核感染症課監修、ヘルス出版、1999 2. 伝染病予防必携 第2版補訂版 : (財)日本公衆衛生協会、1979 3. 愛知県衛生研究所 http://www.pref.aichi.jp/eiseiken/</p>				

7. 逸走と危害の発生を防止するために必要な情報

飼い主は、飼っている動物が逸走することによって、人や社会に対して迷惑や危害をおよぼすことのないように心掛けなければなりません。

動物の逸走と危害の防止について「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」は次のことを飼い主の責任として定めています。

- ・飼養施設は、家庭動物等の逸走の防止に配慮した構造とすること。
- ・飼養施設の点検等、逸走の防止のための管理に努めること。
- ・逸走した場合には、飼い主等が自らの責任において速やかに捜索し捕獲すること。

さらに、人に危害を加えるおそれのある動物を飼う場合には、

- ・飼養施設は、動物が脱出できない構造とすること。
- ・飼養施設を常時点検し、必要な補修、施錠の確認をするなど管理に万全を期すこと。
- ・動物逸走時の措置についてあらかじめ対策を講じ、また捕獲等のための機材を常備すること。
- ・万一逸走した場合には速やかに関係機関、近隣住民へ通報、周知すること。

としております。

なお、人の生命、身体又は財産に害を加えるおそれがある動物については、動物愛護管理法施行令において動物種が指定され、都道府県等では、条例により危険防止のための規制を実施しています。しかしながら、外国からの移入野生動物のペット化など、ペット動物が多様化する中で、規制対象動物以外の動物であっても危害性を持つものがあることが考えられることや、同じ種の動物であっても、例えば闘犬のように攻撃性が強い性質を持つものや咬傷癖のあるものもいることに留意し、これらについては特にこの管理に注意する必要があります。

8. 生物多様性保全の見地から必要な情報

生物多様性とは、地球上の生物の多様さと、その生息環境の多様さ、言い換えれば生物種、生態系および遺伝子の多様性をいうもので、生態系は多様な生物が生息するほど健全であり、安定しているということです。

熱帯雨林の急速な減少、種の絶滅の進行等世界的危機感のもとに採択された「生物多様性条約」を批准したわが国では、平成14年3月に「新・生物多様性国家戦略」を策定しました。この新国家戦略は、生物多様性の保全と持続可能な利用を目的としています。

この新国家戦略では、生物多様性の3つの危機の1つに、移入種（外の地域から持ち込まれた動植物）による生態系の攪乱を挙げており、ペットの遺棄や逸走による移入種の増加を指摘しており、ペット動物の適正な飼養保管が求められています。

わが国には20万から30万ともいわれる種類の動植物が生息していますが、この中には沖縄のヤンバルクイナの例に見られるようにマンゲースやノネコの影響で絶滅の危機に直面している動物もいます。

人と動物が共生できる社会を実現していくためには、飼い主はひとたび飼養動物が逸走したり、あるいはこれを遺棄した場合、人の生命、身体、財産への害、人への迷惑などのほか野生動物の捕食、圧迫、在来種との交雑等生物多様性保全上の影響が大きいことを十分理解して慎重に飼う必要があります。

(1) 購入者への説明事項

動物を遺棄しないこと〔法律違反であり罰則（50万円以下の罰金）があること、生態系への影響の説明〕

動物を逸走させないこと〔近隣への迷惑、危害防止について、生態系への影響の説明〕

動物は終生飼養すること〔不測の事態（飼えなくなった場合等）の相談、説明〕

動物の適正な飼養、管理方法の説明〔生態、習性及び生理等の基本知識を含めて〕

(2) わが国において問題となっているペット動物による生態影響の事例（図表6）

図表6

動物種	< 影響の種類 >							人への影響	
	生物多様性への影響					影響を受ける地域の特性			
	< 影響の評価項目 > (影響を評価する際の主な視点)								
	影響のタイプ(種の特性)				生態系の攪乱				
	生態系の攪乱			遺伝的な攪乱					
捕食	競争・駆逐	土壌環境等の攪乱	希少・固有生態系、種		影響が生じている地域				
[哺乳類]									
カイウサギ							七ツ島(石川県)		
タイワンリス									
チョウセンシマリス									
アライグマ							北海道		
ノネコ							沖縄島、対馬		
[鳥類]									
ワカケホンセイインコ									
[爬虫類]									
カミツキガメ									
ミシシippアカミミガメ									

：国内で影響が確認されたもの

：(海外で影響が確認されるなど)国内でも影響を及ぼす可能性がある

(参考:環境省『野生生物保護対策検討会移入種問題分科会』資料)

III . 動物種ごとの個別事項

1 . 犬<食肉目イヌ科>

(1) 分類、品種、特性

犬は食肉目イヌ科に属し、もっとも古い家畜です。現在、地球上で飼われている犬種はおよそ350以上あり、わが国でも150犬種ほどが飼われていると推定されています。体重1kgに満たない超小型犬種から50kgを超える超大型犬種まで、大きさや外観は変化に富んでいますし、それぞれの犬種には目的に合わせて選択繁殖が行われてきた歴史があり、外見だけではなく、行動や性格にも特徴が認められます。犬の能力を発揮して活動している警備犬、麻薬探知犬、災害救助犬、猟犬などや、盲導犬、聴導犬などの障害者補助犬のほか、ほとんどの犬はコンパニオンドッグとして家庭で飼養されています。

犬を飼うにあたっては、ただ外見や大きさなどの見た目だけで選ぶのではなく、その犬種の性格や能力など「犬種の特性」を理解して選択することが大切です。同じ犬であっても、犬種によって、大きさだけでなく、その性格や、飼養の際必要となる運動量など、大きく異なります。飼養環境、目的、飼養管理の能力にあった犬種であるかどうか理解させる必要があります。犬種の特性は外観では判断できないものなので、初めて犬を飼う人には特に十分な説明が必要です。

日本でよく見られる犬種についての大きさや特性は図表7の通りです。

図表7:犬種別特性一覧表

No	犬種名	大きさ(成犬)		被毛	適性・性格			訓練性
		体重(kg)	体高(cm)		興奮しやすさ	攻撃的性格	運動量	
1	チワワ	1~3	16~23	短長	高	高		中
2	ポメラニアン	2~5	13~30	長	高	中		低
3	ヨークシャー・テリア	2~4	18~23	長	高	中		低
4	パピヨン	2~5	20~30	長	高	中		中
5	マルチーズ	2~4	20~30	長	高	中		低
6	狆(チン)	2~4	17~30	長	中	中		低
7	ミニチュア・ピンシャー	2~5	25~32	短	高	中		中
8	イタリアン・グレーハウンド	3~5	32~38	短	中	中		中
9	ブリュッセル・グリフォン	3~6	21~28	ワ	高	中		中
10	トイ・プードル	3~7	25~28	長	高	中		高
11	ミニチュア・ダックス・フンド	3~5	12~23	短長ワ	高	高		中
12	日本テリア	3~5	25~35	短	高	中		中
13	ビション・フリーゼ	3~5	23~31	長	高	中		中
14	ペキニーズ	3~7	15~25	長	中	中		低
15	シー・ズー	4~9	20~28	長	中	中		中
16	ラサ・アプソ	5~7	25~28	長	中	中		中
17	パグ	6~9	25~35	短	中	中		低
18	日本スピッツ	5~8	25~38	長	高	中		中
19	ミニチュア・シュナウザー	6~8	30~36	ワ	高	高		中
20	ウィペット	5~13	43~55	短	中	高		高
21	ケアーン・テリア	6~8	20~30	ワ	高	高		中
22	ウエスト・ハイランド・ホワイト・テリア	5~9	20~30	ワ	高	高		中
23	ジャック・ラッセル・テリア	6~9	22~38	短ワ	中	中		中
24	ボストン・テリア	5~12	35~45	短	高	中		低
25	キャバリア・キング・チャールズ・スパニエル	5~10	30~40	長	中	低		高
26	フォックス・テリア	6~10	35~40	短ワ	高	高		中
27	柴犬	6~10	35~42	短	高	高		中
28	シェットランド・シープドッグ	6~13	33~41	長	高	中		高
29	ビーグル	7~14	30~43	短	高	中		低
30	アメリカン・コッカー・スパニエル	7~13	33~40	長	高	中		低
31	スコティッシュ・テリア	8~11	20~30	ワ	高	高		中
32	パセージ	9~11	40~43	短	中	中		中
33	ミニチュア・ブル・テリア	9~15	25~35	短	高	高		低
34	ウェルシュ・コーギー	8~14	23~35	短	高	中		高
35	フレンチ・ブルドッグ	8~17	25~40	短	高	高		中
36	甲斐犬	11~23	39~53	短	高	高		中
37	イングリッシュ・コッカー・スパニエル	12~15	36~41	短長	高	中		低
38	サルキー	13~30	56~71	短	低	中		低
39	ボーダー・コリー	14~23	45~56	短長	高	中		高
40	アイリッシュ・セター	15~32	52~69	長	高	中		中
41	シャー・ペイ	16~25	41~51	短	中	高		低
42	シベリアン・ハスキー	16~28	51~60	短	中	高		低
43	パセット・ハウンド	18~30	28~38	短	低	低		低
44	エアデール・テリア	18~27	55~65	ワ	高	高		中
45	チャウ・チャウ	18~32	46~60	長	低	高		低
46	ブルドッグ	22~25	30~36	短	低	低		低
47	イングリッシュ・スプリングー・スパニエル	20~24	48~51	長	高	中		高
48	ピアデッド・コリー	18~30	50~57	長	低	低		高
49	コリー	20~34	51~66	短長	低	低		高
50	ダルメシアン	20~30	48~61	短	中	高		中
51	アフガン・ハウンド	23~35	61~75	長	低	中		低
52	ドーベルマン	23~40	61~71	短	中	高		高
53	サモエド	23~30	46~60	長	低	高		低
54	ブル・テリア	20~30	50~56	短	高	高		低
55	ボクサー	25~36	53~64	短	高	中		中
56	フラットコーテッド・レトリバー	25~36	56~61	長	低	低		高
57	ラブラドル・レトリバー	25~35	52~65	短	低	低		高
58	ゴールデン・レトリバー	25~36	51~61	長	低	低		高
59	ジャーマン・シェパード・ドッグ	26~42	51~70	短	低	高		高
60	ワイマラナー	23~40	55~70	短	中	中		中
61	秋田犬	31~50	57~71	短	中	高		中
62	オールド・イングリッシュ・シープドッグ	30~41	53~65	長	低	低		低
63	ボルゾイ	34~48	66~85	長	低	中		中
64	アラスカン・マラミュート	34~57	58~71	短	低	高		低
65	バーニーズ・マウンテン・ドッグ	35~50	58~74	長	中	低		中
66	ロットワイラー	41~50	58~69	短	低	高		中
67	グレート・ピレニーズ	41~57	61~82	長	低	高		中
68	グレート・デーン	45~77	70~90	短	低	高		中
69	ニューファンドランド	50~68	66~71	長	低	低		高
70	セント・バーナード	50~90	63~85	短長	低	高		低

参考文献:「SELECTING A SUITABLE DOG FOR AN OWNER」

VSAVA(飼い主に合った犬種の選択について:世界獣医学会)(1995)茂木利夫

短:ショートヘア

長:ロングヘア

ワ:ワイヤーヘア

体高とは:犬が立った状態で、首の付け根の肩甲骨上端から地面までの高さをいう

体長とは:肩端または胸骨端から後躯の坐骨端までの長さをいう

これらの純血種の他に、いわゆる「雑種」の犬たちがいます。これらの犬は両親犬が同種でない交配から生まれた犬で、外見的に両親が推定されるような個体から、全くそれらしい特徴のない個体まで様々ですが、性格が温和で人懐こいすばらしい家庭犬がたくさんいます。

(2) 習性、生理

寿命

犬の寿命は飼養環境や食餌の向上、感染症等に対するワクチン接種などによって延びています。犬種や個体によってかなり差はありますが、「犬の平均寿命は10歳（1994年）」といわれていたものが最近では15歳、さらには20歳を超えるものも珍しくなくなっています。大型犬は小型犬に比べて寿命が短い傾向にあるといわれています（図表8参照）。

幼齢期	1～6ヵ月齢
若齢期	6ヵ月～1歳
壮齢期	1～5歳
熟齢期	5～10歳
老齢期	10～13歳
高老齢期	13歳～
老齢期に入る年齢は犬のサイズによって異なります。 小型犬(～9kg) 9～12歳 中型犬(9～22kg) 9～11.5歳 大型犬(22～40kg) 7.5～10.5歳 超大型犬(40kg～) 6～9歳	

習性

オオカミを祖先とする犬は、オオカミと同様に群れで生活を営み、リーダーに従属し、順位制が尊重される社会が形成されます。家庭に迎えられた犬たちは家族を群れとして認識して行動しますから、この習性を理解して犬のしつけを行うことが大切です。

1) テリトリー

犬は自分のテリトリー(縄張り)を大切にします。テリトリーを守ることは、吠えたり、攻撃的な行動をとることで表されます。

2) 鳴き声

犬が鳴くのは必ず何か理由があります。支配的な威嚇、恐怖、苦痛、学習、興奮、不安などの理由があり、犬にとって無駄、無意味な鳴き声というものはありません。

鳴き声は犬の特性上、社会的に容認される程度であれば一般的に問題になりませんが、特に住宅地などでは近所からの苦情となるケースが多く見受けられます。このような場合には、飼い主は犬が鳴く理由を取り除かなければなりません。

生理

平均10～12ヵ月齢で性成熟に達します。メス犬の発情期は年2回、ほぼ6ヵ月周期で見ら

れ、妊娠すれば9週後(60日から63日頃)に子犬が誕生します。出生子数は小型犬種では数頭ですが、大型犬種では10頭近く生まれることも珍しくありません。

3週齢の終わり頃から4週齢に離乳食を少しずつ食べるようになり、6週齢頃には母乳に依存せず、離乳食に完全に切り替えます。

離乳食を食べ始めれば、子犬は母犬から独立して生活でき、譲渡可能にはなりますが、同胎の「きょうだい犬」ともしばらくは一緒に過ごしながら犬特有の社会生活のルールを学習して、いわゆる「社会化」を身に付けることが大切です。

社会化期

社会化というのは、相手を社会的存在として受け入れて、付き合っていけるような正常な行動がとれることをいいます。

生後約3週齢～12週齢までを社会化期といい、子犬の初期の発達段階の中でも特に重要な時期といわれています。この間、母犬と飼い主である人間の愛情が十分に注がれ、また同胎犬とのふれあいや他の人間や犬、繁華街などの雑踏、車などいろいろな環境刺激に慣れさせれば、しつけやすい犬となり、すばらしい家庭動物としての基礎が築かれ、問題行動の予防にもつながります。

このことから「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」では、子犬の譲渡に当たっては、特別な場合を除き、離乳前に譲渡しないように努めるとともに、その社会化が十分に図られた後に譲渡するよう努めること。また、譲渡を受ける者に対し、社会化に関する情報を提供するよう努めることとしています。

(3) 飼養上必要な設備、機材及び環境など

大型犬は屋外犬、屋内では小型犬という今までの考え方が最近ではかなり変化が見られるようになってきました。

室内飼いであっても、犬は犬専用の寝床(専用のソファ)やケージ内で寝かせる「しつけ」も必要で、犬嫌いの人の訪問時や、犬をゆっくり休息させる上でも大切なことです。屋外飼養で犬舎を置く場合には、外来者の出入りの多い場所は避けて家族の居室に隣接したところに置くようにします。庭に放し飼いにする時には、犬が外へ脱出しないように塀や垣根の構造には十分注意しましょう。繋いで飼う場合、短い鎖でけい留し、犬の運動を拘束するのは虐待に等しいことになるので禁止したいものです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

食事と栄養管理

犬はもともと肉食動物ですが、長い間、人間と密着した生活を続けてきたため、現在では雑食性になっています。しかし、犬と人とは栄養素の必要量にかなり違いがあるので、人と同じ食事を与えてはいけません。たとえば、犬の場合、タンパク質は人間の4～5倍、カルシウムは10倍必要で、逆に塩分は1/3以下、野菜も少量でかまいません。

この栄養バランスを考えて作られているのが、ドッグフードです。手作り食の場合は、肉を中心に、その他の食物で足りない栄養素を補うこととなりますが、栄養士でない限り、

犬の栄養を満たす食事をつくるのは難しいことです。子犬の頃からドッグフードに慣れさせておきましょう。

ドッグフードを選ぶ際はそれぞれの特徴をよく知り、犬の体調や嗜好、成長などに応じて選びます。例えば、経済性、使いやすさで選ぶならドライタイプが最適です。ウェットタイプの缶詰やレトルトは犬の嗜好性という点で優れています。

ドッグフードの内容表示には食事の目的や内容量、与え方などが明記されていますが、主食には「総合栄養食」と書いてあるものを選び、与える量は、パッケージの表示に従います。また、幼犬用、成犬用等、成長段階に応じたものを与えましょう。

犬の食事は全てドッグフードでも構わないのですが、もうちょっと手をかけたいという場合には、手作り食を検討してみてもよいのですが、犬に必要な栄養をバランスよく配合するのは、簡単なことではありませんので、副食としてドッグフードに調理した肉や野菜を混ぜてあげたり、ときどき手作り食を与えるという程度にとどめておきましょう。

与えてはいけない食物：玉ねぎ、長ねぎ、にら、生の魚介類、鶏・魚の骨、乳製品、甘いもの、塩辛いもの、香辛料のかかったもの、生卵、アルコールなど。

運 動

屋外へ散歩に出るのは運動が必要ということだけでなく、環境に適応し、心理的な発達や社会性を養う上で大切です。

散歩中は首輪が抜けないように、引き綱(リード)も犬の大きさに適合したものを選んで犬が放れて事故に遭わないよう、また、通行中の人や他の犬に危害を与えないように十分注意しましょう。

しつけの基本

人が常にリーダーシップをとって犬の行動をコントロールすることが「しつけ」の基本です。

家庭犬として飼われている犬種では、子犬の時から主従関係をしっかり認識させ、理想的には、家族の最下位に犬が位置するように接すれば飼い主の要求に従う犬に育ちます。

「尊敬されるリーダーになる」ように厳しくしつけ(ただし体罰は絶対に避ける)、できたら大仰に褒める、というのが「しつけ」を成功させるコツです。生活していく上で、人間にとって不都合な犬の行動は、早めに制御して修正しましょう

迷惑防止

ペット飼育による迷惑なことについては、平成12年に総理府が実施したアンケートの調査結果(図表9)の通りですが、この中でトップを占めているのは「散歩している犬のふんの放置」、次いで「鳴き声がうるさい」です。

図表9：ペット飼育による迷惑(複数回答) 動物愛護に関する世論調査 (総理府実施平成12年6月調査)	
該当者数	2,190人
散歩している犬のふんの放置など飼い主のマナーが悪い	58.10%
猫がやって来てふん尿をしていく	40.90%
鳴き声がうるさい	36.10%
犬の放し飼い	30.90%
悪臭がする	21.80%
咬まれるなどの危害を加えられるおそれがある	16.90%
寄生虫や人と動物の共通感染症がうつされる心配がある	13.70%
その他	0.50%
特になし	11.80%
わからない	0.50%

ペットフード工業会のアンケート調査(平成13年)によると、犬の排泄場所はどこかという問いに対して、室内17.0%、自宅敷地内26.9%、敷地外・散歩中は実に55.8%との回答で、犬の運動、散歩は排便目的も兼ねたものと錯覚している飼い主が多いのではないかと思わせる結果となっています。散歩に出かける前の排便のしつけの徹底が望まれるところです。

犬の鳴き声については、犬にとって「吠える」ことは、ごく自然なことです。吠えすぎは近隣からの苦情の原因となります。犬が鳴いたり、吠えたりするのは、何かのきっかけや興奮する原因があったり、何か要求があったり、縄張りを守ろうとしたり、相手を威嚇したり、不安があったりなどが原因となっていますので、これを防止するためにはこれらの原因を除去することとしつけが必要です。

いずれにしてもこれは飼い主の自覚によって改善されることですので、十分留意して迷惑をかけて苦情が出ないように努力しなければなりません。

繁殖制限(不妊、去勢手術)

メス犬を飼い、繁殖を望まないときは、次のような利点がありますので、不妊手術を受けるようにしましょう。

- ・年2回見られる発情期の出血や心理的变化が抑制でき、ストレスがなくなる。
- ・偽妊娠の兆候や、メス犬特有の病気、例えば乳腺腫瘍や子宮の病気が予防できる。

オス犬の去勢手術によるメリットは、

- ・メス犬に対する性的要求や興奮がコントロールされストレスがなくなる。
- ・攻撃的性格や粗暴な振舞いが抑制され、温和で飼いやすくなる。
- ・オス犬の高齢犬に発症が多い前立腺の病気や、肛門周囲の腫瘍の予防効果がある。

(5) 健康と安全の管理

犬種によりかかりやすい病気

犬はその大きさや犬種によりさまざまな特徴や体質の違いがあり、かかりやすい病気の傾向や、大型犬種の股関節形成不全のような遺伝的疾患もありますので十分な情報収集が必要です(図表10参照)。

主な病気(感染症)と予防

犬の感染症は、一度発症すると命にかかわる危険な病気が少なくありません。しかも感染後の治療は難しく、死亡率が高いのが現状です。中には病気が治っても後遺症に苦しむ場合もあります。こうした感染症を防ぐためには、ワクチン接種や予防薬の服用が効果的。感染症は予防が肝心です(図表11参照)。

ウイルスによる主な感染症には、狂犬病、ジステンパー、犬伝染性肝炎、犬パルボウイルス、犬パラインフルエンザなどがあります。この他、蚊の媒介で感染する寄生虫の病気のフィラリア症や細菌によるレプトスピラ症などがあります。

その他、気をつけたいのはコクシジウム原虫、回虫や鉤虫など腸内寄生虫の感染です。寄生虫の有無は検便でわかります。

人と動物の共通感染症

犬から人にうつる人と動物の共通感染症の中で代表的なものが狂犬病です。このほか、ダニやカビなどが原因となる皮膚疾患、犬の糞から感染するカンピロバクター、犬の回虫の「幼虫移行症」のほかQ熱などがあります。

	大型犬	小型犬
特徴	肘関節、股関節の形成不全。首の椎間板ヘルニアなど、骨や関節の成長に関係した病気が多い。	水頭症、膝蓋骨の脱臼が多い。頭骨の合わせ目(泉門)が開いている犬種は、頭部への衝撃を避けなければならない。老齢になったら、歯肉炎、心臓病に注意。
かかりやすい病気	<p>ゴールデンレトリバー 股関節形成不全、白内障や進行性網膜萎縮症などの眼疾患、心臓病が三大遺伝病。長毛種のため皮膚病も発生しやすい。</p> <p>秋田犬 皮膚病にかかりやすい。フォクト・小柳・原田様症候群(ブドウ膜髄膜炎)という免疫に関連のある目の遺伝病もある。</p> <p>イングリッシュ・セター 尾を傷つけやすく。出血すると長引く場合もある。老犬は白内障や難聴、鼓腸(腸内にガスが充満する)になることが多い。</p> <p>コリー 寒冷地原産のため、夏の強い紫外線に弱く、鼻すじや目の周囲に炎症が広がる日光性皮膚炎に要注意。コリーアイという目の先天性疾患が原因で、眼内出血や緑内障になることもある。失明する網膜の病気も警告されている。</p>	<p>シー・ズー 顔が扁平で目が大きいため、角膜炎など目の病気が多い。目の周りの皮膚を引っ張ると、目が飛び出してしまうこともある。喉頭・呼吸器疾患や、皮膚が脂っぽくベタベタした脂漏性の皮膚病になりやすい犬もいる。</p> <p>チワワ 呼吸器疾患、眼疾患のほか、先天性のものとして脳神経疾患(水頭症、後頭骨形成不全)になりやすい。</p> <p>マルチーズ 中には血小板減少性紫斑病の報告も多い。老犬になると心臓病をおこしやすい犬もいる。運動時に出る咳や疲れが見えたら要注意。外耳炎にも注意。</p> <p>ヨークシャー・テリア アレルギーや膿皮症などの皮膚病になるケースが多い。目の周りの被毛も結膜炎の原因に。歯周病にも注意。</p>

種類	接種・服用の時期
狂犬病予防接種 畜犬登録と予防接種は法律による飼い主の義務。	生後90日が過ぎたら第1回目を接種。以後年1回4月に追加接種。
5種(7種、8種)混合ワクチン 動物病院により、5種か7種かは異なる。犬パルボウイルス感染症には単体のワクチンも有る。 5種(犬ジステンパー、犬伝染性肝炎、犬アデノウイルス2型感染症、犬パラインフルエンザ、犬パルボウイルス感染症という5種類の病気を予防するワクチン) 7種(5種にレプトスピラの2種類の株を加えたもの) 8種(7種に犬コロナウイルス感染症を加えたもの)	生後50日前後に第1回目、その後3、4週間隔で1回以上接種。以後1年に1回。
フィラリア症予防薬 気候により、服用期間が異なる。	毎年5月～11月(地域や気候によって異なる)に月1回のペースで服用。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

犬の飼い主は「狂犬病予防法」に基づいて生後91日以上の犬には「登録」と「予防注射」が義務付けられています。日本では現在、狂犬病の流行が見られないために疎んじられている傾向がありますが、前述したとおり狂犬病は人にも感染し、致命的な経過をとる危険な感染症です。日本と交流の深い近隣諸国だけでなく、米国や欧州のいくつかの国でも発生が報告されているので油断はできません。犬に予防注射をして、いつ侵入しても流行拡大しないよう予防対策が重要です。

また、地方自治体によっては条例により一定以上の飼育頭数を規制しているところもありますので、確認する必要があります。

(7) その他特記事項

周囲の迷惑にならないよう、犬の放し飼いを行わないようにしましょう。

犬をけい留する場合は、けい留されている犬の行動範囲が道路または通路に接しないようにし、通行者に危害や迷惑を及ぼさないよう注意しましょう。

2 . 猫<食肉目ネコ科>

(1) 分類、品種

猫は食肉目ネコ科に属します。家猫は紀元前2～3千年の間、エジプトでリビアヤマネコを飼いならしたものとされています。現在、世界的に見ると40種ほどの品種が公認されています。わが国では日本猫のタイプだけでなく、ペルシャ系の長毛種や、シャム猫、アメリカン・ショートヘア一種の混血などが普通に見られます。

猫の品種は、被毛タイプ別に長毛種と短毛種に分類し、一つの品種で長毛、短毛種の二つのタイプがある場合を含め、日本でよく見られるものは次の通りです。

長毛種（ロングヘア）

ペルシャ、ヒマラヤン、ソマリ、バーマン、ラグドール、メイン・クーン、アメリカン・カール、ジャパニーズ・ボブテイル、スコティッシュ・フォールドなど

短毛種（ショートヘア）

アメリカン・ショートヘア、セルカーク・レックス、アメリカン・カール、シャム（サイミーズ）、アビシニアン、スフィンクス、ジャパニーズ・ボブテイル、日本猫など

(2) 形態、習性、生理

形態と大きさ

猫の種類が増加してきたのは50～100年位前からで、特徴のある毛色や体型などの個体が誕生すると、その遺伝子を固定するように人為的に繁殖を試みたからで、それぞれの体型などの特徴が受け継がれています。

例えば大きさで見るとノルウェージャン・フォレスト・キャットは体重3～9kg、シベリアン（サイベリアン）・フォレスト・キャットは4.5～9kg、メイン・クーンは4～10

kgといずれも大型種に属し、日本猫やシャム猫は2.5～5 kgですから比べるとかなり差があり、アメリカン・ショートヘアー（3.5～7 kg）、アビシニアン（4～7.5 kg）などはその中間タイプに属します。

寿命

ワクチンの開発と獣医学の進歩、キャットフードの普及によるバランスのよい栄養食などによって少しずつ寿命が延びる傾向があると考えられています。現在では14～15歳まで元気である猫は少なくありませんし、長寿の猫としては20年以上のものもいます。屋外飼養、屋内外出入りが自由な猫は感染症、交通事故などにより短命です。

生態と習性

1) 社会生活

猫類の生態はオスもメスも単独生活が基本ですが、それぞれが一定の広さの行動圏（ホームレンジ）と狩猟圏（ハンティングエリア）をもっています。

一軒の家の中で複数の猫が暮らす場合や餌場、休息場所を共有してコミュニティーを形成するなどして生活する場合があります。

社会生活をする上で動物相互間の情報交換や意志伝達が大切な役割を果たしています。意志伝達的手段として、音声、顔の表情、ボディランゲージなどがあります。

また、匂いによる情報伝達も極めて重要です。例えばマーキング行動の中に「尿によるマーキング」、「顔やわき腹などの擦り付け」、「前肢による引っかき行動」、「肛門囊からの分泌物」、「メスの発情期の性フェロモン」などがそれにあたります。

2) 猫の身づくろい（セルフグルーミング）

猫はたいへんきれい好きな動物で、猫特有のザラザラした舌で全身をなめまわしたりしています。これはセルフグルーミングという「毛づくろい行動」で、狩りをする猫にとっては臭いで獲物に気付かれないために必要な習性です。

また、これは自分で健康を保つための基本的な行動であり、皮脂腺を刺激して毛に防水性を保たせたり、暑いときの体温調節や脱毛の始末に役立っています。

3) 爪研ぎ（引っかき行動）

爪研ぎは、常に伸びてくる爪を適当な間隔で研ぎ、利用しやすい武器にしておく必要から行われる行動と従来まで考えられていました。しかし、その他にも行動圏の中で樹木や木材、柱など、室内では家具やソファなどが利用され、爪で傷をつける視覚的マーキングと足の裏から出る汗をつける匂いのマーキングの両者が同時に行われているのです。

また「爪研ぎ」をしている猫は、一種の快感を覚えているように見受けられますし、機嫌のよい時や遊びを誘う時、ちょっとはしゃいだ後などにも誘発されるのを見ると単なるマーキングの行動だけでなく、大切なボディランゲージでもあるようです。

4) 猫の行動範囲

猫は犬に比べ、はるかに行動半径が小さく、家猫の空間的広がりとしての範囲は、主

として自宅とその周辺で、飼い主の家と周辺の庭程度が「ホームレンジ」になっています。

メスや去勢されたオスの行動圏は小規模で狭く、逆に去勢されていないオスは広く、メスの約10倍程度といわれています。また、オス猫は近所にいるメス猫数頭を対象に巡回し、メス猫の分布状況によってはかなり広い地域をパトロールしていることとなります。

屋内飼いの場合、ホームレンジは、家族で暮らす部屋やベランダですが、本来猫は安心できる空間があれば狭くても暮らしていけます。

5) 夜行性

猫は本質的には夜行性の動物です。その証拠に闇夜でも視力が働き、人の眼が感じる最低の光量の6分の1の明るさでも物を見ることができるようになります。

しかし、現代の猫の行動を見ると飼い主の生活リズムに適応して行動するようになり、真の夜行性とはいえないようです。

6) 鳴き声

猫の鳴き声には、くつろいだ時に発するつぶやくようにのどを鳴らす声、自分に関心をひきつけたい時や食餌を求める時に発するはっきり音をだす声、攻撃、防御、交尾の際に発する金切り声や「ファー」という唸り声の3種類があります。

生理（繁殖行動）

1) 性成熟

オス： 生後18ヵ月の頃から性ホルモンの影響により、成獣のオスとして行動が大きく変化し、特徴的な鳴き声や尿を壁等に吹きつけるスプレー等の行動がみられるようになります。特に、オス猫の性行動に伴う三大問題といわれる、放浪癖、オス猫同士のけんか、スプレーが顕著となります。

メス： 生後7ヵ月から12ヵ月の間に最初の発情があります。発情兆候は落ち着きがなくなり、尾を上げて排尿回数が増加し、特有の鳴き声をだすなどの行動が見られます。また、一種の化学物質であるフェロモンを出してオスの性衝動を誘発します。

発情の頻度や間隔は飼われている環境や品種などによって個体差があります。発情が次々に来る猫もいますし、6ヵ月以上も発情しない猫もいます。一般的には1年に3回、約3ヵ月の間隔で、1月中旬～3月初旬、5～6月、8～9月に見られ、発情は約1週間程度続きます。

一般的な猫の発情期をモデル化すると図のようになります。

【メス猫の発情期】



通常、交尾をしない場合は、4～5週間おきに発情が起こります。
ただし、飼養環境やいろいろな条件で個体差がありますので、すべてがこのように発情するとは限りません。

2) 交尾排卵

猫は交尾の刺激によって排卵するタイプです。排卵が近づくと体を柱や家具、人間などに擦り付けたり、ごろごろ転がり、尾を上げてお尻を見せる行動などが見られます。この時期が交尾の適期なのです。

3) 妊娠

交尾排卵といっても、排卵は交尾が何回か行われることが必要といわれています。有効な交尾の刺激は、24時間後に排卵を起こして受精します。妊娠期間は63～65日、約2ヵ月です。

4) 出産と離乳

受胎してから約2ヵ月後、子猫が3頭～8頭(平均5頭)生まれます。離乳期は約1ヵ月齢(4～5週齢)です。

社会化期

猫にも猫特有の社会があり、そのルールを学ぶ、社会化期があることが知られており、社会化期に人や他の動物などに馴れさせておくことで落ち着きのある、飼いやすい猫になります。逆に人や他の動物と接触していないなど、社会化が不十分な猫は、見知らぬ人や動物に会った時、攻撃的になったり、臆病で神経質な猫になったりします。

子猫同士が、お互いを認識してじゃれて遊び始めるのは3週齢頃からです。相手の顔や体に手を出したり、咬みついたりする動作から始まり、運動機能の発達に伴って、追い回したり、忍び寄って跳びかかったり、取っ組み合いを始めるようになります。

このような遊びの行動を通じて、傷を負わせない程度の咬み方などを学ぶのです。

「社会化」が育まれるのが生後約3週齢～9週齢頃といわれており、この頃に母猫や生まれた兄弟姉妹たちと過ごした経験は、子猫の社会化のために大切なことです。

したがって、子猫を飼う場合は社会化期を過ぎてからが好ましい時期といえます。

もし、捨てられた子猫や人工哺乳で育て仲間と遊ぶ機会がなかった猫を飼う場合は、同年齢ぐらいの子猫がいる家庭に一時預けて猫同士で自由に遊べるチャンスを作ると「社会

化」がうまくいくといわれています。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

猫は家の中で自由気ままに生活し、屋外にも出て行く飼われ方をしてきました。しかし最近の都市部での住宅事情や集合住宅、高層化という環境では、屋内外の出入りを自由にするのは、猫にとってもかなり危険であるばかりか、猫の飼養密度の高い地域では、感染症にかかる確立も高いので、猫の幸せのためにも屋内飼いが推奨されるようになりました。

【屋内飼養の場合の配慮事項】

- ・不妊、去勢手術を行う。
- ・トイレのしつけを行う。
- ・立体的に行動できるようにする。
- ・屋内の危険物を除き、安全に努める。
- ・遊んであげる（ストレスを解消してあげる）。
- ・爪研ぎ器を用意する。

立体的に行動する猫

犬と違って猫は高い所に登るのが得意ですから、室内ではテレビの上や洋服箆笥の上、飾り棚の上などに登りたがると思います。室内空間で猫ができるだけ自由に生活できるように、禁止場所を少なくして、立体的に行動する空間を作ってあげることが大切です。

猫の排泄行動

猫は排泄場所を決めて、糞や尿を埋め隠します。子猫の時から猫用のトイレを用意しておけば特におぼたに教えなくても砂箱の中で排泄しますので、家の周囲や近隣の庭や花壇などを汚さないで済みます。

猫用のプラスチック製のトイレ容器も販売されていますし、台所用品の二重底構造の「水切りカゴ」も代用でき、猫用のトイレ砂を入れておけばよいのです。猫のトイレはいつも清潔にしておかないと、汚れた砂を嫌って他の場所で排泄してしまうことがありますので注意してください。

(4) 飼い方のポイントと注意点

繁殖制限（不妊、去勢手術）

不妊、去勢手術の効果としては、12頁の図表2に示したほかに、猫の場合、発情期に異様な声で夜通し鳴くことがなくなります。

メスの場合、約10日間ほどの発情の間、独特の鳴き声や行動を我慢すればおさまります。しかし妊娠しなかった場合は、猫によっては数週間後にまた発情します。メス猫が発情すると、かなり遠くからオス猫が集まってきて鳴き声を交わすので、夜間など迷惑に感じる人も少なくありません。また、トイレ以外の場所で放尿(マーキング)するものもいます。

オスの場合、屋内外出入り自由に飼われている猫はメスのいる家へ侵入して尿マーキングをしたり、また、発情期のメスを求めて鳴く声や、メスをめぐる闘争、夜間の鳴き声は近所の迷惑になるでしょう。

性成熟したオスは外出したが、外出させないでいると家中にスプレーをして回り、その独特の匂いはとても耐えられるものではありません。

猫の食事と栄養

1) 栄養

猫は高タンパクで高脂肪の食べ物を好みますが、肉や魚だけを与えておけばよいというものではありません。さらにビタミン類やミネラル分も必要です。ビタミンCは体内で合成できますが、ビタミンAは外から取り入れなくてはなりません。

ご飯などの炭水化物は、猫は特に必要としませんが、食べれば消化吸収し、エネルギーとして利用します。

猫は食塩の要求量が少ない(犬の半分)ので、塩分の多い食べ物はよくありません。甘い菓子類も食べさせてはいけません。調味料や香辛料も同じで、食事に味付けは不要です。

動物が生きるのに欠かせない必須アミノ酸に「タウリン」がありますが、人間や他の動物では体内で合成できるのに、猫ではそれができません。タウリンが欠乏すると視力障害や発育不全、心臓病や血液の病気などを引き起こします。タウリンは肉・魚介類に多く含まれています。

2) 猫の食性

食動物のうちで、猫類は最も狩りに適応した動物で、食性は肉食性で植物を原則的には食べません。しかしながら、家猫は長い間人間に飼われてきたので、多かれ少なかれ雑食性の傾向があります。猫は好物の幅が狭くて食べ慣れた味に固執する傾向があります。

猫の胃は体の大きさに比べて大変大きく、食べ溜めができます。しかし、食べ物がいつも食器の中にあり、ねだればすぐに新しい食べ物が出てくるという現代の猫は、昼も夜も無関係に少しずつ何回も食べるという食習慣に変わってきています。

また、猫は食べ物の鮮度に大変敏感ですからキャットフードなども常に新しいものを好みます。

猫には、偏食がもとで起こる病気が少なくありません。食べ物の好き嫌いは子猫のうちが決まりますから、一つの食べ物に偏ることなく、この時期にできるだけいろいろな食べ物を与えて、何でも食べられる猫にしつけることが大切です。

3) キャットフードの与え方

キャットフードにはドライタイプとウェットタイプがあり、これらを上手に利用するとよいでしょう。病気の猫に対しては、症状に応じて適切な療法食が用意されています。

ドライタイプは保存性も栄養のバランスもよく経済的です。しかし水分が約8%しか含まれていませんので、新鮮な水をいつでも自由に飲めるようにしておくことが大切です。ドライタイプだけの場合、飲む水の量が少ないと、尿の濃度が上がって尿結石ができやすい素地をつくったり、腎臓に負担をかけることが多いので注意が必要です。

ウェットタイプには水分が70%も含まれ、缶詰やレトルト製品があります。猫が缶詰を喜んで食べるのは鮮度がよく、猫の嗜好に合うように作られているからです。なお、ウェットタイプだけを食べていると歯垢や歯石がつきやすいので、ドライフード等も併せて利用するとよいでしょう。

1日に与えるキャットフードの量は、年齢、体重、活動的かどうか、授乳中などで異なりますから獣医師に相談するとよいでしょう。

(5) 健康と安全の管理

主な病気と予防

猫の生命にかかわる恐ろしいウイルス性の感染症が、いくつかあります。

1) ワクチンで予防できるウイルス感染症

- ・猫汎白血球減少症（猫伝染性腸炎）

猫のパルボウイルスの感染でおこります。

- ・猫上気道感染症（猫ウイルス性鼻気管炎 / 猫カリシウイルス感染症）

前者はヘルペスウイルス、後者はカリシウイルスでおこります。

- ・猫白血病ウイルス感染症

2) ワクチンの接種

生まれた子猫が初めて飲む母乳を「初乳」といい、様々な病気に対する抗体が含まれ、生後2ヵ月ぐらいまでは病気から守られています。この期間を過ぎると病気に対する抵抗が低下しますから、ワクチンの接種が必要になります。

パルボウイルスは人間の靴や衣服に着いて家の中に侵入しますし、風邪が治ってもヘルペスウイルスは3週間ぐらい目や鼻の分泌物の中にいます。また、カリシウイルスは扁桃腺の中に残っていて長い時は何年も居続けることがあります。猫白血病ウイルスは唾液の中に出るので、同居猫のなめ合いやけんかの傷から感染することもあります。病気の猫は他の猫と接触させず、抵抗力のない子猫は外に出さないほうがよいでしょう。

ワクチン接種は生後7～8週ごろに1回目、その3週間後に2回目、その後は毎年1回の追加接種をします。子猫を手に入れた時はワクチン接種の有無を聞くことが大切ですが、わからないときは獣医師に診せてください。

3) ワクチンのないウイルス感染症

- ・猫伝染性腹膜炎
- ・猫免疫不全ウイルス感染症

以上2つのウイルス感染症は、単独ではあまり重い症状にはなりません、重複して感染すると致命的になることがあります。まだワクチンは開発されていませんから、最良の予防手段は他の猫と接触させないことです。

4) 感染症以外の重い病気

- ・泌尿器症候群

猫には、腎臓、膀胱、尿道などの泌尿器系の病気が比較的多く発生します。

- ・心臓病と胸部疾患

心筋症や膿胸（胸膜炎）などは発見が遅れがちで、重大な結果を招きます。突然現れる後躯麻痺（腰ぬけ）も、心筋症に関連が深いことが多いので要注意です。

- ・皮下膿瘍

オス猫は、けんかの外傷などから化膿菌が入り、皮下に大量の膿（うみ）がたまることがあります。

- ・猫のフィラリア

フィラリア（犬心臓糸状虫）は蚊が媒介するもので、最近、猫にも寄生して肺に障害を起こすことがわかってきました。フィラリア症は1ヵ月に1回予防薬を飲ませるだけで予防できます。

5) 猫のノミ

内暖房のおかげで、今は冬でも猫にノミの寄生が見られます。ノミはアレルギー性の皮膚炎の原因になるだけでなく、人間も刺されて足首などにかゆい発疹ができることがありますし、猫の腸内寄生虫の瓜実（うりざね）条虫の中間宿主ともなりますから、数が増えないうちに対策を立てるようにしましょう。

ノミのほとんどは猫の体ではなく、成虫も卵も猫の体から落ちてカーペットなど床の暗いところに住みついています。幼虫からサナギになると、猫が近づいた振動で殻が開き、成虫になって猫に取り付きます。ですから、ノミ退治には、床をいつも清潔にしておくことが大切です。

ノミの殺虫、駆除剤は、猫の体に薬液をスプレーするタイプ、薬液を滴下するタイプ、薬成分を封じ込めた首輪タイプなどがあります。また、内服薬や注射薬などでノミの幼虫の成長を阻害して繁殖を防ぐ薬剤もあります。環境、季節を考慮しながら、これらの薬剤を組み合わせ、効果的で抜本的なノミの駆除対策をとりましょう。

人と動物の共通感染症

猫から人にうつる感染症には、猫ひっかき病、トキソプラズマ症、皮膚糸状菌症、疥癬症、狂犬病、Q熱などがあります。

(6) その他特記事項

猫の健康と安全、近隣迷惑の防止のために、屋内飼養と不妊、去勢手術の実施が望まれています。

3. ウサギ<ウサギ目ウサギ科>

(1) 分類、品種

ウサギ目はウサギ科とナキウサギ科の2科があるのみで、ウサギ科はアナウサギと、それとはまったく別種のノウサギからなります。愛玩動物として飼われているものはアナウサギの改良品種です。

品種としては、小型のネザーランド・ドアーフから、大型のフレミッシュ・ジャイアントや毛の長いアンゴラ、耳の垂れ下がったロップイヤー、たてがみのように首の周りの毛が立っているライオンなどさまざまで、現在、50以上の品種があるといわれています。

(2) 形態、習性、生理

大きさは体長30～60cm位、体重1～6.5kg位と品種によりさまざまです。耳は血管が張りめぐらされた敏感なところであり、汗腺が発達していないため、ここで体温調節の役目を果たしています。高温多湿に弱い動物の1種といえます。反面、水はよく飲み、水分が不足すると自分の尿を飲むようになりますし、子育てのときは子を食べてしまいます。

本来、夜行性であり、食性は草食性。木の皮や若木、草やその根、実、畑の作物などを食べています。軟便と固くて丸い便の2種類の便をし、軟便はもう一度肛門から直接食べてビタミンB₁₂などの未消化栄養素を吸収するという二重消化の特徴をもっています。

オスには順位制があります。寿命は5年～15年で、性成熟は品種により違いがあり4～10ヵ月(大型種ほど遅い)です。交尾排卵のため1年中繁殖可能ですが、だいたい1年に3～4回(1回に4～7羽)繁殖するようです。妊娠期間は30～35日で離乳期は45日前後です。ふだんはおとなしいですが、不妊手術をしていない場合、発情すると特にオスは気が荒くなり、咬まれると思わぬケガをすることがあります。また、鋭い門歯に指を当てただけでもケガをすることがありますので、幼児や児童が扱う場合には注意が必要です。体臭はほとんどありませんが、糞尿の量が多いので、処理を怠ると臭気がひどくなります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

室内のケージ飼いが一般的ですが、屋外施設を利用する飼い方もあります。

室内のケージ飼いをする場合

ウサギ専用のものや小鳥用大型ケージのほか、犬用ケージ(天井がなくともよい)を利用します。床材としては、木製のすのこを敷き、すのこの下にペットシートか新聞紙を厚めに敷いておくと毎日の掃除に便利です。床の隅には、主食用とその他の用のための食器2個(プラスチック製だと齧ったときに危険なので陶器製がよい。齧っても害はない木製のマスも適切です)、ウサギ用トイレ(中に固まらないタイプの猫砂を敷いておきます)、寝床(中にワラを敷きます)を設置します。ケージの側面には、食用の乾牧草入れ(ケージの外に掛ける専用のもの)と、サイホン式の給水ピンを取り付けます。運動不足からストレスとならないよう、目の届く時間にはできるだけ室内に出してふれあいを図ったり遊ばせたりすることが大切です。室内の色々な危険や事故を避けるためにはサークルの利用が有効となります。

屋外の施設飼いをする場合

木製の小屋が一般的です。地面を金網の柵で囲って自然に近い状態で飼うこともできます。この場合は、地中に穴を掘って柵の外に逃げられないように、地中にブロックか、トタン板(雨水が溜まらないよう水抜き穴を作ること)などでプール状に仕切りを埋め込むなどの工夫が必要です。

飼養環境

高温と、特に湿気に弱い動物であることを考慮する必要があります。特に梅雨期には湿気を防ぎ、夏季には直射日光が避けられ、涼しく、湿気のこもらない通風のよい環境をつくるのが大切です。

寒さにはかなりの抵抗力がありますが、本来地中生活者であるため、冬季の昼夜の急激な温度変化にはさらさないように気を付け、隙間風を防ぐのが大切です。採光は、昼間は窓からの自然光が得られ、夜は暗くできるような環境にします。日光浴は、タオルなどで日陰の避難場所を作って春、秋、冬の穏やかな陽射しに時々当てる程度にし、夏季の強い日差しの日光浴は考えないほうが無難です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

繁殖制限

繁殖を希望しない場合は1頭飼いが原則です。オスのほうが人なつっこい傾向がありますが、性成熟を迎える前の生後4～6ヵ月頃(品種により違いがあります)に去勢手術をすればスプレー行動などがなくなることが多く、発情時の気の荒さもなくなり非常に飼いやすくなります。1つのケージでのオスどうしの複数飼いはけんかをするので避けましょう。メスどうしの複数飼いは可能ですが、その場合にも性成熟を迎える前に不妊手術をしたほうが発情のストレスもなくなりウサギのためにはよいでしょう。

食 事

主食は専用のペレット(固形飼料)と乾牧草にし、おやつ程度に小松菜などの根菜類・菜っ葉類、りんごなどの果物、オオバコなどの野草を与えます。また、ミネラル補給のための塩土と、歯の伸びすぎ防止のための「かじり木」は常置しておきます。湿気に弱いといっても水は大変よく飲みますので、常に新鮮な水を用意しましょう。なお、下痢をしやすいので水分の多い野菜や果物の多給は控えるのが大切です。ペレットは1日に朝夕の2回、30分程度で食べきってしまう程度の量を与えます。乾牧草はいつでも食べられるように新鮮なものをに入れておきます。嗜好性にかたよりがみられることが多いので、若いときからペレットと乾牧草に十分に馴らしておくことが重要です。

食物の注意点

野菜や果物は、農薬やワックスなどの危険があるのでよく洗い、下痢を防ぐために水気が乾いてから与えるようにします。また、野草を与える場合は、除草剤がかかっていると致命的ですので要注意です。与えてはいけないものに、肉類や、タマネギ、ニラ、ニンニクなどの刺激性のある野菜類、チョコレート、クッキー、ケーキなどの甘いものや人間の食べ物、有毒な園芸植物、観葉植物、野草があります。

なお、干牧草はダニやカビの発生を防止するため、買って帰ったらいったん天日干ししてから湿気ないように密封して保管するのが適切です。これは、寝床や床材として使用する場合も同様で、ワラにも同じことがいえます(以下、小型哺乳類はこの項については同様)。

収容物等の手入れ

尿の量が大変多いので、トイレや寝床の汚れた部分、すのこの下の新聞紙はこまめに取り替え、食事の管理ごとに食器や給水ビンもよく洗い、適宜すのこもよく洗って乾燥させ、週に1回か高温多湿の時期はそれ以上にケージ全体を洗剤で洗うか熱湯消毒して天日干しをします。

その他の手入れ、しつけ

幼齢時からブラッシングに馴らし、時々心掛けましょう。特に毛が抜け替わる春から夏にかけては念入りをする必要があります。湿気に弱いのでシャンプーは禁物です。爪が伸びすぎると歩行困難を起こしますので、伸びた場合には爪切りが必要です。

トイレのしつけは犬の場合と同じようにできますので、ぜひ覚えさせましょう。覚えやすいように、最初にトイレの中に自分の排泄物の臭いがついたものを少し入れておくのがコツです。

運動

ケージの中だけでは運動量が足りません。目の届くときに部屋の中で遊ばせましょう。その際、室内にはケガや事故の原因となるものが多いことに留意し、予め防止策を講じておくことが必要であり、これは他の動物の場合も同じです(電気コードや観葉植物、家具類、タバコなどがじられたり食べられたりしないように、また、家具類の上の置物が落下しないようにします)。床が畳だとかじられますし、板だと滑りやすいので、床には爪が引っ掛からないじゅうたんを敷きます。合成繊維のカーペットは齧って飲み込んだときに固い毛玉になって胃にたまりやすくなり、ループ状のカーペットは爪を引っかけて骨折の原因になるので避けましょう。遊ぶときに、敏感な耳を掴んで持ち上げるのは苦痛となるので禁物です。また、後肢を支えて抱くのは、時にジャンプして落下したときに骨折しやすいので、これも禁物で、抱くときは必ずお尻を支えにしましょう。

逸走防止等

ケージに入れている間は、逸走防止のためケージの扉はナスカンなどでしっかりと留めて置きましょう。逸走防止のため、室内に放すときはもちろん、日常の掃除、ケア一時にも窓やドアはきちんと閉めてあるかどうか確認することが大切です。

危害防止、迷惑防止

門歯に指を引っかけてケガをする場合も多いので、特に幼児がケージの間から指を入れないよう、また室内で一緒に遊んでいる際にも不用意に口許に指を近づけないよう注意することが必要です。

屋外施設で飼っている場合には、糞尿の臭いや衛生害虫の発生、コクシジウム感染防止のため、こまめに掃除を心掛け、周囲への迷惑防止を図らなければなりません。

(5) 健康と安全の管理

健康と安全(12.ハリネズミの項に共通)

健康と安全については、体が小さいだけに抵抗力がなく、病気が発症したら致命的とな

るものが多いため、日頃の注意深い観察と予防（適正な飼養管理に尽きます）が特に大切となることと、意外に些細なことが大きな影響を与えるということ、たとえば、日照（点灯）時間の不規則や不適切によるストレス症状や、食物連鎖の中で下位に位置するものであるだけに非常に臆病で環境に対して敏感であり、騒音などによるストレスの健康への影響が大きいことなどを理解してもらうことが重要です。

また、病気発症以外の日常的な事柄で起きる事故や死亡例が多い動物たちであることにも十分注意することが大切です。たとえば、子供が走り回ってドアを大きな音を立てて閉めたり、個体の移し替えやケア時に逃げようとした個体をあわてて捕まえたりした際などに簡単にショック死や気絶をさせることもありますし、窓からの陽差しや石油ストーブなどでの不注意による熱射病や一酸化炭素中毒、暖房停止や気候による昼夜の急激な温度変化による死亡、衣類や布団などに潜り込んでいることに気付かなかったり、あるいは単純な行為での踏みつけや押さえつけによるケガや圧死、滑りやすいテーブル上で遊ばせていたり抱いていた際の落下事故などです。

ウサギの主な病気と予防等

1) 下痢

尻に糞がこびりついていたりすると下痢をしています。また、ウサギの糞はやや硬めであまり臭いませんが、体調が悪くなると臭ってきますし、軟便になります。下痢は細菌感染によるものが多く、腐った食物を与えないことや給水器、食器、環境の清潔を保つことが予防となります。

2) コクシジウム

血便のときは腸内へのコクシジウムという原虫の寄生によるもので、この寄生はウサギには多いといわれ、感染しても元気なときは症状は出ませんが、ストレスなどが原因で現れてきて、発症すると死亡率も高いものです。

3) 毛球症

糞がいつもより硬くなるとこの病気が疑われます。ウサギは毛づくろいをよくしますので毛を飲み込みやすく、排泄できずに消化管の中にたまと起こります。ひどくなると便秘になり食欲不振、体重減少となります。ブラッシングを怠らず、またおやつが多給などで偏食させず、排泄しやすいように乾牧草を欠かさず与えることが予防となります。

4) スナッフ

咳や鼻水を出したり、ゼーゼーと苦しそうに息をしたり、風邪症状を示します。細菌が原因の伝染性の疾病で、多頭飼養の場合、健康な個体はすぐに他に隔離し、飼養機材の消毒が必要です。死亡率が高く治療の難しい病気です。予防には清潔さが大切で、また、新しく個体を導入する場合には、鼻水を出していないかどうかチェックするとともに、検疫期間を設けることが大切です。

5) その他の病気

ノミ、ダニ、シラミなどの寄生虫が付きやすいので注意します。特に耳に付く耳疥癬（耳ダニ症）はウサギに多い伝染性の病気で、初期のうちは耳を垂れ、頭を振り、あるいは足で掻くなどのことから発見できます。

皮膚真菌症もよく見られる皮膚病です。ケージ等や周囲の環境を清潔に保つこと、普段からブラッシングをして被毛をよく手入れしておくことが予防となります。

門歯の伸びすぎは、食物を食べられなくなりますので、かじり木などの硬い食べ物で予防します。

人と動物の共通感染症

パスツレラ症、野兔病、サルモネラ症、皮膚真菌症、ウサギツメダニ症などがあります。

疾病には様々なものがあり、素人判断は禁物です。早期発見、早期治療が大型動物に増して重要なことはいまでもありませんので、日頃から小型動物診療が可能な動物病院を見つけておくことと、ある程度定期的な検診を受けることが病気の早期発見につながるということです。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

「家畜伝染病予防法」で指定検疫動物になっており、輸出入の際には1日の検疫が必要となっているほか、輸入には輸出国政府機関発行の健康証明書が必要です。

4 . ハムスター〈げっ歯目ネズミ科〉

(1) 分類、品種

ハムスターはげっ歯目ネズミ科に属し、愛玩用として飼われている種は、ゴールデンハムスター属のゴールデンハムスターと、ヒメキヌゲネズミ属のジャンガリアンハムスター、キャンベルハムスター、ロボロフスキーハムスターの3種（この3種は小さいという意味のドワーフハムスターと総称され、以下、ドワーフと略します）、キヌゲネズミ属のチャイニーズハムスターなどがあります。

(2) 形態、習性、生理

愛玩用の中で最小のロボロフスキーハムスターの体長は約7cm前後、体重15～40g、ゴールデンハムスターは体長12～20cm、体重80～150gとさまざまです。

穴掘りに適した鉤爪のある指をもつ前肢は非常に器用に動かせ、物を掴んだり毛づくろいができます。

頬袋をもち、大量のエサを巣まで運べます。嗅覚と聴覚は発達しており、背中左右に臭腺をもっていて（ドワーフには口の両端にもあります）臭いで個体識別ができます。上下2本ずつの門歯は一生伸びつづけますが、これは以下のげっ歯類に共通します。

野生では寒暖差の激しい砂漠や乾燥草原地帯に地中深く巣穴を掘って生活しています。夏の日中は暑さを避けて地中で眠り、夕方から食べ物を探し、冬は冬眠しながらも時々貯蔵し

た食物を食べるといふ夜行性、疑似冬眠性の動物です。ドワーフ、チャイニーズ以外は単独生活者で、オスとメスの出会いは交尾のときだけです。

食性は雑食性で、草の葉や茎や根、種子、果実のほか虫、小型の爬虫類など動物質のものも食べています。寿命はふつう2～3年です。離乳期は約3週間で、約5週間で大人の大きさになって性成熟します(メスの性周期は4日、妊娠期間は16日前後、一度に4～13頭を産みます)。

管理が悪くなければ、臭いはほとんど出ません(トイレのしつけは可能)。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

水槽飼いか専用の金属製のケージ飼いが一般的です。

水槽飼いは温度や騒音(非常に臆病)の管理には向いています。半分くらい土を入れるとトンネルを掘って自然の状態に近い生活を観察できます。蒸れやすいので天井は密閉しないで金網でフタをします。

ケージ飼いは世話や掃除に便利ですが、温度や騒音の管理に気を使う必要があります。高さのあるものはよじ登って落ちてケガをしやすいので、床面積の広いものを選びましょう。1日に8kmくらいは動き回るといわれているほど運動量が多いので、できるだけ広さのあるケージ等と回し車やトンネルなどの運動具や遊具が必要です。床には、干し草、ワラ、チップ(杉や松など針葉樹が素材のものはアレルギーを起こすことがあります)などいずれかを適当に混ぜてハムスターが潜れるくらいに厚めに敷きます。床の隅には主食用と副食用の食器2個、ハムスター用トイレ、木製の巣箱(中に床材と同じものを入れる)を置き、側面には給水ビンを設置します。

飼養環境としては、寒暖差の激しさ、低温(15以下になると動きが鈍くなります)と高温、多湿、特に突然の大きな物音、騒音を嫌うということを踏まえることが必要です。採光は、昼間は窓からの自然光が感じられ、夜は暗くできるようにします。水槽飼いの場合は蒸れないよう通風に十分気をつける必要があります。

(4) 飼い方のポイントと注意点

ドワーフ及びチャイニーズ以外の単独性のハムスターはつがいにせず1頭ずつ別々の収容物で飼うのが原則です。縄張り意識が強く、オス・メスどうしてもけんかしてしまうからです。もし繁殖を希望するならオス・メスの見合い期間を設けて相性を見るなどの措置が必要ですが、生まれた子供の数だけ収容物が必要となりますので、覚悟が必要です。繁殖を希望しないなら、1年中繁殖が可能で性周期も短いためすぐに増えてしまいますので、オス・メスを一緒に飼うのは禁物です。

晩秋頃から冬季にかけてはヒマワリの種やクルミを多めに与えて体力をつけ、保温に気をつけて、飼養下では冬眠させないで飼ったほうが無難です。

主食は専用のペレットにし、副食として色々なものを少しずつ与えましょう。1日に1回、夕方の活発に動き回る頃にエサを与え、傷みやすい副食の食べ残しはしばらくして片づけてみましょう。ハムスターは下痢を起こしやすく、下痢をしたら致命的になりやすいからです。ま

た、傷んだエサは頬袋の炎症の原因にもなります。

副食としては、根菜類や野菜、ハト用配合飼料などの穀類、アルファルファなどの乾牧草があります。大好物のヒマワリの種やクルミ、ピーナッツなどの種子類は脂肪分が多いのでおやつ程度に、ふれあいを図るために与え、肥り過ぎに注意します。

また、一日おきくらいにペット用煮干しやゆで卵の白身などの動物性食品やリンゴなどの果物を与えます。なお、ミネラル補給のための塩土と、歯の伸びすぎを防ぐため「かじり木」は常時置いておきます（これは、以下のげっ歯類に共通します）。毎日、巣の中に溜め込んだ食物を点検し、生ものや腐りそうな物は取り除きます（巣の中に食物を貯める習性のあるものは、以下同様にします）。

ケージ等や個体の手入れ、しつけはウサギに準じます。なお、トイレ砂は全部を取り替えますが、臭いの付いたものを少しだけ残しておきます。同様に、週に1回は床材と巣材を全部取り替えますが、臭腺で縄張りに臭い付けしていますので、汚れていない古い床材を少し混ぜます。夕方などに一緒に遊んでやれば運動にもなりますし、よく馴れます。おやつを使って人の手によく馴らしましょう。また、自由にしておくならともかく、長時間手でいじることはハムスターにとっては大きなストレスになり健康を害することになるということに留意しなければなりません。

逸走防止はウサギに準じます。ハムスターの背後又は上方から急に掴もうと手を出したり、眠っている時や仰向けになって「キーキー」と声を出している時（これは怒っているか、怯えている時のしぐさ）やよくなついていないものにうっかり手を出すと咬まれることがあり、意外に深い傷を受けることがありますので、幼児などが不用意にケージの中に指を入れないよう注意する必要があります。

ハムスターによる咬傷事故に注意

ハムスターに咬まれたことにより、アナフィラキシーショックをおこす飼い主がでています。ハムスターの唾液にアレルギー反応をおこすことにより発生したと考えられています。ハムスターに過度に接触しないこと（ ページ参照）、咬まれることのないように注意してください。

(5) 健康と安全の管理

体の調子が悪くなると耳がレタスのようにクシャクシャした感じになるのがハムスターの特徴です。健康時の糞はだいたい茶褐色でコロコロしています。

主な病気と予防

1) 下痢

尻が汚れていたり尾が濡れて棒状になったりしていると下痢をしています。糞の状態からもわかります。下痢の原因はさまざまです。食物や水、飼養環境の不清潔さ、過度の接触や騒音などによるストレスが最大の敵です。

2) カゼ

くしゃみをしたり鼻水や目ヤニを出したり、ゼーゼーと苦しそうに息をしたりします。

予防は、昼夜の急激な気温変化にさらさないこと、普段から十分な運動と栄養で体力をつけておくこと、ストレスを与えないこと、などです。

3) 皮膚病

患部には病状の進み具合などにより毛並みの荒れ、脱毛、じくじくした液の滲み、かさぶたなどが見られますのでわかります。飼養環境を清潔に保つことが予防となります。

4) 腫瘍

さわると体にしこりがあるのに気付くことがあります。早期のうちには手術で治療可能です。早期発見できるよう接触観察が大切です。

人と動物の共通感染症

げっ歯類の人と動物の共通感染症として考えられるのは、腎症候性出血熱、レプトスピラ症、真菌症（皮膚真菌症、糸状菌症）、エルシニア症、サルモネラ症、リンパ球性脈絡髄膜炎、野兔病、ペスト、リーシュマニア症、ネズミチフスなどです。

5. マウス〈げっ歯目ネズミ科〉

(1) 分類、品種

マウスはげっ歯目ネズミ科のハツカネズミを研究用に改良したものです。一般的な品種は全身が白色で目の赤いアルビノですが、茶や黒い毛が現れたものや全身が黒、グレイ、茶などさまざまな色変わりや、研究用に改良された無毛・無菌のもの（ヌードマウス）もあります。また、ひと回り小型のパンダマウス（体長約5cm）といわれる品種もあります。

(2) 形態、習性、生理

体長約7cm、尾長約8cm、体重はオスが40g前後、メスが30g前後。毛のない細長い尾は体温調節の役目をしているといわれ、また尾を器用に巻き付けて使い、樹木や綱などの細いものでも登り降りや渡ったりできます。前肢（指は4本）は器用で物を掴んだり毛づくろいしたりします。後肢（指は5本）で身体を支えて立つことができますし、かなりジャンプ力があります。頬袋はなく、食物を巣内に貯めたりする習性や冬眠習性はありません。活動は日が暮れてから開始し日が昇る前までには終える夜行性です。マウスは学習能力に優れ、1頭で飼えば人によく馴れます。寿命は2～3年ですが、6年の記録もあります。生後4～6週間頃に体重が急に増え、繁殖が可能となります。繁殖適期は生後2ヵ月くらいからで、1回で6～13頭を出産します。妊娠期間は平均20日、離乳期は約3週間です。

おとなしく人馴れしやすい性質がありますが、不用意に手を出すと噛み付くこともあります。体臭はハムスターよりも少し強く、排泄物の量が多いので掃除をこまめにしなければ臭いがかなりきつくなります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

専用のケージで飼うか、水槽飼いが一般的です。高さがある程度あるものが適当で、ハシゴや枝付きの木などを立てかけておいたり回し車を設置しておくことで運動に使います。また、

市販の迷路や穴のあいた玩具などで遊ばせることも有効です。他はハムスターに準じます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

複数飼いは可能ですが、オスは強いものが弱いものをいじめることがあり、逃げ場所がないとケガを負わせたり共食いしたりしますし、オス・メス混合飼養だとすぐに繁殖してしまいますので、考慮が必要です。ふれあいを図るためには1頭飼いが適当で、よく馴れます。

主食はマウス・ラット用ペレットかハムスター用ペレットにします。副食やその他はハムスターと同じで構いませんが、ドッグフードなどを加えて動物性タンパク質を多めにします(キャットフードは肥満になりやすく不向きです)。食物や水分が不足すると、複数飼いの場合は共食いが起こりますので注意します。ペレットなど腐りにくい食物の食べ残しは次の食事の時までそのままにしておいて構いません。排尿はたいてい隅のほうにしますが、あちこちに臭いつけをすることもあります。尿量が多くてトイレにはしないので、掃除は毎日こまめにしましょう。毎日1回は一緒に遊ぶとよくなつきます。マウスはしっぽを持っても嫌がらず大丈夫です。

(5) 健康と安全の管理

飢餓状態になるとすぐに餓死しますし、複数飼いの場合は共食いが起きるので、うっかりしてエサを切らさないように注意する必要があります。

主な病気と予防

外部寄生虫病(疥癬など)や、癌、腫瘍がよく見られます。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。中でも、ネズミ科に属するものには特にレプトスピラ症、鼠咬症のほか、ネズミチフスに関心をはらう必要があります。また、腎症候性出血熱は国内の動物実験施設での発生例がありますので特に気を付ける必要があります。

6. スナネズミ(ジャービル) <げっ歯目ネズミ科>

(1) 分類、品種

げっ歯目ネズミ科に属し、人間には100年ほど前から実験用に飼養されてきました。原種は灰褐色で腹は白色ですが、白い身体に赤目のアルビノや黄色がかかった褐色、灰色、黒、それらのツートンカラーなどの色変わりなどがあります。

(2) 形態、習性、生理

体長13cm前後、尾長10cm前後、体重は60g前後。尾はマウスと違って毛で覆われています。前肢は小さくて器用で、物を掴んだり毛づくろいし、後肢は太くて強く、30cm以上も跳び跳ねることができます。へその下に皮脂腺があり、その周りは分泌液で濡れています。

野生下では、水分の消失をできるだけ抑えるために汗をかかず、腎臓で濾過した水分を再利用して濃い尿をします。地中にトンネルを掘ってオス1~3頭に対しメス2~7頭と子供たちで群居生活をし、子育てにはオスも加わります。共同体意識は強く、群れは縄張りをも

っていてよそ者は寄せつけません。基本的に夜行性ですが、気温が適当であれば昼間でも地上で活動します。

食性は、雑食に近い草食性で、草の種子、葉、茎、根、果実を主として虫なども食べます。冬毛と夏毛があり、春先と秋口に換毛します。冬眠習性はありません。寿命は4～7年。生後2～3ヵ月で性成熟し、繁殖適期は生後3ヵ月くらいからです。妊娠期間は25日前後で、1回で平均5頭を出産します。離乳期は生後約1ヵ月です。メスの性周期は4～6日ですが不規則です。年中繁殖は可能ですが、ふつう春から秋にかけて3～4回出産します。

おとなしく、噛み付くことはほとんどありません。尿の臭いはきつくなく、量も少なく、ほとんど臭いを出しません。「ピーピー」という小鳥のような小さな声を出します。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

ケージや水槽等のセットはハムスターに準じますが、スナネズミの特徴として床材を飛び散らかすのが常ですし、跳びはねることもありますので、なるべく大きめのものを用意します。ケージ飼いの場合は、テーブルクロス用の厚めのビニールでケージの高さの3分の1くらいを巻き付けておけば周囲への散らかしを防げます。水槽はその点が楽であり、また、小さな隙間に尻尾を引っ掛けやすい傾向があるので、水槽のほうが適しているといわれます。トイレは、しつけが難しいので不要です。なお、自然に爪が削れるように岩を入れておくと爪の伸びが防げます。

飼養環境としては、非常に臆病で気絶しやすいので、大きな物音がすることのない静かな環境を考えることが大切です。他はハムスターに準じます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

スナネズミは群居性で、なれた個体同士ではけんかもないので一つのケージや水槽等での複数飼いは可能ですが、オス・メス混合だとすぐに繁殖してしまいますのでよく考慮する必要があります。元々人間にはなつきにくい面がありますが、ふれあいを図るためには1頭飼いが適当です。臆病なので、驚かさないうちで注意しながら食べ物を使って根気よく馴らすことがコツです。

主食はハムスター用ペレットでよく、食事内容はハムスターに準じます。ただし、動物性食品の割合は少なめにします。毎日、巣の中に貯めこんだ生ものや腐りそうな物は取り除き、汚れた巣材や床材も新しいものに取り替えます。週に1回は床材と巣材は全部新しくしましょう。少なくとも月に1回以上は飼養機材全部を洗剤で洗うか熱湯消毒をし、天日干しして清潔な環境を保ちましょう。ジャンプ力があるのでふれあいを図るときには段ボールなどで囲った中で遊ぶのが安全です。また、水槽のフタを開けた途端にジャンプして飛び出す場合がありますので注意しましょう。ケアー用ケージに移すときなど、スナネズミは尻尾をつまんで持ち上げて構いませんが、尻尾の先を持つと皮がむけることがあるので必ず付け根を持つように注意し、片方の手の平に乗せます。もし、部屋の隅や物陰に逃げてしまった場合、あわてて捕まえようとするとうちで気絶させたりケガをさせたりしかねないので、食べ物を入れた缶を近くにおいておき、おびき出して捕まえるようにします。

(5) 健康と安全の管理

ストレスが原因でケージの金網を齧り、鼻や口を傷つけてしまうことがあります。広いケージに換えるか、癖になっているようなら水槽飼いにしましょう。驚かさないようにすることが大切です。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。特にアレチネズミ類はペストやリーシュマニア症を媒介することに注意が必要です。

7. モルモット<げっ歯目テンジクネズミ科>

(1) 分類、品種

モルモットは南アメリカ原産で、げっ歯目テンジクネズミ科に属し、ペルーテンジクネズミが、インディオによって3千年以上前から食肉用に家畜化されたものといわれています。短毛(イングリッシュモルモット)、長毛(ベルビアンモルモット)、ヘアレス(スキニーギニアピッグモルモット)、巻き毛(アビシニアンモルモット)や、それらの色変わりなど、品種のバリエーションは豊富です。

(2) 形態、習性、生理

体長約21cmで尾はなく、体重は1.2kg前後です。頬袋はなく、食物を巢内に貯める習性や冬眠習性はありません。肛門の周囲に皮脂腺があり、尻を押しつけて臭い付けをし、嗅覚は敏感で他の個体の臭いを嗅ぎ分けます。聴覚も優れていて、小さな物音にも敏感に反応します。群居性で、色々な鳴き声でコミュニケーションを図っており、オスには順位制があります。食性は完全な草食性。人と同じく体内でビタミンCを合成できない数少ない動物です。本来は夜行性ですが飼い主の生活に活動周期を合わせることができます。平面活動が中心。暑さには割合に強く、寒さに弱い動物です。寿命は5～15年(平均10年)です。繁殖適期はメスで生後3ヵ月、オスで4ヵ月以上からで、妊娠期間は約70日、1回に平均4頭を産みます。約2週間で離乳します。

よほどのことがない限り噛み付くこともなく、オットリとした人馴れしやすい性質をもっています。排泄物の量が多いので掃除をこまめにしなければ臭いがきつくなります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

屋外の小屋飼いや容易ですが、室内のケージ飼いが一般的です。ケージは水平的になるべく広いもの(1頭飼いで少なくとも50cm四方以上が理想的)で、高さは30cm以上あれば天井はなくても大丈夫です。床には木製のすのこ(足がすっぽりと抜けることのない、また、指を挟むこともない適度な隙間のあるもの)をとりつけ、その上に床材として干し草、ワラなどを多めに敷くと湿気対策になります。すのこの下には新聞紙を厚めに敷いておくと毎日の掃除に便利で、その他もウサギと同様にします。寒さに弱いので冬季は保温に気を付けること(18℃以上を保てるように工夫します)、また臆病、神経質なので物音にも敏感に反応

し、騒音があると用心して眠らずストレスがたまるということを考慮することが大切です。湿気対策や採光、日光浴などはウサギに準じます。屋外のサークル内の運動もよいでしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

居性なので複数飼いは可能ですが、オスどうしは順位づけのためにけんかし、逃げ場所がないとケガをしますし、オス・メス混合飼養だとすぐに繁殖してしまいますので、考慮が必要です。

主食はビタミンC入りのモルモット専用ペレットにし、毎日朝夕2回与えます。ビタミンCは空気にふれると壊れやすいので、消費期限に注意し、開封したら保管に注意が必要です。副食としてビタミンCの豊富な色々な野菜(レタスは適しません)や、タンパク質が豊富な乾牧草(アルファルファなどのマメ科のものが適切。モルモットは植物性タンパク質を多く必要とし、また歯の伸びすぎ防止にもなります。)を毎日少しずつ与えます。ハコベやナズナ、シロツメグサ、タンポポなどの野草も喜びます。ビタミンCの豊富なミカンやイチゴ、キウイ、リンゴなどの果物も、糖分が多いので与えすぎに注意しながら時々与えましょう。カルシウム補給のためにペット用煮干しも時々与えます。

トイレのしつけは基本的にはできないと考えたほうがよく、また排泄物の量が多いので、床材の汚れた部分は毎日取り替え、すのこの下の新聞紙も湿気予防のために濡れたら上から取り除いていくと手間がかかりません。

長毛種は糞がこびりつきやすいので、お尻の部分の毛はカットするなりして、ストレスを感じさせないように注意しながら時々ブラッシングも心がけましょう。淋しがり屋なので1日1回はケージから出して遊ばせることが大切ですが、大声を出したり、急に乱暴に抱き上げて驚かせるとショック死することもありますので気を付けましょう。機嫌が悪い時に「キー、キー」と鳴いたり歯をガチガチと鳴らしたりすることがあります。

(5) 健康と安全の管理

主な病気と予防

病気発症の場合、ほとんどの例で治療効果が期待できないといわれています。多いのはビタミンCの不足による壊血病です。その他、呼吸器疾患や下痢、皮膚病(細菌や疥癬、シラミなどが原因)などがありますが、多くの死亡例は細菌やウイルス、真菌や寄生虫の感染症なので、特に複数飼いの場合は環境の清潔さを保つことが大切です。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。

8. チンチラ<げっ歯目チンチラ科>

(1) 分類、品種

チンチラはチリ北部原産で、げっ歯目チンチラ科に属しています。高価な毛皮のために狩猟の対象となり野生下では絶滅が危ぶまれています。人工繁殖が盛んで、原種は黄色がか

った灰色の腹部のほかは身体の大部分が青みがかった灰色をしています。黒っぽいもの、薄い灰色のもの、白っぽいものなど、色変わりの品種が作り出されています。

(2) 形態、習性、生理

体長約23～28cmで、体長の3分の1ほどの長さのふさふさと毛の生えた尾をもち、体重約500g、大きなものは800gくらいあります。本来は何十頭もの大きなコロニーを形成して暮らす群居性の動物で、夜行性です。食性は草食性で、草やその種子、果実、樹皮、サボテンの果肉などを食べていますが、昆虫などを食べることもあります。毛が薄い大きな耳を持ち聴覚は敏感です。身体には絹のような手触りの細くて長い毛が密生して保温の役目を果たしており、春と秋に換毛期があって冬眠習性はありません。毛は引っ張ると容易に抜けてしまいます。皮膚から出る分泌物(ラノリン)を取り除き清潔を保つために砂浴びが欠かせないという特徴をもっています。寿命は約10年で、生後4～6ヵ月で性成熟し、繁殖適齢期は6～8ヵ月くらいからです。妊娠期間は約110日、1回で1～6頭を産みます。生後約7～8週間で離乳します。

人馴れしやすい性質をもっていますが、怖がっているときに無理に手を出したり、急に鼻先に指をもっていったりすると噛み付くことがあり、思わぬ深い傷を負うことがあります。トイレのしつけも可能で、臭いはほとんど出しませんし、鳴き声も時々で「グーグー」と小声です。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

意外に活動的ですのでケージは広さ、高さともなるべく大きいもの(チンチラ専用ケージか、猫用ケージなら理想的)にし、ケージ内はウサギと同様にします。なお、チンチラ専用の砂浴び用容器を設置します。砂浴び用の砂は、目の粗いものは砂浴び本来の効果が期待できないので、必ずチンチラ用の砂か、細かく砕いた鉱物質の砂を用意します。また、天地の中間にジャンプしてもよいように柵板を設置し、その上に十分動けるくらいの広さの木製の巣箱を置き、中に干し草をたっぷりと入れます。ウサギと同様、高温、多湿に弱いことを認識する必要があります(温度は25℃、湿度は50%を超えないように)。寒さにはかなりの抵抗力がありますし、冬は冬毛で対応しますから、冬季の昼夜の急激な温度変化には気を付けながらも、巣材をたっぷりと入れて、ケージ全体を通気性のあるタオルで囲うくらいで保温にはあまり神経質になる必要はないようです。日光浴は特に必要ありません。臆病ですので静かな環境が必要です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

ウサギと同じように室内の放し飼いも可能ですが、安全性を考えれば室内のケージ飼いが一般的です。また、相性が合えば1つのケージに複数飼いも可能ですが、よほどの広さがなければストレスの原因になりますし、相性の合うオス・メスどうしだと容易に繁殖してしまいますので、1ケージ1頭が適当です。

夜行性なので食事は夕方に与えます。チンチラ専用かウサギ専用のペレットを主食にし、副食に乾牧草や野草を与え、おやつ程度に天日干しの人参やサツマイモ、干しぶどう、果物、

ナッツ類、ヒマワリの種を与えます。主食や副食の乾牧草などはやや多めに与えておき、あとの傷みやすい食物の食べ残しはすぐに片づけます。歯の伸びすぎ防止のために市販されているチンチラストーン(齧り石)や小枝、かじり木などを常備しておきます。尿量は少なく臭いもきつくないので、トイレの掃除は楽です。糞は毎日片づけましょう。床材は湿ってきたらすぐに取り替えることが大切ですが、たいてい週に2回程度でよいようです。砂浴びのときにたまに排尿することもあり、また、皮膚についていた虫を落とすので、砂はこまめに取り替えます。適宜、ケージや機材全部の掃除が必要なことは他の動物と同様です。時々、柔らかなブラシでブラッシングが必要です。特に換毛期は念入りに。シャンプーは禁物です。トイレのしつけはウサギと同じようにできますので、ぜひ覚えさせましょう。ケージの中だけでは運動不足ですので、ウサギと同様に部屋の中で遊ばせましょう。人に馴れさせるコツは決して驚かせたり、あせって無理強いしないこと。好物の干しぶどうやナッツ類を使って徐々に馴らせば自分で膝の上に乗ってくるようになります。抱くときは、毛が抜けやすいので決して毛を引っ張ってはいけません。

(5) 健康と安全の管理

逃げようとしたときにあわてて捕まえようとしたり大きな音を立てたりすると、気絶したりショック死したりすることが多いので気を付けましょう。他については割合丈夫な動物です。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。

(6) 飼養上の知って置きたい法律、手続き等

「ワシントン条約」の附属書Iに掲げられる動物で、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」にも関係します。

9. シマリス<げっ歯目リス科>

(1) 分類、品種

シマリスはげっ歯目リス科に属し、人為的に改良された品種としては、色変わりのアルビノ(色素が欠乏したもの)とパイド(白ブチ)があります。モンゴルから中国北東部、朝鮮半島、北海道にかけての樹林帯に生息しています。ペットショップで見かけるシマリスの多くは中国産のシマリスです。

(2) 形態、習性、生理

体長約14cm、尾長約13cm、体重100g前後。前肢はハムスターと同じく非常に器用に動かせ、物を掴んだり毛づくろいができます。足の裏からは蠟状の分泌物を出します。尾が長いのは、木の上でバランスをとったり、冬眠時に身体をくるんで保温するのに役立ちます。昼行性で、視覚、聴覚は優れていて、嗅覚も10cmくらいの積雪の下の食物を嗅ぎ分けられるほど発達しています。単独生活者で、地中にトンネルを掘ってすみかとしています。日中は

樹上で過ごすことが多く、半地上、半樹上の生活を営んでいます。頬袋をもち、そこに詰め込んだエサを巣やその周辺に掘った小さな窪みに蓄え、疑似冬眠をします。食性は、ドングリや松かさなどの木の実(種子)を主とし、草の種子、野ブドウ、コケモモなどの果実、木の芽、虫類、鳥の卵なども食べる雑食性です。寿命は5～10年。性成熟は生後約半年くらい。繁殖期は春で、原則として年1回です。妊娠期間は約30日で、1回で4～5頭を出産します。離乳期は生後約1ヵ月です。

野性味を強く残しており、よく馴れているリスでもちょっとした加減で噛み付いたり引っかいたりすることがありますので、気を付ける必要があります。繁殖期には「キッ、キッ」など甲高い声で一日中鳴いたりしますので、集合住宅等で近隣に迷惑となる場合もあるかもしれません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

室内のケージ飼いが一般的です。ケージはできるだけ高く(1m以上)、広いもの(少なくとも50×50cm以上)を選びます。できれば2個のケージを使って自作し、もっと高さを確保すると理想的です。中に床から天井まで届く枝つきの太い木(クヌギなどの広葉樹で防腐剤が使われていないもの)を設置します。床には新聞紙かペットシートを敷きます。床の隅には、食器2個とセキセイインコ用の木製の巣箱(ケージの隅に巣材として干し草を置いておくと自分で巣の中に運びます)を置き、側面には給水ビンを取り付けます。運動のための回し車も取り付けてみて、利用しないなら取り外しましょう。

飼養環境としては、高温と夏季の直射日光に弱くて、熱射病、日射病に非常にかかりやすい動物であることと、急激な寒暖差に弱いことを考えることが必要です。留守中の冬の温度低下と夏の温度上昇には特に注意しなければ死なすことにもなります。騒音はストレスの原因になること、多湿を嫌うということ踏まえた環境が必要です。また、夜は暗く静かな環境が大切です。ケージに通気性のよい布をかぶせておくことが適切です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

昼行性なので、昼間の飼養管理がよくできる家庭環境であるかどうかを考えて飼い始めることが大切です。また、子リスのときから飼ったり、根気よく付き合っていけば人にもよく馴れますが、突然馴れなくなったり、それがずっと続いたりすることがありますので、基本的にはその姿や動作の愛らしさを愛でる動物であることも考える必要があります。単独性のシマリスはつがいにせず1匹ずつ別々のケージで飼うのが原則です。どんな組み合わせの場合でも、けんかして時には殺しあいに至ることがあるからです。冬眠性のリスですが、家庭ではハムスターと同様にしたほうが無難でしょう。

主食はリス用ペレットとハト用配合飼料にし、副食として色々な野菜や果物、野草と、ミルワーム、ゆで卵、ペット用煮干し、ドッグフードなどの動物性食物を、なるべく種類多く、少しずつ毎日与えます。食事は1日に1度午前中に与えます。量の加減は、夕方になって主食が少し残っているくらいを目安にしますが、腐りやすいものは早めに取り除きます。秋にはドングリも喜びます。なお、巣箱の中の食物の点検はシマリスが嫌うため頻繁にはしない

ようにします。

シマリスの足の裏から出す分泌物でケージが汚れやすいので、ひどくなったら洗剤で洗いますが、シマリスが違和感をもちますので、これもあまり頻繁にするのは控えましょう。

日光浴は、春や秋の日差しの柔らかい午前中にさせるとクル病の予防になりますが、日射病、熱射病にかかりやすい動物ですので、タオルなどで必ず日陰の逃避部分をつくります。初夏から初秋にかけての直射日光は禁物で、日光浴はさせないほうが無難です。

ヒマワリの種などを使って根気よく手に慣らすようにすればケージの外に出してふれあっても図れます。よく馴れているリスでも冬眠期前の秋や出産前後などには警戒心が強くなって鋭い歯で噛み付いたり引っかいたりすることがあります。そういう時期は無理にふれ合おうとしないで放っておくのがコツで、以後、人に馴れにくくなることも少なくなる傾向があるといわれます。また、ふいに掴もうとしたり、口元に指をもっていたり、手に保定しているときでもびっくりしたときに噛まれることがありますので、注意深く扱う必要があります。逸走防止はハムスターに準じますが、非常にすばやく少しの間隙からでも脱走しますので、ケア時の移し替えの際などには特に注意を要します。

発情期に鳴き声がうるさくなった場合、黒い布をかけると少しは薄らぐようです。

(5) 健康と安全の管理

急に驚かせたりすると気絶したりショック死することがありますので、部屋のドアの開け閉めも乱暴にしないように気を付けましょう。また、逃げようとするのをあわてて尻尾を掴むと皮がはがれますので気を付けましょう。

なお、発情期になるとオスの睾丸が下がってきて、腫れ物と間違われやすい点があります。

主な病気と予防

1) カゼ

肺炎になりやすいので、くしゃみをしたり、鼻水が出ているのが見られたらすぐに獣医師に診てもらいましょう。

2) 下痢

下痢は脱水症状を起こしやすく、体力もなくなると危険な病気です。普段からプレーンヨーグルトや市販されている乳酸菌の錠剤を与えたり、食物と水を新鮮に保つようにします。

3) くる病

カルシウムとリンのバランスが悪かったり、ビタミンDの不足でなります。バランスのとれた食事と日光浴を心がけましょう。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

わが国に生息するシマリス、台湾リスは「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」により狩猟鳥獣に指定されており、狩猟の対象にされていますが、違法捕獲は罰せられます。

10. プレーリードッグ<げっ歯目リス科>

(1) 分類、種類

北アメリカ原産のげっ歯目リス科の動物です。5種類のプレーリードッグに分類されていますが、ペットとして日本に輸入されていたのはオグロプレーリードッグと呼ばれる種類です。

(2) 形態、習性、生理

プレーリードッグは尻尾の短い大きなリスです。地中に張りめぐらしたトンネルに住み、コテリーと呼ばれる高度に組織化されたコロニーを形成しています。日中は地上にでて草を採食します。

厳寒時には冬眠もします。寿命は8～10年くらいです。体長(頭胴長)は28～35cmで、尾長は3～11.5cm、体重は0.7～1.4kgです。24～36ヵ月で性成熟に達します。28～32日間の妊娠期間で2～10頭(平均5頭)の子供を産みます。子供は35～42日で巣穴から出始め、42日で離乳します。捕獲時には噛み付きます。高音の警戒音を発します。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

プレーリードッグの習性に合わせ、1メートル四方の立体的な構造をした専用のケージで繁殖させることも可能です。床材にチップを敷きます。水飲みや食器は市販のもので十分です。しかし、彼らの行動から見た場合、逃走できないような排水性のよいコンクリート製で、少なくとも50平方メートル以上の動物舎を作り、その中に土を入れて地中に自由にトンネルや巣穴を作らした方が、よりよい飼養環境を提供できます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食としてウサギ用ペレットを与え、副食として種々の野菜を与えます。ドッグフードも食べますが、肥満の原因になります。脱走防止には、出入り口の施錠を確認します。

(5) 健康と安全の管理

ケージ飼養の場合、白癬菌などによる真菌性皮膚炎が多いため、頻繁に寝藁の乾草を交換するなど環境を清潔に保つ必要があります。土の中に巣穴を作ったプレーリードッグに乾草を与えると、採食するばかりでなく、古い巣材を持ち出し新しい乾草を持ち込む行動が観察されます。

(6) その他特記事項

平成14年、米国疾病対策センター(CDC)から米国内の動物輸出業者が扱うプレーリードッグが野兔病で大量死したという情報があり、また、ペストの媒介危険性があることが指摘されていること等から平成15年3月1日から「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」に基づき、輸入は原則禁止になりました。

国内繁殖の個体を飼う場合でも、ある程度の規模の専用施設が必要であり、国内で逃走、野生化した例もあることから、ペットとしての一般的な飼養には相当の配慮が必要です。

11. モモンガ<げっ歯目リス科>

(1) 分類、種類

モモンガはげっ歯目リス亜目(リス型げっ歯類)リス科に属します。愛玩動物としては主にアメリカモモンガとタイリクモモンガが飼われています。日本では、北海道にタイリクモモンガの亜種(エゾモモンガ)が、また本州、九州にはホンシュウモモンガ(日本特産でニホンモモンガともいう)が生息しています。

(2) 形態、習性、生理

体長17cm前後、尾長12cm前後、体重130g前後。リスの仲間ですが、大きく異なる点は夜行性であることと、体と手足の間に体毛で覆われた皮膜があり樹間を滑空することです。樹上生活者で、地上に降りることはめったになく、爪は鋭い鉤爪になっていて樹木を走り回ることができます。頬袋があり、秋には巣(木の洞)にエサを貯め、シマリスとは違って冬眠せず、冬は数頭から時には数十頭が群居してあまり巣から出ないで越冬します。冬ごもりのためにエサを貯め込み始める時期と冬ごもりのとき以外は単独生活が基本です。食性は植物食主体の雑食性で、木の葉、種子、昆虫、鳥の卵などと多彩です。寿命は5~10年で、生後約1年で性成熟し繁殖が可能となります。妊娠期間は約40日で、1回に平均3頭を産みます。離乳期は生後約50日です。

根気よく付き合えば人によく馴れてくれます。しかし、無理に掴もうとしたり、ふいに手を出して驚かせたりしたとき、またはよく馴れていないうちにさわろうとしたときは、噛まれて思わぬ深手を負うことがありますので、馴れていないうちは革手袋をして取り扱うのが無難です。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

シマリスに準じます。なお、巣箱は樹上性のためケージの上部に取り付けます。また、クヌギなどの自然木の棒を段差をつけて取り付けておくと、飛び移ったりして運動にもなりますし、爪の伸びすぎ予防にもなります。飼養環境として、夏季は、昼間眠っている巣の中が蒸れないよう、風通しのよい涼しい直射日光の当たらない場所に置き、冬は隙間風の入らない温暖な環境を保つことが大切です。日光浴は特に必要ありません。

(4) 飼い方のポイントと注意点

冬ごもりが不要な飼養下では、繁殖を目的としない限り単独飼いをするのが適切です。幼齢のうちから動物用ミルクを与えて世話をすればよく馴れてくれます。夜は暗くしなければ生活サイクルを狂わせて体調をくずす原因となりますので、部屋の照明は早めに消すか黒い布をかぶせるかして暗くしましょう。

夜行性なので食事は夕方の活動時期に与えます。食物の内容と世話はシマリスに準じます。量の加減は、朝方になって主食が少し残っているくらいを目安にします。野性味が強くてブラッシングや爪切りなどは人を怖がる原因となりますので、ケージの清潔さ保持と爪の伸び

すぎ予防が大切となります。なついてくれば部屋に放し、滑空をさせたりして運動とふれあいを図ることができます。その際、豆電球だけの照明にするか赤色電球を利用するようにし、飛び移ったときにケガをさせることがないように余分なものを取り除いておくことが大切です。また、部屋の中に糞尿を散らかしてしまうことがあるので、汚されて困るものはあらかじめ片づけておきましょう。なお、行動習性を考え、深夜はゆっくりと休ませましょう。ケージからの脱走や逸走防止のための措置はリスと同じく特に注意が肝要です。なついていない場合は、捕まえるのが大変ですし、無理に追いかけるとその後なつきにくくなりますので、部屋に放すのは控えたほうが賢明です。

(5) 健康と安全の管理

木の皮や木の芽など自然界にある食物を与え、果物や野菜など美食を避けるのが、病気にさせない飼養法の要点といわれています。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

わが国に生息するエゾモモンガ、ホンシュウモモンガは「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」により保護鳥獣になっておりますので、環境大臣が与える特別許可がない限り捕獲できないことになっております。

また、タイリクモモンガは外来生物法(特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律)の特定外来生物に指定されています。

12. ハリネズミ <食虫目ハリネズミ科>

(1) 分類、種類

ハリネズミは、名前とは違ってネズミの仲間(げっ歯目)ではなく、食虫目ハリネズミ科に属し、愛玩動物として一般的に飼われる種は、ナミハリネズミ、ヨツユビハリネズミ、アルジェリアハリネズミ、オオミミハリネズミがあります。

(2) 形態、習性、生理

体長は14~30cm位まで、体重も400~900g位までと種や個体によって様々です。聴覚、嗅覚ともよく発達しており、四肢は意外に長いため、逃げ足は人間の早足と同じくらいに速く、低い障害物も乗り越えられますし、場合によっては泳ぐこともできます(本来は水を嫌がります)。ときたま何らかの汚物を嚙んで、泡立った唾液を脇腹の針に塗り付けることがありますが、これは嫌な臭いや有毒な物質で捕食者からの攻撃に備えるものではないかと推測されています。

生息地の環境は種によって様々ですが、湿地には住まず、森林や草原、耕作地帯、乾燥地の木の根元や草むらなどにもぐったり草や落ち葉を集めたりして寝場所にし、単独生活をしています。基本的に夜行性で、行動範囲は広く、一晩に1kmから数kmに及ぶといわれています。

す。

食性はほぼ完全な動物食性で、ミミズやナメクジ、カタツムリなどの軟体動物や昆虫、両生類、爬虫類、ネズミなどの哺乳類と多彩です。生息地の状況や種によっては、人間の残飯や植物質も少量食べます。食物がなくなる時期には、寒い地方に住むものは低温下での冬眠、乾期がある地方に住むものは高温下での夏眠（休眠）をする習性があります。

寿命は5～10年で、繁殖可能な時期は生後2～8ヵ月頃からです。妊娠期間は約40日、1回で3～7頭を産みます。生後約6～7週間で離乳し始め、45～60日で独立します。

一般的におとなしく臆病ですが、怒ると噛み付くこともあります(オオミミハリネズミは、背中中の針が鋭くて素手でさわると痛く、個体差にもよりますが気性も他種と比べて荒く、体当たりで攻撃したり噛み付いたりすることも多いようです)。抜け落ちた針が刺さらないよう気をつける必要があります。ハリネズミはきれい好きであり自分で体の手入れをしますし、排泄物の量もあまり多くないので、管理を怠らなければ悪臭は出ません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

金属製のケージ飼いか水槽飼いが一般的です。高さはあまり必要とせず、平面的な広さが十分あることが大切です。ケージの場合は、よじ登って落下するとケガをすることがありますので、むしろ高さのないものを選ぶよう注意します。床材として、固まらないタイプの猫砂が適当ですが、干し草、ワラ、チップなど使いやすいものを選び、もぐれるくらいの厚さに敷きつめます。木製の巣箱(寝箱)は、アレルギー防止のため針葉樹以外の素材のもので、中で体を動かせる位の広いものを選び、中には干し草かワラをたっぷりと入れます。食器は2個用意し傷みやすいものとそうでないものを分けて入れますが、ハリネズミは手で物を掴むことができませんので、背の低い安定性のあるものを選びます。トイレは使いません。飼養環境としては、冬眠、夏眠をさせない温度管理をして飼ったほうが途中の死亡事故につながることもなく安全です。したがって、特に冬季の保温と、隙間風や昼夜の気温差には気をつけるとともに、夏季の高温と蒸れに注意する必要があります(20～27度が適温の目安)。

(4) 飼い方のポイントと注意点

夜行性であることを考え、自分の生活サイクルに合っているかどうか判断して飼い始めることが大切です。単独生活者なので一つの収容物に対して1頭飼いが原則です(繁殖を希望する場合でも、別々の収容物に入れたオスとメスのお見合い期間を設け、メスのほうにオスを入れる必要があります)。

夜行性なので食事は夕方に与えます。食欲旺盛なので、傷みやすいもの以外は容器に入れたままにしておきます。主食としてはハリネズミ専用フードまたはキャットフード(硬いものを齧ることはないのでドライタイプのもは湯でふやかします。また野生下では魚肉は食べないので、獣肉か鶏肉の総合栄養食タイプの製品を選ぶことが大切です)を与え、副食として市販の乾燥パツタや昆虫、ミルワーム、ゆで卵の黄身、牛の生のレバーや心臓などの動物性食品を種類多く与えます。ミネラルやビタミンの補給のため、時々食品にカルシウム粉や総合ビタミン剤を添加するとともに、塩土も置いておきます。また、たまに果物や野菜も

与えます。

行動範囲が広い動物ですので、できるだけケージ等から出して運動させることがストレス防止のために大切です。その際、サークルか段ボールなどで囲った中で遊ばせると個体の安全のためにもよいでしょう。日光浴はそれほど必要としませんが、野生下では比較的陽に当たる環境に住んでいますので、ときどき穏やかな陽に当てると喜びますし、皮膚病の予防にもなります。日陰の避難部分を作った上でケージ等ごと日なたに出したり、同様にして庭のサークル内で運動させるのも適当です。室内に放す時は、逃げ足が速いことを考慮し、戸締りなど逸走防止の措置をとることを忘れてはなりません。ふれあいを図る場合は手袋をする
と人の安全と保健のためには有効です。運動が終わったら、抜けた針が落ちていないか調べ、糞尿の始末もきれいにしましょう。

(5) 健康と安全の管理

外部寄生虫(ダニ、マダニ、疥癬など)が多く、マダニなどは輸入時にすでに寄生していることも考えられるため、予め動物病院で検査してもらいましょう。予防には特に環境の清潔さを保つことと、高温、多湿を避けるようにします。

人と動物の共通感染症

ダニ脳炎、サルモネラ症、レプトスピラ症、ロッキー山紅斑熱、疥癬などが可能性として考えられます。

(6) 特記事項

イギリスの島で人為的に移入されたものが繁殖し生態系に影響している事例があり、逸走及び遺棄の防止には特に注意する必要があります。

13. フェレット<食肉目イタチ科>

(1) 分類、品種

フェレットは食肉目イタチ科に属するイタチの仲間です。ヨーロッパケナガイタチを家畜化したもので、ウサギ狩りやネズミなどの退治のために、また毛皮用として飼われてきました。毛色のバリエーションは多彩です。品種によって性格に少しずつ違いがあるようです。

(2) 形態、習性、生理

体長30~50cm位、尾長10~20cm位、体重0.7~3kg位でオスよりもメスのほうが小さいのが目立ちます。後肢だけで立ち上がることができ、また体はしなやかで、前肢は短く器用ですので、かなり細い穴や通路でも素早く通り抜けられます。穴や隙間に潜りたがる習性があり、穴掘りも得意です。前肢の親指は他の指と向かい合うようになっているので物を握ることができます。鋭い爪は猫のように出し入れできません。夏毛と冬毛とに生えかわる換毛期があります。肛門腺をもち、驚いたり危険を感じたりすると強烈な臭いのする分泌液を霧状に吹きかけて防御しますが、この臭いはなかなか消えません。メスの繁殖生理は交尾排卵で、発情時に交尾をしないと、発情が止まらない「エストロジェン過剰症」というホルモン

中毒を起こし死に至ることもあります。フェレットの原種は森林や沼地で地中に巣穴を掘って夜行性の単独生活をする肉食獣です。寒さには抵抗力がありますが、暑さには大変弱く、熱射病にかかりやすい体質があります。寿命は6～10年位で、性成熟はメスが7～10ヵ月位、オスが8～12ヵ月位です。妊娠期間は約40日、1回で3～7頭を産みます。生後約1ヵ月で離乳します。

人馴れしやすく、馴れたものは噛んだり攻撃したりしません。しかし、怒っているときに無理にさわろうとしたりすると咬まれることがあります。オス、メスとも性成熟する前(生後6ヵ月頃が適当といわれます)に不妊手術をすればおとなしくなる傾向があります。肉食のため、猫と同じように糞の臭いは強めです。しかし、体の手入れや掃除を怠らなければ、気になるほどの臭いは出しません。通常は近所迷惑になるような鳴き声は出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

室内のケージ飼いが一般的です。1つの収容物での複数飼いは可能ですので、どうするかにより収容物の大きさを考えます。中が2階建て以上の造りになったものなどフェレット専用の金属製ケージが色々と市販されています。

床は足を挟まない程度の隙間があいた木製のこにし、その下に新聞紙を敷いておくと掃除に便利です。床の隅に食器2個とトイレ(壁際や四隅に排泄する習性がありますので、入り口以外が高くなった専用のものが市販されています。中に猫砂を敷きます)を置きます。寝床として、ふわふわしたものを好む性質があり、ハンモックや布製のトンネルなど色々と市販されているものや自家製のものを工夫して、適当な場所に設置します。給水ピンは、多くの水を飲みますので専用のものを使用します。脱走防止のため扉の留め金(ナスカン)も必要です。部屋に出したときにも安心して休める場所として木製の巣箱(中に指を引っかかない布などを敷きます)か市販の専用テント又は寝袋、その他トイレも用意しておきましょう。

飼養環境としては、特に暑さに弱いということを考え、夏季は直射日光が当たらない、風通しのよい涼しい場所にケージを置くことが大切です。寒さには抵抗力がありますが、急激な温度差や隙間風は悪い影響を与えますので注意しましょう。人間の生活サイクルに合わせられますが、いつも明るいという状態にしないよう配慮することが大切です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

遊び好きで、コミュニケーションをとる時間が少ないとストレスとなります。留守がちな飼い主の場合、複数飼いや考慮する必要があるでしょう。

肛門腺からの分泌物は人体に悪影響を与えますので必ず肛門腺除去手術をした個体を飼うようにしましょう。また、繁殖を希望する以外では、1頭飼いの場合でもメスは必ず不妊手術をした個体でなければなりませんし、飼いやすさの観点からオスも不妊手術をした個体が適当です。なお、この不妊手術の必要性は、万一逸走した場合に、生態系を崩す危険がありますので、その観点からも特に注意する必要があります。

フェレットは食物の消化時間が短く“貯め食い”ができませんので、1日に少しずつ何回か

に分けて食べる習性があります。したがって、基本的には朝夕の2回食事の世話をするようにし、好きなときに食べられるように主食は容器に入れたままにしておくといでしょう。肉食のため高タンパク、高タウリンを必要とします。そのために製造された専用のペレットを主食として与えます（生後3ヵ月位までの幼獣には猫用のミルクでふやかして1日に6、7回に分けて与えます）。主食だけでは飽きますので、ゆでた鶏肉やペット用煮干しなどの動物性食物もおやつ程度に与えます。野菜、果物、イモ類も好物ですし、専用のドライフルーツもあって、ふれあいを図るための利用には有効ですが、植物繊維は消化しにくく下痢の原因になりますので与えすぎに注意が必要です。水はかなりの量を飲みますので切らさないように注意することが大切です。糞の臭いが強いのでトイレの掃除はこまめにするようにしましょう。

フェレットはふれあいが大切で、毎日1時間位は室内で一緒に遊んでやらないとストレスとなりますから、小さいときからのしつけが重要です。手を咬んできたら指ではじいて叱れば徐々に咬まなくなります。

トイレは隅のほうにする習性がありますので、しやすい所を見定めておき、臭いをかぎながらウロウロしたり、尻尾を持ち上げて後ろにさがっていくような動作をしたら、トイレに連れていきます。寝起きのときや食事後にすることが多いので、そのときは注意深く見守って失敗させないことがコツです。体の隅々までさわって人の手にも十分に馴れさせておけば、爪切りや耳掃除、ブラッシングも容易となります。ブラッシングは換毛期には毎日することが大切です。爪切りや耳掃除も適宜必要です。本来、水を嫌いませので、コミュニケーションのため、また体を清潔に保つためにも、たまにシャンプーをしましょう。しかし、やりすぎは皮膚を乾燥させますので、1ヵ月に1～2回を限度にするようにしましょう。胴輪を使って庭や外の散歩も可能です。道路などは車や自転車などの事故防止のためキャリーバッグに入れるか抱いて歩き、空き地や公園などの安全な場所で目を離さないようにして遊ばせたり連れ歩いたりするのが適切です。脱走の名人であることに留意し、ケージの扉は厳重に留めておくこと、室内で遊ばせる場合には予め窓やドアは閉めてあるかどうか確認して逸走防止を図らなければなりません。

(5) 健康と安全の管理

室内で遊ばせることが必要なフェレットの場合は、安全のため特に次のような点に注意しましょう。すなわち、思いもかけないようなところにも潜り込んで出られなくなる場合もありますので家具類の下などの隙間は塞ぐこと、誤って踏んだりしないよう洗濯物などを取り除いておくこと、高さがわからないので落下による椎間板ヘルニアなどの予防のため高いところに登れる足場となるようなものも取り除いておくこと、ぬいぐるみや羽毛マットなどの毛のあるものは本能的に咬んで毛球症を引き起こしやすいことや、ストッキングやゴム製品などの異物の飲み込みも多いので、これらもまた取り除いておくことです。また、無理な姿勢で抱いたり尻尾を持ったりすると脱臼や骨折の原因になりやすいことにも注意する必要があります。

主な病気と予防

1) 犬ジステンパー

感染すると死亡は免れません。ワクチン接種が必要です。

2) インフルエンザ

人間のものも感染します。くしゃみをしたり、鼻水が出ているようならすぐに獣医師の診察を受けましょう。

3) 副腎の腫瘍等

早期の不妊手術などが原因で副腎に腫瘍や障害が見られます。脱毛などが起きますが、腫瘍の場合はしこりがあるのに気付くことがあります。

4) 低血糖

食事の回数が不適切な場合や、空腹によって起きます。弱ってヨダレを垂らし、食物を受けつけなくなります。保温して糖分を与えましょう。

5) 腸閉塞

換毛期などに毛を飲み込んで起こしたり、前述の異物の飲み込みが原因であったりします。

6) フィラリア

犬と同じです。

人と動物の共通感染症

サルモネラ症、カンピロバクター症、狂犬病、レプトスピラ症などが可能性として考えられます。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

条例により飼養開始の届け出を義務づけているところがあります。

14. スカンク <食肉目イタチ科>

(1) 分類、種類

食肉目イタチ科に分類される小型の肉食獣です。ペットになっているのはシマスカンクと呼ばれる種類です。

(2) 形態、習性、生理

ふさふさした被毛で、毛色は黒と白のツートンカラーの縞模様をしています。危険を感じる肛門腺から猛烈な臭いを発射します。また、興奮すると、尾を上げて威嚇動作もします。飼養する場合は臭腺の除去が必要です。藪や岩のごろごろある草地に生息し、夜行性です。寿命は6～10年です。体長(頭胴長)は28～38cmで、尾長は18.5～43.5cmで、体重は3.0～10.7kgです。11ヵ月で性成熟に達します。59～77日間の妊娠期間で1～10頭(平均4～5頭)の子供を産みます。子供は56～70日ほどで、離乳します。

(3) 飼養上必要な施設、樹材及び環境

大型の犬用のケージで飼養は可能です。動物が生活しやすく飼養管理を容易にするため床はチップを敷きます。動物が休む寝小屋も設置します。水のみや食器は小型犬用のもので十分です。寒さには強い動物ですが、日当たり、通風のよい場所にケージを置きます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は缶詰のキャットフードを与え、副食として少量の果物や野菜、ゆで卵などを与えます。肥満しやすいので体重を定期的に計測し、食事でウエイトコントロールを行います。

(5) 健康と安全の管理

スカンクは他の動物の感染症に感受性があります。犬や猫からの感染症を予防するため、犬ジステンパー、犬肝炎、レプトスピラ症、猫汎白血球減少症など犬や猫とほぼ同じワクチン接種が有効です。肥満は飼い方のポイントを参照して下さい。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

スカンクはアライグマと同様に北米では、狂犬病のキャリアーとなっています。そのため、平成12年1月1日より、「狂犬病予防法」の改正に伴って、狂犬病の検疫の対象動物として犬に加えてスカンクも追加されています。

15. アライグマ<食肉目アライグマ科>

(1) 分類、種類

食肉目アライグマ科の動物で、カナダ南部、アメリカ合衆国、中央アメリカのアライグマとコスタリカ東部からペルーやウルグアイ東部に生息するカニクイアライグマの2種に分類されます。ペットとして一般的なものはアライグマです。

(2) 形態、習性、生理

水辺の森に生息し、木登りや泳ぎが上手です。餌などを水に入れて洗うような動作(野生での餌探し行動)がアライグマの名前の由来です。夜行性の動物ですが、昼にも活動します。寿命は14年くらいです。体長(頭胴長)は41~105cm、尾長は19~41cm、体重は5~8kgで、オスの方がメスよりも大きいです。オスは24ヵ月、メスは12ヵ月で性成熟に達します。63~73日間の妊娠期間で1~7頭(平均3~4頭)の子供を産みます。子供は49~120日で離乳します。成長すると凶暴になり、人に噛み付く危険性があります。身体は軟らかく、また力が非常に強いので捕獲が容易ではありません。大きな声は出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

子供のときは犬用のペットケージで十分飼養することができます。しかし、地方自治体によっては規制対象動物となる場合もありますので、条例の基準に従ったケージが必要です。飼養面積はできる限り広く取り、少なくとも10平方メートルとします。広ければ広いほど管理が楽になります。床は、穴を掘ることを防ぎ水洗いも容易であるコンクリートにし、水洗いのための給排水設備を設けます。放飼場所と寝室を仕切れるようにすれば、動物と一緒にケージに入らないで飼養管理をすることができます。放飼場に木登り用の止まり木も必要で

す。水飲みや食器はステンレス製の犬用の市販品で十分です。丈夫な動物ですので、気温や湿度を気にすることはありませんが、日当たり、通風のよい飼養場所が健康に飼養するためには不可欠です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

リンゴやバナナ、ニンジンなどを主食とし、併せて乾燥ドッグフードを副食とします。肥満し易いため、バナナなど甘いものを控えめにします。与えたものを水に入れてから食べる習性があるため、水のみは大き目のものを用意します。ケージに止まり木を設置し、立体的にケージを利用できるようにして運動量を確保します。アライグマは非常に器用な動物ですので、脱走防止のために、飼育作業の後は必ず施錠します。臭いが隣近所の迷惑にならないように、定期的な清掃が必要です。また、ケージの中に直接手を入れてアライグマから危害を受けないようにするためには、人止め柵の設置は効果があります。去勢など犬や猫の繁殖制限の方法が利用できます。

(5) 健康と安全の管理

アライグマは人や他の動物の感染症に非常に感受性があります。また、アライグマの回虫が人に感染し、寄生虫性脳炎を引き起こす恐れがあり、公衆衛生上問題です。そこで、飼養に際しては回虫の駆虫が不可欠です。犬や猫からの感染症を予防するため、犬ジステンパー、犬肝炎、レプトスピラ症、猫汎白血球減少症など犬や猫と同じワクチネーションが有効です。健康のバロメーターは食欲です。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

アライグマは北米では、狂犬病のキャリアーとなっています。そのため、平成12年1月1日、「狂犬病予防法」の改正に伴って、狂犬病の検疫の対象動物として犬に加えてアライグマも追加されています。また、外来生物法(特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律)による特定外来生物に指定されています。

(7) その他特記事項

日本の気候はアライグマが生息し易い環境であるため、名古屋や北海道などでは逃走、あるいは捨てられたアライグマが帰化動物として野生化し、日本固有生物の生息環境を脅かしています。アライグマのようにペットとして海外から輸入し、日本の気候に適応し易い動物は、日本の自然に野生化させないという原則を守るべきです。

16. フェネックギツネ<食肉目イヌ科>

(1) 分類、種類

フェネックギツネは北アフリカ原産の食肉目イヌ科ギツネ属に分類される最も小さな野生のイヌ科動物です。

(2) 形態、習性、生理

フェネックギツネは、ふさふさした被毛で、イメージは小型のギツネです。砂漠などに生

息し、夜行性です。寿命は12～14年です。体長(頭胴長)は35～41cmで、尾長は17～31cmで、体重は1～1.5kgです。9～11ヵ月で性成熟に達します。飼養下での交尾期は1～2月で、50～63日間の妊娠期間で1～6頭(平均2～3頭)の子供を産みます。子供は61～70日ほどで離乳します。糞や尿の臭いは犬と同じ位です。小さいとはいえ鋭い歯をしています。捕獲しようとするれば噛んできます。あまり大きな声を出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

大型の犬用のケージで飼養は可能ですが、少なくとも10平方メートルくらいの広さが必要です。広ければ広いほど動物が生活しやすくなりますし、管理も楽になります。床は砂やチップを敷きます。水のみや食器は小型犬用のもので十分です。寒さにはそれほど弱くはありませんが、寝小屋に遠赤外線などの部分暖房があった方がよいです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は缶詰のキャットフードを与え、副食として少量の果物や野菜、ゆで卵などを与えます。砂漠など乾燥地域に生息する動物です。夜行性動物ですが、ケージや動物舎は日当たり、通風のよい場所に設置します。

(5) 健康と安全の管理

感染症の感受性は飼い犬と同様です。犬フィラリア症にも罹りますので、犬と同様に犬フィラリアを予防することが必要です。また、感染症を予防するため、犬ジステンパー、犬肝炎、レプトスピラ症など犬と同様のワクチネーションが有効です。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

平成12年1月1日より、「狂犬病予防法」の改正に伴って、狂犬病の検疫の対象動物として犬に加えて「きつね」も追加されました。そのため、キツネ属のフェネックギツネも対象動物になりました。

(7) その他特記事項

ペットとして飼養されるキツネ属にギンギツネがいます。飼養上の注意点はフェネックギツネとそれほど変わりがありません。しかし、臭いは強烈ですので、室内飼養には向きません。200平方メートルほどの広さで、穴を掘っても逃げられない構造の動物舎を作れば、キツネにとって飼養環境のエンリッチメントになりますし、穴掘りなどの自然な行動を見ることが出来ます。

17. ワラビー <有袋目カンガルー科>

(1) 分類、種類

ワラビーはオーストラリアに分布する有袋目カンガルー科に分類される小型のカンガルーです。一般的に販売されているのはダマワラビーと呼ばれる種類です。

(2) 形態、習性、生理

有袋類は重さ2gほどの未熟児の状態生まれた子供を下腹部にある皮膚の袋(育児嚢)

の中で哺乳しながら育てます。メスにはこの袋があります。外見からは分かりませんが、オスにも袋骨と呼ばれる骨が骨盤から伸びています。乾燥した藪の中などに生息し、薄暮から夜間に行動します。寿命は9年ほどです。体長（頭胴長）は42～68cmで、尾長は33～54cm、体重は2.6～9.9kgです。12～36ヵ月で性成熟に達します。28日間の妊娠期間で1頭の子供を産みます。子供は240日ほどで、育児嚢からでます。非常におとなしい動物ですが、捕獲時には両後肢で蹴ります。声は殆ど出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

跳びはねる動物ですのでケージでの飼養は無理があります。乾燥した場所に生息する動物ですので、水はけ、日当たり、通風のよい場所で飼養します。100平方メートルほどの面積の放飼場に雨の時や冬の寒さを避けることのできる3.3平方メートルほどの動物舎が必要です。犬小屋ほどの大きさの寝小屋も利用します。舎内には遠赤外線ランプなどの部分暖房器が必要です。また、動物が生活しやすく飼養管理を容易にするため、地面や床を砂地にします。水飲みや食器は犬用のもので十分です。寝床として乾草を用います。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は草食獣ペレットやウサギ用ペレットを配合し、副食として青物、ニンジン、サツマイモ、リンゴ、バナナなどを与えます。口腔粘膜を傷つけ、顎骨の化膿性疾患（カンガルー病）を引き起こす恐れがあるため、粗雑な茎のある乾草の給与は控えてください。

(5) 健康と安全の管理

寒さに強い動物ではないので、風邪を引かせないように防寒に気を付けて下さい。カンガルー病については、飼い方のポイントを参照してください。有袋類はトキソプラズマに感染するため、猫の排泄物に近づけないようにします。

18. ポッサム（フクロギツネ）＜有袋目クスクス科＞

(1) 分類、種類

ポッサムはオーストラリア原産の有袋目クスクス科に分類される中型の動物です。

(2) 形態、習性、生理

体毛は密でふさふさした尻尾を持っています。森林で樹上性の単独生活を行い、夜行性ですので日中は樹洞のなかで寝ています。寿命は6～7年位ですが、14年8ヵ月生存していた記録もあります。体長（頭胴長）は32～58cmで、尾長は24～38cm、体重は1.0～5.0kgです。オスは9～24ヵ月、メスは9～12ヵ月で性成熟に達します。17～18日間の妊娠期間で普通1頭の子供を産みますが、2頭の場合もみられます。子供は4～5ヵ月で育児嚢を初めて出ますが、離乳には6～7ヵ月かかり、8～18ヵ月で独り立ちします。樹上性の動物ですので爪が鋭く、捕獲時には噛み付きます。声は殆ど出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

2メートル四方ほどの金網ケージに止まり木、寝箱が必要です。出入り口は、二重鍵にし

ます。屋外の場合、寝箱に雨が入らないように屋根が必要です。床は土でもコンクリートでも可能です。水のみや食器は小型犬用のもので十分です。寒さには強い動物ですが、日当たり、通風のよい場所にケージを置きます

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は青物、ニンジン、サツマイモ、リンゴ、バナナなどを与え、副食として乾燥ドッグフードを与えます。隙間に潜り込むのが上手ですので、脱走防止のためケージの隙間を点検します。

(5) 健康と安全の管理

有袋類はトキソプラズマに感染するため、猫の排泄物に近づけないようにします。

(6) その他特記事項

日本の気候はポッサムが生息しやすい環境です。ニュージーランドでは19世紀にオーストラリアから毛皮の採取のために移入したポッサムにより、森林の葉が採食され大きな被害がでています。仮にペットとしてポッサムを日本に輸入して飼養するとしても、野生化させないという原則を堅く守る必要があります。

19. サル<リスザル：霊長目オマキザル科、マーモセット：霊長目キヌザル科>

(1) 分類、種類

サルは私たち人にとっても近い動物です。一般の家庭で飼養しやすい種類は、霊長目のうち南米産であるリスザルやマーモセットなどです。

(2) 形態、習性、生理

リスザル

オマキザル科。南米のコロンビアからパラグアイに生息する小型の昼行性のサルで、大きな群れ(10~35頭)を作って生活しています。寿命は12~25年です。体長(頭胴長)は23~37cm、尾は32~42.5cmの長さです。体重は500~1,000gになります。オスは54~60ヵ月、メスは30~36ヵ月で性成熟に達します。152~182日間の妊娠期間で1頭の子供を産みます。子供は120~180日で離乳し、12ヵ月で独り立ちします。無理に捕まえたりすると噛み付きます。糞や尿の独特な臭いがあります。大きな声はだしません。"

マーモセット

マーモセットは中南米にすむキヌザル科に分類される小型のサル類の総称です。ペットとして飼養されているコモンマーモセットは耳の房毛に特徴があります。ブラジル東部の熱帯雨林が原産で昼行性です。寿命は16年ほどです。大きさは、体長(頭胴長)13~30cm、尾長17.2~40.5cm、体重230~453gです。性成熟はオスで9~17ヵ月、メスで10~24ヵ月です。140~148日の妊娠期間で、1~3匹の子供を産みます。子供は42~84日で離乳

します。無理に捕まえたりすると噛み付きます。リスザルほど強くはありませんが、糞や尿の独特な臭いがあります。小鳥のような高い声をだします。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

小鳥用ケージ(できれば1立方メートル以上)でペア飼養は可能です。ただし、床もメッシュにして排泄物が下に落ちるか、あるいはチップを敷き、身体が汚れないようにする必要があります。水飲みや食器はケージに付属した容器で十分間に合います。休息できるような太目の止まり木を取り付けます。寝床が必要になりますので木箱や段ボール箱(30cm四方)をケージの上隅に備え付けてください。湿度はそれほど気にする必要はありませんが、室温は少なくとも15℃以上は必要です。また、ペットヒーターなど部分暖房も併設します。しかし、真冬でも風がなく日光が十分あたっていれば、屋外に出すことができます。ケージを置く場所は、日当たりがよく、通風のよい場所を選びます。ただし、真夏の直射日光は避けてください。

(4) 飼い方のポイントと注意点

食事は高タンパク質(粗タンパク質25%含有)が必要です。そのため、マーモセット用飼料などを主食とし、適量の青物やニンジン、サツマイモ、リンゴなどを副食とします。ただし、副食は25%以下に抑えます。マウスの赤子はマーモセットの好物の副食ですが、マーモセット肝炎の原因になることがあるため、欧米の動物園では給与を控えています。

食事および給水の回数は1日2回がよいです。というのは、一度に与えても食べる量が少ないため、回数を2回にすることで、新鮮な餌や水を与えることができるからです。

食物中のビタミンD₃をほとんど利用しません。毎日、直射日光にあたらぬ場合、餌からビタミンD₃を十分摂取することが重要になります。

全ての霊長類はビタミンCを餌から摂取する必要があります。市販のサル用のビスケットに添加してあるビタミンCは製造後6ヵ月以内で顕著な崩壊が見られるので、副食の青物、オレンジ、フルーツジュース、複合ビタミン剤やビタミンC剤で補う必要があります。

ケージの入り口には施錠し、脱走防止に努めます。また、飼育作業時には、飼養している部屋の窓や扉を閉め、部屋の外に逃げないようにすることも必要です。逃げた際には、捕虫網で安全に捕獲することができます。また、糞尿には独特な臭いもありますので、隣の家が接近している場合、飼養場所を考慮して迷惑防止に努めるようにします。

繁殖制限の方法としては、オス・メスの分離飼育のほか、不妊、去勢手術、オスのパイプカットなどがあります。また、繁殖能力を一時的に抑制する方法としてメスへのホルモン剤の埋め込みが有効です。

(5) 健康と安全の管理

サル類は人へ病気を感染させ、また、人から病気を感染されることがあります。飼い始めるときは、糞便の寄生虫や細菌検査等を獣医師に依頼することが必要です。また、飼い主が風邪などの病気にかかった場合、サルへ感染させますので、接触を避けます。特に、ヒトヘルペスのマーモセットへの感染は致死的ですので、口移しの給餌は絶対にはいけません。

熱帯地方が原産地ですので、寒くなると下痢したり、感冒に罹りやすいため、保温の注意が必要です。

健康のバロメーターは採食状況、便状です。また、人と同じように寒ければ震えますし、暑ければ呼吸が速まります。これらの症状を的確に観察し、早期に対処することが必要です。

栄養による病気の代表的なものとしてクル病や骨軟症、壊血病(ビタミンC欠乏症)があります。飼い方のポイントを参照してください。

手入れを怠ると、排泄物で身体が汚れて健康を害するため、清掃は定期的に行います。寝箱は汚れやすいため、ダンボールを使い捨てにするのも清潔に保つ秘訣です。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

サル類は絶滅の危機に瀕している動物が多く、全てのサル類が「ワシントン条約(CITES)」の附属書II表以上にランクされており、国際商業取引が規制されています。国内においても、これらのサル類はI表の場合、国内商業取引が「種の保存法」で規制されています。リスザルやコモンマーモセットは「種の保存法」に規制されないII表の動物ですが、適正に輸入された動物かどうかを確認する必要があります。というのは、平成12年1月1日より、動物の輸入検疫制度の変更に伴って、サル類のエボラ出血熱とマールブルグ病を対象としたサルの輸入検疫が「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」で義務付けられるようになったからです。ただし、国内繁殖が証明されれば、II表の動物は種の保存法には規制されません。

また、サル類のなかには、動物愛護管理法に定める特定動物(危険動物)、外来生物法(特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律)に定める特定外来生物に該当するものが多く含まれています。

(7) その他特記事項

日本に生息する中型のサルであるニホンザルは、捕獲については「鳥獣保護法」の許可が必要です。下北半島に生息するものは天然記念物に指定されており、「文化財保護法」で規制されています。成長すると力が強くなり、人に凶暴になります。

IV . 参考

< 引用及び参考資料 >

- ・ 今泉吉典監修 『世界哺乳類和名辞典』 (株)平凡社、1988
- ・ 正田陽一著 『家畜という名の動物たち』 (株)中央公論社、1983
- ・ 石川祥子著 / 小暮規夫監修 『初めての人の犬のしつけと飼い方』 (株)西東社、2001
- ・ 西東社出版部編 『子犬の飼い方・育て方』 (株)西東社、2002
- ・ 鈴木立雄、小方宗次監訳 『犬種と疾病』 文永堂出版(株)、1989
- ・ 『愛玩動物飼養管理士教本 (2 級・ 1 級) 』 (社)日本愛玩動物協会
- ・ 『飼育読本シリーズ』 (社)日本愛玩動物協会
- ・ D.W. マクドナルド編・今泉吉典監修 『動物大百科』 (株)平凡社、1986
- ・ 宇田川龍男著 『ハムスター・ウサギ・リス・モルモットの飼い方』 (株)梧桐書院、1996
- ・ 宇田川龍男著 『ハムスターの本』 モンキーブックス、1988
- ・ 道行めぐ著 / 平井博監修 『かわいい小動物の飼い方』 (株)西東社、1998
- ・ 霍野晋吉監修 『ウサギとハムスターとフェレットBOOK』 成美堂出版(株)、1998
- ・ 霍野晋吉監修 『ハムスター・ウサギ・リスたちと暮らす本』 成美堂出版(株)、2001
- ・ 福田啓一監修 『リスハンドブック』 (株)あおば出版、2002
- ・ 長坂拓也著 『ハリネズミクラブ』 (株)誠文堂新光社、1997
- ・ 中山沙織著 『かわいい小動物の飼い方・育て方』 (株)ナツメ社、1997
- ・ 山根義久、長谷川篤彦監修 『メルク獣医マニュアル第 8 版』 (株)学窓社、2003 (発刊予定)
- ・ Toni Danzig・Project Coordinator and Editor ; Biological Values for Selected Mammals, Third Edition, American Association of Zoo Keepers, Inc. 1992"
- ・ 清水悠紀臣ほか編 『獣医伝染病学 (第四版) 』 近代出版、1995
- ・ James R. CAREY and Debra S. JUDGE Longevity Records : Life Span of Mammals, Birds, Amphibians, Reptiles, and Fish Odense Univ. Press 2000"

< 関係法令・条約等参考ホームページ >

環境省 (<http://www.env.go.jp/>)

- ・ 動物の愛護及び管理に関する法律
- ・ 家庭動物等の飼養及び保管に関する基準
- ・ 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律
- ・ 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律
- ・ 生物多様性条約
- ・ 生物多様性国家戦略

厚生労働省 (<http://www.mhlw.go.jp/>)

- ・狂犬病予防法
- ・感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律

農林水産省 (<http://www.maff.go.jp/>)

- ・家畜伝染病予防法

外務省 (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/>)

- ・ワシントン条約

文化庁 (<http://www.bunka.go.jp/>)

- ・文化財保護法

ペット動物販売業者用説明マニュアル(哺乳類)

環境省自然環境局総務課動物愛護管理室

〒100 8975 東京都千代田区霞ヶ関1 2 2

電話：03 3581 3351

請負者：社団法人 日本動物保護管理協会

〒107 0062 東京都港区南青山1 1 1 新青山ビル西館23階

電話03 3475 1695 FAX：03 3475 1697

発行：2003年3月

【マニュアル研究会委員(50音順)】

委員長 小暮規夫(小暮動物病院院長)

榎 敬蔵(社団法人日本愛玩動物協会理事)

永淵恒幸(東京都動物愛護相談センター指導監視係監視担当係長)

橋崎文隆(東京都建設局恩賜上野動物園飼育課動物病院係長)

山口千津子(社団法人日本動物福祉協会調査員)

本マニュアルは、環境省の承諾を得て転載しているものです。

目次

鳥 類

・基本事項	64
1．飼養動物選択上の留意事項	64
2．終生飼養	64
3．適正飼養	65
4．迷惑と危害の防止	65
5．生物多様性の保全	66
6．関係法令	66
・共通事項	71
1．鳥類の基礎知識	71
2．飼育管理	73
3．購入に当たっての留意事項とチェックポイント	74
4．鳥類の病気と健康管理	75
5．人と動物の共通感染症	81
・種類ごとの個別事項	84
1．フィンチ	84
2．カナリア	90
3．キュウカンチョウ（九官鳥）	91
4．すり餌鳥（軟食鳥）	92
5．セキセイインコ	93
6．中型インコ類	94
7．大型オウム・インコ類	95
8．ハト類	97
9．ニワトリ	98
10．キジ類	99
11．水禽類	99
12．猛禽類	100
・その他	102
1．野生の雑鳥を保護したとき	102
2．足環のついている鳥を見つけたら	102
・参考	103
引用及び参考資料等	103

Ⅰ．基本事項

1．飼養動物選択上の留意事項

動物の飼養に当たって、その種類や品種を選ぶ上で考慮すべき事項は次の通りです。

- (1) 飼養目的
- (2) 動物の特性
それぞれの動物種の生態、習性、生理、食性、適応環境、知能、運動能力、力の強さ、行動パターン、気質や性質(成長に伴う変化、繁殖期の変化等も含む)、成長した時のサイズ、力量、性別、品種による気質や運動要求量の差、寿命等。
- (3) 飼養環境
必要空間、住宅環境。
- (4) 経済的負担
- (5) その他
 - ・家族の同意
 - ・家族構成とそれぞれの年齢
 - ・家を留守にする時間
 - ・他に飼っている動物の有無、種類、年齢、性別
 - ・今までの飼養経験

2．終生飼養

動物を飼い始めるときは、途中で飼育を放棄することなど絶対ないと、誰もが考えているのではないのでしょうか。特に小鳥の場合は寿命が短いものも多く、飼育禁止の住宅も少ないので、問題は比較的少ないといえるでしょう。

しかし、なかには転居、近隣からの苦情、子供のアレルギー等の理由により飼えなくなってしまいう例が見られますし、ヒヨコがニワトリになって持て余してしまうというのは、昔からよくあったことです。

また、鳥類のなかには10年から30年以上生きるものも多いので、このような種類の鳥を飼う場合は、その長い期間責任を持って飼い続けることができるかどうか飼い始める前に十分検討する必要があります。

動物を遺棄する(捨てる)行為は、「動物の愛護及び管理に関する法律」により処罰される違法行為です。

鳥の場合、飼えなくなったら放してやれば生きていけると安易に考える傾向がありますが、飼われていた鳥は警戒心が薄く、猫などに襲われる等生き延びる可能性は高くありません。

また、生き延びたとしても環境や野生動物の生態系に影響を与えることが考えられます。

一見「自由にしてやる」というよいことのような響きがありますが、飼い鳥を放すことは捨て犬、捨て猫と同じく犯罪行為だということを理解してください。

3 . 適正飼養

動物の飼い主には適正飼養が義務付けられています。この動物を適正に飼養するということには2つの意味があります。

1つは、その動物の生態、習性、生理等を正しく理解して、動物が健康に生活できるような環境で飼育するということ。もう1つは、その動物を飼うことにより、周囲や近隣に迷惑をかけることのないようきちんと管理して飼育するということです。

動物の健康と周囲の環境に対する配慮の両面を考えて、適切な飼育設備を整え、正しく飼育管理しなければ適正飼養とはいえません。

(1) 動物の健康に対する適正な飼養

まず、鳥の大きさや羽数に応じて十分な広さの鳥かごや禽舎、適度な温度、湿度、採光のとれる飼育場所、食性に合わせた餌などを確保しなければなりません。

毎日の飼育管理では、一般的に鳥は飢餓に対する抵抗力がなく、餌を切らすとすぐに死亡してしまいますから、餌の管理が特に大切です。また、それぞれの種類の生態や習性に応じた飼育方法がありますので、それを十分理解して飼育に当たる必要があります。

(2) 近隣環境に対する適正な飼養

室内で少ない羽数を飼う場合は、汚物や羽毛などの処理は比較的こまめに行えますが、屋外に禽舎を設置している場合や、多数飼育している場合は管理が雑になりがちなので、十分な注意が必要です。

また、住宅密集地域でニワトリなどの鳴き声の大きな鳥を飼うことは、相当の設備と周囲への配慮がなければできないことでしょう。これは、飼い始める前に十分考えなければならぬことです。

4 . 迷惑と危害の防止

(1) 近隣への迷惑の防止

保健所等に寄せられる飼い鳥に関する苦情の主なものは、

- ・清掃の不徹底による羽毛、糞の飛散
- ・多数飼育による臭い、害虫の発生
- ・ニワトリ、オウム等の鳴き声

などです。

これらの苦情の原因の多くは、飼い主が適正飼養の義務を果たしていないところにありま

す。自分たちさえよければという身勝手な考え方では、地域の理解を得られないだけでなく、苦情などの問題が発生することになります。

地域の中で人と動物が調和のとれた生活をしていくためには、動物の飼い主と飼っていない人の相互の理解が欠かせません。それにはまず、飼い主が周囲の人の立場を考慮して責任ある飼い方をすることが最も重要です。

また、コミュニケーションが希薄な地域では、些細な問題が苦情や大きな揉め事に発展する傾向があるので、近隣関係を良好に保つような配慮も必要です。

(2) 人への危害の防止

鳥類のなかでも猛禽類や大型の鳥を飼育する場合、種類によっては危険な動物に指定されていて、都道府県知事の許可が必要な場合があります。許可を受けるためには基準に適合した飼育施設を準備しなければならないので、事前に都道府県の担当部署に問い合わせてください。

許可が不要な種類でも大型の鳥を飼う場合は、人に危害を加える恐れのない施設の中で相当の注意を払って飼育管理しなければなりません。

5 . 生物多様性の保全

地球上の多様な生物をその生息環境とともに保全し、生物資源の持続的利用を目的として「生物多様性条約」が締結されました。これに基づくわが国の「新・生物多様性国家戦略」では、ペットの遺棄や逸走による移入種による生態系の攪乱を生物多様性の危機のひとつと位置づけています。

ペットショップなどで売られている鳥類は、ほとんどが海外から輸入されたものです。これらが故意または過失で自然のなかに放たれると、交雑、捕食、食物競合による圧迫などにより、日本在来種が大きな影響を受ける場合があります。また、感染症の媒介、農作物の被害など、人の生活に直接影響を与える場合もあります。

いったん国内の環境で繁殖して個体数が増えると、これを捕殺するなどコントロールしていくために膨大な経費がかかることとなります。これらの鳥を飼う場合は、特に終生飼養と逸走させない確実な管理が不可欠です。

6 . 関係法令

(1) 動物の愛護及び管理に関する法律

動物の虐待防止、動物の適正な取り扱い等を通じて生命尊重等の情操かん養に資するとともに、動物による人の生命、身体、財産への侵害を防止することを目的として、飼い主の責務、動物販売業者の責務、動物取扱業の規制、危険な動物の飼育の規制、犬・猫の引取りなどを規定しています。

(2) 家庭動物等の飼養及び管理に関する基準

動物の愛護及び管理に関する法律に基づいて、家庭等で飼育される動物の取り扱いについて具体的な基準が示されています。

(3) 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律

鳥獣の保護を図るための事業を実施するとともに、鳥獣による生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害の防止、猟具の使用に係る危険を予防することを目的としています。

鳥獣の捕獲等の規制、鳥獣の飼養、販売等の規制、鳥獣保護区の指定などを規定しています。

野生鳥獣の捕獲は、原則として都道府県知事の許可がなければできません。

また、傷ついた鳥を保護したり雛を拾ったりした場合も、種類によっては飼育することができませんので、都道府県の担当者の指示に従ってください。

(4) 家畜伝染病予防法

伝染病が発生した場合の届出、患畜の隔離、消毒などを行うことにより、家畜の伝染性疾病の発生、まん延を防止し、畜産の振興を図ることを目的とした法律です。

表1および表2にこの法律で指定している法定伝染病および届出伝染病を示しましたので参照してください。

表1：鳥類の法定伝染病

法定伝染病	鳥の種類
家きんコレラ	鶏、あひる、うずら、七面鳥
高病原性鳥インフルエンザ	
ニューカッスル病	
家きんサルモネラ症 (サルモネラ・プロラム、サルモネラ・ガリナラムによるものに限る)	

表2：鳥類の届出伝染病

届出伝染病	鳥の種類
サルモネラ症(サルモネラ・ダブリン、サルモネラ・エンテリティディス、サルモネラ・ティフィムリウム及びサルモネラ・コレラスイスによるものに限る)	鶏、あひる、七面鳥、うずら
鳥インフルエンザ	鶏、あひる、七面鳥、うずら
鶏痘	鶏、うずら
マレック病	鶏、うずら
伝染性気管支炎	鶏
伝染性喉頭気管炎	鶏
伝染性ファブリキウス嚢病	鶏
鶏白血病	鶏
鶏結核病	鶏、あひる、七面鳥、うずら
鶏マイコプラズマ病	鶏、七面鳥
ロイコチトゾーン病	鶏
あひる肝炎	あひる
あひるウイルス性腸炎	あひる

(5) 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律

昔の伝染病予防法が改正されたもので、感染症の予防とまん延の防止を目的として、新感染症などに迅速に対応することができるよう、医療等に関する措置を定めています。

主な感染症を5つの種類に分けて対策を講じていますが、このなかで四類感染症に定められている疾病には、人と動物との共通感染症が多く含まれています。

(6) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)

野生動植物が、生態系及び自然環境の重要な一部として人類の豊かな生活に欠かすことのできないものであることから、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存を図ることを目的としています。

捕獲及び譲渡の禁止、国際希少野生動植物種の個体登録、生息地等の保護に関する規制などを規定しています。

表3にこの法律で指定されている国際希少野生動植物のうち主な鳥類を示しましたので参照してください。

国際希少野生動植物種は、商用目的で繁殖された個体でも、登録したものでなければ販売、譲渡、陳列はできません。譲渡、売買にあたっては、登録票があることを必ず確認してください。また、販売、頒布目的で陳列するときは、登録票を備えつけないけません。

表3：国際希少野生動植物として指定されている主な鳥類(平成15年7月20日現在)

アカノボウシインコ	アカミコンゴウインコ	フクロウオウム
キボウシインコ	シロビタイムジオウム	コンセイインコ
アカオボウシインコ	フィリピンオウム	ミノバト(キンミノバト)
オウボウシインコ	オオバタン	ミンドロミカドバト
ミカドボウシインコ	アオコンゴウインコ	(ミンドロオビオバト)
サクラボウシインコ	チャムキガシラオハシインコ	マダガスカルメンフクロウ
キエリボウシインコ	アオハシインコ	モリコキンメフクロウ
マツバヤシキボウシインコ	イチジクインコ	オニコノハズク
アマゾン・オロケファラ・加バニア	ヤクシャインコ	ニュージーランドアオバズク
オオキボウシインコ	ハイワインコ	クリスマスアオバズク
アシボソキエリボウシインコ	ヒメフクロウインコ	カギハシハチドリ
オオキボウシモドキインコ	ニョオウインコ	ケツアール
アカソデボウシインコ	アカハラワカバインコ	アオオビカザリドリ
アカボウシインコ	キミインコ	ハジロカザリドリ
カラカネボウシインコ	キジインコ	クロハラシマヤイロチョウ
イロマジリボウシインコ	ヒガシラインコ	コンコンヤイロチョウ
ブドウイロボウシインコ	ヤシオウム	ニシオナガムシクイ
メキシコアカボウシインコ	ヤマヒメコンゴウインコ	ハシナガヒゲムシクイ
アカビタイボウシインコ	アカビタイヒメコンゴウインコ	ハゲチメドリ
スマレコンゴウインコ属全種	ヒスイインコ	ズアカハゲチメドリ
ヒワコンゴウインコ	ディシミリスヒスイインコ	ノーフォークメジロ
アオキコンゴウインコ	ゴクラクインコ	カプトミツスイ
コンゴウインコ	シマホンセイインコ	キバラムクドリモドキ
(アカコンゴウインコ)	アオマエカケインコ	ショウジョウヒワ
ミドリコンゴウインコ	ハシブトインコ属全種	カンムリシロムク

- (7) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約 (CITES)
- 通称ワシントン条約と呼ばれ、絶滅の危機に瀕した野生の動植物を、国際取引を規制することで保護していくことを目的とした条約です。
- 条約では絶滅が危惧される野生動植物の種類を、その度合いに応じて「附属書I・II・III」に区分しています。附属書Iに掲載される種は最も絶滅が危惧されており、商業目的の国際取引が原則的に禁止されています。
- (8) 動物愛護管理関係条例
- このほか、法律に基づいて都道府県で制定している、動物の飼養に関する条例があります。各都道府県によって内容に違いがありますが、危険な動物の飼育の許可制、犬・猫の引取り、犬の逸走防止などが規定されています。
- また、区市町村で条例を制定しているところもあります。内容についてはそれぞれの自治体の担当部署に問い合わせてください。
- * 次の法令等は、環境省のホームページ (<http://www.env.go.jp/>) から法律全文をダウンロードできます。
- (1) 動物の愛護及び管理に関する法律
 - (2) 家庭動物等の飼養及び管理に関する基準
 - (3) 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律
 - (6) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律
- * 次の法令等は、総務省行政管理局の「法令データ提供システム」 (<http://law.e/gov.go.jp/cgi/bin/idxsearch.cgi>) で検索できます。
- (4) 家畜伝染病予防法
 - (5) 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律
- * 次の条約は、トラフィックイーストアジアジャパンのホームページ (<http://www.trafficj.org/>) に概要が掲載されています。
- (7) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約 (CITES)

II . 共通事項

1 . 鳥類の基礎知識

(1) 鳥類とは

鳥類は羽毛に覆われ、飛翔力を持ち、卵を産んで殖える恒温動物です。昆虫やコウモリなども空を飛びますが、翼を使って飛翔するのは鳥類だけです。ダチョウやペンギンなどの飛べない鳥は、走ったり泳いだりする能力に優れ、飛ばなくても生きていけるようになった鳥です。

(2) 分類

鳥類は哺乳類や魚類と同じ脊椎動物のなかで、鳥綱というグループを形成しています。現在地球上には約8,600種の鳥が生息し、27の目、さらに約150の科に分類されています。スズメを分類単位にしたがって分類すると、動物界・脊椎動物門・鳥綱・スズメ目・ハタオリドリ科・スズメ属・スズメということになります。

(3) 進化

鳥類は爬虫類から進化したもので、羽毛は鱗から発達したものです。始祖鳥が見つかったのが約1億5,000万年前のジュラ紀後期で、ジュラ紀から白亜紀にかけて小型の羽毛をもった恐竜から鳥類が進化したと考えられています。"

(4) 形態・生理

鳥類の体は、空を飛びやすい形や造りになっています。羽や骨は丈夫で軽く、飛ぶための強い筋肉を持ち、食物や暮らし方にあった嘴(くちばし)や足をもっています。鳥の目は外見からは小さく見えますが、頭の中に大きな目がかくれていて、たいへん目がよく遠くの獲物や敵を見つけます。体を軽くするため、腸などの消化管は短く、速く消化して糞もすぐに排泄します。

大部分の鳥の羽は年1回繁殖が終わった春から夏にかけて抜けてはえかわります。これを換羽といい「とや」とか「毛がわり」ともいいます。病気ではありませんが、鳥自身の変調期ですので、種類によっては餌や世話の仕方などに工夫が必要です。

鳥の雌雄鑑別は、キジ類のように外見で明らかなグループと、見た目には判りにくいグループがあります。見た目に判りにくい種も、種ごとにわずかな雌雄の差があり、慣れてくると見分けられるようになります。ハト類やカナリアのように繁殖期のディスプレイや鳴き声で雌雄を鑑別できるものもあります。

表4:鳥類参考データ

品 種	全長(図 1)	産卵数 (個)	孵化日数 (日)	巣立日数 (日)	性成熟 (ヵ月)	平均寿命(最 高)
ジュウシマツ	10	5~8	14	21~25	4~6	5
ブンチョウ	14	5~7	14	28	7~8	7(16)
キンカチョウ	10	3~7	13	18	6~10	5
コキンチョウ	12~14	5~6	15	21	6~9	7
カエデチョウ	10	5~7	12	21	6~9	4~5
ハウコウチョウ	10	5~6	12	21	6~9	4~5
ベニスズメ	9	4~5	12	21	6~9	8
ナンヨウセイコウチョウ	11~12	5~6	14	21	6~9	7
ヘキチョウ	11~12	3~7	12	21	6~9	5
キンランチョウ	12~13	3~4	14	15	6~9	7
カナリア	12~21	4~6	14	14~22	6~12	10(24)
キュウカンチョウ	30	2~3	14	20~28	1~2年	8
セキセイインコ	18~23	4~7	17~18	28~30	4~6	7~10(20)
コザクラインコ	16~17	4~6	23	40	12	10~15
キエリボタンインコ	14~15	4~6	23	35~38	6~12	10~15
オカメインコ	32	4~7	22~23	45	6~12	15~20(30)
ナナクサインコ	30	4~7	19	35	12	15~20
タイハクオウム	45	2	28	120~180	3~6年	40
キバタン	45~52	2~3	25~27	60~80	3~6年	30~40(56)
ベニコンゴウインコ	90~95	2~3	26	95~120	3~7年	40
ハト	31~34	2	18	30	10	10~15(35)
ウスユキバト	19~20	2	10	12	6	6~8
ヒメウズラ	12~15	7~8	16	1	3	4~5
キンケイ・ギンケイ	61~115	6~12	22	1~2	12	12
ニワトリ	60	10~365	21	1~2	6~8	10(30)
アヒル	40~71	10~40	28	1~2	6~7	10(19)
コブハクチョウ	125~160	4~8	35~36	120~150	3~5年	20~30
オシドリ	41~51	9~12	28~30	40~45	12	10~15

品種により数値が大きく異なります。

2. 飼育管理

(1) 飼育環境

鳥にとって有効で快適なスペースを用意することが、よい飼育環境をつくりだします。鳥が隠れられて休める安全な場所や、安心して止まれる止まり木、清潔な餌や水と容器、種によっては遊び道具を鳥かごや禽舎に用意するのが理想的です。飼われる鳥にとって、そうした飼育環境と同じ、あるいはそれ以上に大切なのは、飼い主、すなわち実際に世話をしてくれる人という環境です。飼う人が小学生のお子さんか、時間に余裕のあるお年寄りか、初心者か経験者かなど、まず世話をする人にあった鳥を飼うことをお勧めします。

(2) 換気

鳥の健康のために新鮮な空気を入れ替えます。窓や戸を細めに開ければなしにすると隙間を通る流れ風ができ、かえって風邪を引かせる恐れがあります。冬の寒い日などは空気の温まった午前10～11時ごろに、短時間窓を大きく開けて換気をするとういでしょう。屋外の禽舎なら通風のよい場所と風の通らない場所を作り、鳥自身が居場所を選べるようにします。

(3) 採光

鳥の成長や健康のために日光浴も大事です。1日15分間でも日光にあたることで、ビタミンDの形成を促し、成長を促進します。夏の強い日光の直射にあうと日射病にかかることもあり、夏なら朝のうちに日光浴をさせるなど、季節により工夫が必要です。大きな鳥かごや禽舎なら日の当たる場所と当たらない場所を作り、鳥自身が好きな時間に日光浴ができるようにするとよいでしょう。

(4) 温度・湿度

気温が高すぎたり、低すぎたり、風通しが悪く蒸れてしまわないようにすることが大事です。飼い主と同じ空間で飼う場合は、人の快適な気温、湿度で飼えば問題ありません。留守にする時間には、高温あるいは低温にならないよう鳥かごの置き場所などの工夫が必要です。最近ではエアコンで鳥にも快適な気温、湿度をつくりだすことができるようになりました。

(5) 禽舎

鳥をもっとのびのびと飼うことを実現してくれるのが禽舎です。禽舎はふつう金網の日差しの差し込む方向が南向きか東向きに建てます。全体が屋根に覆われた屋内式、半分が屋根に覆われた半露天式、天井全体が金網で屋根のない露天式があります。雨の多い日本では半露天式が鳥の健康のためによいでしょう。禽舎も飼う鳥の種類により、構造や材質が異なります。木を齧(かじ)るインコやオウムの禽舎は太めの金網を使い、骨組みも鉄など金属製が理想です。水鳥の禽舎は池が必要ですし、キジ類だったら砂あびのできる床が必要です。屋外の禽舎の鳥は犬や猫、あるいはイタチなどに襲われることがあります。土台の強度、金網の網目の大きさ、扉の構造など、害獣が侵入しないよう頑丈につくることが肝心です。

(6) 鳥かご

鑑賞用、繁殖目的、鳴き声を楽しむなど、鳥を飼う目的により鳥かごも様々な種類があります。材質もいろいろなものが使われ、竹、木、金属などのほか最近ではプラスチック製のものも作られています。金属製の角型や丸型のかごは鑑賞用に向いています。オウム類は嘴の力が強いので、太い丈夫な金属製のかごで飼います。ウグイスなどの声を楽しむために、日本では昔から竹かごが使われてきました。庭(にわ)箱(こ)は木製の箱状のかごで、繁殖用に適しています。

(7) 掃除

鳥かごや容器は常に清潔にしておくことが、大事です。日頃は汚れが目立つところなどをために掃除し、月1回くらい全体の大掃除をするのがよいでしょう。たとえば、ペアのブンチョウだったら1週間に1～2回、かごの床の新聞紙をとりかえ、月に1～2回天気の良い日を選び、かご、止まり木、餌入れなど全部を水洗いし、日に干して大掃除をします。

(8) 衛生

普段から掃除をまめにし、飼育環境の清潔さを保つことが、鳥を健康に飼うことの第一歩です。鳥かごや餌入れなどに熱湯をかけてから洗って日に干すことで、細菌や寄生虫を駆除できます。薬剤での消毒に比べ、日光や熱湯消毒は鳥にも人にも安全な消毒方法です。ただし、病気や寄生虫の種類や発生状況によっては、薬剤を使った消毒も必要になることがあります。

(9) 飼料

鳥の種類により与える餌の種類や量は決まっています。まき餌鳥に与える穀類、すり餌鳥に与えるすり餌、養鶏用の配合飼料、ハト用配合飼料、猛禽用の肉や魚、それに昆虫、菜、ポレ一粉（カキ殻：着色していないもの）など鳥の種類や状況によりいろいろな餌を使用します。餌は常に毎日新鮮なものが食べられるようにすることが大事です。殻つきのアワやヒエでは殻だけが残っていることがありますから、毎日確認します。自動給餌器などを使うときは、残りの量の確認を怠らず、餌の清潔さを保つことが大事です。

(10) 水

飲水は毎日新しく取り替え、いつでも新鮮な水を飲めるようにしてください。自動給水器を使うときは残りの量の確認を怠らず、容器に水あかなどが出ないようにこまめな管理をしてください。水浴びの好きな鳥では水浴び用の水も用意しますが、狭いかごでは周りを濡らしてしまうので、天気の良い日などに時間を決めて水浴びをさせてもよいでしょう。

3. 購入に当たっての留意事項とチェックポイント

「鳥を購入する」ということは、慎重に決定すべき極めて重要な行為です。特に小鳥は安価であることから、安易に衝動買いしてしまうケースがよく見受けられます。鳥も私たちと同様、地球上に暮らすかけがえのない生き物であることを認識し、適正な環境下で終生飼養することを前提に、鳥の健康と安全を確保する義務と、近隣への迷惑防止など社会的責任を負うことを自覚した上で、鳥の購入は決定すべきです。また、鳥も生き物ですから、数多くの病気にかかります。たとえ購入時に安価であったとしても、疾病の治療には料金が発生し、購入金額以上の費用がかかることも承知しておくべきです。

鳥を購入する際、まずは希望鳥種を決めましょう。飼い主の好き嫌いも重要ですが、飼育環境、例えばアパートの一室で飼うのか、庭付きの一軒家で飼うのか、飼育スペースの大きさ、飼い主の家族構成や年齢、他の飼育動物の種類や数なども、購入する鳥種を決定する重要なファクターになります。一般に鳥類は長寿です。セキセイインコでは10～15年、上手に飼うと20年近く生きますし、大型のオウム類に至っては80年以上も長生きした例があります。そうなると、飼い主の年齢によっては、次の世代に引き継いで飼育することも考えなくてはなりません。そこまではなくても、5年、10年、あるいはそれ以上の長い年月を家族として生活を共にするわけですから、ご家族全員の同意と協力が必要になることはいうまでもありません。また、大型の白色オウム類や鶏のオスは、雄叫びに近い大きな鳴き声を発しますし、水禽類では水浴場や広い運動スペースの確保が必要になります。広い庭付きの一軒家なら飼育は可能でしょうが、狭いアパートの一室では近所迷惑にもなりますので、飼うことができません。現在の飼育動物とのかね合いもまた重要となります。さらに、犬や猫と比較して鳥類では複数飼育をすることが多いですが、鳥種による相性や適正な羽数についても考慮しましょう。購入してしまってからお互いに不幸な結果となる前に、あらかじめ生理・生態をしっかりと調べた上で、鳥種は決定すべきです。次に、購入するペットショップを決めましょう。実際に足を運んでみて、鳥の飼育管理がしっかりされており、鳥に関する知識や経験が豊富な店員さんのいるペットショップなら安心です。鳥との接し方や飼育するに当たっての注意点・疑問点など、親身になって相談にのってくれるペットショップを選びたいものです。最後に、購入する個体を決めましょう。膨らんでじっとして動かなかったり、鼻水が出ていたり、下痢をしているような個体は避けて、元気で活発な健康個体を選びましょう。また、特に大型のオウム・インコ類の場合は、お目当ての鳥との相性をみるために、できればご家族の方と一緒に、少なくとも3回はペットショップへ通って欲しいものです。また、給餌の時間に行き、餌の食べ具合を見ておくのも重要

です。

また、ワシントン条約（CITES）、その他の法律関係のことも念頭に入れ、購入希望鳥種および購入個体が繁殖個体であるか、野生個体であるかも確認してください。野生個体の場合、鳥種によっては法律に触れることもありますし、多くの未知の病原体を持っていることもあります。また、できればCITESに関連する書類（輸出国CITES管理当局発行の輸出許可証や経済産業省の確認申請書など）が入手可能な場合があるので、ペットショップに訊いてみるべきでしょう。これにより、その個体の年齢や性別などが判るとともに、国内での移動、譲渡および疾病時にその書類が必要なこともあります。すり餌鳥などに関しても輸入個体かどうかを確認して購入する必要があります。

さて、新しい鳥を迎えるに当たって、まず健康診断を受けに動物病院に行きましょう。購入直後が無理であれば、少なくとも1週間以内には連れていくようにしましょう。動物病院によっては鳥を診察していない所もあるので、あらかじめ調べておくことが大切です。できれば、鳥類をよく診ている獣医師のいる病院を探しておきましょう。また、家庭内では、先住動物とのかね合いも重要です。購入7～10日間は購入個体が落ち着いて、新しい生活に慣れてくれるように、安静にしてあまり構わず、観察を重視すべきです。特に同一種の鳥類を複数飼育している場合、新しい個体をすぐに同居あるいは同室にしてしまうと、その個体が感染症を持っていた場合、全羽に感染が広がる可能性があります。できれば別室にして、購入個体の様子をよく観察し、衛生面に気をつけた上で、同居あるいは同居させることをお勧めします。最初の1～2週間はできるだけペットショップと同じような飼育管理（餌や生活リズム）を心がけ、特に雛、若鳥の場合には、給餌についてのしっかりとした知識を持って臨むことが必要です。

4．鳥類の病気と健康管理

朝起きたら小鳥が死んでいた...という話はよく聞きます。鳥は「病気を隠す」生き物です。これは自然の生態系の中で一番弱い生き物だからです。犬や猫と比較して、鳥の医学は発達していませんし、検査や治療にも限界があります。ワクチンなども家禽類を除いてありません。だからこそ、「早期発見・早期治療」が必要です。少しでもおかしいと思ったときにすぐに動物病院へ行かないと手遅れになることも少なくありません。そして病気にさせないための「予防医学」が最重要であり、知識を身につけた上で適切な飼育管理が小さければ小さい生き物ほど大切です。

(1) 主な病気とその予防

鳥は哺乳類と比較して明らかな症状を出しません。羽が膨らんでいる、寝る時間が長い、食欲が落ちている、下痢をしている、といった症状が多くの病気に共通してみられます。また、病気のほとんどが栄養障害や不適切な給餌など、飼育管理に起因することが多いようです。特に、3～4週齢前後の若鳥は、親からの免疫力が消失する時期とちょうど一致するためか、多くの疾病にかかりやすいようです。

鳥の羽が膨らんでいて寒そうにしていたり、日中でも長い間、背中に顔を埋めていたら病気ですから、まずは暑がらない程度にまで暖めてください。

多くの鳥種に共通する重要な病気

1) 肥 満

飼鳥全般にみられる病気です。動きが鈍くなり、飛べなくなってしまう個体もいます。肥満は基礎疾患としても重要で、肝臓疾患、痛風、糖尿病など種々の病気を継発します。予防としては、規則正しい生活と栄養バランスを考えた餌にすべきです。猛禽類を除く全ての鳥種には青菜の給餌を忘れてはなりません。

2) 卵 塞

飼鳥全般にみられる病気です。大きな糞をして床にすることが多く、お腹が大きく膨れます。元気、食欲がなくなり、時に嘔吐や痙攣を起こして死亡することもあります。低温と栄養不足が主な原因です。ボレー粉やカトルボンなどカルシウムの給与は欠かさず、生理・生態に合った繁殖回数（小鳥の場合は年に1～2回）にさせることが大切です。過排卵のた

め栄養不足になることが決して少なくありません。

3) 感冒

全ての鳥種で罹患し、若鳥に多発する傾向があります。特にラブバードでは特徴的な症状を出します。一般的にはくしゃみ、咳、流涙、眼結膜の発赤・腫脹、鼻汁の排泄などがみられます。その他、異常呼吸音や呼吸速迫、声の異常といった症状も発現します。慢性化すると完治しにくいいため、早期治療が重要となります。

4) 毛引き(羽つつき)

オウム・インコ類の鳥種すべてが対象となる病気です。鳥自身が自分の羽毛をかじったり、抜いてしまったり、肉を食べてしまうこともあります。原因は様々ですが、慢性疾患や寄生虫感染、ホルモンのアンバランス、栄養障害などに起因することが多く、これらに精神的ストレスが重なっていることもあります。

フィンチ類で重要な病気

1) 皮膚真菌症

トリコフィートンという真菌によって起こります。嘴の届かない頭頸部に丸い黄色の痂皮ができて、非常に痒がります。こまめに水浴や日光浴をさせてあげてください。

2) トリコモナス感染症

フィンチ類、オウム類、ハト、猛禽類に非常に多く発生し、若鳥では死亡率が高い病気です。トリコモナス原虫が原因で、くしゃみ、鼻汁、プチプチ音、口腔の粘りや汚れ、嘔吐、頭頸部の腫脹を起こします。同じ餌入れ・水入れなどから他の個体へうつります。不適切な給餌から起こりやすくなります。

カナリアで重要な病気

1) 肝臓疾患

カナリアは羽毛の色を美しくするために「色上げ剤」を給与することが多いようです。しかし、これを長期間与えつづけると肝臓疾患を起こします。爪や嘴が変形して伸びやすくなり、羽毛は失沢し、粗造となり、脚にはハバキが過剰となり、皮膚には色素が沈着します。「色上げ剤」を使用する時は、換羽期のみ短期間の使用とするべきでしょう。

キュウカンチョウで重要な病気

1) ヘモクロマトーシス

肝臓に鉄分が貯蔵する病気で、初期はくしゃみなどの風邪様の症状がみられますが、悪化すると開口呼吸、呼吸速迫となり、腹水が溜まって死亡します。キュウカンチョウをはじめとする特定の鳥種に発生する病気で、餌の中の過剰な鉄分が原因といわれています。また、遺伝的な要素が関連しているかもしれません。予防としては、ミルウォームなどの虫やフルーツ、野菜を毎日必ず給与し、できれば「低鉄分」を明記してある餌を給与することが望ましいでしょう。

セキセイインコで重要な病気

1) 脚弱

セキセイインコに多く見られます。給与飼料の栄養不足から起こります。特にビタミンの欠乏による「脚(かっ)気(け)」が多く、起立歩行ができなくなります。サシエの中には青菜を摺って入れるなど、必ずビタミン、ミネラルを添加してください。

2) カイセン症

嘴や目の周囲、脚などに粉をふいたような白い痂皮ができます。進行すると嘴が変形してしまいます。トリヒゼンダニが原因で、同居鳥は程度の差はありますが感染していることが多いです。青菜(ビタミンA)不足や免疫力低下が関与しています。

ラブバード(ボタンインコ、コザクラインコなど)で重要な病気

1) 感冒

全ての鳥種で罹患しますが、特にラブバードでは特徴的な症状を出します。くしゃみ、鼻

汁、耳漏、開口呼吸、呼吸速迫といった症状や逆にそうした症状を伴わずに眼の発赤、腫脹、流涙、閉眼のみを示すことも少なくありません。若鳥の場合は死亡率が高い病気でもあります。膨羽しているようであればすぐに保温します。日頃から青菜（ビタミンA）の給与やバランスのとれた食餌が大切です。

オカメインコで重要な病気

1) そ嚢炎

すべての鳥種に罹患しますが、特にオカメインコの若鳥では、原虫（トリコモナス）および細菌（らせん菌）によるそ嚢炎が多くみられます。症状としては、嘔吐や食滞を示します。予防には適切な飼育管理と衛生が重要です。

2) カンジダ症

カンジダ酵母の感染による消化管の病気で、すべての鳥種にみられます。一般に、嘔吐や下痢がみられますが、特にオカメインコでは口腔内の粘りや口角の汚れが顕著に現れます。治療には、抗真菌剤の投与が行われますが、ビタミンの補給や飼育管理の改善も重要です。大型のオウム・インコ類で重要な病気

1) サーコウイルス感染症（PBF）

すべてのオウム・インコ類が対象となる病気です。全身の羽毛が抜けて嘴や爪が長く伸びます。サーコウイルスの感染によって発症しますが、特に大型のオウム類では発症すると治らない病気です。健康診断の際、このウイルス遺伝子が検出された場合、発症する前にすぐに治療を行うと、発症が防げることがあります。脂粉や糞便によって他の鳥へ感染しますので、この病気の鳥が見つかったら早期の隔離が必要となります。

ハトで重要な病気

1) ニューカッスル病（ND）

トリパラミクソウイルス1型（鶏のNDウイルスと同一抗原性を有する）の感染によって起こる重要な疾病で、下痢と神経症状が主体となります。ハトの場合は、腸管の出血や呼吸器症状に乏しく、下痢と神経症状が主体となります。本病の予防にはNDのワクチン投与が効果的です。

2) 封入体肝炎（IBH）

肝臓に核内封入体を形成することを特徴とする感染症で、トリアデノウイルス（AAV）によるものとハトヘルペスウイルスによるものがあります。AAVによるIBHは下痢、削瘦、嘔吐、急死などの症状を示します。効果的な予防法や治療法はなく、隔離と淘汰によって発生の拡散を防止します。

3) サルモネラ症

サルモネラ・チフィウムムの感染によるものが多く、下痢、削瘦、翼や脚の麻痺、産卵障害などを示して死亡します。保菌ハトの摘発・淘汰による清浄化に努めることが唯一の予防法です。治療には感受性のある抗生物質が用いられます。

4) その他

真菌症やトリコモナス感染症が散発的に発生します。

ニワトリで重要な病気

1) ニューカッスル病（ND）

NDウイルスの感染によって起こる伝染性の強い病気です。強毒ウイルスが流行すると高致死率による甚大な被害をもたらすため、法定伝染病に指定されている重要な病気です。ワクチンが広く普及しており、発生数は極めて少ないのですが、未だワクチンの不使用や不適切なワクチンの使用による散発的な発生が問題となっています。

2) 鳥インフルエンザ（AI）

A型インフルエンザウイルスの感染によって起こる局所または全身性の病気で、法定伝染病または届出伝染病に指定されています。不顕性感染するものから急性経過で死亡する高病

原性鳥インフルエンザ(法定伝染病)まで病態は様々です。予防にはワクチンが有効ですが、我が国では実用化されていません。

3) マレック病 (MD)

ヘルペスウイルスに属するMDウイルスの経気道感染によって起こるTリンパ球性の白血病で、届出伝染病に指定されています。ウイルスは皮膚のフケによって空気伝播し、初生雛が最も高い感受性を示します。予防には生ワクチンが使われていますが、ワクチンはウイルス感染までは防止しませんので、通常の衛生管理が重要です。

4) 伝染性ファブリキウス嚢病 (IBD)

IBDウイルスの感染によって起こる急性伝染病で、届出伝染病に指定されています。この病気はリンパ組織の壊死と炎症反応を特徴とするため、著しい免疫抑制を引き起こします。したがって、細菌などの二次感染による症状の増悪が問題となります。予防は適切な時期でのワクチン接種および消毒による汚染の低減が重要となります。

5) マイコプラズマ病

鶏のマイコプラズマ病は2種類のマイコプラズマによる慢性呼吸器病で、まれに関節炎も見られます。通常は不顕性感染ですが、飼育環境の悪化や他の微生物の複合感染により発症します。予防には、MG(マイコプラズマ・ガリセプチカム)ワクチンの生または不活化ワクチンが使われています。

6) サルモネラ症

サルモネラ菌感染による人と動物の共通感染症であり、特定の血清型では法定伝染病または届出伝染病に指定されています。本来は幼雛の敗血症性疾患で、死亡の多くは2週齢頃までにみられ、一般に保菌鶏は無症状で経過することが多いようです。また、食中毒の原因菌としても重要です。予防法としては、近年、ワクチンおよび競合排除法が実用化されてきています。

7) コクシジウム症

アイメリア属の原虫感染によって起こる病気で、下痢、食欲不振・廃絶、体重減少、貧血、産卵低下などの症状を呈し、血便がみられるものでは高死亡率を示します。予防および治療には、サルファ剤や抗原虫剤の投与などが行われます。近年では、予防用ワクチンも実用化されてきています。

8) その他

上記の病気のほかにも、伝染性気管支炎 (IB)、伝染性喉頭気管炎 (ILT)、鶏痘 (FP) などのウイルス病、家きんコレラ、伝染性コリーザ、大腸菌症などの細菌病、アスペルギルス症などの真菌症、ロイコチトゾーン症、ヒストモナス症などの原虫病および鶏回虫、鶏毛体虫、鶏盲腸虫、気管開嘴虫、鶏糞線虫などの内部寄生虫病があります。また、栄養・代謝障害で起こる痛風、脂肪肝、骨障害などもみられます。

ウズラで重要な病気

1) ニューカッスル病 (ND)

NDウイルスの感染によって起こり、元気消失、緑便、産卵低下、無斑卵の産出を主徴とし、脚麻痺などの神経症状を示すものもみられます。予防には生ワクチンが用いられます。

2) マレック病 (MD)

MDウイルスの感染によって起こり、6～7ヵ月齢以降に多発します。神経症状はみられず、食欲低下、元気消失および消瘦を示します。予防には、14～35日齢で生ワクチンを接種することが有効です。

3) サルモネラ症

サルモネラ・チフィウムムの感染によるものが多く、水様便や白色下痢便を排泄して死亡します。発生予防や治療には、感受性を示す抗生物質が用いられます。養(よう)鶏(じゅん)場(じょう)における浄化対策が重要です。

4) 潰瘍性腸炎(ウズラ病)

クロストリジウム・コリナムの感染によって起こり、発病したウズラは元気・食欲がなくなり、羽毛を逆立て、目を閉じて佇立し、水様の下痢をします。腸では潰瘍が形成され、しばしば穿孔性の腹膜炎を起こします。治療には感受性を示す抗生物質の投与が有効です。

5) その他

アスペルギルス症による肺炎、急性型または慢性型のコクシジウム症、産卵低下を起こす条虫症が発生します。

アヒル、ガチョウで重要な病気

1) アヒルウイルス性肝炎

アヒル肝炎ウイルスの感染によって起こり、伝染性の高いアヒルの感染症として知られています。5週齢未満の雛で発生がみられ、主に肝臓が冒される致死性の病気です。外国では予防にワクチンが用いられていますが、国内ではワクチンは使われていません。

2) アヒルウイルス性腸炎

アヒル腸炎ウイルスによるアヒルとガチョウの急性感染症で、アヒルペストと呼ばれています。症状としては、食欲・元気の消失、喉の渴き、運動失調、羽毛の逆立ち、鼻汁、水様性下痢がみられ、若齢雛では高い致死率を示します。

3) ガチョウパルボウイルス感染症

ガチョウパルボウイルスによるガチョウの雛の急性感染症で、アヒルにはみられません。2週齢以下の感染雛では、時に食欲廃絶や虚脱がみられますが、ほとんどが突然死します(死亡率は70~100%)。我が国ではワクチンは実用化されていませんので、本症の予防としては雛を4~5週齢まで厳密に隔離飼育することが大切です。

4) モラクセラ感染症

モラクセラ・アナチペスチファーの感染によって主としてアヒルの雛に発生する敗血症性疾患です。症状としては、元気消失、流涙、鼻汁、咳、くしゃみ、緑色下痢、頭頸部の振戦、昏睡がみられ、気嚢炎、心膜炎、肝被膜炎などが特徴的な病変です。予防には不活化ワクチンが有効ですが、我が国では実用化されていません。治療には抗生物質およびサルファ剤が用いられています。

猛禽類で重要な病気

1) アスペルギルス症

一般的には呼吸器に感染する真菌で、死に至ることもある病気です。このカビの胞子は至る所に存在しており、これを吸入することによって感染しますが、ストレスなどにより免疫力が低下している動物が発症します。呼吸困難、声の変化、不活発などの症状がみられます。予防には、飼育施設を清潔に保つ、温度や湿度を適正に保つなどの快適な環境整備が必要です。

2) 趾(し)瘤(りゅう)症(しょう)

猛禽のほか、水鳥にも多い病気です。足の裏が変形したり、炎症を起こして腫れたり化膿したりします。時には骨にまで炎症が及び、死に至ることもあります。予防としては、ビタミンの補給や適正なサイズの止まり木に取り替えるなど、適切な飼育管理が重要です。

3) その他

トリコモナスなどの原虫や線虫、条虫、吸虫などの内部寄生虫が多くみられます。その他、ヘルペスウイルスやポックスウイルスなどによるウイルス病、パストレラやマイコバクテリウムなどの細菌病もみられます。輸入鳥が多いため、日本にはいない寄生虫も問題となります。

ワクチンについて

感染症の予防のために、鶏用のワクチンは野外で広く応用されています。ワクチンのプログラムは個々の飼育場所での汚染状況、衛生環境、立地条件、周囲の流行状況などによって異なる

りますので、それぞれに適したプログラムを組み立てる必要があります。各種疾病の予防に用いられる鶏用ワクチンを、表5に示しましたのでご参照下さい。

表5: ワクチンで予防できる鶏疾病

病原体	疾病名	ワクチンの種類
ウイルス	ニューカッスル病(ND)	生・不活化
	鶏伝染性気管支炎(IB)	生・不活化
	鶏伝染性喉頭気管炎(ILT)	生
	鶏脳脊髄炎(AE)	生
	マレック病(MD)	生
	伝染性ファブリキウス嚢病(IBD)	生・不活化
	トリレオウイルス感染症(AR)	生・不活化
	鶏痘(FP)	生
	産卵低下症候群・1976(EDS・76)	不活化
	鶏貧血ウイルス感染症(CA)	生
	頭部腫脹症候群(TRT)	生・不活化
マイコプラズマ	マイコプラズマ病(MG)	生・不活化
細菌	鶏伝染性コリーザ(IC)	不活化
	大腸菌症	不活化
	サルモネラ症(SE)	不活化
原虫	コクシジウム症	生
	ロイコチトゾーン症	不活化

(2) 衛生

哺乳類と同様に鳥かごや餌入れ・水入れ等の清掃を励行します。一般に、消毒薬は哺乳類で用いるものと同様です(哺乳類の冊子を参照)。鳥類は気嚢を有しているため、「吸入刺激」には非常に敏感です。できれば、刺激の少ない薬剤を選択したほうがよいでしょう。鳥かごは金属性のものが熱湯消毒に対して耐久性も高く、有用だと思われます。キュウカンチョウ、すり餌鳥に関しては、傷みやすい餌が主食となるので、季節によっては1日に数回取り替える必要があります。また、穀類主体の鳥種でも、古い餌へ新しい餌の追加は不衛生となりますので避けましょう。

(3) 栄養

各鳥種により、栄養の必要要求量は異なります。一般に哺乳類と比較すると、鳥類はビタミンA欠乏やカルシウム不足による代謝障害(痛風、卵塞など)が多いです。ちなみに、鳥類は哺乳類と比較してカルシウムの要求量は5倍ともいわれています。また、室内飼育によるため日光不足やビタミンD₃不足も多くみられます。フィンチ、カナリア、オウム・インコ類、キュウカンチョウに関しては、近年、「総合栄養食」としてのペレットが数多く販売されているので利用してみるのもよいでしょう。また、それぞれのライフスタイルに伴って変化する栄養要求に合わせたバランスのとれた食餌が必要です。成長期、換羽期、繁殖期では、通常の2倍の蛋白量が必要とされ、その他、気候、年齢、運動量なども考慮する必要があります。哺乳類と比較して、1日中飽食(餌の入れ放し)にさせることが多いので、バランスのとれた食餌(できるだけ多くの種類の餌)をムラなく食べさせることが大切です。フィンチ、カナリア、オウ

ム・インコ類、ハト、キジ目に関しては1～2日で食べ切る量にして、餌の追加や総入れ替えは栄養のアンバランスを引き起こしますので避けるべきです。但し、この場合特に、身体の小さい鳥は体力がないので、いつも餌があることは必ず確認してください。特定の栄養素の過剰あるいは欠乏は、多くの疾病を引き起こす要因となり、このことによって死に至ることも決して少なくありません。猛禽類、キュウカンチョウ、すり餌鳥を除くほとんどの鳥種では、穀類を主食とし、必ずカルシウムの補給としてボレー粉やカトルボーン、ビタミンの補給として青菜（大型のオウム・インコ類では果物も可）の給与を行いましょ。キュウカンチョウは低鉄分の餌を主食とし、毎日数種以上の果物や昆虫も与えましょ。すり餌鳥には、各鳥種にあった配合のすり餌に青菜を摺って与えましょ。また、鳥種によっては、昆虫やフルーツの給与も必要です。猛禽類はできるだけマウス、ラット、ヒヨコなどの給餌を心がけ、さらにカルシウム剤やビタミン剤の添加も必要です。

(4) 事故防止

小鳥たちは、繁殖を必要とした時のみに巣を入れましょ。1年中巣を入れておくと、不衛生になったり、ホルモンバランスが悪くなったりします。また、特にフィンチやカナリアは爪が伸びすぎてつぼ巣に指や爪を引っ掛ける事故も多く見られます。小型鳥からキュウカンチョウくらいの大きさの鳥では羽を切らないようにしましょ。羽が切られていると、危険が迫った時にうまく逃げられません。特に、手乗り鳥として室内に出している時などに、「踏んだ、挟んだ」という事故が後を絶ちません。また、室内に放鳥する時には必ず窓が閉まっていること、台所等に危ないものを置いていないことを確認してください。外へ逃げてしまったり、油の入った天ぷらなべに落ちてしまったりすることがあります。万一、外へ逃げてしまった時にも、羽が切られているとうまく飛んでいけずに、猫やカラスに襲われてしまう例があります。オウム・インコ類では鳥自身が扉を開けて逃げることがあるので洗濯バサミなどで逃亡を防ぐ工夫も必要です。特に大型オウム・インコ類では、鳥かごを食い破ってしまうこともあるので、しっかりとした大型のステンレス製の鳥かご（亜鉛メッキなどの塗装を施していないもの）を選び、扉にはナスカンを使用します。しかし、ナスカンでも開ける個体がいましょので、南京錠が必要な場合もあります。

(5) 人への被害

大型のオウム・インコ類は家族のヒトに優先順位をつけて、自分より弱いものに対して威嚇したり攻撃したりすることがあります。必要に応じて羽を切るなどして行動制限を行いましょ。また、いつでもヒトの目線より低い位置で飼育することが大切です。子供が不用意に手を出すと大きな事故につながる恐れがありますので、近づく時には優しく声を掛け、鳥の反応を見ながら接するように心がけましょ。

5 . 人と動物の共通感染症

(1) 人と動物の共通感染症とは

人と動物との共通の病気、動物から移る病気を人畜共通感染症、動物由来感染症などといい、世界には200種類ほどの病気があるといわれています。このうち鳥から感染するといわれているものは表6のとおりです。ほかにも海外には日本ではまだ発生がない病気が多くありますから、新しい個体を導入する場合や、輸入して間もないものには注意を払う必要があります。

動物を飼う人が増えたことと飼育環境の変化などにより、日本でも人と動物の共通感染症の発生例が増えています。しかし、これらの病気を知り、適切な管理と予防をすれば必要以上に恐れることはありません。人と動物の共通感染症についての知識を深めて、動物との生活を健康で楽しいものにしたいものです。

(2) 飼育環境の管理

鳥かごやその周辺の掃除をこまめに行って、いつも清潔にしておきましょ。鳥かご、餌入

れなどの飼育器具は、定期的に日光や消毒薬で消毒するのが理想的です。

餌や水は常に新鮮なものを与えるようにしてください。

室内で飼育している場合は、鳥かごだけでなく室内の清掃と、換気を十分に行ってください。

(3) 動物の健康管理

動物は人と動物の共通感染症にかかっているにもかかわらず、はっきりとした症状を示さないことがあります。早期発見のために、飼っている動物に普段と違った様子がないかなどを常にチェックしておきましょう。

特に雛や飼いだけの鳥は念入りに観察し、異常を見つけたときは早めに獣医師に相談しましょう。

(4) 動物に接するときの注意

口移しで餌を与えるなど、濃厚な接触は避けましょう。鳥や鳥かごを台所や食卓に近づけることもやめてください。ある程度のけじめを持って接することが大切です。

鳥にさわるとき、糞の始末などの世話をする前後には、必ず石けんで手を洗いましょう。また、多数の鳥を収容している飼育室や、禽舎の中などで作業をする場合は、作業服に着替え、マスク、防護ゴーグルなどを着けることも必要です。作業後の手洗いとうがいを習慣にしてください。

自分の体の具合が悪いときは、なるべく動物を取り扱わないようにしましょう。

また、病院などで診療を受ける際には、鳥を飼っていることを医師に伝えてください。

(5) 主な人と動物の共通感染症（四類感染症）

オウム病

比較的多く発生している病気です。

病鳥や保菌鳥の糞中のクラミジアを吸い込むことで感染します。また、口移しでえさを与えたり、かまれたりして感染する場合があります。

発病した鳥は元気がなく、さえずりもなくなり、目を閉じて羽を逆立ててふくらんでいます。また、下痢が見られます（お尻がよごれる）。雛や若鳥で症状が重く、死亡することが多いのですが、成鳥では無症状のことがあります。

人が感染すると高熱、頑固な咳など、風邪に似た症状がみられ、重症の場合は肺炎をおこします。

買ってきた小鳥からオウム病が感染し、飼い主が死亡したとして、ペットショップが訴えられた事例があります。

鳥インフルエンザ

鳥インフルエンザはウイルスの感染による家禽類を含む鳥類の疾病で、低死亡率で感染すると呼吸器症状、下痢、産卵の低下をもたらす低病原性（弱毒型）タイプと、「家禽ペスト」と呼ばれ、沈鬱状態、神経症状を示し、ほとんどが死に至る高病原性（強毒型）タイプがあります。

鳥インフルエンザが人に感染した場合、重症例になることが多いといわれています。

ウエストナイル熱

ウイルスによる鳥と人に共通の感染症で、主に蚊を介して人に感染し、発熱や脳炎をおこします。我が国ではまだ感染例はありませんが、ヨーロッパやアメリカなどでは1990年代中頃から発生しています。

鳥類では普通は症状を示さず、鳩、鶏、カラスなどでは脳炎、死亡、または長期間のウイルスの持続感染がおけるといわれています。

人では感染例の約80%は無症状で、発症した場合でも多くは発熱、頭痛などの風邪に似た症状を示し1週間程度で回復します。麻痺、痙攣などの髄膜炎・脳炎症状をおこす重症者は感染者の約1%で、高齢者に多いようです。

表6：鳥類に関係する主な人と動物の共通感染症

病名	病原体	主な感染経路	動物の主な症状	人の主な症状	その他
オウム病	クラミジア	吸入(糞便、だ液)	下痢、元気消失。 ヒナや若鳥で重症、成鳥では無症状が多い。	インフルエンザ様症状 発熱、咳、倦怠感、筋肉痛、頭痛、関節痛 重症例では呼吸困難、意識障害。	第4類感染症
ニューカッスル病	ウィルス	飛沫への接触	食欲廃絶、元気消失、濃緑色下痢、呼吸器および神経症状。	結膜炎、インフルエンザ様症状、耳下腺炎。	
鳥インフルエンザ (高病原性鳥インフルエンザ)	ウィルス	吸入(咳など) 経口(手指を介して) 不明の点が多い	沈うつ、とさか・顔面の腫れ、呼吸器症状、下痢、食欲減退。	急な発熱、倦怠感、頭痛、関節痛、のどの痛み、咳など。 高齢者は肺炎に移行することがある。	第4類感染症
サルモネラ症	細菌	経口(飲食物を介し)	無症状が多い。	発熱、下痢、嘔吐等の急性胃腸	食中毒原因
非定型抗酸菌症	細菌	経口 不明の点が多い	皮膚の肉芽腫様病変、体重減少、肝腫大。	免疫が低下していると肺炎症状、時に皮膚病変。	
クリプトコッカス症	真菌	吸入(糞便)	無症状。	免疫が低下していると症状が出ることがある。発熱(軽度)、咳、胸痛、頭痛、昏睡、記憶障害(クリプトコッカス髄膜炎)。	
カンピロバクター	細菌	経口(飲食物を介し)	無症状が多い。	発熱、粘血便を伴う腸炎。	食中毒原因
ウエストナイル熱	ウィルス	蚊の媒介	通常は症状を示さない。 カラス、カケス、サギ類で感受性高。小型鳥類は感受性低。	発熱、頭痛、筋肉痛、時に消化器症状、倦怠感。	第4類感染症
<p>世界にはこのほかにも、鳥類が関係するといわれている人と動物との共通感染症として、Q熱、デング熱、ライム病、西部ウマ脳炎、野兔病、クリミアコンゴ出血熱、ヒストプラズマ症、ムレーバレー脳炎、シンドビス脳炎などがあります。</p>					

III. 種類ごとの個別事項

1. フィンチ

(1) 分類、品種

フィンチとは、スズメ目の60科中のホオジロ科、アトリ科、カエデチョウ科、ハタオリドリ科の4科の鳥を表す総称です。鳥類は同じ科に属する仲間であっても、種によって色々なものを餌とし、ホオジロ科の鳥の中には飼い鳥としての分類上、食性の違いから通常は軟食鳥として扱われるフウキンチョウ類、ミツドリ類も含まれます。したがって飼い鳥におけるフィンチの範囲は食性による違いも考慮して「前記の4科の内、粒餌（播餌）を主食として飼育できるスズメ型の鳥」ということになります。そのうちの約50種程度が一般的な飼い鳥として知られ販売されています。ジュウシマツ・ブンチョウなどは飼育下で歴代繁殖を繰り返され飼い鳥化の進んだ種類として、基本さえ正しく守れば初心者でも飼い易い入門鳥として人気がありますが、今でも野生のものを捕獲して販売、飼育されている種類も多くあります。なお、アトリ科のカナリアはフィンチの範囲に含まれる鳥ですが、飼育の歴史が長く、多くの品種もあることから通常、フィンチとは分けて個別に取り扱います。

(2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

施設、環境

飼育には鳥かごや庭箱を使う方法と禽舎と呼ばれる大型の小鳥小屋を利用する方法がありますが、鑑賞目的で飼育するには金属製の鳥かごを用います。鳥かごの大きさは小型フィンチのつがいでは35（間口）×35（奥行）×40（高さ）cm（以下同じ）、大型種のつがいでは45×45×50cmを標準に、少なくとも羽を広げて止まり木から止まり木へと飛び移ることができる空間が必要です。庭箱は前面を除く面が木製で小鳥を落ち着かせることができるので、繁殖の時や輸入されたばかりで飼育される環境になじまないとき、神経質な鳥を飼育するのにむいています。鳥かごや庭箱は人の目と同じくらいの高さで安定のよい場所におきましょう。

禽舎飼育の場合は植木や草などを利用して自然に近い環境を再現して飼育を楽しめます。飼育の歴史が長く、飼い鳥化の進んだ一部の種類を除くフィンチ類は鳥かごでの飼育は難しく、ましてや繁殖を試みる場合は禽舎飼育でなければ困難です。但し1×2×1m程度の広いスペースが確保されなければなりません。

器具、機材

止まり木は、鳥が生活のほとんどの時間を過ごす重要な場所です。木製のものが推奨され、鳥が止まった状態で爪の先端が止まり木に触れる程度が標準的な太さです。設置は鳥かごの奥と手前に段差をつけて鳥の尾羽が鳥かごや餌入れに当たらないように十分な間隔を取って取り付けます。止まり木を交差させて設置すると必要以上に糞で汚れるので、平行に取り付けるのが一般的です。自然木を利用することもよいことです。熱湯消毒をした後、よく乾燥させて使用してください。

餌入れ、水入れは鳥かごに付属の物でかまいません。副餌用にかごにかけられる小型の容器と菜さしを別に用意します。フィンチの多くは、水浴びを好みます。飲み水とは別に水浴び用の容器が必要です。陶器製の小判型の水入れが安定性に優れ、洗浄も容易なのでよく利用されます。跳ね水防止には専用のカバーを利用するのも便利です。

巣は通常、ツボ巣と呼ばれるワラ製の物や木製巣箱などで、その鳥の習性や体の大きさに合った巣を選びます。カエデチョウ科の約半数は夜間巣に入って寝る習性をもちますが、それ以外の大部分のフィンチは、繁殖以外の目的に巣を必要としません。雑菌や害虫の発生のほか、ホルモンバランスの異常の原因にもなるので必要なとき以外は取り付けないようにします。なお、繁殖用の巣は、雛が育った状態を想定して大きめの物を設置しましょう。巣材としてワラ、乾草、シュロ、コケなども与えます。禽舎では十分に巣材を与えれば自分で営

巣する鳥が多くいます。

(3) 飼い方のポイントと注意点

飼料

フィンチ類の飼料も、他の動物と同じく栄養的に蛋白質、炭水化物、脂質、ビタミン、ミネラルなどのバランスのよい餌が基本です。また、鳥種、季節的要因、繁殖期、換羽期、成長段階などを考慮して主餌に混合する穀物の種類や割合の工夫が必要です。フィンチ用として一般に市販されているのは、ヒエ・アワ・キビ・カナリアシードの4種の穀物を混合したもの（以下4種混合）です。よく比率は順に6：2：1：1がよいといわれますが、ヒエが高価なこととカナリアシードを好む鳥が多いため、実際にはこの割合で販売されている餌は少ないようです。特にキビの類似穀物を増量している特売用の餌には注意してください。大粒で見た目に艶があり、きれいな餌は要注意です。無意味な着色をしている商品などは論外です。このほかにナタネ、エゴマ、ニガーシードなどの脂肪餌、玄米や未熟米、エンバク（オートミール）などを与えることもあります。冬季や育雛期間、換羽後期には高栄養を必要としますので脂肪餌や動物性の餌を少量加えます。ムキ餌は雑菌やカビが付きやすく、栄養分も損なわれやすいので、特別な事情のある場合を除いて殻付のものが推奨されます。またフィンチ類の嘴は穀物の殻を剥いて採食する形状に進化しており、鳥の習性上、ストレスの解消のためにも殻付の穀物が適度な飼料形状といえます。主餌の他に補助飼料としてポレー粉や青菜、ビタミンやミネラルなどのサプリメントを与えます。ポレー粉はグリットとして筋胃内で小鳥が食べた餌を細かくすりつぶす働きをするとともに、カルシウムの供給源になります。青菜はビタミンの供給源として小松菜、キャベツ、アブラナなどを与えます。小鳥専用のビタミン剤が販売されていますので利用するのもよいでしょう。さらに近頃では鳥類の栄養学的研究が進み、微量元素（ミネラル）などの栄養素の重要性から、各種サプリメントが給餌されるようになってきました。また、最近では各種フィンチ、カナリア用のペレットフードが市販されるようになりました。ブンチョウやカナリア等飼い鳥化が進んだ種類の場合、飼料の選択肢の一つとして利用してみるのもよいかもしれません。繁殖期用の特殊飼料として、アワ玉、卵黄、昆虫などが利用されます。これらの飼料は、動物性蛋白質の供給を目的に与えますが、発情期や育雛、健康を害した時などに限って給餌する飼料であり、常に与えることは動物性蛋白質の過剰摂取を招き健康を害することがあるので注意が必要です。なお、市販のアワ玉は保存上の問題などから大半の商品は卵の割合が少なく、発情促進目的に使用する場合には、ムキアワ180～360ccにつき卵黄1個の割合で自作したほうが効果を望めます。飲み水は常に新鮮なものを与えます。フィンチ類の鳥は水浴びを好む種類が多いので、水を汚しがちです。少なくとも1日に2回は取り替えるようにします。

自然は鳥たちの食べ物の宝庫です。季節の草木の若葉や種子、虫の幼虫、発芽を開始した穀物類など鳥が必要とするときに必要なものを自然は準備しています。その季節に何を与えたらよいかを考えると参考にしてください。

日常管理

フィンチやインコ類の1日の生活は日の出とともに始まり、もっとも活発に活動するのは早朝の時間帯です。したがって朝できるだけ早い時間に水を交換し、主餌や副餌、その他の点検、補給を済ませます。このときに小鳥の状態を観察する習慣を身に付けておくようにし、餌や水の摂取程度、動作、便の状態などこまめにチェックします。普段と何か違うような気がした時は、少し様子を見てみようなどと考えずに、早めに獣医師の診察を受けるようにしましょう。フィンチ類など弱い動物は自分の具合の悪さをなるべく隠そうとします。具体的な症状が見られたときには既に手遅れになっていることが多いのです。

かごの掃除は汚れの状態によって行います。あまり頻度が高くなると鳥が落ち着けなくなってしまいます。特に営巣期間中は最小限にとどめます。日の入りとともに鳥の1日は終了し、寝につきます。このサイクルは非常に大切で、不自然な人工灯の下での飼育、特に1年

を通した日照時間のリズムを無視した飼育はホルモンに影響を与え、その結果、健康に影響を及ぼします。手乗りの鳥であっても触れ合う時間は日中に限り、夕方暗くなれば静かに寝かせてやる習慣をつけましょう。鳥かごの設置場所についてもこのことをよく考えて、居間や台所のようにいつまでも人のいる場所のそばには置かないようにします。店頭においても同様で、せめて小鳥の生体を展示している部分だけでも、日没後は消灯し、静かな環境においてやるのが望まれます。1日と1年の日照サイクルを適正に守ってやれば、小鳥は比較的丈夫な生き物です。

季節ごとの管理

1) 春

もっとも気候のよい時期ではありますが、昼夜の気温差が激しい日もあり、輸入後間もない鳥や若鳥では温度変化が大きくなりすぎないように注意が必要です。繁殖をはじめるところには、ツボ巢や巣箱を取り付け、アワ玉などの発情飼料を準備します。梅雨のころには飼料のカビや腐敗、ワクモなどの害虫の発生などに注意が必要で、器具類の消毒を適時行います。

2) 夏

羽毛が抜け替わる(換羽)季節に入ります。抜け始めの頃はそっとしておき、休養をとらせます。新しく生えはじめる頃から十分なたんぱく質やビタミン・カルシウムの補給が必要です。繁殖は原則中止し、衛生上のことも考慮して巣は取り外します。高温多湿の日が続く、餌にカビや虫が発生し易いので、日光に当てよく乾燥させて与えるようにします。また真夏の直射日光の下での長時間の日光浴は危険です。室内でも密閉されていると思わぬ高温になることがあるので注意します。

3) 秋

小鳥にとって一番安定した季節といえます。再度繁殖活動に入る種もあり、準備に取り掛かります。この時期は冬越しのための体力作りの季節でもあります。適当な日光浴と運動、ビタミン類の補給が必要です。晩秋になると1日の昼夜の気温差が大きくなるので注意します。初めて冬を迎える若鳥や温暖な地方原産の種には保温の準備をはじめます。

4) 冬

飼い鳥化の進んだ種類では通常の室内飼育で越冬は十分可能です。熱帯地方原産の種、体力の乏しい小型品種、老鳥などには保温を行います。一部分を暖めるのではなく、室内、少なくとも鳥かご全体が暖まるように、エアコン、ヒヨコ電球による保温が効果的で、石油やガスストーブ、コタツの利用はガス中毒や酸素の欠乏、火災発生などの危険を伴うので避けたほうが賢明です。なお、乾燥が強い季節でもありますので適度な加湿も重要です。

巣引き(繁殖)

飼い鳥を繁殖させることを巣引きと呼びます。フィンチの仲間では人の手元で繁殖できるように飼い鳥化されているのはカエデチョウ科の一部の鳥に限られ、それ以外は禽舎での自然繁殖に頼らざるを得ないものがほとんどです。フィンチの代表としてジュウシマツの繁殖を取り上げてみます。ジュウシマツは夏の換羽期を除いて、条件を揃えればいつでも巣引きすることができます。繁殖の基本は、相性がよく年齢の近いオス・メスのつがいの選択から始まります。つがいが決まればツボ巢の入り口をやや上向きに付け、発情を促すためのアワ玉と、産卵に供えてビタミンやカルシウムなどを十分に与えます。発情餌を与え始めて2週間くらいで効果が観察でき、オスはメスに向かって胸を張り(さえず)ります。この頃に巣材になる柔らかいワラやシュロを与えるとつがいで巣材を巣に運び込み営巣します。鳥かごの移動や掃除は、巣引きの期間中は原則的に避けます。その後、メスが巣にこもるようになると産卵が始まります。1日1個、1週間くらいかけて平均5、6個産卵します。抱卵は2、3個産卵した時点から始まります。メスが朝夕の食餌以外にほとんど巣から出なくなったら、オスの再発情(追いざかり)を防ぐため、アワ玉の給餌は中止します。抱卵期間が終わる1、

2日前から育雛用の餌として再びアワ玉を与えます。孵化後4、5日でウブ毛がはえ始めるとオスも育雛に参加し、雛に餌をつがいで運ぶようになります。順調に生育した雛は21～25日で巣立ちし約3～4ヵ月のち換羽して4～6ヵ月を経て成鳥になります。また、冬季の巣引きは卵詰りや低温による雛の死亡などのリスクが大きいため避けるようにします。コキンチョウなど北半球では冬季に繁殖期を迎える鳥を巣引きする時や、そのためのジュウシマツ仮母（後述）には保温が必要です。

ジュウシマツによる仮母

ジュウシマツの子育て上手を利用して抱卵、育雛の下手な種類の鳥の卵を本来の親である種鳥に代わってジュウシマツに育てさせる方法です。産卵期を揃えるためと種鳥には毎日1卵ずつ産卵して1週間ほど休産した後にまた産卵を繰り返すサイクルをもつものが多いことに対応するため、1つがいの種鳥に対して5つがいくらいのジュウシマツを用意すると効率的な巣引きができます。方法は通常のジュウシマツの巣引きと同様にして、ジュウシマツの卵を種鳥の卵と取り替えるだけです。ただし、ジュウシマツの雛と似かよった姿勢で餌を求める種類であることと食性がジュウシマツと同じであることが必要条件です。

(4) 代表的なフィンチ

ジュウシマツ（十姉妹）

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属しますがジュウシマツは野生には存在しない鳥で、コシジロキンバラや近似種を交配して作り出された愛玩鳥です。野生の生活を知らないため鳥かごの中でもよく落ち着いていて、初めて鳥を飼う人にとって入門鳥として飼育が容易なフィンチの代表です。比較的地味な色合いです。黒・茶・白の3色を基本に様々な模様があります。また、羽毛の一部が変化した芸物と呼ばれる品種、ヨーロッパで改良されたヨーロッパジュウシマツなどがあります。

2) 飼い方のポイントと注意点

雄は羽を膨らませて胸を張り（さえず）ります。雌は地鳴きと呼ばれる短い「ジュリジュリ」という鳴き声だけです。この鳴き方の違いによって雌雄の判別ができますが、成熟前の若鳥ではほとんど判別できません。主餌は4種混合で、ヒエ、アワを好みます。巣は中程度の大きさのツボ巣を使用し、繁殖時以外は不要です。子育てが非常にうまく他のフィンチの仮母として用います。

ブンチョウ（文鳥）

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、ジャワ島、バリ島など東南アジア近辺の原産ですが、現地では生息数がかなり減少しています。一般に販売されるのは飼育下で代々繁殖を重ねた飼い鳥です。羽色によって桜、パイド、白、シナモン、シルバー、アルビノなどがあります。白ブンチョウは日本で江戸時代に出現し固定された品種です。

2) 飼い方のポイントと注意点

雄の嘴は濃い赤色で大きく、上嘴が盛り上がっています。雌の嘴は上嘴がなだらかで雄に比べて細長く色も薄い赤色です。目のまわりの赤色も雄の方がはっきりして濃い色をしています。成鳥ならば雄はピーヨピヨとよく（さえず）り、ピョンピョンはねるようなダンスをします。これらの違いで雌雄の判別をします。主餌は4種混合のほか未熟米（中米）、エンバク（オートミール）を与えます。発情餌にはアワ玉のほか、米に卵をまぶした卵米（らんまい）を使用します。巣は大型のツボ巣または木製の専用の巣箱が市販されています。繁殖のとき以外は不要です。

3) 手乗り文鳥

鳥を飼育する楽しみ方の一つに、手乗り鳥があります。ブンチョウはその代表品種です。手乗り鳥にするには、孵化後2週間程度で雛を巣から取り出し、人の手で餌を与え

る(挿し餌)ことにより人に慣れさせます。よくなれた鳥は名前を呼べば飛んできたり、人を怖がることなく手のひらや肩に乗ったりするようになります。

雛は市販されていますので、よく観察して口を大きく開け、大きな声で餌をねだっている、お尻の部分が汚れていない個体を選びます。

《用意するもの》

わらフゴ(フongo)またはますかご、アワ玉、挿し餌用器具、青菜、ビタミン・カルシウムなどのサプリメント、ペットヒーター

《挿し餌のしかた》

アワ玉が浸る程度に熱湯を加え、小鳥の体温(42度)まで冷ましたものに、すりつぶした青菜と各種サプリメントを加えて餌を作ります。雛は上を向いて大きく口を開けて餌をねだりますので挿し餌器具で喉をつかないように注意しながら餌を与えます。餌が冷たくなると食べにくくなるので再度暖めます。食べた量は「そのう」のふくらみでわかります。早朝から夕方までのあいだ、3~4時間おきに1日4~5回与えます。一度暖めた餌は腐敗し易くなるので与えるたびに新しく作ります。朝1番と夕方最後の餌は特にしっかりと食べさせてください。成長とともに与える回数を減らし自分で粒餌を食べるように仕向けていきます。手乗り鳥を育てるにあたって保温は特に重要です。1~2羽での飼育は内部で30度程度の温度が保てるように、パネル型のペットヒーターの上にフゴを置いて暖めます。

キンカチョウ(錦華鳥)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属するオーストラリア原産の初心者から愛好家まで幅広いファンがいる小鳥です。ジュウシマツよりやや小型で、飼い鳥化が進み、ノーマル、古代、白、シナモン、フォーン、ペンギンなど様々な羽色の種類が作り出されています。

2) 飼い方のポイントと注意点

ノーマルカラーの雄はオレンジ色の頬を特徴にして雌と判別できます。その他の羽色の場合も雄は雌より鮮やかな色で嘴の色も雄の方が鮮やかです。アワを好みますので、主餌は4種混合にアワを多めに増量します。巣は小型のツボ巣をもちいますが、産卵後の自育能力には個体差があり、自育しないペアの抱卵・育雛にはジュウシマツ仮母を使います。

コキンチョウ(胡錦鳥)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、オーストラリアフィンチと呼ばれる種類の中で最も代表的なフィンチです。その名前のとおりオーストラリアの原産で、目をみはる鮮やかな配色の羽毛に覆われた美しい小鳥です。古くから飼い鳥として知られ、赤コキンチョウ、黄コキンチョウ、黒コキンチョウなどのほか、多彩な種類の色変わり品種が作りだされています。

2) 飼い方のポイントと注意点

雄は雌より色彩が鮮やかです。飼育には庭箱を用い金かごは不向きです。主餌は4種混合、ニガーシードを少量加えます。寒さに弱く、北半球では冬季に繁殖に入るため保温は必ず必要です。巣はとっくり型の専用のツボ巣があります。繁殖のためには禽舎飼育が適当です。庭箱飼育では飼い込めば産卵まではしますが、自育することはまれでジュウシマツ仮母を使います。

その他、オーストラリア産フィンチには、コモンチョウ、オオキンカチョウ、カノコスズメ、サクラスズメ、シュバシキンセイチョウなどがあります。これらの鳥はすべて保護政策がとられていて、市販されるのは繁殖されたものです。飼い方はコキンチョウと同様です。

アフリカフィンチの仲間

1) 分類、品種

アフリカフィンチとは、アフリカ原産のフィンチの総称です。カエデチョウ科に属する種類が多く、小型で活発に活動します。代表的なアフリカフィンチとして、カエデチョウ、ホウコウチョウ、セイキチョウ、コウギョクチョウ、シマベニスズメなどがあります。いずれも体長約10cmでジュウシマツよりやや小型、平均寿命は4～5年です。

2) 飼い方のポイントと注意点

鑑賞を目的とする場合には金かごでも飼育出来ますが、出来れば庭箱飼育が適切です。繁殖を試みるには鳥かごや庭箱飼育では困難で、成功させるためにはススキなどの草を植え込んだ禽舎で多数羽飼いを必要とします。主餌は4種混合餌にアワを増量します。また、発情と育雛期には小型の虫の幼虫や粟玉などの動物質の餌を与えることが重要なポイントになります。カエデチョウ、ホウコウチョウは比較的丈夫な鳥で入手後の疲れが取れれば、室内では保温の必要なく越冬します。通常飼育において特に気を使うことはありませんが、臆病なので静かな環境に置くようにしましょう。セイキチョウ、コウギョクチョウ、シマベニスズメなどについては、輸入後の養生と最初の越冬に注意が必要で、これを乗り越えれば丈夫にすごします。アフリカフィンチで販売されているのはすべて野生を捕獲したものです。

キンランチョウ（金蘭鳥）

1) 分類、品種

スズメ目ハタオリドリ科に属します。アフリカ大陸に広く分布しているため、地域により色合いの異なる亜種が多くあります。

2) 飼い方のポイントと注意点

雄は普段は雌と同じような色合いで、背部の斑紋の濃さで判別しますが、繁殖期になると頭部から胸部にかけて鮮やかなオレンジ色になります。雄は抱卵から育雛までを雌にまかせて、次の雌と繁殖に移るため、1羽の雄に複数の雌が必要であり、1つがいただけの飼育では繁殖を期待できません。主餌は4種混合を基本に、カナリアシードを好むので増量します。冬季にはニガーシード、虫類を少量与えます。禽舎内によく乾燥させたワラ、牧草を入れておけば雄が巣作りをします。販売されているのは野生を捕獲したものです。

ベニスズメ（紅雀）

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、インド、セイロンから東アジアにかけて広く分布する鳴き声の美しいフィンチです。

2) 飼い方のポイントと注意点

雄の生殖羽は翼と尾の暗褐色を除いて全身が真っ赤になり、胸や腹部に鮮やかな白点が出ます。国内でのかご飼育では換羽が困難なようで、年々黒ずんでしまいます。通常的主餌は4種混合でもよいのですがアワ以外ほとんど食べないので、アワをかなり多めに混合するとよいでしょう。かご飼育での繁殖は困難で、巣引きから育雛期には小型の昆虫などの生餌や強いすり餌を必要とします。販売されているのは野生を捕獲したものです。近年国内で、逃げ出した紅雀が河川敷などで自然繁殖しているとの報告があります。

ナンヨウセイコウチョウ（南洋青紅鳥）

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属します。ニューギニアを中心にセレベス、カロリン諸島、ソロモン諸島、北東オーストラリアに広く分布します。緑色の体に頭部の艶やかな濃い青色が特徴です。

2) 飼い方のポイントと注意点

雌雄同色ですがメスの顔の青色がやや暗く範囲も狭いことで判別します。神経質な小鳥で庭箱飼育するのが一般的です。身を隠すために天井から針葉樹の枝を吊るしてやると落ち着くようです。繁殖は庭箱でよく飼いこめば産卵しますが自育はまれで、仮母ジュウシマツに抱かせます。禽舎飼育で適度な環境を与えてやればよく増えます。近似種のヒノマルチョウ(日の丸鳥)はニューカレドニア島の固有種で鮮緑色の体で、頭部、顔、胸にかけてと尾羽が赤色です。サイズや飼い方は同じです。主餌は4種混合で、カナリアシードを若干多くします。未熟米もあたえます。販売されているのは、主にヨーロッパで繁殖されたものです。越冬には保温が必要です。

ヘキチョウ(碧鳥)

1) 分類、品種

スズメ目カエデチョウ科に属し、マレー、スマトラ、ジャワに分布しています。

2) 飼い方のポイントと注意点

頭部から胸にかけて白く、他は茶褐色。雌雄同色で判別は困難です。見た目は地味ですが、丈夫な鳥で飼い易く、室内では越冬も容易にします。主餌は4種混合、玄米や未熟米もよく食べます。鳥かご飼育では繁殖は望めません。植え込みを伴った大型の禽舎が必要です。中近東からアジアにかけて分布するギンバラ、アミメチョウ、キンバラ、コシジロキンバラなどもほぼ同様です。いずれも販売されているのは野生捕獲のもので、す。

2. カナリア

(1) 分類、品種

スズメ目アトリ科カナリア属カナリアという野生種を祖先にして、鑑賞鳥として長い歴史の中で作出された飼い鳥であり、鳴き声 姿態 羽彩 色彩の4分野の鑑賞をそれぞれ目的として改良され、多くの品種が作られています。ジュウシマツと同様かご以外の生活を知らないのかご内で落ち着いて生活し、人を恐れることも少なく飼育しやすい種類の鳥です。国内の繁殖家のもとで繁殖されたカナリアには、産まれた年と通し番号の入ったクローズドリングが装着されています。

ローラカナリア

鳴き声を鑑賞するための品種で、鳴き声を繰り返し転がすように低く長く(さえず)りをします。歌の訓練は、若鳥に歌の上手い鳥の(さえず)りを聞かせてマスターさせます。(さえず)りだけを楽しむ場合は、雄を2羽別のかごに飼い、鳴き声を競い合わせます。

スコッチファンシーカナリア

姿態(スタイル)を楽しむ品種で、細カナリアの基礎種で、体が細く、静止姿勢の標準は横から見たとき弓形とされています。また、訓練により翼を羽ばたかせずに止まり木を渡る「トラベリング」という動作を修得させることもあります。

その他の姿態を鑑賞する品種：巻き毛カナリア(フリルド)、グロスターカナリア、ヨークシャーカナリア、ノーウィッチカナリア、ポーターカナリア(巣引きが上手いので細カナリアなどの仮母として利用されます)

リザードカナリア

羽彩を楽しむ品種で、現存するカナリアで最も古いタイプとされています。体の大部分に鱗状の斑紋があり羽毛は絹のような光沢があります。

その他の羽彩を鑑賞する品種：ロンドンファンシーカナリア

カラーカナリア(赤カナリア、レモンカナリア、白カナリアなど)

赤カナリアは、カナリアとショウジョウヒワとの交雑種を元に品種改良されて作出された品種で、羽毛の色が換羽期間中の餌によって変化します。これは羽毛に血液が通っている時

だけ色揚げ飼料が効果を発揮することを示しています。赤カナリアでは羽毛に鱗状の斑紋がない「無覆輪（むふくりん）」と斑紋のある「有覆輪（ゆうふくりん）」があります。レモンカナリアではそれぞれ「極黄」「淡黄」と呼ぶ場合もあります。

(2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

前述のように鑑賞目的は様々ですが、いずれの場合も巣引きが大きな楽しみの一つですので、通常1つがいごとにカナリア用の庭箱で飼育します。金かごで飼育する場合は正面以外を段ボールなどで囲い鳥が落ち着いて営巣できるようにします。なお、鳴き声の鑑賞やつがいの相性をみる場合には金かごや竹かごに1羽飼います。その他はフィンチと同様ですが、繁殖用には皿型のワラ巢（皿巢）をもちます。

(3) 飼い方のポイントと注意点

雌雄判別の最も確実な方法はオスの（さえずり）ですが、若鳥や換羽期のオスは（さえずり）らないので、体型による判別や総排泄腔の形状による判別を行います。体型の雌雄差は、オスはメスに比べて骨太の骨格で大きく、尾羽も長い点を見分けます。総排泄腔による判別は鳥の腹面を上にして保定し、下腹部に息を吹きかけ総排泄腔を露出させて観察します。オスの総排泄腔は細長く突出しています。メスは突出が無く、下腹部に丸みがあります。この方法は熟練を要するので機会があれば練習を積むことが大切です。

カナリアの主食は、ヒエ、アワ、キビ、カナリーシードの他にナタネ、エゴマなどの脂肪種子を全体の2～3割程度加えて配合します。その他の飼料としてボレー粉や青菜を与えるのはフィンチと同じですが、赤カナリアの換羽期には黄色の色素を増やすルテインを含む青菜、卵黄、ナタネなどの給餌は避け、カロチンを含む専用の色揚げ飼料やビタミンサプリメントを与えます。これによりオレンジがかった色への退色を防げますが、与えすぎると肝臓を悪くすることがあります。なお、換羽期の飼料管理として、換羽前期（抜けはじめ）には飼料のカロリーを下げて早く古い羽を落とし、その後、一気に高カロリーの飼料に切り替えて美しい羽を揃えるテクニックがあります。この方法はほとんどのフィンチにも共通して使えます。換羽期間を短くすることで鳥の負担も軽減でき、その後の巣引きもしやすくなります。脂肪種子を好んで食べることもあり、便はフィンチと異なりべっとりとしていて、金網やかごの底に付くと取れにくく不衛生になりがちです。脚について固まってしまうと爪が欠けたり、脚を傷めますので注意してください。

(4) カナリアの繁殖

巣引きは確実な雌雄判別と相性のよい鳥をつがいにするところから始まります。春の日差しが強くなり始める頃に繁殖期を迎え、皿巢に巣材を運び始めます。この頃からゆで卵の黄身や粟玉などの発情餌を与え交尾、産卵を促します。抱卵期間は14日、その後14日位で巣立ちしますが巣立ち後1週間程度は親から餌をもらいます。自分で餌を拾うようになったら親から離し、別飼います。親鳥は夏までの間に2、3回繁殖を繰り返します。雛は巣立ち後2～3ヵ月で換羽し、翌年の春には繁殖可能な成鳥になります。

3. キュウカンチョウ（九官鳥）

(1) 分類、品種

インドから東南アジア、中国にかけて分布するムクドリ科の鳥です。体の大きさと肉だれの具合によって数種の亜種がみられます。以前は大量に輸入されていましたが、最近ではCITESのII類に登録されたこともあり、輸入数はかなり減少しています。ものまね鳥として有名なこの鳥は、飼育下での繁殖が難しいことでも有名でしたが、DNAによる雌雄判定の結果、つがいを実際に作ることができるようになり、海外では人工繁殖が行われつつあるようです。

(2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

一般的には、1羽をキュウカンチョウ用の竹やプラスチック製のかごで飼育します。餌、水入れは専用のものが市販されています。陶器とプラスチック製の物がありますが、陶器製の方

が安定もよく衛生上も好ましいでしょう。寒さに強くありませんので、冬季の保温器具を用意しましょう。

(3) 飼い方のポイントと注意点

雑食性の鳥で成鳥にはキュウカンチョウ専用のペレットフードを、芯が残らないように軟らかくふやかしたものと、果物（リンゴ、バナナ、桃など）や蒸かしたサツマイモをさいの目に切って与えます。たまにミルワームやコオロギなどの生餌を与えます。その他、ビタミンなどのサプリメントはペレットフードに混ぜて与えます。雛や若鳥にはペレットフードだけでは栄養が不足するので、生肉やレバーを少量与えるか、または5～7分のすり餌に果物や卵黄を練り込んで少し軟らかめにして与えます。キュウカンチョウは軟便の鳥です。汚れたかごや止まり木の糞で細菌が繁殖し、脚部の感染症になることがありますので洗浄はこまめに行います。また、水浴びはシャワーなどを利用して定期的にさせます。

おしゃべりの教え方

一般にインコ類よりもキュウカンチョウのほうがはっきりと人の声に近い声で話すといわれます。能力に個体差があることはいうまでもありませんが、根気よく教えれば、ほとんどのキュウカンチョウは言葉を覚えます。一般的に男性の声よりも女性や子供の甲高い声の方が覚えやすいといわれています。ポイントは、

- ・鳥が集中できる静かな場所を選び、かごのそばに座って行います。
- ・毎日何回かに分けて1回の練習は5分位にします。
- ・短い言葉からはじめて一つの言葉を覚えてから次に進みます。
- ・長い言葉は「もしもし」「もしもしかめよ」と少しずつ伸ばしていきます。

以上の注意点を参考にして気長に訓練してください。

4. すり餌鳥（軟食鳥）

(1) 分類、品種

メジロ、うぐいす、ホオジロ、ヤマガラ、シジュウカラ、オオルリ、ヒバリなど国内で身近な鳥から、ソウシチョウ、キュウカンチョウなどの外来種の鳥もふくめて、「すり餌」というわが国独自に発達した餌を使って飼育する鳥類の総称で、分類上の種別ではありません。例えばホオジロは播餌で飼育すればフィンチといえますが、すり餌で飼えばすり餌鳥ともいえます。

また、ソウシチョウ、ガビチョウ、ホオジロガビチョウ、ホオグロガビチョウの4種類の鳥については、外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）の特定外来生物種に指定されています。

(2) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

すり餌鳥は通常「さしこ」と呼ばれる竹製のかごで飼育します。大きさは鳥種によってメジロ用の8.5寸から1尺6寸くらいまで、1寸刻みにあります。一般に関西地方では関東より一回り小さいかごを用います。また鳥の習性に合わせた、ヤマガラかご、ヒバリーかごなど専用のかごや水浴び専用かごもあります。餌入れは「餌ちょこ（ちょく）」水入れは「なつめ」という陶器のものを使用します。すり餌による鳥の飼育は鳴き声の鑑賞目的が大半で、鳥期を過ぎれば再び野に帰すことが一般であったため、長期にわたる飼育、繁殖については飼育目的の対象外であり、一時的に飼うための機材しか開発されていません。

(3) 飼い方のポイントと注意点

すり餌は、わが国で数百年前から利用されてきた飼育技術で、その範囲は、果食型、蜜食型、虫食型、雑食型の鳥に幅広く利用できます。

すり餌の材料は、植物質（米ヌカ、玄米粉、大豆粉、小麦粉）と動物質（魚粉）に大別されます。植物質の材料を上餌とよび動物質を下餌とよびます。上餌は、それぞれ煎って乾燥させ、粉末状にして使用します。下餌は塩分の低い川魚を乾燥させて利用し、脂肪分の調整のため魚の種類（一般にはフナを使いますが、特殊な場合には、山女、はや、なども使われました）や

内臓の有無など加工方法を選びます。すり餌の「～分餌」とは上餌の重量に対する下餌の重量比を表します。例えば3分餌とは上餌100に対して下餌30の混合物であることを示しています。下餌の多い餌を強餌、少ない餌を弱餌とよびます。何分の餌を選ぶかの選択は虫食の傾向の強い種類ほど動物性たんぱく質の多い「強餌」を用い、季節や成長などを考慮して強弱を調整します。寒期や成長期の雛鳥には通常より1～2分強めの餌を与えます。関東では3分、5分、7分、関西では2分、4分、6分が標準品として市販されています。これは関東に比べて関西が温暖であることから、少し「弱い餌」が適当とされたからです。すり餌の作り方は、1羽当たり手の平に半分程度の青菜をすり鉢でよく摺ることから始めます。その中にすり餌を加え水で固さを調整しながら練ります。メジロのような蜜食性の鳥は軟らかく、穀食や虫食の鳥は固めにします。水分を加えるため、すり餌は腐敗し易いので1日朝昼2回、夏季は3回程度新しく作り直す必要があります。すり餌鳥の補助飼料として、鳥の食性に合わせて、みかん、りんご、柿などの果物や蜂蜜、クヌギやピーナッツ、エゴマ、麻の実など木の実や穀物などを与えます。虫食の鳥にはミルワーム、青虫、くも、バッタやコオロギの幼虫などの生餌やラード(豚の脂身)を時折与えます。なお、飲水及び水浴び用の水は常時新鮮なものを与えてください。

5. セキセイインコ

(1) 分類、品種

オウム目インコ科に属し、オーストラリア原産です。頭部が黄色で全身が緑色、後頭部から翼にかけて黒い斑紋がたくさんある原種から、200年以上にわたって飼育され、いろいろなタイプに改良されてきました。地色の変化し、黒い斑紋が退色したり減少したり巻き毛になったり、そして体格が大型化したものがあります。代表的な品種は、ルチノー、ハルクイン、オバーリン、オーストラリアンパイドなどで、非常に多くの品種が作り出されています。

(2) 生態、習性、生理

体長は18cm、体重26～29g、野生では、オーストラリアの乾燥地帯に群れて生活し、雨が降るとその後、繁殖行動に入るといわれています。雨で草が伸び、餌が多くなるのに合わせて繁殖するのです。そういった習性があるので、餌の豊富な飼育下では仲のよいペアなら季節に関係なく繁殖します。巣は木の穴などに作ります。一産4～6個の卵は18日ほどでふ化し、30日ほどで巣立ち、成鳥の色になるには3～4ヵ月かかります。

飼育していると大体10年前後は生きるようですが、上手に飼うと15年以上生きる個体もいるようです。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

金かごで十分飼育、繁殖できます。繁殖を目的で飼育する場合は箱巣を入れる必要があるので、大き目のものがよいでしょう。かごの置き場所は、夏は涼しく直射日光の当たらない場所、冬は暖房は必要ありませんが暖かく風の当たらない環境に置きましょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

非常に丈夫な鳥で、餌はヒエ、アワ、キビにカナリアシードを加えたインコ用混合飼料を主食とし、青菜も与えましょう。カルシウム補給としてイカの甲も必要です。塩土も与えたほうがよいでしょう。

餌の量は1～2日で食べ切る量にして、餌の追加や総入れ替えは栄養のアンバランスを引き起こしますので避けるべきです。身体の小さい鳥は体力がないので、いつも餌があることを必ず確認してください。もちろん水は毎日取り替えます。

手乗りで育てる場合には、餌に関することが一番重要です。まず、こういった餌を使うかということですが、一番よいのは最近市販されているパウダーフードを使うことです。これはインコ類の人工育雛用に開発されたもので、ビタミンやミネラルなど必要な栄養分が含まれているので、これをお湯で溶いて、40度程度に冷ましてスプーンで与えましょう。お湯の量は雛が小さい頃にはパウダーフード1に対してお湯9、成長と共に徐々に濃度を上げ、最終的には2

対8ほどの濃度にします。給餌間隔も始めは3時間程度あけますが、餌の濃度を濃くすると共に給餌間隔も徐々にあけていきます。与える量は、雛が食べるだけ与えてもかまいません。古くから使われているアワ玉にこのパウダーフードを加えても雛を育てることができます。

雛を飼育する入れ物ですが、雛には保温が必要です。そこで、わらでできたふごやプラスチックケースに入れ、寒い時期にはその下に保温マットを置くなどして、暖めてあげましょう。

手乗りで人が育てる場合、親鳥と同じ餌を置き、それを食べるようになって、羽が生えそって親鳥と同じくらいの大きさになったら（生後約1ヵ月）、かごに移しましょう。

ひとりで餌を食べるようになって、できるだけ一緒に遊んで、コミュニケーションをとることが、手乗りインコを楽しむコツです。

6. 中型インコ類

(1) 分類、品種

中型インコと一般的に呼ばれるものは、オウム目の鳥の中でセキセイインコより大きく、ボウシインコ類よりは小型の種類です。具体的には、オカメインコ、ボタンインコ類、クサインコ類、ホンセイインコ類、メキシコインコ類、アケボノインコ類、ヒインコ類などが含まれます。

オカメインコはオウム科に属していて、原種は灰色で頭部が黄色で頬に赤い班がありますが、その色変わりとしてシロオカメインコ、パール、パイド、ホワイトフェイス等があります。

ボタンインコ類では、野生種としてはキエリクロボタンインコ、ルリゴシボタンインコ、コザクラインコがよく知られています。これらは飼育されてきた歴史が長いいため、数多くの品種ができており、ヤマブキボタンインコやブルーボタンインコ、シロボタンインコといった品種ができています。コザクラインコは、非常に色変わりが多く、イエロー、タイガー、モーブ、バイオレットといったような品種が数多く作られています。

クサインコ類にはナナクサインコ、アカクサインコ、ビセイインコ等があります。近年これらにも色変わりが出現し、オウゴンビセイインコやブルーのアカクサインコなどがあります。

ホンセイインコ類は東南アジアに生息しており、ワカケホンセイインコやオオホンセイインコなどがあります。両種ともルチノーやブルーといった色変わりが出ています。

メキシコインコの仲間は、中米から南米にかけて生息しており、コガネメキシコインコやテツバメキシコインコ、クロカミンコなどがあります。

アケボノインコ類は、中南米に生息し、アケボノインコ、メキシコシロガシラインコなどがあります。

ヒインコ類は、インドネシアからオーストラリアにかけて生息し、ヒインコ、ズグロオトメインコ、ゴシキセイガイインコなどがいます。

(2) 生態、習性、生理

中型インコといっても、単にその大きさだけで分けられているので、その生態、習性などは様々です。

ボタンインコの仲間は、アフリカのサバンナなどに生息していて、つがいの仲がよくラブバードといわれます。そして、インコの仲間では珍しく、巣材を選びます。鳴き声はかなり高く、騒々しい種類です。寿命は10～15年くらいです。

オカメインコは、オーストラリア原産で、性質が穏やかで他の小鳥と同居しても大丈夫です。寿命は15～20年くらいです。

ヒインコ類は、花の蜜や果汁を食べるのに適応し、舌の先がブラシ状になっており、その食性のため糞は水分がとても多いです。また、鳴き声はキーキーとかなり高く、かなりうるさい種が多いです。寿命は20年以上です。

メキシコインコ類は、中南米に生息していて、オカメインコと同じくらいか、少し大きい鳥たちです。非常に声がやかましく、活発な性質です。人には慣れやすい鳥が多いようです。寿

命はやはり15年ほどです。

アケボノインコ類は、中南米産で、体形はボウシインコ類そっくりですが、より小型で、ハトより一回り小さいくらいです。性質はおとなしいものが多いようです。寿命は20年以上生きるといわれています。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

飼育するには、金かごか禽舎が適しています。オカメインコやボタンインコの仲間は、大きな金かごに市販の巣箱をつけることによって繁殖することも可能です。他の種類は手乗り以外なら、禽舎で飼育するのがよいでしょう。ただし、メキシコインコ類は非常に破壊的なので、木製の部分はトタンなどでカバーしたほうがよいかもしれません。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は、基本的にはセキセイインコ用の混合飼料に若干、ヒマワリや麻の実を加えるとよいのですが、太りやすいのでかご飼いの場合は少なめに与えましょう。これに青菜や少量のリンゴなどの果物を与えます。イカの甲などもカルシウム補給として与える必要があります。

最近市販されているインコ用のペレットは、栄養価が高く、ビタミンなども追加されているので、混合飼料の代わりにペレットを使用するのもよいでしょう。

アケボノインコやメキシコインコの仲間は、他の中型インコよりも果実や野菜などの副食を多く与えましょう。

ヒンコ類については、他のインコ、オウム類と食性、生態が違うので、当然与える餌も違います。ヒマワリの種子やカナリアシードを食べる個体もありますが、基本的には果実食の鳥なので、出来るだけ多く果物や野菜を与えます。また、最近ではヒンコ類用の人工飼料も販売されていますので、これらと果物、野菜で飼育するとよいでしょう。

新鮮な飲み水を与えることはいうまでもありませんが、水浴びをさせることも健康を維持するのに重要です。自分で水浴びをしないようなら、霧吹きで水浴びをさせましょう。もちろん、嫌がるようなら無理にしなくてもかまいません。

冬の温度については、ボタンインコ類やオカメインコなどは成鳥なら無加温で大丈夫ですが、風の当たらない暖かい所に置きましょう。他の種類も同様なものが多いのですが、ヒンコ類の一部の種やアケボノインコ類などは若干保温したほうがよいでしょう。いずれにせよ、本来、日本より暖かい国が原産です。寒さに耐えられるといっても、無理はしないほうがよいでしょう。

手乗り用の雛から育てる場合、餌は最近市販されているパウダーフードを使ったほうが丈夫に育ちます。ボタンインコ類やオカメインコ類の場合は成長が少し遅いですが、セキセイインコの項を参照してください。アケボノインコ類、メキシコインコ類やヒンコ類は、大型のオウム・インコ類に比べて成長はかなり早いのですが、育て方は同じなので、そちらを参考にしてください。

7. 大型オウム・インコ類

(1) 分類、品種

代表的な大型のオウム・インコ類は、東南アジアからオーストラリアにかけて生息する白色系で、尾が短く冠羽のあるコバタン、キバタン、タイハクオウム、モモイロインコ、クルマサカオウムなどと南米産で全身が緑色のボウシインコ類（キソデボウシインコ、キホオボウシインコ、キビタイボウシインコ）それに同じく南米産で尾が長いルリコンゴウインコやベニコングウインコ、アフリカ産の全身が灰色で尾が赤いヨウムもよく飼育されています。

(2) 生態、習性、生理

ほとんどの種が熱帯に生息していて、果物や木の实、花、木の芽などを食べて生活しており、非繁殖期には群れで生活し、繁殖期になるとペアで生活します。

大きさはコバタンやモモイロインコ、ボウシインコ類、そしてヨウムはハト位の大きさで、

300～400g弱の体重です。タイハクオウムやキバタンは600g程度、ルリコンゴウインコやベニコンゴウインコなどはニワトリ大で1kgを超える体重です。

コバタンやモモイロインコ、タイハクオウムは目の虹彩を見るとオスメスがわかります。若鳥のうちにははっきりしませんが、オスは虹彩が黒く、メスは茶色だからです。

寿命については、飼育下で30年以上生きることができます。中には50年以上生きた記録もあります。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

嘴の力が非常に強く、金属のかごでも丈夫なものでないと簡単に壊してしまいます。特にコンゴウインコ類や大型のバタン類には、しっかり溶接されたかごが必要です。かごの大きさは、基本的には大きければ大きいほどよく、少なくとも翼を広げられる程度の大きさは必要です。冬季の温度については、初めて冬を越す場合は、15度以上に保つ必要があります。1回冬を越していれば、次の冬からは無加温で大丈夫です。しかし、寒さに耐えられるというだけであり、熱帯の鳥なので、できるだけ暖かい環境を整えるべきです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

飼料については、以前はヒマワリの種子と麻の実、それにバナナなどを副食として与えるというのが一般的でしたが、現在は多くの大型種用のペレットが市販されていますので、こういったペレットを主食として、バナナやリンゴだけでなく、ブドウ、マンゴーなどの果物やニンジンやサツマイモ、ブロッコリー、トマトなどの野菜、時期によって入手しやすいものを毎日、1種類の量は少なく種類を多く、副食として与えるとよいでしょう。ヒマワリの種子や麻の実などを主食とすることも出来ませんが、この場合、ヒエ、アワ、キビやハト用の配合飼料なども主食の一部として加えることが必要です。もちろん、この場合も上記の副食を与えましょう。

大型のオウム・インコの飼育で気をつけなければならないことのひとつが、肥満です。肥満になるかどうかは、運動量、餌、その種の特性によって決まります。コンゴウインコ類は、野生でも脂肪分の高いヤシの実などを主食としているので、果実などが主食のボウシインコ類やバタン類に比べると高脂肪のヒマワリの種子などで飼育しても、太りにくい傾向があります。それでも、狭いかごで運動不足だと肥満になってしまいますし、オウム類やボウシインコ類はなおさらです。オウムの場合も肥満になりやすいので注意しましょう。

健康管理には水浴びも必要です。ほとんどの大型のオウム・インコは自分では水浴びはしませんが、シャワーをかけると喜んで羽を広げて水浴びをします。暖かい日の午前中に来るだけ水浴びをさせてあげましょう。オウム類はこの水浴びによって、羽毛から出る粉が洗い流され、かごやその周囲が汚れるのを減らすことができます。

大型のオウム・インコは、最近では手乗りとして、雛鳥が市販されています。これらを育てるにはかなりの時間と根気が必要です。種類にもよりますが、雛が自分で餌を食べようになるのは3ヵ月～4ヵ月、場合によってはそれ以上になります。ある程度育って、自分で餌を食べ始めたくらいのほうが、飼い易いでしょう。

自分で雛を育てる場合には、餌と環境(温度、湿度など)が重要です。餌については、人工育雛用のパウダーフードを使用します。これを温めて与えるのですが、問題は水分量です。雛の育ち具合や状態にもよりますが、水分量を85%前後にします。この餌をお風呂のお湯程度の温度に温めて与えます。与える道具は、大型の金属スプーンの両端を曲げたものや、給餌用の先が太くて長くなっている注射器です。与える際には片手で雛の嘴の脇をおさえ、スプーンを上嘴につけるようにすると、雛は自分で反応して、頭を上下し、その動きで餌が入っていきます。注射器の場合は、嘴の間に先端をくわえさせて、雛の反応に合わせて餌を流し込みます。給餌回数は30日齢で3～4回、50日齢くらいで2～3回くらいですが1回に食べさせる量とまた、その餌の濃度によります。毎日体重を計り、体重の伸びを記録しましょう。餌の量が不足していたり、濃度が薄いと体重が伸びません。ただ、モモイロインコなどでは50日齢前後で、ルリコンゴウインコなどでは60日齢位で体重が最大になり、その後多少体重が減少します。こ

れは巣立ちの準備段階に入ったということであって問題はありません。この状態になったら置き餌して自力採食を促します。

環境については、まず、温度についてですが、筆毛の状態の時には32～33度くらいはあったほうがいいのですが、雛が喘いだり、呼吸が早いようなら徐々に温度を下げしていきます。湿度については75%くらいを保てれば理想的です。こういった状態を保つには、家庭では大きなプラスチックケースや発泡スチロールの箱に保温ランプや保温マットをつけ、サーモスタットで調整するのがよいでしょう。雛の糞はかなり水っぽく、また量も多いので、ペーパータオルのちぎったものなどをたくさん敷きましょう。筆毛の頃はまだ、脚や関節も柔らかく、すぐに開脚してしまいます。雛の体よりふたまわりくらい大きいザルなどに雛をいれると開脚は防げます。これを保温箱にいれるとよいでしょう。

体の筆毛が開いて尾羽が伸び始めたら、巣立ちの準備段階ですから、もう少し温度を下げ、床が滑らないようにして、広いところに出しても大丈夫です。行動を見て、低い止まり木も入れましょう。いつも止まり木に止まるようになったら、かごに移しても大丈夫です。

手乗りのオウム・インコたちは、人間に刷り込まれているので、飼い主の愛情がたくさん必要です。かまってもらえないと毛引きになったり、人間に対して攻撃的になったりします。また、上手に飼えば数十年も生きる鳥たちです。責任を持って飼育しましょう。

(5) その他特記事項

大型のオウム・インコム類は、非常に鳴き声が大きく、鳴き叫んでいるときには、近くで話が出来ないほどです。鳴くのは朝や夕方が多く、何かで興奮したときなども鳴き叫びます。

近隣の方に迷惑がかからない環境での飼育をお勧めします。

8 . ハト類

(1) 分類、品種

ハトはハト目ハト科の鳥類で、約300種います。そのうちよく飼育されているのは、カワラバトから改良されたといわれているレースバトやクジャクバト、ジャヤコビンなどの品種でしょう。その他にジュズカケバト、ウスユキバトがよく飼育されています。ギンバトはジュズカケバトから改良された真っ白なハトであり、ウスユキバトも白色や淡色となった色変わりがいま

す。
大きさは小さきまで、小さなヒノマルヒメバトは全長13～15cm、体重49gほどで、大きなカムリバトでは全長66～75cm、体重1,800～2,000gにもなります。"

(2) 生態、習性、生理

ハトの仲間は種子や果実が主食で、大量に水を飲み、飼料が十分にあり、栄養状態がよければ通年繁殖できます。1回に2個の卵を産み、抱卵をはじめて18日で雛がかえります。その雛を素囊から分泌されるピジョンミルクという分泌物で育てるのがハトの仲間の特徴です。

いったんつがいになると、どちらかが死んだりしない限り、ずっと連れ添います。20年くらい生きるといってもありますが、一般的には10～15年位が寿命のようです。

(3) 飼育上の必要な施設、器具、機材及び環境

ウスユキバトやジュズカケバトは大型のかごで飼育、繁殖することができます。レースバトはハト小屋で飼育するのが一般的です。ハト小屋は、内部に巣箱とハトのためのトラップのついた入り口、到着台があることが必要です。トラップはハトが中に入れても外には出られないようにするものです。到着台はこの入り口のの前につけます。クジャクバトやジャコビンなどは禽舎や小屋で飼育するほうがよいでしょう。

かごなどで飼育する場合、ウスユキバトでも保温は必要ありませんが、冬は風のあたらない暖かい場所、夏は直射日光のあたらない涼しい場所におきましょう。

レースバト用のハト小屋の場合、屋根やベランダに設置して、ハトが帰ってくる際に見つけやすいようにすることが必要です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌については、ウスコキバトやジュズカケバトは小型なので、ヒエ、アワ、キビ、それにカナリアシードなどを混合したインコ用の混合餌に少量の麻の実を混ぜるとよいでしょう。青菜も与えるべきで、ハト用の塩土も必要です。レースバトやクジャクバトなどの場合、市販されているハト用配合飼料を与えるのが一般的です。内容はコーン、サフラワー、マイロ、豆類などが入っています。これに加えてビタミン補給のため青菜を与えましょう。ミネラル補給のための塩土も欠かせません。

ハト類は多量に水を飲むので、給水器などで水を切らさないようにすることが必要です。また、水浴びも好むので、水浴び用に大きな水入れを別に用意しましょう。

(5) その他の特記事項

ハト類に限りませんが、糞や羽毛がアレルギーの原因になったり、ハト自体は健康に見えても、人間にもうつる病原菌を持っていることがあります。あまり神経質になることはありませんが、掃除をこまめにする、ハト小屋に入る際はマスクをする、世話をした後にしっかり手を洗うといったことを守りましょう。

9. ニワトリ

(1) 分類、品種

ニワトリはキジ目キジ科のセキショクヤケイから改良されてきたといわれています。セキショクヤケイは東南アジア原産で、現在でも生息地では飼われているニワトリと交雑しているといわれています。ニワトリを大きく分けると、卵用、肉用、卵肉兼用そして愛玩用に分けられます。卵用として有名なのは白色レグホン、肉用は白色コーニッシュ、兼用はオウハンプリマスロックなどがあります。ペットとして飼育されるのは、チャボやウコッケイ、コシャモなど小型の愛玩用がほとんどで、チャボにはシロ、カツラ、ゴイシなど羽毛の色の違う品種があり、また尾羽の退化したウズラチャボなどもあります。ウコッケイにもシロとクロがあり、コシャモにもアカザサ、シロ、スズナミなどの体色があります。

(2) 生態、習性、生理

本来のセキショクヤケイは雑食性で、地上で種子や昆虫を食べ、巣も地上に作ります。夜間は外敵から攻撃されないよう、樹上で眠ります。そして、テリトリーを持ち、一夫多妻です。ニワトリもこの先祖の習性を受け継いでいます。セキショクヤケイは繁殖期になるとメスが10個程度の卵を産み、その後抱卵をはじめます。卵用の品種では、こういった習性を抱卵しないで、卵を産み続けるように改良し、現在では年間300個以上産卵するようになりました。しかし、産卵には日照時間も関係し、羽が生えかわる時期には産卵しません。愛玩用のチャボやウコッケイは年間に数十個程度しか産卵しませんが、就巢性が強く、抱卵育雛が上手です。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

小型のチャボなどは、市販されているチャボ用の金かごで飼育することもできますが、できれば禽舎で飼育した方がよいでしょう。南向きの西日の当たらない所に禽舎を作りましょう。また、冬季は風が直接当たらないようにします。体が入るくらいのも木製の箱を設置するとそこに産卵します。床には乾いた砂を敷くと掃除しやすく、また、ニワトリは砂浴びができます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

飼料は、市販されているニワトリ用の配合飼料がよいでしょう。しかし、これだけではビタミンや素繊維が不足してしまいます。配合飼料に加えて、青菜類をできるだけ多く与えましょう。ハコベなどの野草もよい餌となります。時々、ミルワームなど昆虫を与えると喜びます。配合飼料はかびたりしやすいので、1日で食べきる量を毎日与えましょう。水も勿論、毎日新しくする必要があります。

一般的には、複数で飼育しますが、オスが2羽以上いると喧嘩する場合がありますので、オスは1羽だけにしましょう。

- (5) その他特記事項
ニワトリは鳴き声大きいので近所迷惑にならないところで飼育しましょう。

10. キジ類

- (1) 分類、品種
キジ科には、全長12～15cm、体重20～57gのスズメ位の大きさしかないヒメウズラから全長180～250cm、体重は5kg近くになるインドクジャクまで、約210種類がいるといわれています。その中で、比較的多く飼育されているのは、ヒメウズラ、ウズラ、キンケイ、ギンケイ、インドクジャクなどでしょう。
キンケイには全身が退色した品種があり、オウゴンキンケイと呼ばれています。ヒメウズラにも退色したものがあります。インドクジャクでは全身が白いシロクジャクがいます。
- (2) 生態、習性、生理
キジ科は鳥の中では脚力が強く、普段は地上で歩き回って生活しています。翼は長距離を飛翔するには適していませんが、敵に襲われると数十メートル以上飛んで逃げます。
オスは縄張りを持ち、抱卵、子育てはメスだけが行うのが一般的です。
雑食性で、草の種子や花、昆虫、トカゲなどの小動物も採食します。
- (3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境
小型のヒメウズラやウズラは大型の鳥かごでも飼育できます。キンケイやギンケイは1坪以上の禽舎を準備します。インドクジャクにはオスの尾羽が折れないように2坪以上の大型の禽舎を準備します。禽舎は、夏は涼しく、直射日光が当たらず、冬は暖かく、風の当たらない場所に作りましょう。鳥かごの場合も禽舎と同じ環境におきましょう。
- (4) 飼い方のポイントと注意点
飼料は市販されているニワトリ用の配合飼料が使いやすいでしょう。ただ、この配合飼料のみでなく、青菜類もできるだけ与えるようにしましょう。ハコベなどの野草も非常によい餌となります。また、基本的には雑食性なので、時々ミルワームなどの昆虫を与えることも必要です。ヒメウズラは小型なので、小鳥用のヒエ、アワ、キビなどで飼育できます。
飼育する場合、繁殖期にはオス同士が闘争するので、オス1メス1のペアまたはオス1羽に複数のメスを1つの鳥かごや禽舎に収容します。キジ類では繁殖期にオスがメスを追いまわすことがあるので、1ペアで飼育するより、メスを複数入れることで、オスからの攻撃を分散することができます。また、植え込みや隠れ場を設けることにより、オスからの攻撃を避けることができます。
- (5) その他特記事項
インドクジャクは鳴き声大きいので近所迷惑にならないところで飼育しましょう。

11. 水禽類

- (1) 分類、品種
水禽類カモ目カモ科に分類される鳥類で全世界に147種類が知られています。全長30～36cmのアオマメガンやオオハクチョウのように全長140～165cm、体重7,500～12,700gにもなる大きな種類もあります。いずれも指の間に水かきがあり嘴の先端に嘴爪があることなどが特徴になっています。一般的に飼育されているのは、マガモから改良されたアヒル、サカツラガンやハイイロガンから改良されたガチョウ、それにオシドリやコブハクチョウです。アヒルには品種として、アオクビアヒルや白いペキン、ガチョウにはシナガチョウやツールーズ、エムデンといった品種があります。
- (2) 生態、習性、生理
野生種は、ほとんどが北方で繁殖し、渡りをして南方で越冬するという習性があり、このために雛の成長は早く、春に生まれ秋の始めには飛翔できるようになります。コブハクチョウも

同様に、野生の場合は渡りをします。また、この渡りをするために親鳥は夏の間には羽が抜け変わります。

餌は種子や水草、水生昆虫などで、基本的には草食性の強いものが多いです。

家禽化されたアヒルやガチョウは大型化し、ほとんど飛翔することはできません。一方で、品種によってはより多く産卵するように改良され、年に300個以上産卵するアヒルもいます。しかし、家禽化されてきた過程で、就巢性が失われており、人工孵卵器で雛を育てる必要があります。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

飼育に必要なのは、少なくとも十分に水浴びのできるプールがある禽舎です。アヒルやガチョウは飛べないので問題ありませんが、オシドリやコブハクチョウは断翼してあれば、周囲を囲った池などで飼育することもできます。この場合は、ネコやカラス等の害獣に襲われないようにしなければなりません。

コブハクチョウは大型の鳥なので、かなり大きな池が必要です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌については、ニワトリ用の配合飼料と小松菜などの青菜類が一般的です。池に餌をそのまま撒くと配合飼料は沈んでしまい、また、池の水が汚れるので、別のバットなどに入れて与えたい方がよいでしょう。

アヒルやガチョウは群れで飼育できますが、コブハクチョウは繁殖期になると縄張りをもって闘争するのでつがいでの飼育した方がよいでしょう。オシドリは広さがあれば、複数のペアで飼育できます。

(5) その他の特記事項

コブハクチョウは、現在、日本各地で野生化し、繁殖しているところまであります。こういった外来種の移入は日本の生態系に悪影響を与えかねません。逃げ出さないよう十分に注意して飼育する必要があります。

12. 猛禽類

(1) 分類

猛禽類には、ワシタカ類とフクロウ類が含まれます。ワシタカ類で比較的飼育されているのは、オオタカ、アメリカチョウゲンボウ、フクロウ類ではメンフクロウ、アフリカオオコノハズク、オオコノハズクなどがあります。

(2) 生態、習性、生理

猛禽類は、ヤシハゲワシなどごく一部の種を除いて、完全な肉食です。小型の種では、コノハズクのように昆虫を主食とする種があり、また、ミサゴのように魚を主食とする種もあります。

ほとんどの種が、縄張りを持ち、つがいか単独で生活していて、繁殖期には、かなりよく鳴きます。また、ワシタカ類は昼行性ですが、フクロウ類は一般的には夜行性です。

寿命は、種によって違い、飼育下では、小型の種で10年から15年くらい、オオタカなどは20~30年生きるといわれています。

(3) 飼育上必要な施設、器具、機材及び環境

小型の種は、かごで飼育することもできますが、狭いかごでは翼を傷めやすいのです。かごで飼う場合は、内側にダンボールなどをつけるとういでしょう。ただし、通気に気をつける必要があります。自作で鳥の大きさにあった木箱を作ることできます。中型種以上は禽舎や専用の小屋で飼育するほうがよいでしょう。

馴らすために足革をつけてつないで飼う場合、オオタカなどは専用の小屋にTバーにつないで飼育します。チョウゲンボウなどはTバーではなく、ブロックを止まり木にします。

この方法は、知識のある経験者むけで、特に小型種は難しいです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

動物食なので、鶏肉、牛肉などで飼育することが出来ますが、これらのみを与えているとビタミン、ミネラル不足となり、長期飼育は出来ません。そこで、マウス、ウズラ、ハトなど、内臓も共に採食できる餌を与えるべきです。中型種以上は1日1回、小型種では1～2回の給餌が基本ですが、特に大型種は野生でも毎日獲物を捕獲できるわけもなく、1週間に1回程度、状態に応じて絶食させてもよいでしょう。ただし、季節によって採食量も変わるので、絶食もその状態により加減しましょう。

水については、基本的に水分は餌から取っていますが、自分から飲むこともあるので、きれいな水を用意します。水浴びも好むことが多いので、特に暑い時期には大きい水入れを使用しましょう。

猛禽類は、餌が肉類のため、糞の水分が多く、また、たくさんの尿酸が含まれています。かなり臭気もあります。こういったことから、非衛生的になりやすいので、こまめに掃除しましょう。

(5) その他の特記事項

ワシタカ類は、繁殖期や餌をねだる時など、かなり騒がしく近所迷惑になります。迷惑のわからない環境で飼育しましょう。

猛禽類は保護されている種が多く、日本産の猛禽類はすべて飼育することはできません。飼育できるオオタカは輸入されたものか、輸入されたものから繁殖したものです。フクロウなども同様です。日本だけでなく、多くの国々で猛禽類は保護されており、ワシントン条約で輸入を禁止されている種もあります。購入する際には、正規に輸入されたものかどうか、国内繁殖の場合も合法的な個体なのか確認することが必要です。

また、ワシタカ類のなかには動物愛護管理法に定める特定動物（危険動物）に指定されているものがあります。

IV. その他

1. 野生の雛鳥を保護したとき

野鳥を保護したので、どうしたらよいかという相談があります。いうまでもなく日本国内に生息する鳥は原則飼育禁止です。たとえ落ちていた雛鳥やけがをした鳥であっても届け出が必要です。都道府県の自然保護課や林業課に届け、そこで保護の方法について話し合います。獣医などの保護委員が定められているときはそちらに委ねます。これが通常の方法です。ただ雛鳥を保護したときは、そのような時間的余裕が少なく、とりあえず保護者が面倒を見なければならないことが多くあります。

もっとも多い保護の例としては、巣立ちしたばかりのまだあまり飛べない雛を見かけた場合です。巣立ち雛はほとんど動かずひ弱に見えますが、必ず親鳥が側で様子を見、餌を運んでいます。たとえ猫やカラスに襲われたとしてもそれは自然の摂理であり仕方のないことです。そのままにして立ち去ることが最善の選択です。保護をしてしまって少し時間が空いても元の場所の近くの安全な木の枝などにとまらせておけば、親鳥が見つめて巣に連れ戻します。

次に、羽もほとんど生えそろうていない雛鳥が巣から落ちてしまったと考えざるを得ない場合があります。この場合には巣が近くであれば、なるべく直接手が触れないようにして、そっと巣に戻してやるのが一番です。但し、病的に弱い雛や、ダニなどの寄生虫が大量に発生して親が世話を放棄した場合があります。この場合には人の手で育てることになります。このような場合、最初にしなければならないのは25～30度程度の保温と寄生虫の除去です。当然飼っている他の鳥からは隔離しなければなりません。次に餌ですが5～7分のすり餌が標準です。練ったすり餌を米粒程度の大きさに丸め、少し水をつけてピンセットで目の前で揺らすようにして、口を開ければすばやく食べさせます。水を含ませた筆でくちばしを濡らしてやると口をあけることもあります。一度、すり餌を食べたあと自分から口を開いて餌をねだるようであれば安心です。食べない場合はあきらめるほかありません。昆虫食の傾向の強い鳥ほど強い餌、すなわち動物性蛋白質の多い餌が必要で、すり餌のほか、ミルワーム、ハエ、青虫、クモなどを適当な大きさに切って与えます。無事に育ってもいずれは自然に戻してやらなければならないので、十分な飛翔のできる大きさの鳥かごや禽舎で飼育し、自然界に戻ったときに自分で餌を捕れるように、すり餌から昆虫など自然にある餌に慣れさせておく必要があります。

2. 足環のついている鳥を見つけたら

足環のついた野鳥を保護したり死体を見つけたら、その足環をよく見てください。『KANKYOSHO TOKYO JAPAN』、『KANKYOCHO TOKYO JAPAN』、『KANKYOSHO JAPAN』、『KANKYOCHO JAPAN』のいずれかが刻印されていたら、環境省が標識調査（渡りなどの行動を調査する目的）の為に付けられたものです。この場合は、山階鳥類研究所・標識研究室（04・7182・1107）に連絡してください。

ハトに足環がついていた場合、その個体は個人のレースバトです。その足環をよく見ると電話番号が刻印されていることがありますので、連絡を取るとよいでしょう。また、刻印文字で『JPN』は日本鳩レース協会（0120・810・118又は03・3822・4231）、『NIPPON』は社団法人日本伝書鳩協会（03・3801・2687又は03・3801・2789；足環についている年号と6桁の数字を伝えてください）となりますので、そちらに連絡をしてください。

V. 参考

< 引用及び参考資料 >

- 「小鳥のお医者さん Q and A式飼育方法」* / 1999 / あおば出版
「新 小鳥のお医者さん 楽しく学ぶ飼育のしかた」* / 1999 / あおば出版
「鳥類の内科および外科臨床 鳥類の飼育を含む」Mr & Mrs Harrison著 / 伊東 登訳 / 1997 / LLL. セミナー
動物由来感染症その診断と対策 編著 神山恒夫 真興交易(株)医書出版部
「Exotic Animal Formulary エキゾチックアニマルの薬用量マニュアル」成島悦雄監修 / 2003 / インターズ
・ James R. CAREY and Debra S. JUDGE Longevity Records : Life Span of Mammals, Birds, Amphibians, Reptiles, and Fish Odense Univ. Press / 2000
「Parrots of The World」Joseph M. Forshaw / 1978
「Parrots : Their Care and Breeding」Rosemary Low / 1992
「Hand・Rearing Parrots and Other Birds」Rosemary Low / 1991
「Cockatoos in Aviculture」Rosemary Low / 1994
「原色飼鳥大鑑 Vol.1」川尻和夫、立松光好 / 1982 / ペットライフ社
「原色飼鳥大鑑 Vol.2」川尻和夫、立松光好 / 1984 / ペットライフ社
「原色飼鳥大鑑 Vol.3」川尻和夫、立松光好 / 1988 / ペットライフ社
「決定版ペットバード百科」デビッド・アルダートン著 / 誠文堂新光社
「ペットの飼育事典」小学館
「新版鳥獣原色大図説」講談社
「愛玩動物飼養管理士教本(2級)」社団法人日本愛玩動物協会
「飼育読本『手乗り文鳥の飼い方』」社団法人日本愛玩動物協会
「学校飼育動物の診療ハンドブック」社団法人日本獣医師会
「とり情報誌」(ペット新聞)より江角正紀「野鳥のヒナと出会ったら」

* 印は漫画。

ペット動物販売業者用説明マニュアル(鳥類)

環境省自然環境局総務課動物愛護管理室

〒100 8975 東京都千代田区霞ヶ関 1 2 2

電話：03 3581 3351(代)

請負者：社団法人 日本動物保護管理協会

〒107 0062 東京都港区南青山 1 1 1 新青山ビル西館23階

電話03 3475 1695 FAX：03 3475 1697

発行：2004年3月

【マニュアル研究会委員(50音順)】

委員長 小宮輝之(東京都恩賜上野動物園飼育課長)

佐竹浩之(東京都動物愛護相談センター相談指導係長)

真田直子(小鳥の病院BIRD HOUSE院長)

高木嘉彦(埼玉県こども動物自然公園主任)

西村尚一(社団法人日本愛玩動物協会専務理事)

【イラスト】田村三恵

本マニュアルは、環境省の承諾を得て転載しているものです。

目次

爬虫類

・基本事項	106
1．飼い主の責任	106
2．動物販売業者の責任	106
・共通事項	108
1．飼養動物の種類や品種を選ぶための情報	108
2．終生飼養を確保するために必要な情報	110
3．適正飼養を確保するために必要な情報	110
4．繁殖に関する情報	112
5．人と動物の共通感染症の予防に必要な情報	113
6．逸走・危害・迷惑の発生防止	114
7．生物多様性の保全	115
8．関係法令	116
・種類ごとの個別事項	119
ワニ	119
1．ワニ	119
カメ	121
2．ミシシippアカミミガメ（ミドリガメ）	121
3．ワニガメ	124
4．スッポン類	127
5．スッポンモドキ	129
6．ホルスフィールドリクガメ	129
7．ケヅメリクガメ	131
8．インドホシガメ	133
9．アカアシガメ	134
ヘビ	136
10．ナミヘビ類	136
11．ボア・ニシキヘビ類	139
トカゲ	142
12．ヒョウモントカゲモドキ	142
13．グリーンイグアナ	143
14．フトアゴヒゲトカゲ	146
15．カメレオン	147
16．アオジタトカゲ	148
17．オオトカゲ	149
・参考	152
引用及び参考資料等	152

1. 基本事項

平成11年12月に改正された「動物の愛護及び管理に関する法律」では、動物の所有者又は占有者の責務等として「命あるものである動物の所有者又は占有者としての責任を十分に自覚して」が加えられましたが、これは、動物の命を預かる飼い主の責任とその自覚を明記し、その徹底を図っていかうというものです。

飼い主がその責任を果たすためには、動物の生態、習性及び生理などの知識やその動物に適した飼育方法などを正しく理解することが不可欠です。これらの知識や技術を飼い主が身に付けるためには、動物の大きな供給源である販売業者が動物の販売に当たって、動物の習性や特性、適正な飼育方法などについて適切な説明を行うことが求められます。これらの説明が不十分で購入者の理解がないまま飼育されることが、その後の不適正な飼育管理や飼育放棄の一因となっている現状があります。特に、近年ペットとして飼育されるようになった爬虫類などの動物種の増加に伴い、この問題が注目されています。これらを踏まえ、「動物愛護管理法」では、動物販売業者に対し、購入者に適正な飼育方法等について説明し、理解させる責任を新たに課しています。なお、平成17年6月の法改正により、この動物販売業者の説明責任は、販売に際して文書交付による説明をすること等と、さらに強化されました。

動物を購入するときの窓口である動物販売業者による適正な説明が動物飼育をめぐる多くの問題を未然に防ぐための重要なポイントとなります。

1. 飼い主の責任

動物を飼うにあたっては、その動物の生態、習性及び生理をはじめ、成長に伴う変化等に適した飼育管理方法を事前に十分調べ、必要な準備をしなければなりません。これらの準備をしないまま、「かわいい」「珍しい」などの感情や一時的なブームに影響されて、安易に飼い始めてしまうことが、不適切な飼育管理や飼育放棄、遺棄につながります。

動物は飼い主を選ぶ立場にはありません。その生涯をすべて飼い主に託すこととなります。だからこそ、飼い主はその動物のすべてに責任を負うこととなります。

(1) 動物への責任

動物を飼うということは、その動物の命を飼い主が預かることです。「命ある動物を飼う」という責任を十分に理解したうえで、その動物に見合った適正な飼養管理に努め、その動物の命をまっとうするまでの間、愛情を注ぎ終生飼い続けるという責任があります。そのために、飼い主は、住宅環境、家族構成の変化など将来的な生活設計を踏まえて、慎重に判断することが求められます。これらのことから、動物を飼うにあたっては、家族の同意が前提になることはいうまでもありません。

(2) 社会への責任

動物の飼い主には、飼っている動物が人の生命、身体、財産へ害を及ぼすことを防ぐとともに、逸走（脱走）等による自然環境への影響を防止する責任があります。爬虫類を誤って逸走させた場合には、爬虫類ということだけで周辺の住民を不安に陥れるなど大きな社会問題となる可能性があります。このため、飼い主には、日頃の飼育管理施設の点検、修理、補修を含め、必要に応じて繁殖制限等適切な管理等を行うことなど、動物が人間社会で共に暮らす上での特段の配慮が求められます。

また、災害発生時の動物による事故の防止や、避難の際の対応についても考えておくことが大切です。

2. 動物販売業者の責任

動物販売業者に購入者への説明責任を課したのは、飼い主の責務が適確に実施されるよう、これ

を最も効果的にサポートをしてもらおうということからです。

販売業者には、従業員が購入者に対し適切な説明、助言が行えるよう、日頃から従業員に対する教育、指導を行うことも求められています。

購入者への説明が必要な項目は、多岐にわたりますが、主な項目としては次のようなものがあります。

(1) 終生飼養

飼い主としての責任を果たす上で、最も重要な基本は「その動物の命を託され、終生飼い続ける」ことにあります。飼育途中で動物を手放すことのないよう、結婚などによる家族構成の変化や転勤や転居の有無など、将来的な見通しを踏まえて飼う必要があることを説明する必要があります。

(2) 適正飼養

それぞれの動物種には、それぞれの健康維持にふさわしい食物があり、本来の生態に適した環境と習性が十分に発揮できる生活空間が必要となります。外温動物の爬虫類にとっては、特に、適正な温度、湿度管理が重要です。また、その個体の成長後の姿を想像した飼育環境も整えておくことも必要です。そのために必要な情報を説明し、理解してもらうことが大切です。

(3) 動物に起因する感染症

動物から人へ、人から動物へ病原体が感染すること、又はその感染によって起こる疾病を「人と動物の共通感染症」などといい、世界で約200種類程度あるといわれています。爬虫類に関しては、未知のことが多くありますが、これらの感染症の多くは手洗いの励行など、日頃の注意で防ぐことができるので、必要以上に心配することはありません。予防法としては、日頃から動物の健康状態に留意し、ペットの爬虫類のほとんどが野生動物であるということを強く認識し、新しい動物を導入するときは十分な検疫を設けることが第一です。また、飼い主は飼育動物との過度の接触を避けるようにしましょう。人と動物の共通感染症に関するパンフレットを用意し、説明をするなどの工夫も必要です。

(4) 飼うための届出許可等

飼う動物の種類によっては、危険な動物として都道府県知事等の許可が必要な場合があります。爬虫類では、カミツキガメ類、大型ヘビ類、ワニ類、有毒の種類が該当します。許可を得る場合には、守るべき事項や行政による立ち入り検査等の規制を受けることとなります。それらの心構えがあるかの確認と、具体的な手続きを含め、以後に問題がおきないように十分な説明が必要です。

(5) 購入後の飼育相談

動物が購入された後、販売業者が飼育に関する相談にも適切なアドバイスを提供することが求められています。

II. 共通事項

爬虫類の飼育開始にあたっては、最初に、現生の爬虫類は約6,500種という膨大な種数を数える動物群であり、その中の相当数の種がペットとして流通している現状と、それぞれの種が異なる飼育条件を求め、ということ認識する必要があります。また、流通している爬虫類全ての種において飼育技術が確立されていない（確立されている種のほうがはるかに少ない）という実情を踏まえて飼育管理を考えなければなりません。

1. 飼養動物の種類や品種を選ぶための情報

近年、爬虫類をペットとして飼育することがかなり普及してきました。流通する種数も増え、専門店のみならず総合ペットショップや観賞魚店でも扱う店舗が増えており、「鳴かない」、「臭わない」、「手間がかからない」といった表現で、一人暮らしや集合住宅でも飼育がしやすい動物であるという切り口で販売されている例も見られます。容姿の珍奇さから衝動買いされることも少なくないこと、また、一般的に爬虫類と認識されていないことも多い「ミドリガメ」の商品名で呼ばれるミシシippアカミミガメ (*Trachemys scripta elegans*) の幼体や、「ゼニガメ」（この呼び名は本来、ニホンイシガメ (*Mauremys japonica*) の幼体に対して名付けられたものでしたが、本種の生息数の減少と共に流通する数も激減し、近年ではクサガメ (*Chinemys reevesii*) の幼体に対しても使われるようになっていきます）の飼育人口は安価であることなどの理由から、大変多いと考えられます。

いずれにせよ、「手軽に飼育できる動物である」との誤解のもとに飼育が開始されており、必然的に正しい知識に基づいた適正な飼育がなされていない事例を目にすることも少なくありません。しかし、実際の爬虫類飼育は、爬虫類特有の性質や飼育している種ごとの情報を理解し、しっかりした飼育環境を設定した上で管理することが要求されます。

(1) 動物の特性

爬虫類に限ったことではありませんが、動物を飼育しようとするときには、その対象となる動物（種）の特性を十分に把握する必要があります。そのためには、好適な温度帯（至適温度帯）、好適な湿度、食性、行動特性（昼行性、夜行性など）、生息環境（地上棲、樹上棲など）、性質、成体のサイズ、寿命などの情報が必要であり、こうした情報を出来る限り提供すべきです。

特に、自ら体温を作り出すことが出来ない「外温動物」である爬虫類の場合は、温度管理の重要性が高いことを認識しておくべきです。

比較的多く耳にする質問に、「（人に）馴れますか？」というものがあります。ここで注意が必要なのは、この質問の真意は「（飼育者に）なつきますか？」というものであることです。

「馴れる」ということと「なつく」ということが全く違うものであることはいうまでもないでしょう。そして、ごく一部の種を除いて爬虫類には「なつく」ということはありません。飼育者の扱い（ハンドリングや給餌など）に馴れる事はあっても、犬や猫のような飼育者に対するなつき方はないと考えてよいでしょう。

また、爬虫類には人間に対しての危険性が高いとして、各地方自治体の条例により飼育を規制されている種が含まれています。このような種を飼育しようとする場合には、申請、規制条件を満たしたうえで許可がおりる、という流れがあることを理解しておかなければなりません。さらに、飼育を規制されている種以外にも非常に攻撃的であるなど、人間に危害を加える可能性のある種が存在し、十分な注意のもとで飼育管理する必要があることも、大切な情報です。

さらに、飼育が極めて困難であったり、事実上飼育が不可能な種が流通していることも事実です。一般的なペットとして飼育される爬虫類は、ヒョウモントカゲモドキ、キングヘビなど人工的に養殖が行われ、飼育下の環境に適応している種が選択されるべきでしょう。

外温動物とは

以前は爬虫類のように周囲の環境の温度によって体温が変動する動物のことを、「冷血動物」、「変温動物」といった呼び方をしていましたが、最近では「外温動物」という呼び方に変わってきています。

爬虫類は、一般に考えられているように単に周囲の温度で体温が決定されるのではなく、朝のうちや、エサを食べたあとなどは日光浴をして体温を上げたり、逆に暑いときには涼しい場所に避難して、積極的に体温を調整しています。飼育下でもこのような行動がとれるように、飼育ケージ内に場所による温度差を設けるようにします（これを温度勾配と呼びます）。

(2) 飼養目的

爬虫類にある程度の知識があり、選択した種が本当に好きで飼育しようとする場合、容姿から、また、販売価格から衝動的に購入しようとする場合、今後入手が困難になると予想されたり、価格が上昇することが予測されるからという投機的な理由など、飼育を開始する動機には様々なものがあり、場合によっては飼育ではなく入手（購入）が目的である場合もあります。安易な飼育の開始は、安易な飼育の放棄、不適切な環境における飼育につながるケースが多いことに留意したいものです。

(3) 自宅及び周辺的环境

実際に流通している爬虫類の中には、非常にコンパクトかつ簡素な施設で飼育できる種から、動物園クラスの設備を要求するものまで、様々な種が存在します。飼育者の住環境により、飼育可能な種がある程度決定されるという点は重要です。物理的な面では、四畳半一間のアパートで、最大甲長が80cmに達するうえに非常に成長速度の速いケヅメリクガメ (*Geochelone sulcata*) の飼育が可能であるわけがないのですが、これに近い事例は多く聞こえてきます。

また、特に集合住宅においては、たとえ小型で人間に対して全く無害な種であっても、ヘビの飼育には周囲から強烈な拒絶反応が出がちなものです。最終的には飼育者の判断にゆだねられる部分ですが、こうした点に関しては十分な確認が必要です。

(4) 野生由来ペット動物飼養の特殊性

犬や猫、ハムスター、フェレットなどの流通する個体が全て養殖された個体である動物と違って、爬虫類は野生採集個体が流通することが大変多いものです。また、人間の手によって養殖が行われている種や個体においても、それほど世代を経ておらず、飼育下の環境にそれほど適応していない場合もあります。このような動物を飼育する際には、その野生下における生態や生息環境を把握したうえで、できる限りこれを再現できるように飼育管理を行わないと、飼育の失敗につながります。

また、野生由来の個体に対しては、人と動物の共通感染症に対する警戒も必要となります。動物に触れた後は必ず手を洗う、といった極めて基本的な対応でこれに対するリスクは激減します。

ペットとして流通する爬虫類の中には、絶滅が懸念され、国際取引の規制を受けていたり原産国では保護を受けている種も存在します。飼育する種によっては「飼育個体に対する福祉」だけでなく「種に対する福祉」を考慮することも重要であり、責任を持って飼育することが求められます。

(5) 必要経費

飼育ケージやこれに付随する調度品、照明器具、保温器具などの飼育開始当初に必要な費用は、時として飼育しようとする動物の価格の数倍から数十倍に及ぶこともあります。特に動物の価格が低いときには、こうしたことに抵抗を感じる飼育者が多く、極力廉価で簡便な施設で飼育しようとする傾向があります。しかし、それぞれの種が要求する飼育環境はその価格とは全く関係がないもので、できる限りその要求を満たすものを用意しないと適切な飼育管理は不可能です。また、初期投資以降の飼育にかかる経費は、主に食餌の費用と水道、光熱費であり、

一般的に莫大なものにはなりません、大型になる種においては将来的に相当のものとなる可能性があることは当然です。

どのような場合にせよ、経済的観点から飼育される動物が不適切な扱いを受けるようなことは避けなければなりません。

2．終生飼養を確保するために必要な情報

爬虫類は哺乳類や鳥類などに比べて、終生飼養の例が非常に少ない動物です。いくつかの理由が考えられますが、大きな要因の一つとして、寿命の長さがあげられます。

最もペットに向けたトカゲの一つとされるヒョウモントカゲモドキ (*Eublepharis macularius*) には28年以上生きた記録がありますし、グリーンイグアナ (*Iguana iguana*) にも30年近い飼育記録があります。ヘビでは、カリフォルニアキングヘビ (*Lampropeltis getula californiae*) を例にとると、33年4ヵ月という記録があります。いずれも流通量が多く飼育される機会の多い種ですが、犬や猫をはるかに上回る寿命を持っていることはあまり認識されていないようです。カメは古くから長寿の代名詞として親しまれており、「長生きする動物である」という認識は持たれているはずですが、ミシシippアカミミガメ ミドリガメ (*Trachemys scripta elegans*) が40年ほど生きるということはなかなか実感にくいようですし、さらに一部の種が100年を超える寿命を持つことを現実的に考えることは難しいものです。

これほどの長い期間には飼育者の生活環境には様々な変化が起こりうるため、その全てに対して事前に考慮することは不可能です。このこと一つとっても、爬虫類は「手軽に飼育できる動物」ではないこと、それなりの覚悟とでもいべきものを持って飼育に臨むべきことを十分に認識することの必要性が理解できるかと思います。

もう一つの要因として、幼体で販売されることの多い動物の成長時のサイズに対する認識の不足があります。一般的な感覚では甲長が20cm以上のカメは「大きい」という感覚を持たれることが多く、事実、この程度のサイズのカメを持て余してしまう飼育者が多くなります。爬虫類として最も一般的で飼育人口が多いであろうミシシippアカミミガメは、「ミドリガメ」として販売されているサイズが成体であり、これ以上成長しないと思っている人も少なくありません。3年ほどで甲長は20cmに達し、雌であれば最終的に甲長30cmに達することもあるという事実を認識せずに飼育を開始すれば、適切な飼育空間を与えられないでしょうし、最終的には飼育個体の遺棄といった飼育放棄という結末を迎えるであろうことは想像に難くありません。「どこまで大きく育つかを理解しているか?」という点は必ず確認すべきであり、また、その際には正確な情報を伝えることが必要です。

また、飼育しようとする種の成長スピードをよく認識しておくことも大切で、特に大型になる種の場合には重要なポイントです。

先にあげたグリーンイグアナは、全長30cmに満たない幼体が販売されますが、適正な飼育環境のもとでは1年で全長が1mに達することもまれではありません。人気の高いリクガメにおいても、ケヅメリクガメ (*Geochelone sulcata*) は、最も販売されることの多い甲長6cmほどの幼体が、順調に成長すると1ヵ月に1cmほども甲長が伸び、3年後には甲長40cm、体重は25kgを超えることもあります。飼育者の感覚がこのような成長スピードについていくことができないと、飼育の放棄や飼育動物の遺棄につながるため、十分な説明が求められるところです。

さらに、爬虫類は必ずしも適切でない飼育環境下においても、相当の期間生存する場合がしばしばあります。言い換えると、3年、5年といった長い期間をかけて徐々に死んでいくという事態が発生するので、飼育個体の状態を把握するために日頃の観察が非常に重要なものとなります。

3．適正飼養を確保するために必要な情報

先に述べたとおり、爬虫類には多くの種が含まれており、それぞれの種によって要求する飼育環境や管理が異なります。正確な情報のもとに、飼育環境の設定、管理が行われ、適正な飼育が行わ

れるようにしなければなりません。以下に、一般的に留意すべき点について大まかに述べることでありますが、常に動物の状態を観察して、最初の環境設定や管理方法を修正することが大切です。

(1) 飼育ケージ

一般的に求められる条件は、飼育個体に対して十分な広さを持つこと、脱走できないこと、温度や湿度の管理がしやすいこと、給餌や清掃といったメンテナンスがしやすいこと、観察がしやすいことなどです。

樹上棲の種には底面積よりも高さを重視すべきですし、リクガメ類のように行動範囲が二次元的な種には底面積が重要になります。水を張って飼育する必要のある水棲カメ類には観賞魚用の水槽が用いられることが多いと思いますが、陸上部分を設ける必要があることと、水深を深くとることによってカメの行動空間を広くできること、水量の増加による水質悪化の鈍化などのメリットから、なるべく深い水槽を選択すべきです。

小型種であっても、広いスペースを与えないと精神的に安定しない種や個体が存在します。個体が小さいからといって短絡的に小さなケージで飼育することは避けるべきでしょう。

また、一部の種を除いては個体間の干渉が激しいことが多く、一個体一ケージが基本となります。

(2) 飼育ケージ内の調度

樹上棲種には止まり木を、隠れる性質がある種にはシェルターを、といった種ごとの要求に合わせたものを用意します。自然を模して、美しくレイアウトすることは飼育の大きな楽しみの一つとなりますが、メンテナンス性には注意を払いましょう。

床材の選択には頭を悩ませることが多いのですが、歩きやすいこと、ほこりが出にくいこと、汚れが目立ち清掃や交換がしやすいことなどを基準に選びます。また、多湿を好む種には保湿性が高いもの、乾燥した環境に生息する種には、濡れてもすぐに乾くものを選択します。

(3) 温度管理

爬虫類は外温動物ですから、それぞれの種の要求に沿った温度管理を行う必要があります。温度により代謝機能変動し、成長、内分泌、消化などに大きな影響を与えます。必ずしも熱帯産の種が高い温度を好むという訳ではなく、飼育種ごとの至適温度帯を把握して飼育環境の温度を設定します。わが国の夏の気温は、種によっては致命的な場合があり、低温を好む種の飼育にあたっては、エアコンによる温度管理が必要な場合もあります。

重要なのは飼育ケージ内に温度勾配を設けて、飼育個体はその時点で最も快適な温度の場所に移動できるようにすることです。ホットスポットと呼ばれる高温の場所をケージの一方に設置し、もう一方は低温になるように、このためにも飼育ケージにはゆとりのあるサイズが要求されます。

冬季の暖房に対しては、様々な保温器具が販売されていますが、大切なことは保温電球のような空気を暖めて飼育環境そのものの温度を上昇させるタイプの器具と、パネルヒーターのように動物自体を暖める器具を必ず併用することです。温帯に分布する種に対して冬眠を試みたり、無加温で越冬させようとする飼育者が見られますが、前者については相当の飼育スキルが必要なこと、後者については動物の生命を危険にさらす可能性が高いことから、基本的には避けるべきです。

温度は目に見えません、最高最低温度計の設置は爬虫類の飼育にあたって必須の装備です。

(4) 湿度管理

熱帯雨林に生息し高い湿度を好むものから、砂漠に住み乾燥した環境に適応しているものまでさまざまな種があります。いずれも通気性を十分に確保することが大切で、たとえ高湿度を要求する種であっても蒸れるような環境では体調を崩します。

また、冬季の極端に湿度が低下する季節には、暖房することによる乾燥とあいまって砂漠棲の種であってもしばしば脱水を起こすため、霧を吹くなどして最低限の湿度の確保に努めます。

(5) 照明

例外はあるものの、多くのヤモリのような夜行性の種や、多くのヘビ類は照明を必要としませんが、多くのカメ類のような昼行性の種には必ず照明を設置し、昼間の時間帯に点灯するようにします。

爬虫類の飼育においては、古くから特にカルシウム代謝に大きな影響を持つ紫外線の照射に関心が高く、現在ではこの点を重視した照明器具が多く開発、販売されているので、こうした製品を利用します。ただし、紫外線は強ければよいといった性格のものではなく、種ごとの紫外線要求量に見合ったものを選択します。

直射日光による日光浴は、大いに奨励されますが、通気性の確保及び動物が避難できる日陰の部分を用意することと、日光浴時の気温に十分な配慮をしないと熱死させてしまうことがあります。

また、昼行性の種であってもむやみに明るい環境は好まない種も存在します。このような種に対してはシェルターを設けたり、飼育ケージに対して小型の照明器具を使用するといった配慮が必要となります。

(6) 食餌と水

人工飼料が非常に発達しており、これだけで終生飼育が可能な水棲ガメ類以外の種においては、飼育している種に合ったエサを与えなければなりません。

肉食の種には、エサ用に販売されている昆虫類やマウス、魚、貝類、脂肪分の少ない肉などをそれぞれの種の食性に合わせて与えます。特にコオロギやミルワームといった昆虫類はカルシウム・リン酸比が悪いので必ずカルシウムの粉末をまぶして与えるようにします。これに加えてビタミン、ミネラルなどの粉末も定期的に加えます。マウスは完全栄養であると考えられることが多いのですが、冷凍されたものはビタミンが破壊されていることを考慮し、やはり定期的なビタミンの添加が推奨されます。

草食種には、市販の野菜、果実、野草などを与えます。ここでもカルシウムとビタミンの添加は必須となります。

雑食で、何でも食べるから飼育しやすいという表現をされる種がありますが、これは逆に様々なものをバランスよく与える必要があるということで、必ずしも飼育しやすいわけではありません。入手しやすい食餌に偏ることのないように注意が必要です。

飲用の水は必ず用意します。トカゲ類には止水を水と認識しない種があり、霧を吹いたり、ドリップ式の容器を用意する必要もあるでしょう。乾燥した地域に生息するリクガメ類には、水を飲もうとしない個体が見受けられます。このような場合は、無理に飲ませようとするよりは、食餌にレタスやキュウリなどの水分量の多いものを混ぜて与えるとよいでしょう。ヘビ類には必ず全身を浸すことのできる水容器を設置します。

4 . 繁殖に関する情報

動物を飼育するうえで繁殖を試みることは大きな楽しみの一つですし、自らの飼育スキルの証ともなる部分です。さらに飼育技術が確立されているとはいいがたい爬虫類飼育の現状や、野生資源の浪費を避ける意味合いからも、飼育下における繁殖の試み、及びその技術の確立は推奨されるべきものです。事実この分野は、アマチュアの先導により発展してきた要素が大きく、現在もその傾向はそれほど大きく変化していません。

しかし、爬虫類の繁殖は決して簡単なものではありません。単純に雌雄を一緒に飼育していればよい、というようなものではないことは当然で、本来適正な飼育に必要な、飼育スペース、温度、湿度、光環境、栄養などの条件のバランスを高いレベルで取ったうえでさらに経験や勘に頼る部分があること、また、最終的には飼育している個体次第で結果が左右されてしまうことも多いものです。

具体的なリスクとしては、爬虫類の求愛行動には暴力的な行動を取る種があり、発情のタイミングが合わないまま雌雄を同居させた場合に、雄の求愛に答えようとしない雌が傷つけられたり、反

対に雌に逆襲された雄が怪我を負わされること（極端な場合どちらかが殺されることもあります）がありますが、同様の理由で普段から雌雄の同居飼育は避けるべきです。さらに雌の体力が十分ではない状態で、産卵にいたりその後体力を回復できないまま死亡してしまうこと、抱卵はしたものの、温度や産卵スペースが不適切なために産卵することができず、卵詰まりを起こしてしまうことなどがあります。

また、発情促進や受胎率の向上のために、冬眠も含めて季節的な低温にさらすという操作が必要な種も多いのですが、その際の温度管理や過度の乾燥による個体のへい死も大きなリスクとしてあげることができます。

繁殖を試みるにあたっては、まず何よりも飼育している個体を良好な状態に保つ、いわゆる「飼いこんだ」状態を実現する必要性が非常に大きく、この飼い込む期間は年単位で考える必要があります。

さらに、繁殖を考える際には、「どのような種を繁殖させるか」という点にも考慮が必要です。成功した場合、種によっては1回の産卵によって数十頭のベビーが得られることもあります。殖やした個体を全て、手元に置いて飼育することが可能ならばよいのですが、そうではない場合には責任を持って飼育できる譲渡先を見つける必要があります。この譲渡先を見つけるということの難易度が、種によって大幅に違ってくることをよく理解したうえで種の選択を行わないと、不適切な飼育環境におかれる動物を増やす結果を招く上、飼育者の飼育意欲を削ぐことにもなりかねません。このような個体が動物販売業者に持ち込まれることもよくあります。繁殖者が換金したい気持ちは理解できますが、業界の実情からなかなか希望通りには行かないことが多いと思われます。商業的な人工養殖が盛んに行われている種ほど、飼育下での繁殖に適応しており一般家庭での繁殖が成功する可能性が高いといえますが、こうした種は流通量も多く適切な譲渡先の確保が難しいというのも事実です。

いずれにせよ、動物の安易な繁殖は慎むべきものであり、入念な準備と十分な計画性を持って望みたいものです。

5. 人と動物の共通感染症の予防に必要な情報

(1) 感染症の種類

世界で約200種類近くある「人と動物の共通感染症」の中で、爬虫類から人に感染する恐れのある代表的な病気はサルモネラ菌による感染症です。国内でもミドリガメから感染した事例があり、新聞などで報道され注意が呼びかけられたことがあります。アメリカでは、全家庭の約3%が何らかの爬虫類を飼育していると推定され、年間約70,000人がサルモネラ菌に感染しているといわれています。サルモネラ症は細菌性食中毒の代表といえますが、人に感染すると急性胃腸炎の症状が出て、時には敗血症を起こし生命にかかわる事態となることもあり、5歳未満の子供や高齢者、基礎疾患のある人（糖尿病などの免疫機能が低下する疾患）及び妊婦は特に注意を要します。爬虫類も人と同様に急性胃腸炎の症状が出ることもありますが、無症状でサルモネラ菌を排出する例もありますので注意が必要です。サルモネラ菌以外に、主として下痢の原因となる細菌を保有していることもあります。"

また、口腔内に連鎖球菌、ブドウ球菌などの細菌を保有することがありますが、咬まれた傷から細菌が感染し、化膿の原因となることがあります。イグアナに顔を咬まれて炎症を起こした事例が、海外で報告されています。

まれにパストレラや抗酸菌といった病原性の強い細菌を口腔内に保有していることも海外で報告されています。そのため、爬虫類に咬まれたとき（場合によっては引っかかれたときも）の注意も必要となります。爬虫類に咬まれて痛み、腫れ、発赤、化膿などの症状があるときには、医療機関にて受診することを勧めてください。

現在のところ、爬虫類飼育による人への感染症発生は、それほど多くはありませんが、今後増加する心配もあります。

(2) 予防のための注意点

次のような注意を行うことで、感染は十分に予防できます。

- ・動物及びそのケージ等施設に触れた後は、常に石けんと流水で十分に手を洗う。
- ・糞便は素手で触らない。
- ・特に、カメ類の水槽の清掃は頻繁に行い、漂白剤等を用いて消毒する。
- ・爬虫類は台所や食事をする場所に入れない。
- ・餌皿、飼育ケージ、水槽などの洗浄は台所等では行わない。浴槽などを使用した場合は十分に洗浄し、漂白剤で消毒する。
- ・乳幼児や高齢者との接触は避ける。
- ・咬まれたり、引かれたときは十分に洗浄、消毒を行う。
- ・化膿した傷がなかなか治らないときは、医師の診断を受ける。

犬や猫を飼うときも同じですが、爬虫類も病原菌をもっている可能性があることを認識した上で飼うことが重要です。そのため、動物販売業者には、爬虫類の飼い主や購入希望者に対し、これらの感染症に関する情報を提供することが求められます。

6. 逸走・危害・迷惑の発生防止

(1) 逸走防止

爬虫類は脱走の名人です。飼い主は、爬虫類は必ず逃げるという前提のもとに飼育管理を行う必要があります。爬虫類は一般的には好まれない動物です。逸走（脱走）した場合は、その容姿等から攻撃性や危害等がない場合でも、人々は恐怖感、嫌悪感等の反応を示すことがあり、迷惑や騒ぎとなることがあります。飼育施設は逸走できない構造とし、施設の点検など注意を払って管理するのはもちろんですが、たとえうっかりしていても逃げられることのない管理システムをあらかじめ確立しておくなど、慎重な上にも慎重な管理が求められます。また、逸走した場合は、飼い主が自らの責任で、速やかに捜索し捕獲してください。人に危害を与える可能性のある動物の場合は、110番通報等が必要です。

一方、飼育動物が逸走、遺棄などにより野生化する外来生物問題や、危害等が発生した場合、飼い主が判明することが困難であったり、保護収容されても個体標識がないため飼い主の元へ戻れなくなる事例が後を絶ちません。「動物愛護管理法」では、動物の飼い主に対し、飼い主責任の所在を明らかにするとともに、逸走した動物の飼い主発見の促進や遺棄防止の徹底を図るために、その動物が自分の飼育動物であることを明示するよう求められています。爬虫類の個体識別方法には、その個体の大きさにもよりますが、マイクロチップなどがあります。動物種に応じた個体識別措置を講じてください。

(2) 危害防止

動物による危害防止のため、「動物愛護管理法」は次のようなことを定めています。

「人の生命、身体又は財産に害を加えるおそれがある動物として政令で定める動物（以下危険動物という）の飼養又は保管を行おうとする者は、環境省令で定めるところにより、特定動物の種類ごとに特定動物の飼養又は保管のための施設の所在地を管轄する都道府県知事の許可を受けなければならない」と定め、危険動物の種類については政令により指定されています。

政令により指定されている危険動物

人の生命・身体・財産などの侵害の恐れがある動物として政令で定めている動物のうち、爬虫類については次のとおりです。

科名	種名
(1) かめ目	
かみつきがめ科	かみつきがめ科全種
(2) とかげ目	
どくとかげ科	どくとかげ科全種
おおとかげ科	ハナブトオオトカゲ、コモドオオトカゲ
ボア科	ボアコンストリクター、アナコンダ、アメジストニシキヘビ、インドニシキヘビ、アミメニシキヘビ、アフリカニシキヘビ
なみへび科	ブームスラング属全種、アフリカツルヘビ属全種、ヤマカガシ属全種、タチメニス属全種
コブラ科	コブラ科全種
くさりへび科	くさりへび科全種
(3) わに目	
アリゲーター科	アリゲーター科全種
クロコダイル科	クロコダイル科全種
ガビアル科	ガビアル科全種

家庭動物等の飼養及び保管に関する基準による飼養上の留意事項

家庭動物等の飼養及び保管に関する基準の第3に、特に、家畜化されていない野生動物等を飼養する場合について、飼養及び保管にあたっての配慮すべき事項が規定されています。

- 1) その生態、習性及び生理に即した特別の飼養・保管のための諸条件を整備し、維持する必要があること、譲渡が難しく飼養の中止が容易ではないこと、人に危害を加える恐れのある種類が含まれていること等を、その飼養に先立ち慎重に検討すべきである。
- 2) こうした動物は、ひとたび逸走等により自然生態系に移入された場合には、生物多様性の保全上の問題が生じる恐れが大きいことから、飼養者の責任は重大であり、この点を十分に自覚する必要がある。

動物の愛護及び管理に関する条例

(通称ペット条例：自治体により名称、内容は多少異なります。)

多くの地方自治体は、人の生命、身体又は財産への侵害の恐れがある動物として政令で定めた動物を飼養する場合は許可を必要とすることと、守るべき事項や行政による立ち入り検査等の規制措置を内容とする条例を定めています。詳細については各自治体にお問い合わせください。

7. 生物多様性の保全

健全で安定した生態系を維持していくためには、地球上に様々な多くの動物種が存在し、多様な生息環境が存在することが必要です。

しかし近年、様々な原因により、地球上の生態系が破壊あるいは影響を受けつつあることが報告されていますが、このところ注目されていることに、飼育されていたペットの遺棄・逸走による生態系影響の問題があります。海外からわが国に移入された動物は、本来わが国に生息する生物とその性質を異にするものであることから、移入動物が国内の自然界に定着した場合、在来種の捕食や駆逐、在来種との交雑などを招き、生態系へ影響を及ぼしているのです。

マングースやノネコの影響で絶滅の危機に直面している沖縄のヤンバルクイナの例をはじめとして、ブラックバス、カミツキガメ、ミシシippアカミミガメの国内定着による在来種の駆逐などが

生態系の影響、攪乱要因となっていることはよく知られているところです。

これらの問題に対処するため、国は平成16年6月「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」を制定し、今後、政令で定める外来の動物種についてはその輸入・飼育を厳しく規制することになりました。

また、「動物愛護管理法」は飼い主の責任として動物愛護と危害、迷惑防止のため、逸走防止と遺棄の禁止を定め、適正な管理を求めています。

人と動物が共生できる社会を実現していくためには、近隣への迷惑防止の面からだけでなく、動物の遺棄・逸走などの不適正な飼育、特に外国からの輸入の多い爬虫類の飼育に際しては、生態系に影響を及ぼすおそれがあるということを認識して、慎重な飼育が望まれます。

8 . 関係法令

爬虫類の販売や飼育にあたっては、「動物の愛護及び管理に関する法律」をはじめとした国内法のほか、各国の法律や国際法により制限されているものが多くあります。

以下、その主なものについて示します。

(1) 国内法

動物の愛護及び管理に関する法律（昭和48年10月1日 法律第105号）

この法律は、動物の愛護に関する事項と動物の管理に関する事項を定めて、国民の間に生命尊重などの情操を養うことに役立たせるとともに、動物による人の生命、身体、財産等に対する侵害を防止することを目的としており、この中で飼い主として果たさなければならない責任と努めなければならない義務等を定めています。

【基準】

飼い主が法律で定められた責任を果たすために守らなければならない事項を示しています。動物愛護管理法に基づき次のような4つの基準が定められています。

- ・家庭動物等の飼養及び保管に関する基準（平成14年5月28日 環境省告示第37号）
- ・展示動物の飼養及び保管に関する基準（平成16年4月30日 環境省告示第33号）
- ・実験動物の飼養及び保管等に関する基準（昭和55年3月27日 総理府告示第6号）
- ・産業動物の飼養及び保管に関する基準（昭和62年10月9日 総理府告示第22号）

このほか、動物取扱業を対象として次の基準があり、これに違反した場合は改善命令、措置命令、罰則が定められています。

- ・動物取扱業者が遵守すべき動物の管理の方法等の細目

（平成18年1月20日 環境省告示第20号）

動物愛護管理関係条例

動物愛護管理法に基づいて都道府県等で制定している、動物の飼養に関する条例があります。各都道府県等によって内容に違いがありますが、危険な動物の飼養の許可制、犬・猫の引取り、犬の逸走防止などが規定されています。

また、区市町村で条例を制定しているところもあります。内容についてはそれぞれの自治体の担当部署に問い合わせ下さい。

特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律

（平成16年6月2日 法律第78号）

この法律は、外国や国内の他の地域から持ち込まれた外来生物による生態系への影響（在来種の捕食、競合、駆逐や交雑による遺伝的攪乱等）、人の健康や農林水産業者への被害を防止するため、政令で定める外来生物（特定外来生物）の輸入の原則禁止、飼養の禁止や許可制、個体識別措置義務、野外へ放つことの禁止、防除などについて定めています。

特定外来生物による生態系等に係る被害の防止 に関する法律の概要

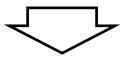
目的

特定外来生物の飼養、輸入等について必要な規制を行うとともに、野外等に存する特定外来生物の防除を行うこと等により、特定外来生物による生態系、人の生命若しくは身体又は農林水産業に係る被害を防止する。

特定外来生物被害防止基本方針の策定及び公表

特定外来生物

生態系等に係る被害を及ぼし、又は及ぼすおそれのある外来生物を政令で指定



特定外来生物の飼養・ 輸入等の規制

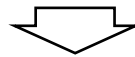
飼養、栽培、保管又は運搬は、主務大臣の許可を受けた場合(学術研究等の目的で適正に管理する施設等を有する)等を除き、禁止
輸入は、許可を受けた場合を除き、禁止
個体識別措置等を講じる義務
野外へ放つこと等の禁止

防除

野外における特定外来生物について国のほか地方公共団体等の参加により防除を促進する。

未判定外来生物

生態系等に係る被害を及ぼすおそれがあるかどうか未判定の外来生物を主務省令で指定



未判定外来生物の 輸入の制限

輸入者に届出義務
判定が終わるまでの一定期間輸入を制限

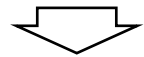


主務大臣の 判定

被害を及ぼす
おそれあり

被害を及ぼす
おそれなし

指定されない
生物



規制なし

その他、輸入時に特定外来生物を確認する証明書の添付、調査、普及啓発、罰則等所要の規定を整備する。

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）

（平成4年6月5日 法律第75号）

野生動植物が生態系及び自然環境の重要な一部として人類の豊かな生活に欠かすことのできないものであることから、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存を図ることを目的としています。

捕獲及び譲渡の禁止、国際希少野生動植物種の個体登録、生息地などの保護に関する規制などを規定しています。

国際希少野生動植物は、商用目的で繁殖された個体でも、登録したものでなければ販売、譲渡、陳列はできません。譲渡、売買にあたっては、登録票があることを必ず確認して下さい。また、販売、頒布目的で陳列するときは、登録票を備え付けなければいけません。

（2）条約

絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約

（CITES = Convention on International Trade in Endangered Species of Wild Fauna and Flora）

（ワシントン条約 昭和55年条約第2号）

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」（以下「サイテス」という。）は、絶滅の危機にある野生動植物を保護するために制定された国際条約で、1973年に採択、75年に発効し、わが国では1980年に国会承認され批准されています。条約の規制対象となる野生動物種は、3段階の附属書として絶滅の危機の度合いに応じて次のように分類されています。

附属書Ⅰ

これに含まれている種は、最も絶滅のおそれがあるとされているもので、学術研究用として輸出許可証と輸入許可証が付けられたものと、人工飼育により繁殖させた個体（第2世代の個体）以外の商業取引は原則禁止されています。

附属書Ⅱ

これに含まれている種は、現在必ずしも絶滅のおそれがあるというわけではありませんが、その国際取引を制限しておかないと将来絶滅のおそれのある種になる可能性があると考えられているものです。

これについては商業目的の国際取引は可能ですが、その輸出入に際しては輸出国の輸出許可書が必要とされています。

附属書Ⅲ

これに含まれている種は、特定の締約国にとって自国内で規制する必要があるため、かつ取引の取り締まりのため、他の締約国の協力が必要と認められることから指定された種です。

これについては商業目的の国内取引は可能ですが、その輸出入に際して、附属書掲載国からの輸出の場合は当該国の輸出許可証が、それ以外の原産国からの輸出の場合は原産地証明が必要となっています。

III . 種類ごとの個別事項

〇ワニ

1 . ワニ

(1) 分類、品種

ワニはワニ目に属する動物で、通常 3 科22種に分けられます。ワニの英語名は全体ではクロコディリアン、グループごとにアリゲーター、カイマン、クロコダイル、ガビアル(ガリアル)と呼びます。これは和名と単純に合致しているとは限りません。

アリゲーター科：アリゲーター 2 種 ミシシッピワニ (*Alligator mississippiensis*)、ヨウスコウワニ (*Alligator sinensis*)、カイマン 5 種 メガネカイマン (*Caiman crocodilus*) など。

クロコダイル科：クロコダイル14種 イリエワニ (*Crocodylus porosus*)、ナイルワニ (*Crocodylus niloticus*)、コビトワニ (*Osteolaemus tetraspis*) など。

ガビアル科：ガビアル 1 種 インドガビアル (*Gavialis gangeticus*) 。

カイマンとガビアルは、そのままカイマンとガビアルといいます。アリゲーターはワニとすることが多いのですが、アリゲーターとすることもあります。クロコダイルはだいたいワニと訳されます。

(2) 形態、生理、習性

ワニは22種に分けられますが、全体的な印象は似ていて、1つにして扱えます。ただ大きさは最大になっても1.5mに満たないものから、10mに達するものまであります。子供は20~30cmで生まれてかわいいものですが、成長が速く数年で1mを超えますから、危険になっていきます。餌が肉や魚ですから臭いは出ますし、水の濾過をしっかりとする必要があります。繁殖期や地震や雷の時などには大声で鳴く種類もありますが、そんなにやかましいものではありません。寿命はおおむねミシシッピワニ56年、メガネカイマン22年、コビトワニ42年です。

(3) 飼育上必要な設備

ワニはアリゲーターの2種以外、熱帯・亜熱帯に分布しています。水中で生活し、陸にもよく上がります。水はワニがある程度泳げる位の広さが必要です。糞はだいたい水中でしますが、時々陸上でもします。濾過循環装置をつけ、陸上から水を流しこまないような排水も必要です。水温は25~28 位に保ち、20 以下にはしないでください。湿度は考える必要はないと思われませんが、採光は必要で、日光浴ができればよいのですが、できなければ陸上でひよこ電球や赤外線ランプで照射してください。気温は30 位あったらよいでしょう。飼育

場所は限られていますから、温度が上がり過ぎないように注意が必要です。通風はあまり注意する必要はないかもしれませんが、ムレないように気を付けてください。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌はマウスやラットなどのネズミ、鳥、淡水魚（ドジョウ、小魚、鯉等）です。海水魚は餌の全体量の半分位なら大丈夫のような報告もありますが、半分以下に控えた方がよいと思われれます。その他、馬肉、レバー等があげられ週に1～2回与えます。子ワニにはカルシウムやビタミンを多く含む餌を与えてください。給水については、生活水を十分濾過する必要があります。運動はあまり気にしなくてよいと思われれますが、逸走（脱走）には十分留意して、水槽の場合は金網などでフタをして、重しをのせておく必要があります。手荒な扱いをすると、気性が荒い個体になります。咬まれないように気を付けながら、やさしくしてください。近寄ると、たいてい餌をくれるものと思って寄って来て、待つようになります。

(5) 健康と安全の管理

主な病気とその予防法としては、ワニに限らず爬虫類の健康管理はまず温度管理です。風邪や肺炎は温度管理が十分ならたいてい大丈夫です。

脂肪織炎は海水魚を与え続けると起こりやすくなります。

観察は動物を飼うときはいつでも必要で、食べ残し、糞、動きなどに注意して見てください。成長を考慮しながら、太りすぎなら餌のやりすぎに注意し、餌が残らないようなら、時々餌を増やして様子を見ます。餌はネズミ中心がよいと思われれますが、ヒヨコ、鯉、馬肉、レバーなどを組み合わせて与えます。餌は様々な種類を与えた方がよいでしょう。ケージ内は清潔に保ってください。ワニは水中で過ごすことが多いので、特に水は清潔に保ってください。不潔だと健康にも影響が出るでしょう。

(6) その他特記事項

ワニ目は全種がサイテスの附属書II以上で、一部が附属書Iに属します。

(2)形態、生理、習性で述べたように、かなり大きくなりますし、全種危険動物に指定されていますので、飼育には許可が必要ですし、施設・設備も大掛かりになります。ペットとして飼うには、死ぬまで飼うつもりがなければ、飼うべきではありません。飼い主がなくなっても、家族が責任を持つべきです。飼うのであれば、ワニが活着している限り一生飼うと覚悟を決めて飼ってください。

しかしながら、ワニ類は普通の家庭では飼うべきではなく、動物園や水族館のような施設に任せるべきだと思われれます。

○カメ

カメはカメ目に属する動物で、通常12科200種以上に分けられます。甲羅を持ち、原則として、甲羅に頭・四肢・尾を隠すことができます。

カメが住む場所は、例外はありますが、四肢の形態である程度判断できます。池や川などに住むヌマガメ類は、指の間の水かきの発達程度で分かりにくいかもしれませんが、指がはっきり分かります。陸にすむリクガメ類は、四肢がこん棒状をしていて、爪ははっきり分かりますが、1本1本の指は分かりません。海にすむウミガメ類は、前肢がオール状をしています。

爬虫類では大きさを表すのに、通常、頭の前から尾の先までの全長で表しますが（これを体長ということもありますが、哺乳類では体長は尾を除いた長さなので、全長の方がいいでしょう）、カメは頭や尾を甲羅の間にかく特徴があり、測るのが難しいので、甲長（背甲 背中の甲羅の長さ）で示するのが普通です。

2. ミシシippアカミミガメ（ミドリガメ）

(1) 分類、品種

ミシシippアカミミガメ (*Trachemys scripta elegans*) はイシガメやクサガメと同じヌマガメ科のカメで、北アメリカに分布しています。このカメは小さい時に緑色をしていますから、ミドリガメといわれています。しかし緑色をした子ガメがミシシippアカミミガメだとは限りません。

緑色をした子ガメは、近縁のアメリカヌマガメ類の子ガメだけでもたくさんいるのです。ただ日本に輸入される大部分がミシシippアカミミガメの子ガメだということで、ミドリガメといえば、ミシシippアカミミガメということになっています。ちなみに英語でグリーンタートルというとアオウミガメのことです。以下の「アカミミガメ」は「ミシシippアカミミガメ」を指します。

(2) 形態、生理、習性

ミドリガメという商品名で販売されている時の甲長はわずか3 cm程度ですが、順調に成長すると4～5年後には雌で28cmに達します。寿命はおおむね20年ほどといわれています。

小さい頃は緑色をしています。成長するとオリーブ褐色の地に黒や黄褐色の斑紋のはいった地味な色彩になります。和名が表すように、耳の付近を横切る赤いライン模様がありません。また、改良品種として、アルビノやパステルといったものがありますが、アルビノ個体においては、目が悪い、あるいは目が弱くて眼病になりやすい虚弱な個体が散見されます。

また、本来必要な日光浴の量を調節する必要があるなど、アカミミガメとは思えない、飼育困難種ともいえる側面があります。

雌雄の鑑別は前足の爪と尻尾の形態をみて行います。爪がフォークのように長く、尻尾も太くて長く、総排泄腔が甲羅の辺縁より外に位置するのが雄です。また成長しきった個体で

は雄のほうが雌より小柄です。

温帯性のカメであり、日本の四季によく順応します。十分なスペースと良好な環境を用意すれば、通年屋外飼育が可能で、屋内飼育よりもむしろ健康でプロポーションのよいカメに育てることができます。発情した雄は、長い爪を使って独特の求愛行動をとります。

肉食に近い雑食性で、野生ではザリガニをはじめとする水棲小動物やその死骸、各種水草やその腐植などを口にしています。

泳ぐという行動に特化した形態をしています。甲羅は水の抵抗が少ないなめらかなカーブを描き、手足には広く発達した水かきがあり、かなりのスピードで泳ぎまわることができます。水から突き出した木の枝などにも巧みによじ登って日光浴をするなど、意外なほど立体的な活動を行います。陸上でも短距離ならば相当なスピードで走ることができます。

成長して20数cmに達したカメは、人馴れしている個体を除き、おおむね荒い性質を持っており、咬み付く力も強く、くちばしも鋭いので、咬まれるとけがをします。

大きな個体を屋内で水槽飼育をする場合、毎日水を換えても大量の糞尿によって相当な悪臭がします。汚水には大量の雑菌が繁殖しているため、大変不衛生です。

(3) 飼育上必要な設備と機材

アカミミガメは劣悪な環境でも生存し、間違った飼育方法でもなかなか死亡しないため、正しい飼育方法が省みられることは多くありません。

アカミミガメの本来の生態を考えると、屋外の池で飼育するのが理想的です。ベランダに大型水槽を設置した飼育がこれに続きます。しかし、たいていの場合、屋内の水槽飼育ということになりますが、大きく成長した個体では、最低でも90cm。通常は120cmの大型水槽を用意しないと、泳ぎ回ることができません。よく行われている浅く水をはったタライや60cm水槽での飼育は、愛玩動物としての飼育という概念から逸脱し、虐待ともいえる環境になります。

少量の水を頻繁に交換するタライ方式は、体型の異常や、カビなどの皮膚感染、大量の雑菌の繁殖といった問題があります。一方で飼育コストがかからないことや、日光浴をするため容器ごと移動がしやすいといったメリットがありますが、いずれにせよアカミミガメの正しい終生飼養の方法とはいえません。

以上のことからアカミミガメを正しく飼育するためには、アロワナなどの大型魚を飼育するつもりで飼育施設を用意する必要があります。ただし、アロワナなどよりもはるかに水を汚しますので、強力かつ大きな濾過システムをつくる必要があります。目詰まりのしにくい荒めの濾材(直径3～4cm大の溶岩濾材が最適)を底面濾過装置(穴の開いた塩ビ板に塩ビパイプで足を付けスノコにしたもの)にセットして、これに大きめの外部濾過装置を接続して水をまわし、月に1度程度、部分的に水換えを行います。底面濾過装置にヘドロが溜まり始めたら、水槽ごと大掃除をしますが、直径3～4cm大の溶岩濾材を利用すると、おおむね年に1度程度のメンテナンスで済みます。外部濾過装置の濾材も同梱のものと溶岩濾材を入れ替えて使用すると、メンテナンスを頻繁にしなくて済みます。直径3～4cm大の溶岩濾材

は、隙間が広いので目詰まりしにくく、好気的な濾過が行われます。また、ここに発生した様々な微生物によってカメの糞や食べ残しの餌が分解され、外部濾過装置のポンプを詰まらせません。さらに、微生物が構築する生態系によって、大腸菌やサルモネラ菌、カビなど有害な微生物が捕食され、皮膚病などの病気の発生が抑えられ、飼い主の衛生にも良好な水が作られます。

甲羅干しのための陸場を水面付近に作ります。従来からいわれているような底砂利で傾斜を作るのではなく、十分な水深をとった上で、浮島をセットします。子ガメから親ガメまであらゆる大きさのカメに対応した様々な製品が売られていますのでそれを利用します。

照明は、人工太陽灯を浮島に向けて照射し、上陸したカメが照明にあたるようにします。

室内飼育のカメにあてる照明は、以下の要因を満たしたうえで、太陽光の代用とせねばなりません。

すなわち、体温を上げるための熱(カメの体温調節を水槽の水温調節でまかなおうとするのは間違いです)、十分に明るいこと(照度)、物体本来の色がきちんと見えるような光の色(演色性)、カメの生理活性を高める波長を含むこと(カルシウム代謝や皮膚の新陳代謝に必要な紫外線など)、などの要素を過不足なく満たしていないと、カメの健康は維持できません。市販の器具でたとえると、ハロゲンライトで熱と明るさを確保し、これに爬虫類用の蛍光灯を組み合わせて紫外線を補助するというのが一般的です。また、少し高価ですが、HIDランプ(水銀灯やメタルハライドランプなどの高輝度放電管)は、1灯で全ての要素をカバーできます。

ちなみに、窓越しの日光は、紫外線が足りないといわれますが、トータルのエネルギー量が桁違いに大きいので、電気代を使って人工の光源を使用するよりもはるかに効果的で経済的です。まずは水槽の位置を日当たりのよい窓際に置くことを考えましょう。ただし、夏の暑さで水槽が異常高温になる危険もありますので注意が必要です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は市販のヌマガメ用配合飼料か、鯉の餌が利用できます。カメの餌と称する商品の中には、バランスのよい配合飼料以外にも色々ありますので、犬でいうところのドッグフードに相当する配合飼料を選びます。バランスのよい配合飼料を与える限り、基本的に副食は必要ありません。

必須ではありませんが、爬虫類用のビタミンやカルシウムを配合飼料に添加して与えると病気の予防になります。ただし与え過ぎは過剰症の心配がありますので、注意書きにしたがって使用してください。

毎日食べるだけ与えると容易に肥満し甲羅の成長と身体の成長のアンバランスも起こしやすいので、適宜、給餌量や間隔を加減してください。ゆっくり育てることも大切です。

大きく成長したカメは幼児が不用意に手をささないように管理します。咬まれると危険です。また、ベランダで飼育している場合、逸走(脱走)に注意しないと落下事故などが起こります。

(5) 健康と安全の管理

アカミミガメは基本的に丈夫なカメで、適切な施設で適切な管理をして育てれば、あまり病気はしません。逆に不適切な管理によって長年の歪みを背負って病気になったカメはもはや治療に反応しないような重症となる場合が多いようです。

よくある病気は、カビなどによる皮膚病、日光浴不足による代謝性骨異常栄養症、ビタミンA欠乏症、仲間同士や同居の犬などによる咬傷、逸走（脱走）後の落下や交通事故による外傷（甲羅の損傷を含む）、浅い水深によって手足に体重がかかって起こる手足の皮膚の潰瘍、不衛生な水によっておこる甲羅の潰瘍などですが、いずれも、適切な飼育を心がければ、まずおこらないことばかりです。

健康に飼育できているかどうかの観察ポイントとしては、活動性、食欲、成長の具合、体のプロポーションの変化（池で泳いでいるアカミミガメがおおむね正しいプロポーションの参考になります）などがあります。

(6) その他

なお、ミシシippアカミミガメは、生態系等への影響について文献等で指摘されていることから、更に知見及び情報の充実に努める必要のある外来種として、専門家の間で論議されているので、これから飼育を考える場合は、このようなことを十分考慮する必要があります。

ミシシippアカミミガメの取扱いに係る留意点として論議されている事項は次のとおりです。

- ・飼養者に子供が多くいるとともに、学校や幼稚園等における飼養もなされていることから飼養状況を把握しづらく、規制を徹底させることが現時点では困難である。
- ・輸入と遺棄の禁止が野外における個体数の低減に結びつくとみられ、輸入禁止等の対策効果は高いと推定される。一方で、本種を規制すれば、都市部を中心に大量に遺棄される可能性がある。
- ・本種の規制により、クサガメ、アカミミガメ以外のスライダークメ属 *Trachemys*、クーターガメ属 *Pseudemys* のようなカメ類が代償のペットとして大量に流通するようになる可能性がある。
- ・安易な愛玩飼養は避け、逸走や遺棄をすることがないように、関係者に普及啓発を行うことが重要。特に、生態や管理の方法について販売者から飼育者に説明し、注意を喚起する事が重要。

3. ワニガメ

(1) 分類、品種

ワニガメ (*Macroclemys temminckii*) はカミツキガメ科のカメで、北アメリカ南東部に分布しています。

(2) 形態、生理、習性

ワニガメは、最大甲長80cm（体重113kg）の記録があり、他の大型のカメと同様に順調に成長すれば、人力での移動もままならない物体と化します。頭部が大きく、魚類を捕食するのに適した鉤状のくちばしを持っています。舌の先にはミミズ状の特殊器官があり、これを小刻みに動かして口の近くに魚をおびき寄せる行動をとりますが、夜間は水底を移動しながら餌を探すことが多いようです。尾も長く、大きな鎧状の鱗が発達しています。頭部と尾部は甲羅の中に完全に收容されることはありません。背甲にはキールが発達していて、強靱な前足や鋭い爪とあいまって、総じて凶暴で危険なイメージを見るものに植えつめます。ただし、外見と実際の性質は別で、不適切な取り扱いをしない限り、積極的に人を攻撃してくる生物ではありません。おおむね四季のはっきりした気候帯の河川や湖沼の水底で生活し、産卵時以外はほとんど上陸しません。日光浴は、浅瀬で水面付近に浮上して行うようです。魚類を中心として口にはいるサイズであるなら、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、甲殻類、貝類など、様々な生物を捕食し、一部は植物質を採餌します。

寿命は飼育下で70年という記録があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

ワニガメはほぼ完全な水棲生物であることから、水槽や池での飼育となりますが、巨大に成長することから、可能な限り大きな水槽や池を用意する必要があります。規格水槽では1,800mm水槽、可能なら水産業用の養魚プールを用意します。"

また、水からあまり出ないとはいえ、脱走の名人ですので、脱走できない設備を作ります。さらに、多くの自治体では条例で危険動物として指定されていますので、規定の条件を満たした飼育施設を用意しないと飼育許可がありません。各自治体の条例を参考にして飼育施設全体をデザインします。

水の深さは、カメが四つんばいになって足と首を伸ばした状態で吻端が水面に出て呼吸ができる程度とします。取り扱い時に危険が生じる動物であることから、大きな排水バルブを設置して、直接個体にさわらずとも換水が出来るように工夫します。水温は、日本の屋外の環境にまかせて問題はありません。ただし、冬季や春先、晩秋はヒーターで水温を管理し、25 ほどが維持できるようにします。無加温で冬越しをさせることもできますが、条件によっては死亡する可能性があります。餌を大量に与えた直後は28 くらいまで水温を上げると代謝が上がって消化が進むようです。ただし、カメがヒーターを破壊する危険性がありますので、カバーなどの保護対策をします。また、海水魚のオーバーフロー濾過システムに見られるように、濾過用の水槽を別に1本用意して、ポンプで水を循環させ、日常的に水を濾過しつつ、大量の排泄がみられたときに全体を換水するという方法も有効です。この方法では、抜気による溶存酸素量の増加（粘膜での呼吸を行うので）、水質の安定、ヒーターを濾過水槽側で安全に管理できるなどのメリットがあります。

照明は、屋外で飼育する限り、日光があたれば十分で、室内飼育の場合でもアカミミガメほどの強い光は必要ないようです。

上陸用の陸場は必要ありません。

幼体は、観賞魚の規格水槽で飼育できます。ただし、将来的には大規模な施設が必要となることを忘れてはなりません。

(4) 飼い方のポイントと注意点

ワニガメの餌は基本的に動物質を与えます。大きな個体では、週1回、小さな個体では毎日か隔日で給餌しますが、小型の個体は成長させなければならいので、量だけでなく栄養のバランスにも気を使います。いずれにせよ、かなり餌代のかかる生き物と考えてよいでしょう。

幼体の餌は、市販の配合飼料を中心に口にはいるサイズの生餌を適宜あたえ、体が大きくなってきたら、川魚やザリガニ、マウス、ラット、ウズラなどの全体食を与えます。爬虫類用総合栄養サプリメントを添加して栄養の不足を補います。与える量は、一度に食べるだけを基本に、肥満や体形の異常が出ないように調節します。

基本的に、飼育施設にカメの知識がない人間や子供を近づけないようにします。普通の人には、カメの瞬発的な攻撃スピードをイメージできずに不用意にカメの頭部に手を差し伸べる危険があります。

カメが水槽の中で立ち上がって、壁面を這い登ろうとしたとき、前足が水槽のへりにかからないようであれば脱走の心配はありませんが、しっかりした蓋を付けたほうが無難です。また万が一水槽から脱走しても、水槽の置いてある部屋からの脱走ができないように部屋にはしっかりしたドアをつけ、施錠などを行います。庭の池で飼育する場合は、池のまわりをしっかりとした塀で囲むなどして逸走(脱走)と部外者の進入を防ぎます。自治体の条例に従った飼育施設では、否が応でもこの条件を満たすこととなりますが、幼体を購入する際にはどうしても将来像がイメージしにくいので、あらかじめしっかり認識することが大切です。

ある程度成長した個体にはマイクロチップを注入することができます。逸走(脱走)してしまった場合の個体識別に有効です。今後、河川への遺棄の防止などの観点から、積極的に個体識別措置を講ずることが望まれます。

(5) 健康と安全の管理

適切な管理をしていれば病気になることは少ない生物です。特に大量の排泄物による水質悪化と急激な換水による水質の急変で皮膚や甲羅を傷めることがあります。飼育設備と管理の工夫で予防できます。管理上の危険防止とカメ同士のけがを防止する観点から、一つの水槽に複数飼育することは常識的に考えられませんし、生まれた子供の行き場をもてあますような生物をあえて個人が繁殖するとは考えにくいので、闘争によるけがの心配はあまりありませんが、そのほかの外傷として、執拗に水槽から出ようとしたために足の裏がこすれて潰瘍ができる場合があります。環境を見直し、水深を深めにとって、悪化を防ぎますが、大型の個体では治療も困難です。

甲羅にコケが生えることがあり、これをブラシで除去する必要性を質問されることがありますが、野生の個体でもコケだらけで生活していることから、飼育者の危険を考えれば、水質さえ管理できていれば、あえて甲羅を綺麗にする必要もないと思われます。

(6) 特記事項

河川への遺棄が問題となっています。また愛護動物としての取り扱いもしなければなりませんので、手に負えなくなった場合は安楽死も検討しなければなりません。カメの安楽死は特殊でどこの動物病院でも可能であるとは限らず、また術者に危険が及ぶ場合もあります。

なお、動物園や水族館などにもてあました動物を安易に持ち込んでも、引き取りには限界があり、多大な迷惑をかけることとなりますので譲渡先としては期待できません。

ワニガメと同じ科にカミツキガメがいますが、カミツキガメは外来生物法(特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律)の特定外来生物に指定されており、飼養することが禁止されています。

4. スッポン類

(1) 分類、品種

スッポン類は、日本を含むアジア、アフリカ、アメリカに分布するスッポン科のカメで、20種以上に分けます。スッポンの特徴は、甲羅が角質の鱗で覆われていないので、縁などが柔らかいというところです。代表種はニホンスッポン(*Pelodiscus sinensis*、シナスッポンともいう)、トゲスッポン(*Apalone spinifera*)、フロリダスッポン(*Apalone ferox*)、コガシラスッポン(*Chitra indica*)、マルスッポン(*Pelochelys cantorii*)などです。

スッポンは多くの種類がペットとして流通しています。小型のものでも30cmにまで成長しますし、大型のものでは1mをこえる種類がいます。将来的にどのくらいの大きさになるのか把握する意味でも、店頭での種の同定は重要であり、販売に際しては正しい表記が望まれます。

(2) 形態、生理、習性

スッポンの最大の特徴は背甲の表面に角質の甲板をもたず、代わりにうすい皮膚が覆っており、甲羅を形成する骨の板も他のカメより退縮しているため、全体に甲羅がやわらかいことです。また水底にいながらにして呼吸ができるように、甲長と同じくらいの長さまで首を伸ばすことができます。このことは、このカメの攻撃範囲を知る上でも重要です。口は、鋭いくちばし状で、俗に、カミソリのような切れ味と称されます。吻端は2本の管のように突出し、呼吸時に頭を水面から出さなくて済むようになっています。手足は遊泳に特化しており、全体が大きな水かきとして発達しています。陸上での歩行には向きません。

身近に生息するニホンスッポンは甲長30cm程度。コガシラスッポンは1m、体重も100kgを超えます。性質は概して臆病で攻撃的です。水底の砂泥質に全身を隠し、鼻先と目だけを出して獲物を待ち伏せするタイプが多いので、飼育下で全身丸見えな状態はストレスとなります。また、清掃や移動などの取り扱い時に怒らせるとさかんに咬み付いてきます。ほとんどが水中で生活しますが、特に小型の種類では積極的に日光浴をします。寿命はナイルスッポンで37年2ヵ月という飼育例があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

熱帯・亜熱帯性のものは、通年保温が必要です。温帯のものは外気温にまかせてよいですが、冬眠させないならば冬は保温します。水質の管理ならびに飼育施設の規模はワニガメに準じ、水底にはさらさらした細かい砂を敷き、潜ってからだを隠せるようにします。底砂は粒子に角がないものを選ばないと、皮膚や甲羅の皮膚を傷つけてしまうといわれています。水底に砂がはいると、水質の管理はカミツキガメなどに比較して、格段に面倒になります。

日光浴の設備をアカミミガメと同様の条件で設置します。日のあたる場所への水槽の設置も有効です。

スポンの種類によっては、汽水域（淡水と海水が混じり合う河口域）に生息し、水質が高硬度の弱アルカリ性を好むものがあり、サンゴ砂などを濾材に混ぜて水質調節をします。おしなべて水質の悪化には弱く、容易に皮膚病になったり体調を崩しますので、強力な濾過装置と頻繁な部分換水（ただし急激な水質変化を避ける）が重要な鍵となります。

小型種であっても30cmを超え、活発に活動する性質から考えても、飼育水槽は、ワニガメの施設と同等かそれ以上のものが必要で、大型種では、ペット飼育用品の概念から逸脱し、養殖漁業関連のメーカーに問い合わせる必要があるでしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

肉食性の種類が多いので、基本は市販の配合飼料でよいでしょう。餌付けが難しい種類もあります。配合飼料をよくふやかして、細長いピンセットやピアノ線に刺して、口もとでゆらすと食べることがあり、まずは人工的な餌の味を覚えさせます。販売されているのはたいてい数cmの幼体なのですぐに食べ始めると思われますが、活きたアカムシから冷凍アカムシ、乾燥アカムシ、アカムシ風の配合飼料、一般的配合飼料といった順で餌を変えていく方法も有効です。入手も大変でコストもかかりますが、大型個体ではワニガメ同様に川魚やマウス、ラットの利用も必要となります。この場合、水質の悪化と過肥に注意します。また、植物質を多くとる種類もいますので、そのような種類は資料を調べた上で、適宜、メニューに植物を加えます。

逸走（脱走）の防止などは、ワニガメなどと同様に留意します。水槽のメンテナンスや給餌時に管理者が咬まれないように、皮手袋や、数十センチの長いピンセットなどを用いて安全を確保します。小さな子供が水槽に近寄らないようにします。

(5) 健康と安全の管理

甲羅の潰瘍を含む、皮膚病が圧倒的に多い生物です。適切な水質が維持できるように、水質管理設備に徹底的に投資しましょう。予防に勝る治療はありません。逆に発症してしまうような環境で飼育されている限り、治療が成功することはありません。

(6) その他の特記事項

やはり屋外への遺棄が懸念される生物群です。巨大な種類はもとより、ニホンスポンの大陸産個体群は、日本の個体群を遺伝子汚染します。水生生物の遺棄は、微生物を含む外来の水圏環境を在来の水圏にもたらすことにもなります。特筆されるような病原性がなかった

としても、外来の微生物は外来動物として認識すべきです。これはもはやカメ 1 頭の問題ではありません。

5 . スッポンモドキ

(1) 分類、品種

スッポンモドキ (*Carettochelys insculpta*) は 1 種でスッポンモドキ科を構成しているカメで、甲羅にはスッポンに似て角質の鱗がありませんが、さわると甲羅が硬いので、スッポンとは違うことが分かります。四肢はスッポンよりもウミガメに似て、オール状をしています。ニューギニアからオーストラリア北部にいます。

(2) 形態、生理、習性

甲長70cmと大型になるカメです。大きな河川の淡水域から河口の汽水域、大きな池・沼などに生息し、魚や貝類のほか、果実などの植物質も多く摂食します。産卵時以外は上陸しません。寿命は17年3ヵ月という飼育例があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

基本的にこのカメは完全水棲で、広い範囲を自由に泳ぎまわりながら生活し、しかも甲長70cmの大型種であることから、飼育施設は少なく見積もっても養魚池レベルのものを用意しないと快適には生活させてやれません。直径5mの丸い養魚水槽の上からHIDランプを照らして、巨大な濾過装置で飼育水を循環させる、といった大がかりな設備が必要なペットです。

(4) 特記事項

屋外に放逐してもまず生存できませんので巨大化してしまったカメを持て余しても、逃がしてあげる、という選択肢は存在しません。

現地で個体数が激減している希少野生動物で、販売されている個体は一切養殖ではなく採集個体であり、これだけ飼育に手間がかかるということからも飼育方法を工夫するより飼育しないことが無難と考える生き物といえましょう。

6 . ホルスフィールドリクガメ

(1) 分類、品種

ホルスフィールドリクガメ (*Testudo horsfieldi*) はリクガメ科のカメで、カスピ海周辺から東は中国まで広い分布をもつリクガメです。日本では初めロシアガメとして売られていました。これは旧ソ連から輸入されたためと思われます。

(2) 形態、生理、習性

甲長が約22cm、丸くて平べったいドラヤキのような形をしたリクガメです。分布が広いため、地域差は存在しますが、野生下では1年の8ヵ月を冬眠ないし夏眠して過ごす特殊なカメです。植物の生えるわずかな期間だけ活動し、あとは穴に潜んでいます。長くて丈夫な

4本の爪と強靱な前足は荒涼とした砂漠やステップ地域で穴を掘るのに適しています。完全な草食性と考えておいてください。

(3) 飼育上必要な設備と機材

日本では冬眠も含め屋外飼育が可能であり、穴を掘って脱走することさえ防げるならば、庭に放し飼いの場所を確保して飼育するのがもっとも健康によいと思われれます。リクガメ全般にいえることですが、運動が大切です。可能な限り広い場所を自由に歩かせることが大変重要です。

室内飼育の場合でも、22cmに成長した個体にとって、市販の飼育水槽は手狭で、十分に広いケージを必要とします。代用品として、コンクリートをこねる桶があります。この桶は軽くて清掃もし易く便利です。これに小動物用の藁を大量に敷いて飼育するとよいでしょう。足場が滑ると、四肢の発達に支障をきたすので、足をふんばって歩いているか観察する必要があります。上手に歩いていない場合は床材を工夫して対応策を決めましょう。

日光浴は不可欠であり、屋外での日光浴の時間を設けることはもちろん、室内ではHIDランプを点灯して、太陽光を補います。飼育当初は、巣穴の安心感を再現するシェルターを用意してやると落ち着きます。大きな植木鉢を半分に切ったものなどが適切です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

わが国でもっとも安価に販売されているリクガメであり、輸入に対して死亡する数が異常に多いカメです。幸い、近年、家庭での繁殖例が聞かれるほど上手に飼育されるようになってきていますので、飼育者はそういった飼育情報を入手してより適切な飼育方法を工夫しましょう。

輸入されたカメはほぼ100%野生採集個体で、大量の寄生虫を持っていることが多いです。現地では共生者として害のない存在だったのでしょうが、捕獲され、流過程で不当な扱いを受けたカメはストレスや脱水症状で弱り、さらに寄生虫がカメの体力を奪い、腸を傷つけ、細菌の二次感染症を引き起こします。

購入と同時に新鮮な便をもって動物病院に連れて行き、検便ののちに適切な処置をしてもらいましょう。最悪のケースでは餌を食べることができないほど弱っていることもあります。このような場合は、麻酔をし、頸に穴をあけ、食道に管を入れ、管を頸の皮膚に縫い付け固定します。体力がもどるまで管から栄養や水分や薬剤を流し込むわけです。一見おそろしげな処置ですが、食べない個体を食べるまで待っているよりはるかに有効な方法です。

餌はなるべく多くの種類の野草や野菜です。桑の葉など、木の葉もよい餌となります。除草剤や農薬の影響のある葉や、毒草は与えないようにしましょう。一部の飼育書にあるような動物質の餌（ドッグフードやピンクマウスなど）は決して与えないこと。

餌から十分な水分を補いつつ、時々温水に体をつけ、大量の飲水と排泄を行います。これは、固体である尿酸を排泄するために「水洗トイレの水」としてストックされている膀胱の水分を新旧入れ替えするために必要なことで、結石の防止にもなります。さらに、温水浴のときには、便をすることがあるので、排泄したての便の検査をしたいときに便利です。

ちなみに、便はコロッとしているのが正常で、練り歯磨き状であったり、葉がそのまま排泄されたり、ドブのような匂いがするのは異常です。すぐに病院で検便を受けましょう。

(5) 健康と安全の管理

適切な餌と、十分な日光があれば、問題なく成長しますが、栄養過多で肥満や甲羅のズレなどを生じた場合は、餌やりのペースをやや落として調節します。ミネラルのサプリメントも適宜あたえ甲羅のカルシウム沈着を補います。

足のふんばりがきかない場所で長く生活すると巻き爪となり、指が変形しますので、歩き方や指の様子を観察しながら、床材を工夫します。

くちばしの変形も起こります。野生状態のカメのくちばしは、ペットショップに行って、入荷直後のカメを観察すれば分かりますので、それらと比較して大きな変形がみられたら、餌が食べにくいなどの障害が出る前に動物病院で麻酔をかけて削ってもらいましょう。

同居の犬などに咬まれたり、ベランダから落下したり、車に轢かれる事故が起こります。甲羅の損傷が軽度ならば治療は可能ですが、事故は予防しましょう。

同居のカメどうして強い個体と弱い個体の差が生じたら、別々に飼育しましょう。同種の仲間に対して思いやりのある生物ではないので、相手が餓死したりストレス死するまでいじめる傾向があります。

冬にはしっかり保温してしっかりライトをあてて飼育するか、しっかり冬眠させましょう。中途半端な温度にさらすと、どちらの生理状態にもいられずに体調を崩して死亡することがあります。なお、冬眠は失敗すれば死亡しますので、繁殖を考えていない場合には、加温飼育が無難です。

(6) その他の特記事項

安いカメなので、やはり飼育放棄が多く目に付きます。とくに甲羅が変形してグロテスクな容姿に育った個体が多く捨てられるようです。不適切な飼育によってグロテスクな形態にしてしまったことも含めて全ては飼い主の責任ですから、途中で投げ出さずに最後まで看取る覚悟を持ちましょう。

7. ケヅメリクガメ

(1) 分類、品種

ケヅメリクガメ (*Geochelone sulcata*) はリクガメ科のカメで、アフリカのサバンナ地帯に分布しています。

(2) 形態、生理、習性

大型で活動的なリクガメです。甲長は70cmを超え、大きな個体は一人の人間では持ち運べないほど重くなります。最大級の個体では、甲長83cm、体重104kgという記録が残っていません。大量に食べ、大量に排泄します。

乾燥系のリクガメで、大変丈夫で、急激に成長します。強大な前足で穴をほり、日中の暑

さをしのぐ習性がありますので、飼育下で放し飼いにしていると、隙間にもぐりこもうとして様々な家具、家財を破壊します。

(3) 飼育上必要な設備と機材

理想的には、牛の放牧場のようなスペースを確保して、広大な敷地を自由に歩かせ、生えている牧草を食べるがままにさせておくのが一番です。実際に、この大きくて活動的なカメを室内に持ち込んで飼育することは、室内でヤギと同居するような覚悟を必要とします。室内では、衣装ケースやコンクリートをこねる桶などに収容しますが、満員電車から一步も出ずに一生を過ごすのに等しい環境ですから、愛護の精神には反します。ただし、放し飼いにする場合、大量の排泄物をまきちらしますので、人間用の紙おむつを付けるなどの工夫をします。また、激しく歩き回り、怪力で隙間にもぐりこみますので、家具を壊されたり、ものを倒されたりしないような場所を選ぶ必要があります。

HIDランプも倒されて火事にならないように設置します。

低温にも耐久性のあるカメですが、冬は保温して飼育します。保温の原則は背中からの強力なライトの照射で、やはりHIDランプが理想的です。腹を温めるマットヒーターだけで保温することは危険なので絶対にはいけません。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は植物食です。巨大な個体は大量に食べますので、餌の確保が大変です。野菜などはコストがかかりますので、桑の葉や葛の葉など、野草を大量に調達します。農地を借りて餌を栽培している人もいます。干草に餌付けると冬の間の餌の管理が楽になります。ヘイキューブやチモシーグラスなど、敷き藁兼用で与えるとよいでしょう。餌を食べたら消化のために、背中に光線をあてて十分に体温上昇させてやりましょう。急激に成長しますので、ミネラルの補給と適切な日光浴が必要です。

庭などで飼育する場合、破壊力があるのでかなりしっかりした囲いを建築しないと脱走します。巨大な個体を自動車が轢いた場合、自動車への損傷が激しく、大変危険な結果を招きかねません。

(5) 健康と安全の管理

脱水と高たんぱくな給餌(大豆など植物蛋白であっても過給は不可)ならびに運動不足で、膀胱結石になりやすく、手術しないと死亡するような重症も多いです。運動で十分に四肢を発達させ、十分に水を与え、かつ適切な餌を与えましょう。日ごろから、白い尿酸が排泄されているか観察を怠らないようにします。呻くような泣き声をあげはじめたら動物病院でレントゲン検査を受けるようにしましょう。

室内で、狭いケージで飼育する際、掃除が行き届かずにジメジメしていると、甲羅が感染症を起こしてしまいます。背中から十分な熱量と明るさをもった光をあてずに、マットヒーターだけを使用すると、過剰にヒーターの上で過ごしてしまい、低温火傷で同様に甲羅が感染症を起こします。ときどき裏返して甲羅の覆面をチェックして、変色したり、じくじくしたりしていないか観察しましょう。

(6) その他の特記事項

巨大に成長したあとの飼育放棄があとをたちません。動物園の入り口に置き去りにしてくるような例が多いようですが、大きなケヅメリクガメを喜んで収容する動物園は存在しません。

8. インドホシガメ

(1) 分類、品種

インドホシガメ (*Geochelone elegans*) はリクガメ科のカメで、インド、パキスタン、スリランカに分布しています。

(2) 形態、生理、習性

背の高いドーム型の甲羅と、黒と黄色の美しい放射模様をもつリクガメです。甲長は38 cmになり、体積を考えればかなり大型のカメといえます。飼育下で24年3ヵ月間生きた記録があります。

モンスーン気候に生息しているため、極端な高温と乾燥、極端な集中豪雨という特殊な気候に適応しています。植物食が基本ですが、他のリクガメよりは動物食に適応しており、飼育下で成長期の一時期、動物性タンパクを給餌することが推奨されています。

雨が降って湿度が上がったときに積極的な活動がみられたり、雨季にあわせて卵が孵化したりと、降雨に生活を依存しているようです。活動時以外の乾燥した季節は穴をほって隠れてすごすことが多いようです。

(3) 飼育上必要な設備と機材

基本的に高温で飼育します。他の爬虫類と同様に昼夜の温度差をつけることは重要ですが、日光浴をさせる場所以外の環境温度を昼30、夜28ほどと高めに設定し、日光浴させる場所では直下で40近くになっても構いません。どちらかという隠遁性の強いカメですので、明るい光線を避けてシェルターに隠れる傾向にあります。必ずHIDランプのような強力なライトか、自然の日光にあたれるようにしましょう。ただし、屋外での日光浴は、農業用の大きな温室の中で日光浴させるなど、外気の寒冷にさらされないような工夫が必要です。

広い運動場所が必要なのは他の全てのリクガメと同様です。室内で飼育する場合は、コンクリートの桶を設置した飼育部屋全体を高温に保ち、各桶ごとにライトを設置します。

基本的には適度な乾燥を維持しますが、他のカメよりも湿度のある場所を好みますので、少し湿った床材に潜れる特殊な場所を別途設置したり、頻繁に温水浴(水温35)させたり、朝夕に霧を吹いてやってもよいでしょう。この場合、時間がたてばすぐに乾燥状態にもどることを心がけ、衛生状態に気をつけます。

子ガメは、雨季の始まりに孵化し、湿潤な環境で成長していきますので、小さなカメを購入した場合は、まず、十分に水を飲ませ、脱水を緩和し、ガラス水槽にヤシガラ土などの床材を入れ、常設の浅い水場をセットし、高温で飼育します。子ガメのうちは脱水に弱く、環

境の悪化に対する抵抗性もないので、成長を促し、危険な時期を早々に脱するようにします。餌の内容やサプリメントに工夫をこらし、飲水・排尿が順調で、代謝が活発なようならば、多少の動物蛋白を与えたり、植物蛋白を強化してみましょ。ただし、腎臓障害や甲羅の変形が起こらないことを確認しながらの微調整が必要です。手間のかけられない人はホルスフィールドリクガメのように植物食だけでかまいません。とにかくホシガメの子ガメは乾燥しないケージで高温を保って飼育することです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は様々な種類の野草・野菜・木の葉を与えます。温度設定が適切なら毎日食べるだけ与えるようにしてもかまいませんが、肥満にならないように手足の観察をしてください。モンスーン気候の乾季では、おそらく青々とした植物にはありついていないことを考えると、大きな耐久性のある個体には乾季のような雰囲気(給餌(飲み水を少なく、干した野菜などを与える)をしばらく続けたのち、人工的に毎日大量のシャワーを浴びせて水浴もさせ、瑞々しい植物やビタミン・ミネラルのサプリメントを大量に与えると、一年のメリハリが出て、繁殖行動を誘発できることがあります。性成熟に達しないカメはこの限りではなく、年間を通して十分な餌を与えます。

(5) 健康と安全の管理

温度を下げないことが各種の感染症の予防となります。繁殖個体を販売するイベントにでも足を運ばない限り、販売されているカメは例外なく野生個体なので、大量の寄生虫がいたり、輸入のストレスで弱っていたりします。まずは、完璧な飼育施設に迎え入れ、十分に水を飲ませ、獣医の手によって駆虫を受けます。

温度管理は防水性のある精度の高いヒーターとサーモスタットを用いて行い、不意の故障にそなえて予備のセットも用意しておきます。最近では昼夜の差をつけたりタイマー機構をもったサーモスタットも販売されていて便利です。

子ガメは10mg単位で計れるキッチンスケールで体重測定をし、成長具合を記録して健康管理の目安とします。

9. アカアシガメ

(1) 分類、品種

アカアシガメ (*Geochelone carbonaria*) はリクガメ科のカメで、中央アメリカ南部から南アメリカに分布しています。

(2) 形態、生理、習性

細長いドーム状の甲羅と、手足の鮮やかな紅色の模様が特徴です。大きさは50cmに達し、家庭で飼育するカメとしては明らかに巨大です。類似の種類にキアシガメがいますが、こちらは80cmを超えるためもはや動物園動物と考えるべきでしょう。

熱帯雨林の林床を徘徊し、野草や落下した果物、きのこ類、動物の死体などを食べている

ため、植物メインの雑食性といわれています。雨季と乾季はあるものの、通年、湿度の高い環境で生活していると考えてよいでしょう。日のあたらない林床で暮らすせいか、隠遁性が強いですが、日光浴も必要とします。寿命は野生で13年8ヵ月という記録があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

広い場所で、高温（30 前後。最低25 ）と適度な湿度を保ち、絶えず綺麗な温水に浸ることができる環境を用意します。暗い場所を用意し、隠れられるようにし、開けた場所にはHIDランプを照射し木漏れ日を演出します。おそらくホシガメと同様に、部屋ごと保温して最低温度を確保するのがよいでしょう。季節の変わり目の低温であっけなく命を落とすことがあります。

保湿性の高い床材として赤玉土やヤシガラなどが推奨されますが、室内で衛生的に飼育するにはとうてい管理しきれるものではありません。土の上で飼育することを考える場合は、農業用温室に観葉植物を植え、熱帯植物園のようにして、そこで放し飼いにするような施設が必要でしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は野菜や野草を中心に、果物類も添加します。果物は他のカメでは偏食に陥るうえに餌として適さないものですが、アカアシガメでは、積極的にメニューに加えてよいようです。ただし、あまり多くを占めないように与えます。そのほか、動物性の餌として、ピンクマウスやドッグフード、精肉類、九官鳥の餌なども与えます。これも多給による害をいつも考えながら与えましょう。

(5) 健康と安全の管理

繁殖個体が流通のメインを占めるめずらしいリクガメですが、依然として野生個体も多くみられますので、入手時の管理が重要です。まず駆虫をすること。適切な環境で十分水を与えて腎臓機能を保護します。

また、ヘルペスウィルスのキャリアとして知られていますので、発症なく家に持ち込まれ、他のカメに感染する危険性もあります。購入した店で売られている他のカメ、たとえば発症しやすいホルスフィールドリクガメなどに異常がみられないか確認しましょう。もし異常があるカメが他にいた場合、ペットショップ内で感染し、キャリアとなっている可能性は否定できません。

〇ヘビ

ヘビ類は、トカゲとともに有鱗目にいれられヘビ亜目とされます。独立のヘビ目とされることもあります。種類は2,300種以上。ヘビには四肢が無いのが普通ですが、原始的なヘビであるボア・ニシキヘビ類とミミズヘビ（メクラヘビ）類は後肢の痕跡があります。

10. ナミヘビ類

(1) 分類、品種

ナミヘビ類はナミヘビ科のヘビで、1,500種以上のヘビが含まれています。ネズミヘビ ナメラ（*Elaphe*）、キングヘビ（*Lampropeltis*）、ゴーフアーヘビ（*Pituophis*）、インディゴヘビ（*Drymarchon*）などの無毒蛇は、ペットスネークという言葉に代弁されるように、品種改良が行われ、もはや野生から捕獲せずとも累代繁殖した子孫のみで必要な個体数の生産がまかなわれている、きわめて稀な爬虫類群です。"

これらの蛇は、適度な大きさの飼育ケージと新鮮な水ならびに餌としてのげっ歯類が用意できれば、特殊な機材すら必要なく容易に繁殖まで楽しめます。

(2) 形態、生理、習性

ナミヘビはおおむね50cmから2m以内のサイズの種類がペットとして一般的です。

いかにも蛇らしい普通の特徴を備えており、顎は大きく開き、大きな餌が飲めます。手足が無く体が細長いので、餌は胴体でしめつけて窒息させつつ、餌の体そのものを細長く締め上げて飲み込みやすくします。俗にいわれるように骨をバラバラに砕くというのは迷信です。

昼に活動するものもいれば夜に活動するものもありますが、おおむね飼い主の都合で餌を食べてくれますので、是が非でも日光浴が必要で世話のサイクルが動物中心となるカメとは大きく異なります。

餌は、ポピュラーなペットスネークの場合、100%げっ歯類で足りります。餌用に養殖された、様々なサイズのマウスやラットが冷凍状態で販売されていますので、これだけを与えておけば問題ありません。

巣穴をもつ種類がほとんどなので、隠れられる場所が必要です。また、寿命は野生でアオダイショウ12年、フロリダキングスネーク12年、インディゴスネーク11年6ヵ月という記録があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

ヘビは爬虫類の中でも、場所をとらずにコンパクトに飼育できるといわれています。たとえば、飼育ケージの長径はヘビの全長の3分の2、短径はトグロの直径の1.5倍もあればよい、といった具合です。1mちょっとのヘビでも無理をすれば60cmの規格水槽で生涯飼育することができます。

ただし、これはあくまでもヘビに遠慮してもらっているに過ぎず、たとえば、国産ヘビで

最も頻繁にペットにされるアオダイショウなどは、環境抵抗を受けやすく、狭いケージで育成すると野生で見られるような大きな個体にはなかなか成長しません。途中から大きなケージに移し替えるとみるみる成長して、体格すら違ってきます。狭い部屋でたくさんのヘビをコレクションしたり、どんどん繁殖させていきたい人はスペースの関係でよりコンパクトな飼育を余儀なくされますが、たとえば1匹をかわいがり鑑賞したい人は、大きなゆとりあるケージに、木や岩などを配してゆったりと飼育してやるとよいでしょう。

ケージの大きさは、 W (ヘビの種としての最大全長の倍) \times D (ヘビの全長) \times H (ヘビの全長) くらいにしてやると、ヘビ本来の美しい体型に育ち、種としての興味深い行動も観察できるようになります。

ナミヘビにはペット化されている種類だけでもきわめて多くの種類が含まれ、中には、高温を嫌い、日本の夏を越せない種類もいます。一方で、しっかりと保温して飼育しないと消化不良や感染症で死んでしまう種類もいます。冷房か保温か、飼育する種類にあわせてしっかり設定してやりましょう。

ヘビはよく水を飲む生き物です。また、暑いとき、脱皮のとき、体表にダニが付いた時など、全身を水に漬けることがあります。ヘビがひっくりかえせないくらいの適度な重さがある、中でトグロをまいても水がこぼれない程度の容量のある水入れを用意しましょう。

巣穴で生活するヘビは、トグロがすっぽり収まるくらいの隠れ家を必要とします。シェルターともいいますが、市販のものや、植木鉢を削ったものを用意します。極端に樹上性に依存した種類では、天井付近に巣箱をつけてやると、掃除のときにヘビを驚かせずに済むので便利です。そういった種類には木登り用の横枝を渡してやり、その枝にケージの外からスポットライトをあててやると、食後に腹を温めにくくなります。それができない場合は、ケージの底の一部、マットヒーターを敷いて、腹を温めて消化を助ける場所をつくります。食後の低温はヘビの寿命を縮めます。

コンパクトに大量に飼育したい人は、引き出し式のケージ、ラックを用います。市販のものもありますが、サイズに限りがあるので、日曜大工で自作することになります。プラスチック製の押入れ用収納ケースの桶の部分だけを用意して、それがすっぽりおさまるような本棚風の枠をつくります。通気穴をあけたケースを差し込んでおけば、ラックの棚板がケースの天井として機能し、ヘビは逃げられず、世話をするときには適宜引き出すという仕組みです。ケースのサイズが色々選べますので、ヘビの大きさに合っていて、なおかつコンパクトに収納できる飼育施設が作れます。ケースの底には必要ならマットヒーターを敷きます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌はマウスを解凍して、38 くらいの温度にして与えます。30cm以上ある長いピンセットで、餌をヘビの前に持っていか、ケージに横たえて放置します。

ヘビが大きな餌を飲み込めるからといって、無理矢理大きな餌を与えてはいけません。概ねヘビの頭部と同じか、やや大きい程度の大きさのマウスをヘビの食欲にあわせて好きなだけ与えます。腹がはちきれんばかりに大量に食べた場合は、ヒーターで十分に暖をとらせま

す。ヘビは消化能力に種差や個体差が大きく、あくまで自分の飼育している個体がどのくらい食べてどのように消化するのか、よく観察しましょう。確実に消化された、密度の濃い、少量の便となって排泄されるように給餌の量と間隔を決定します。

脱皮の前は餌を食べません。目が白くなり、色がくすみ、やがて目がもとどおりの色になると、しばらくして脱皮がみられます。脱皮前に無理に捕獲したりして皮膚に傷がつくとそこから脱皮に必要な水分がうばわれて脱皮不全となります。脱皮前にも食べるような個体であっても、やはりこの時期はそっとしてやるのが無難です。

なお、脱皮前は一時的に湿気を要求しますので、ミズゴケの入った容器などを設置して脱皮不全を予防します。

餌は、マウス類だけで問題なく、たまに、爬虫類用のビタミンサプリメントを添加します。ヘビは匂いに敏感なので、サプリメントはゼラチンカプセルに入れて、マウスの皮膚の下に忍ばせます。消化力の弱い個体を飼育している場合、マウスの尾と手足は除去し、背中 of 皮も除去してやると、消化の助けになります。また、毛のはえていないピンクマウスのような小さいサイズの餌を与えることも消化不良の予防には有効です。

給餌と排便のペースを一定に保ちながら、適宜掃除をします。床材は新聞紙を幾重にも重ねたものが最適で、汚れた紙から順に捨てていくことでヘビにストレスを与えることなく管理できます。

水はなるべく頻繁に綺麗なものと交換します。

ヘビは餌と飼い主の指を区別ができない場合があります。餌やりには必ず長いピンセットを使い、マウスの臭いが手につかないように注意します。もしかまれたらテレホンカードなどを指と顎の間に差し込んでゆっくりとはがします。無理に引きはがすと飼い主のけがも悪化しますしヘビの顎もこわれます。

ヘビは脱走する生物です。1度や2度は必ず逃げるといっても過言ではありません。

ケージは逃げないような工夫をして、逃がさないような管理をすることはもちろん、飼育ケージのある部屋からヘビが外に出ないように飼育部屋の入り口がしっかり閉まるようにします。ヘビが逃げたら、まず、ミズゴケの入ったシェルターなどを部屋の四隅にしかけ、喉がかわいたときにもぐりこむように仕向けます。このようなトラップは念のため、飼育室の外にもしかけ、定期的に見回るとよいでしょう。

ヘビは一般社会において存在自体が迷惑と思われるといっても過言ではありません。集合住宅などで、ヘビが隣家に飼われていると知っただけで眠れない人もいます。脱走したヘビが自宅に侵入してきたら生きた心地がしないでしょう。動物病院への通院も同じです。犬や猫を抱いた飼い主と隣り合わせで順番待ちをする際、中身が見えなくても、患者がヘビだと知ったとたんに気絶する犬の飼い主がいるかもしれせん。迷惑防止という観点からいえば、飼育そのものが迷惑となりうる生物であることを自覚し、社会との調和に努めましょう。

(5) 健康と安全の管理

ヘビは適切な環境と餌を整えやすいペットなので、めったに病気はしませんが、湿度不足による脱皮不全や湿度の過多による皮膚病などは頻繁にみられます。

大きすぎる餌、与えすぎ、食後の低温での消化不良も要注意です。油の浮いた下痢便や嘔吐がみられたらまず餌やりの方法を見直すべきです。

複数での飼育は避けるべきです。餌をめぐって、2匹がからみあい、どちらも命をおとすことがあります。

養殖個体中心のペット爬虫類であるにもかかわらず、伝染病の進入が後をたちません。コバエやダニ、水入れの共有が飼育施設内での感染に一役かっている様子です。新参個体の検疫も大切です。野生のヘビなどはむやみに持ち込まないようにしましょう。

(6) 特記事項

餌の冷凍マウスは家庭用の冷蔵庫とは別に管理しましょう。不衛生です。

ナミヘビ類のなかには「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（特定外来生物法）により特定外来生物に指定されているものがあります。

11. ボア・ニシキヘビ類

(1) 分類、品種

ボア・ニシキヘビ類はボア科のヘビで50種以上に分けられています。アジア、アフリカ、オーストラリア、アメリカと全ての大陸にいます。5mを超える巨大な大蛇も含みますが、小さな種類、中型のものもたくさんいます。ボア類は卵胎生で、ニシキヘビ類は卵生です。主な種類は、ボールニシキヘビ(*Python regius*)、アミメニシキヘビ(*Python reticulatus*)、ビルマニシキヘビ(*Python molurus bivittatus*)、ミドリニシキヘビ(*Morelia viridis*)、カーペットニシキヘビ(*Morelia spilotes*)、ボアコンストリクター(*Boa constrictor*)、エメラルドツリーボア(*Corallus caninus*)があげられます。

(2) 形態、生理、習性

ボールニシキヘビ、ミドリニシキヘビ、エメラルドツリーボア、カーペットニシキヘビなどは全長が1.5m前後。大きくても2mほどで、大蛇というイメージがありませんが、アミメニシキヘビでは最大7m近くまで、ビルマニシキヘビも4m近く、ボアコンストリクターが3mほどにまで成長し、太さや重さを考慮すると、人が一人で取り扱えない大きさの生物になります。事故が起きる、起きないは別として、人を殺傷する能力をそなえたペットだということを自覚しましょう。

完全樹上性(ミドリニシキヘビ、エメラルドツリーボア)から半樹上性、地上性(あるいは地中性)まで様々な生活様式を持ちますが、完全樹上性のものを除けば、基本的にはナミヘビの飼育の延長線として考えることができます。体のサイズにあった様々な生物を捕食し、おおむね熱帯雨林や熱帯サバンナに生息しています。

一度に100卵を産む種類もあり、安易な繁殖はお勧めできません。寿命は野生状態で、ボ

アコンストリクター38年8ヵ月、アミメニシキヘビ25年3ヵ月という記録があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

大きくなるとはいえ、破壊的な生物ではなく、かつ運動量も限られているので、大蛇のイメージの割には狭い場所に押し込めて飼育することができます。市販の120cm幅の爬虫類ケージでも2.5mまでの大蛇は飼育できますし、環境抵抗で、成長が止まる個体も多いようです。

しかし、アミメニシキヘビやビルマニシキヘビは、普通に飼育していても楽に4mに到達しますので、種の最大全長に達していなくても、もはや普通のケージでは飼育できません。しかも、各都道府県の条例によって規制されている種類も多いので、まずはその規制にしたがってケージをデザインします。巨大な飼育ケージの中にはヘビの入れるプールを設置します。プールは大量の排泄物で汚されますので、掃除のしやすい設計が必要です。ハンドリングによく慣れた個体で、脱皮不全を起こしても人間の風呂場で治療できる場合は、ケージにプールは必要なく、大きな水入れ程度でかまいません。

完全樹上性の種類は、高さのあるケージの中段に止まり木をセットし、ケージの床に大きな水入れを設置してやり、ケージの前面を布などで目隠しすると落ち着いて飼育できます。水入れは主として湿度の維持と水浴のためで、飲み水は別途、朝夕の散水によって補います。水は気温と同じくらいまで温めて散水します。ケージの床は排水機構を持たせません。

いずれの種類も昼は28 前後、夜間は26 前後を維持し、餌を与えたあとは特に床暖房で腹を加温してやります。

巨大に成長したヘビにはもはやシェルターは必要ありませんが、孵化したての子ヘビの頃は用意してやると落ち着きます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

ボア・ニシキヘビの仲間は大型になる種類が多く、飼育の基本的な部分はナミヘビと同じですが全てにおいて規模が異なりますので飼育には相当の覚悟が必要です。ナミヘビ程度の飼育設備で飼育できるボールニシキヘビは、大蛇の中でもペット向きといえる種類です。丈夫で、それなりに大蛇の風格を持っていますが、一年のうちで餌を食べる時期が限られていて、食べる時期に一気に食べさせて体格と栄養を備蓄させ、食べない時期には、水を新鮮に保つだけで一切干渉しないといった特殊な管理をします。近年では、品種と呼べるカラーバリエーションも生まれ、繁殖方法も確立されましたので、大蛇をペットとしたい人は、ボールニシキヘビを飼育するのが最良の選択といえましょう。

樹上性のミドリニシキヘビやエメラルドツリーボアは神経質で、温度や湿度の要求が厳しく、多くは野生採集個体であるため、初心者には不向きです。始めに完璧なケージセットをして、あとは個体が慣れるまで、ケージを布で隠して一切干渉せず、小鳥や生きたピンクマウスなどを駆使して餌付けを行います。寄生虫が多いので、餌付いたらすぐに餌に駆虫薬を仕込むか、いちばん最初の導入時に一気に駆虫を完了してからケージに入れるようにします。飼育者をケージ越しに攻撃してくる個体は容易に吻端をけがして、口腔内潰瘍などになりま

す。「大きくて背の高いケージに止まり木をつけて湿度を高くとり通気も確保し、高温を維持して、目隠しをして干渉しない。」これらの基本を守っても最後まで餌付かず死亡するケースも多いです。

ボアコンストラクターは温度を高めに設定して餌と飼育ケージをサイズアップすれば、ナミヘビと同じような感覚で飼育できます。飼育下の繁殖個体がペットとして出回ることが多いので、性質も温和で、事故も起きにくい種類といえますが、条例に合致した完璧なケージを用意する必要があります。

大蛇を飼育する上で問題となるのは脱走した場合に巻き起こる社会不安や、ケージの設定ミスによる火災の発生などです。強化ガラスの水槽も、水入れと水槽の間にヘビがもぐりこんで力めば割れますし、保温球やライトがケージの中にあれば、これも破壊される危険があり、火災の危険が生じます。風呂や日光浴を、犬の散歩よろしく外で行えば、脱走の危険も増します。二重三重の安全策をとって、飼育に臨むべき生物です。

(5) 健康と安全の管理

新しい個体の導入によってウイルス疾患がアウトブレイクしたり、保温設備の作動不良で一夜にして風邪や消化不良になったり、保温器具によって火傷をしたり、活きた餌の逆襲によってけがをしたり。詳しく観察して上手に管理すれば予防できることが多いので、基本に忠実に細かい配慮を持って飼育しましょう。

アウトブレイク：突発性に感染症が発生し、次々と伝播していく様子。

(6) 特記事項

歯が鋭くて長く、たくさん生えています。かまれると相当なけがとなります。普段から飼育者の動きと餌を関連づけないような取り扱いをしましょう。長いピンセットやスネークフックやスネークトング、肩まである革手袋など、安全を確保するための道具もそろえましょう。

○トカゲ

トカゲ類は、ヘビとともに有鱗目にいれられ、トカゲ亜目とされます。独立したトカゲ目とされることもあります。種類は3,400種以上で、種類は現存する爬虫類では最も多いグループですが、四肢の有るもの、まれですが二肢のもの、無いものなど、外見上も変化の多いグループです。四肢の無いものはヘビと似ていますが、動くまぶたがあったり、尾が自切したりして、ヘビには無い特徴をもっています。餌は種類によって様々なものを食べます。

12. ヒョウモントカゲモドキ

(1) 分類、品種

ヒョウモントカゲモドキ (*Eublepharis macularius*) は、ヤモリ科のトカゲモドキ亜科に属するトカゲです。独立した科にすることもあります。トカゲモドキ類はアジア・アフリカ・アメリカに20種以上が分布しています。日本には南西諸島(沖縄・徳之島など)にいます。トカゲモドキのなかで最もよく知られているのが、パキスタンやアフガニスタンなどに分布するヒョウモントカゲモドキです。飼いやすく、繁殖が容易なことから、様々な体色や模様の変異が作られています。

(2) 形態、生理、習性

トカゲモドキとは妙な名前ですが、ヤモリでありながら、指に壁などに登るための吸盤が無い、動くまぶたが有るなど、ヤモリ科の他のヤモリと違って、他のトカゲ的な特徴を持っていることなどからトカゲモドキとつけられています。英名はレパード・ゲッコーとかファット・テイルド・ゲッコーで、ヒョウモントカゲモドキのヒョウを思わせる模様と、栄養がよいと尾が太くなるという2つの特徴を捉えています。レパードはローマ字読みするとレオパードで、レオパなどといわれるのはこれに由来します。寿命は飼育下で28年という記録があります。実際には10年を超すものはそう多くないと思われます。全長25cm位で、本来は夜行性です。卵生で、普通は2個産卵します。生まれたばかりの子は濃い横縞があり、斑点は成長につれ、徐々に出てきて、それにつれ横縞が消えていきます。慣れやすく、小さいので、危険性はありません。臭いはたいしたことはありませんが、健康管理の面からもあまり汚れないうちに清掃します。声は出しますが大きいものではありません。

(3) 飼育上必要な設備と機材

ヒョウモントカゲモドキの場合、床には何もなくてもよいのですが、新聞紙を敷いたり、小砂利を入れるのもよいでしょう。細かい砂は好まないようです。隠れ場所(シェルター)は必要です。市販のシェルターもありますが、新聞紙を入れれば、その下がシェルターになります。また、厚紙を波状に折って入れても構いませんし、板でU字溝のように作ったもので構いません。下に隠れられれば、それがシェルターとなります。排水はこのヒョウモントカゲモドキのように小さい種類の場合どちらでもよいと思いますが、ケージを水洗いする時

には、あったほうがよいでしょう。ケージに排水孔を付けると、脱走経路（トカゲも餌も）にもなります。温度は25～30℃。20℃以下または32～33℃以上にはしないほうがよいでしょう。湿度はやや乾いたという程度にし、水入れは簡単にひっくりかえらないものを用意します。水はいつも忘れずに、綺麗なものをに入れておきます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌はフタホシコオロギ（クロコオロギともいう）などのコオロギ類、バッタ、蛾、ミルワームなど昆虫類、クモ、ミミズなどで、ピンクマウスもよい餌です。初めての餌は食べないことがあるので、普段から色々与えるのがよいでしょう。主食としてはコオロギで、栄養を高めるためにピンクマウスを時々与えるのがよいでしょう。ヒョウモントカゲモドキは馴れやすいので、餌はピンセットでいつも与えるようにすると、人の接近を恐れなくなります。清掃のとき恐がらないように移すなど、色々根気よく工夫してください。あまり器用ではありませんから、ふたは必要ないかもしれませんが、逃げることを考えてふたをしておいた方がよいでしょう。注意することは、脱皮がうまくいかなかった時のことです。指先に脱け殻がたまと爪や指の脱落の原因になるので、気をつけピンセットなどで取り除きます。繁殖期に雄同士は争うので、雄は1ケージに1頭にします。雌同士の同居は可能です。繁殖制限は雄を別にすればよいでしょう。雄・雌は幼体では分かりませんが、成熟すれば、雄は肛門の少し上の鱗に前肛孔がはっきりするので、あまりはっきりしない雌とは区別できます。個体識別は大きさ、模様などでします。模様は変わりますから、時々チェックしてください。時々で間に合いますが、いつでもというのは忘れやすいもので、毎月1回など、忘れにくい習慣を作っておくとよいと思います。

(5) 健康と安全の管理

主な病気の予防としては、入手時に動きがよく、体に張りがあり、口元や、肛門の周りが汚れていない個体を選びます。飼っていて病気はあまりしないように思われます。温度管理、栄養管理をしっかりとってください。尾が太いのは栄養がたくわえられている証拠です。ケージ内はあまり神経質になることはありませんが、清潔にしてください。清掃の時などに体の状態をチェックしてください。無理に捕まえるのはよくありません。

(6) その他特記事項

サルモネラ菌などがいると思って、触ったら必ず手を洗ってください。小形の動物でもあり、事故を防止する観点からも部屋での放し飼いには向いていません。

13. グリーンイグアナ

(1) 分類、品種

グリーンイグアナ（*Iguana iguana*）はイグアナ科に属すトカゲです。イグアナ科は600種を超す大きな科です。最近、この科を数科に分ける研究が発表されていますので、いずれはそちらに移行するでしょう。単純にイグアナといった場合、イグアナ科のトカゲを指す場

合と、グリーンイグアナを指す場合があります。グリーンイグアナはアメリカ大陸のメキシコからブラジル南部、パラグアイまでと、西インド諸島に分布します。以下の「イグアナ」は「グリーンイグアナ」を指します。

(2) 形態、生理、習性

グリーンイグアナは、小さい時は緑色でかわいらしく、つい飼いたくなりますが、大きくなると、小さい時とは違い見事な容貌になり、なかなか魅力的です。餌が植物質なので飼いはじめは簡単です。寿命は飼育下で20年近く生きたものがありますが、10年以上生きることは、そう多くはありません。全長1.8m位になります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

グリーンイグアナは樹上性のため、ケージは他のトカゲ類より広さ、高さを必要とします。水入れはイグアナが入れるくらい大きいものを用意し、水の量はイグアナが入ってもこぼれない程度にします。イグアナは体が大きくなるので便で飼育設備内を結構汚します。樹上性ですから、床だけでなく、とまり木にも壁にも便が付きます。イグアナは自分の便で体が汚れるのをまるで気にしません。その汚れた尾をふって抵抗されると嫌になります。ケージを清掃するには水洗いが一番です。ですから、排水を十分考え、排水孔を付けてください。温度は25～30 位にしますが、温度差がつけられるのなら夜は22～23 位にしましょう。日光浴はさせたほうがよいでしょう。室内なら日当たりのよい所に置いてください。梅雨明けから9月まで、可能なら屋外飼育が望ましいでしょう。ただ元気がでると野性が戻るのが、また馴れにくくなってしまうようです。健康か馴れか、どちらをとるか難しいところです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は子供の時は昆虫類も食べますが、基本的には植物質を食べます。動物質は成長初期か体力が衰えているとき以外は、あまり与えない方がよいでしょう。植物質なら家庭で食べるものでよいと思われがちで、またよく食べて成長しますが、ここに落とし穴があります。野生のイグアナが食べているのは野生に生えている草や木の葉、果実などです。あまりカロリーの高いものは食べていません。野菜や果物では高カロリーですし、含まれているものも違ってきます。フライ(「Iguana : Guide for successful captive care.」Fredric L. Frye 著 / 1995年 / Krieger Pub Co 1995年)によると、与える餌にはカルシウムがリンの2倍以上の比率で含まれていないと、カルシウムがイグアナの体から流出して失われてしまうのだそうです。イグアナの飼育が難しいのは、このバランスがうまく取れないせいでしょう。野草・木の葉を中心に野菜・果物を少し加えていくやり方がよいでしょう。フライの本には、主食ではありませんが、餌の一つとして、冷凍のミックスベジタブルや、豆腐もあげられています。給水は体がつかるくらいがよいでしょう。床、壁、樹上と移動できるよう、枝を配置します。

イグアナはあまり人を恐がりませんから、掃除していると寄って来て出ようとしています。勝手に出させて後で戻るか、つまんで向きを変えたりします。無理やり捕まえてはいけません。掃除の時は、窓際での日光浴もよいでしょう。個体によっては、飛び出して逃げるものもい

ますので、こういう個体には十分気を付けて出さないようにしてください。

グリーンイグアナの性質は比較的温和で、上手に扱ってやれば、よいペットになります。動物を扱う場合、こちらが構えると動物も構えます。最初は逃げるかもしれませんが、気長に少しずつ触れてください。怯えている時は深追いしてはいけません。グリーンイグアナは、すぐ驚いて走りだします。走りだしても、ぶつからないだけの広さがあればよいのですが、なかなかそうもいきません。機会あるごとに触れて、餌もピンセットから摂るように続けます。顎の下に触れられるようになればあとは時間だけです。片手を前足の間に差し込んで少し体を持ち上げます。繰り返しながら、今度は後足です。こうして続けていきますが、気を付けなくてはいけないことがあります。まず爪が結構鋭いということです。ほんとうに小さいときはよいのですが、少し大きくなると、押さえたりする時に暴れると、私たちの肌には簡単に引っかき傷ができます。大きくなるとおとなしくても、体に這い上がらせたりすると、やはり引っかき傷ができます。これはイグアナにとってどうしようもないことなので、飼う側が自衛しなくてははいけません。厚手のシャツを着たり、革手袋を着けたりしてください。嫌なことをしたら、口を開けて咬もうとします。歯は小さいですが鋭く、かみそりのように切れます。咬まれないように撤退します。ここで殴ったりするとだんだん性格が悪くなっていき、果てはどうしようもなくひねくれた個体になるかもしれません。根気と我慢が必要です。

また、雄は大きくなると気が荒くなり、他に雄がいればけんかをはじめます。逃げる広さがあればよいのですが、逃げきれないと大けがをします。したがって、雄は分けて飼うしかありません。触るのも避けた方がよいかもしれません。これは個体次第です。飼育しているだけなら、迷惑とか危害とかは、本質的にはありませんが、逃げだしたら、大きいし、不安をあたえることは間違いありません。絶対に逃がしてはいけません。

個体識別は少数なら、傷痕など、その個体のもつ外観の特徴で区別できますが、数が多いようでしたらマイクロチップを注入することを検討してください。

(5) 健康と安全の管理

主な病気と予防としては、風邪・肺炎が挙げられ、飼育温度が低いとかかりやすくなります。爬虫類の飼育は、温度管理ができれば半分は成功したといってよいでしょう。季節の変わり目には加温が難しいことがあります。風邪などのほか皮膚病も起こりやすい病気です。

また、グリーンイグアナは、すぐ驚いて走りだし、壁などにぶつかって口先をつぶすことがよくあります。その他、金網のケージでは金網に爪や指をひっかけ、爪や指先を脱落するようです。

火傷についても注意が必要です。暖房用の電球や床暖房で起こります。かなりの低温にセットしておいても起こることがあります。

(6) その他特記事項

グリーンイグアナはサイテスの附属書IIに属し、養殖されたものが輸入されています。

グリーンイグアナは値段も安いし、餌が植物質なので、簡単に飼いはじめられます。しかし

動物が安いわりには、暖房など設備に金がかかり、すぐ大きくなりますし、病気にもなりやすく、結構やっかいです。よく逃がして世間を騒がせたりもします。グリーンイグアナの飼育は、一見簡単なようですが、トラブルも多く、普通の家庭向きの動物ではなく、動物園や水族館のような施設に任せるべきです。

14. フトアゴヒゲトカゲ

(1) 分類、品種

フトアゴヒゲトカゲ (*Pogona vitticeps*) はアガマ (キノボリトカゲ) 科のトカゲで、オーストラリアの中東部の内陸部に分布します。フトアゴヒゲトカゲの属するアゴヒゲトカゲ属は8種が含まれて、一部重複しながら、オーストラリアに広く分布しています。

フトアゴヒゲトカゲは体色が美しく、繁殖が容易で、美しい色の品種が生み出されています。

(2) 形態、生理、習性

アゴヒゲトカゲの名は、驚くと口を開けて喉の「あごひげ」を広げて威嚇することからきています。フトアゴヒゲトカゲの「あごひげ」は、近縁のヒガシアゴヒゲトカゲの「あごひげ」ほど見事ではありませんが、体色の美しさでは断然優れています。寿命は飼育下で10年生きた記録があります。全長は約50cmを超えるものがありますが、通常は30cm位です。危険性はありません。臭いはたいしたことはなく、鳴き声も出しません。

(3) 飼育上必要な施設と機材

全長30cmのものなら60cmのケージで2～3頭飼えます。床が乾いた状態に保ってやります。温度は高めがよく、30度を少し超すくらいにし、夜は温度差をつけるなら20度程度にするとよいでしょう。日光浴はさせたほうがよいのですが、体温が上がった時に逃げ込めるような日陰を作っておきます。

乾燥地帯のトカゲなので、湿度は考慮しなくてよいでしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

フトアゴヒゲトカゲの餌の狩猟方法は座って待つやり方です。近寄ってくる昆虫やクモなどの無脊椎動物、カエル、トカゲ類、小鳥などの動物質を半分食べ、残りの半分は植物を食べています。飼育下の餌はコオロギ、ミルワームなどの昆虫類、ピンクマウス、小松菜、クローバー、タンポポ、果物などです。危害などは特に考える必要はありませんが、顎の力がありますから、気をつけてください。

繁殖は容易ですから、繁殖制限するより、きれいな品種を増やした方が得策かもしれません。増えすぎて困るようでしたら、雌雄を分けて飼うか、孵化させないようにすればよいでしょう。個体識別はよく見ればたいてい区別点はありますが、数が多い場合はマイクロチップを注入すればよいでしょう。

(5) 健康と安全の管理

脂肪肝はアゴヒゲトカゲ類によく見られる病気で、肺炎も多い病気です。これらは飼い方や餌、飼育温度が適正ならば防げます。観察はいつでも重要です。太っているように見えても栄養が偏っていることがあります。高カロリーな餌は減らしていくべきでしょう。清潔には神経質になりすぎることはありませんが、適度の実施してください。

15. カメレオン

(1) 分類、品種

カメレオンはカメレオン科のトカゲで、80種以上がアフリカとマダガスカルに半数ずつ、ほかに地中海沿岸から中近東にかけて数種分布しています。

(2) 形態、生理、習性

カメレオンの特徴は体の色を変えること、舌をのばして餌をとること、などです。

寿命ははっきりしませんが、ジャクソンカメレオン(*Chamaeleo jacksoni*)が9年9ヵ月、バンサーカメレオン(*Furcifer pardalis*)が5年2ヵ月などと長い記録がありますが、実際には飼育は極めて難しく、2～3年生きれば大成功で、1年生かせても立派です。

全長はメラークアメレオン(*Chamaeleo melleri*)やウスタレカメレオン(*Chamaeleo oustaleti*)のように全長80cmになるものがありますが、20～30cm位のものの方が多いようです。数センチにしかならない種類もいます。カメレオンは結構速く成長し、半年から1年で性成熟します。臭いは特にありませんが、糞などを溜め過ぎなければよいでしょう。鳴きません。

(3) 飼育上必要な施設と機材

ケージは市販されている爬虫類用ケージ、水槽、鳥かご等何でも構いませんが、通風はよい方がよいので、水槽ではない方がよいでしょう。木枠に金網を張るなど手製で作っても構いません。温室があるなら、そこへ放すのもよいでしょう。樹上性ですから高さが必要です。木の枝を入れてやりますが、カメレオンが掴めるようあまり太くない枝が適当です。葉についた水滴を舐めさせるため、植物をいれたり、ホンコンフラワーを入れたりします。床にも降りますが、ほとんど樹上で過ごしますから、枝や葉は豊富に入れ、これらは隠れ場所にもなります。温度は25℃位にし、赤外線電球で一部温度が高い所を作ってやります。カメレオンはいろいろな種類がありますから、要求する温度も様々です。赤外線電球の近くによく行っているようならば温度が低いと思われれます。逆にまるで近寄らないなら、もっと温度が低い方がよいかもしれません。日光浴は必要です。通風は必要で、通風が難しい場所であれば扇風機を使うのもよいでしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は基本的に生きた昆虫類です。動かないと興味を示しません。コオロギ、ミルワーム、ジャイアントミルワーム、カイコ(幼虫)、ブドウムシ、ヤナギムシなど購入できるものを与え、バッタ、イナゴ、セミ、カマドウマ、ゴキブリ、チョウ、カマキリ、昆虫ではないが

クモなど採集できるものも利用します。カメレオンでやっかいなのは、突然食べなくなることです。餌を変えると食べるのがよくあるので、いろんな種類が必要となります。ピンクマウスも食べることがありますから、たまにはいいでしょう。餌は大きすぎたはいけないのはわかると思いますが、小さすぎる餌も疲れるのか、少しで食べるのをやめてしまいますから注意が必要です。カメレオンはあまり溜まり水を飲まず、葉についた水滴を舐めるので、給水は水滴を落とす装置を作ったり、霧吹きで朝夕2回以上、カメレオンのいる近くの葉に吹きかけてやります。カメレオンは動きは遅いのですが、結構動きまわります。力はあまりありませんが、ケージのフタが開いていれば逃げることがあります。カメレオンは神経質なので、不必要に持ったり、触ったりして、ストレスを与えない方がよいでしょう。他人に迷惑とか、危害を加えることはないと思われます。繁殖制限をするほどではありませんが、カメレオンは小さいうちはともかく、結構争うのでケージが狭ければ1個体で飼うようにし、交尾の時だけ同居という状態にします。繁殖制限するなら同居させなければよいでしょう。個体識別は大きさ、個体のもつ特徴でしますが、小鳥の足環を使うのもよいでしょう。

(5) 健康と安全の管理

カメレオンは健康状態のいいときは、色が明るく、動きにも張りがあります。体色がくすんでいたり、黒ずんでいるのは、温度が低いせいかもしれません。落ち着かないのは温度が高いとか、隠れ場所がないということが考えられます。歯ぐきにチーズの様な膿がついている場合はマウスロトという病気にかかっている証拠です。カメレオンはやっかいな動物ですから、よく観察してストレスを感じさせないように扱わなければなりません。病気に対して注射はよくないようで、飲み薬で対応したほうがよいでしょう。栄養がよいかどうかは、尾の付け根の背側を観察し、痩せて骨がごつごつしているかどうかで見ます。清潔に保つことは飼育の基本ですが、カメレオンにストレスを与えないようほどほどにしてください。

(6) その他特記事項

カメレオンは、ロゼッタヒメカメレオン (*Brookesia perarmata*) だけがサイテスの附属書Iに属し、他は全種附属書IIに属します。カメレオンは非常に魅力のある動物で、色々難しいことが山積しているのに、飼育に挑戦する人が後を絶ちません。しかし飼育が非常に難しい動物で、大半は飼い始めてすぐに原因不明で死んでしまうでしょう。まず餌が確保できるかどうかです。カメレオンはほとんど熱帯・亜熱帯に分布していますから、夏も冬も餌を与えて飼うことが必要です。少なくとも数種類の餌の目処がたたねば不可能です。生き物を飼うのです。面白そうだというだけで飼うことは絶対にやめてください。

16. アオジタトカゲ

(1) 分類、品種

アオジタトカゲ類はオーストラリアとニューギニアに分布しているトカゲ(スキנק)科のトカゲです。アオジタトカゲ属 (*Tiliqua*) は約10種が含まれますが、この中には以前は

別属とされていたマツカサトカゲや舌が桃色のモモジタトカゲなどが含まれていて、アオジタトカゲの名がついているのは5種です。この中で一番よく知られているのはオーストラリアの東部・北東部に分布しているヒガシアオジタトカゲ (*Tiliqua scincoides*) です。以下に述べるのは、断らない限りヒガシアオジタトカゲです。分類はまだ安定していないようで、オーストラリアの北部にいるキタアオジタトカゲもヒガシアオジタトカゲに含めることもあり、その時は2つの亜種に分けます。

(2) 形態、生理、習性

アオジタトカゲの名は、突然口を大きく開き、青い舌を出して威嚇することからきたと思われれます。もともとアオジタトカゲはそれほど気性が荒いトカゲではありませんから、馴れてくると口はあまり開かなくなります。寿命は10年位です。全長は大きくなると60cm位になりますが普通は30~40cm位です。1度に6~25頭の子を産みます。危険性はありません。時々口を開けて威嚇しますが、そんなことがあると気を付けていれば、たいしたことはないと思えます。口先を押し付けてきたとき、ちょっと咬むことがあります。たいして痛くありませんが、口を押し付けてきたら、すっと引くのもよいでしょう。たいした臭いはありませんし、鳴きません。

(3) 飼育上必要な施設と機材

ケージは飼う個体の大きさ、一緒に飼う個体数によりますが、長さ60cm位のものが基本かと思えます。水入れは、あまり水にはいる種類ではないので大きなものは必要ありません。床は乾いた状態に保ってください。飼育温度は25~30℃にし、日光浴はさせた方がよいのですが、体温上昇は死につながりますから、日陰など体を冷やせるよう気を付けてください。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は昆虫、カタツムリ、花、果実などです。家庭で食べる野菜、果物類を色々与えてみてください。足も短く、動きも遅いので、逃げることをあまり注意しなくてもよいかもしれませんが、猫などがいたらずらされないよう気を付けてください。触ったり、抱いたりしたい時は、時々触って嫌がらないようにし、体の下に手を差し込んで持ち上げます。抱くときは四肢を自分の胸や腹に付けてやると落ち着きます。繁殖制限するほど増えるとは思えませんが、そうなったら雌雄を分ければよいでしょう。個体識別は大きさと外観の特徴でできます。

(5) 健康と安全の管理

脱皮の時、指先に皮が残ることがあります。時々ピンセットではがしてやります。取れにくいようでしたら、水でふやかして取ってやります。それでもだめなら食用油を少量たらしながら取ります。

17. オオトカゲ

(1) 分類、品種

オオトカゲはオオトカゲ科のトカゲで、30種以上がアジア、アフリカ、オーストラリアにいます。オオトカゲは独特の風格のある、魅力的なトカゲのグループです。

(2) 形態、生理、習性

オオトカゲといっても、3 mを超す種類から20cm位の小さな種まで大きさは様々です。3 mを超すのはコモドオオトカゲ (*Varanus komodoensis*) やハナブトオオトカゲ (*Varanus salvadori*) の2種だけです。舌は他のトカゲとちがいがいへびと同じです。寿命はたいていの種類で10数年だろうと思われます。危険性があります。オオトカゲは馴れるものと馴れないものの差が極端です。咬まれれば危険性が大きな種類があり、歯も鋭いので気を付けてください。3 mを超すコモドオオトカゲやハナブトオオトカゲは、案外馴れ易い方にはいると思います。尾を振り回したり、口を開けて飛び掛ってくるものの方が、小さくても危険です。臭いは便などによるものです。大きいものでは臭いも出ますが、掃除をさぼらなければそれほどではありません。威嚇音は出しますが、声は出しません。

(3) 飼育上必要な施設と機材

ケージはある程度動きまわれる大きさにし、水槽でも構いませんが、しっかり付けられるフタが必要です。フタは重しをしておく方が安心です。水入れは体を丸めてオオトカゲがつかれる程度の大きさと深さが必要です。結構汚しますので、簡単に水洗いできるものが望ましく、排水は重要です。温度は25~30 にし、温度調節は重要です。日光浴は必要ですが、体温が上がり過ぎると死んでしまいます。日陰など体温を下げられる所を必ず用意してください。乾燥が好きな種類から、かなり湿度が高いのが好きなものまで様々です。湿度は高くてもムレない方がよいなど、条件が難しいものまであります。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は大部分が肉食性ですが、果物を食べるものもいます。一般に与える餌は、大きなものではラットやマウス、ヒヨコ、馬肉、レバーなどです。小さな種類や小さい時は昆虫やピンクマウスを与えます。あまり太らせないほうがよいと思われます。餌を制限するのもよいが、ネズミ類のように栄養価が高いものを減らし、ヒヨコや馬肉やレバーなど様子を見ながら増やしてください。水入れの中で便をすることが多く、汚れていたら取り替えてください。逃走(脱走)防止には留意してください。慣らすのなら、触ってやるしかありません。上手に触れば、暴れないかもしれません。触る側が、嫌がらないよう触ると考えてください。迷惑防止や危害防止としては逃がさないことです。

オオトカゲはそう繁殖する動物ではありません。制限するほど増えて困るなら、雌雄を分けることです。個体識別は少数飼育なら、個体の特徴でできると思われます、多数ならマイクロチップを注入するとよいでしょう。

(5) 健康と安全の管理

主な病気と予防については、風邪・肺炎、金網のケージによるトラブル、火傷等がありますので、グリーンイグアナの項を参照してください。オオトカゲは、傍目には仲良く過ごしているように見えるのですが、突然争うようになります。逃げきれぬほどの広さはケージで

は無理でしょう。争いが始まったら、すぐ分けた方がよいでしょう。雄同士が多いと思いますが、雌でも争います。体調にもよるのですが、大きい方がいじめるとは限らず、小さい雌が大きい雄をいじめることもあります。

観察は動物を飼育する場合の基本です。必ず記録を付けてください。栄養状態がよいかどうか、判断するのは難しいのですが、痩せすぎはわかると思います。太った状態の時、本当に体調がよいかどうか、はっきりいってわかりません。単純に少し太っているのなら構いません。ただ栄養が良過ぎるのはよくないでしょう。皮膚もケージも清潔に保ってください。

(6) その他特記事項

5種がサイテスの附属書Iに属し、残りの全種が附属書IIに属します。同居が難しい種類が多く、とくに雄同士は争いがちなので、原則的には分けて飼育すべきです。動物愛護管理法の政令で危険動物に指定されているのは、3mを超すコモドオオトカゲとハナブトオオトカゲの2種だけです。コモドオオトカゲはサイテスの附属書Iに属し、通常は手に入りませんし、飼うべきではありません。ハナブトオオトカゲはII表ですから飼うことはできます。しかし、許可が必要ですし、かなり大がかりな施設が要求されます。3mを超えるのは2種だけですが、それ以外にも大きくなる種類は多く、逃げ出したら人に不安を与えるでしょう。危険動物に指定されていませんが、できれば飼うのは小型の種類にかぎり、大型種は動物園などに任せるのが妥当だと思われます。

IV . 参考

< 引用及び参考資料 >

「クリーパー」隔月刊情報誌 / クリーパー社

「爬虫類・両生類800種図鑑」千石正一監修 / 1996 / ピーシーズ

「爬虫両生類飼育図鑑」千石正一著 / マリン企画

「爬虫両生類飼育入門」ロバート・デイヴィス、ヴァレリー・デイヴィス著 / 千石正一監訳 / 1998 / 緑書房

・ James R. CAREY and Debra S. JUDGE Longevity Records : Life Span of Mammals, Birds, Amphibians, Reptiles, and Fish Odense Univ. Press / 2000"

組織

「日本爬虫両棲類学会」

問い合わせ先 :

〒606・8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科動物学教室内

日本爬虫両棲類学会事務局 庶務 疋田 努

TEL : 075・753・4091 FAX : 075・753・4114

E-mail : tom@zoo.zool.kyoto-u.ac.jp

「爬虫両生類情報交換会」

問い合わせ先 :

〒171 0032 東京都豊島区雑司が谷1 24 12 松本方

爬虫両生類情報交換会

TEL : 03 3989 7358

E-mail : JCD02261@nifty.ne.jp

ホームページ

「THE EMBL REPTILE DATABASE」 爬虫類、両棲類の分類を紹介している (英語版)

URL: <http://www.embl/heidelberg.de/~uetz/LivingReptiles.html>

ペット動物販売業者用説明マニュアル（爬虫類）

環境省自然環境局総務課動物愛護管理室

〒100 8975 東京都千代田区霞ヶ関1 2 2

電話：03 3581 3351

請負者：社団法人 日本動物保護管理協会

〒107 0062 東京都港区南青山1 1 1 新青山ビル西館23階

電話03 3475 1695 FAX：03 3475 1697

発行：2005年3月

【マニュアル研究会委員（50音順）】

委員長 岡崎留美（東京都動物愛護相談センター指導監視係課長補佐）

石橋 徹（いのかしら公園動物病院 院長）

塩谷 亮（東京コミュニケーションアート専門学校、
福岡エココミュニケーション専門学校 講師）

原 幸治（元・東京都井の頭自然文化園 園長）

本マニュアルは、環境省の承諾を得て転載しているものです。 _